

魔法科高校の訪問者 ～真紅の双子～

冬元 鈴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2120年、人類は滅亡した。

最愛の妹を失った達也が暴走し世界を破滅に追い込んだのだ。

しかし人類は無抵抗で滅んだわけではない。最後まで抵抗していたある魔法師たちの息子が歴史を変えるべくタイムトラベルを行った。

お兄様、万が一億が一にでも深雪が死んだら世界滅ぼすよね？と思ったのでそうなった世界線で二次創作してみました。オリ主が達也たちと一緒に一高入ります。

アンチ・ヘイトは念の為。

大筋を変えるつもりはないですが活躍の場面などを取られてしまうキャラ等が出てきます。人気なキャラクターから奪うことのないように気をつけていますが合わない方はご遠慮ください。

ネタバレしますがヒロインは雫です。できるだけ可愛く描写できたらと思っております。

注：筆者は原作は南海で止まっております。ゆっくり読み進めるつもりですが以降の内容と矛盾する場合があります。悪しからず。

目次

プロローグ	1
一条スチュアート	9
入学編	
入学編 I	13
入学編 II	22
入学編 III	30
入学編 IV	40
入学編 V	46
入学編 VI	56
入学編 VII	66
入学編 VIII	74
入学編 IX	81
入学編 X	90
九校戦編	
九校戦編 I	101
九校戦編 II	107
九校戦編 III	118
九校戦編 IV	126
九校戦編 V	134
九校戦編 VI	144
九校戦編 VII	154
九校戦編 VIII	164
九校戦編 IX	172

横浜騷乱編 VI	301
横浜騷乱編 V	292
横浜騷乱編 IV	286
横浜騷乱編 III	277
横浜騷乱編 II	268
横浜騷乱編 I	263
横浜騷乱編	
八雲の忠告	254
天敵からの呼び出し	246
「真紅」と「夜」	236
夏の休日	228
夏休み編	
九校戦編 X I V	218
九校戦編 X I I I	210
九校戦編 XII	199
九校戦編 XI	191
九校戦編 X	180

プロローグ

西暦2120年。地球文明はおおよそ滅びる運命となった。

20世紀前半の天才物理学者、アルベルト・アインシュタインは「第二次世界大戦は原子爆弾が用いられた。第三次世界大戦はどうなるかわからないが、第四次世界大戦についてならわかる。石と棍棒だろう」と述べた。しかしながら人類史上最も高い知能を持つこの学者の予言は外れることになった。実際に起こった第三次世界大戦においては、世界中の魔法師が尽力し熱核戦争への発展を阻止したからである。

しかしながら、皮肉にも人類史は一大戦遅れでこの物理学者の予言を辿ることになる。

そして皮肉にも、その発端となったのはそのアインシュタインが愛した日本であった。

「スチュアート」

愛称の「アーティ」ではなく、普段呼ぶことのない彼の本名を、父はしっかりと彼の顔を見据えて呼ぶ。その真剣な眼差しにスチュアートと呼ばれた少年は言葉を返すことすらできない。若い頃はプリンスとまで世間と呼ばせるほどの甘いマスクで通っていた彼も、今年齢40を数え瞳の奥底に威厳を湛え日本最高峰の魔法師としての風格を漂わせている。

「スチュアート」

そして父に続いてその横に並び立つ母までもが彼の本名を呼ぶ。父の声とは反対に、慈愛に溢れた、それでいて凜とした声音が、少年の耳を撫でる。金髪に、青い瞳。父と同じく今年40を迎えたというのに、彼女の美貌は衰えることを知らない。しかし母の優しい声に触れても、少年は声を発するどころか、俯いてしまう。少年は知っているのだ。旧友を止めに行くと言いながら、彼を殺すことで彼を救うと言いながら、自分の両親が彼に敵わぬことを承知で死地に向かおうとしているのだと。そうすることではか、自分の両親は今まさに世界を

業火で焼き尽くそうとしている彼に報いることができななのだ。少年は弱冠15歳でありながら、決して口には出さぬ自分の両親の覚悟を敏感に感じられるほどに聡明であった。しかしながら、そんな愛する両親を正視し見送ることができるほど、彼は成熟してはいなかった。

「俺達では、深雪さんを守れなかった」

「ワタシたちでは、タツヤを救えなかった」

一人息子への愛であふれるこの両親は、いつもならそんな少年が俯く顔を上げられるまで何時間でも待っただろう。しかし、今ばかりは状況がそれを許さない。人類に残された最後の希望。それを彼が灼いてしまうのも時間の問題だった。一刻も早く彼と対峙し、時間を稼がなければ、人類に希望はなくなる。故に2人は唇を固く結び、俯きながら必死に涙をこらえる息子に想いを託すしかない。

「どうやるのかは、お前の自由だ。これまでお前には周りの人間のせいで残酷なプレッシャーを与えられ続けてきた。お前ならば、ヤツを殺せるだろう。ヤツも昔からあれほどまでに手がつけられなかったわけではない。何かと規格外だったが、今のお前とは比べるべくもない。お前が15歳を迎えた日、ヤツ自身がそう言っていた。だがお前なら別の方法も取れるはずだ。何もしなくてもいい。お前に与えてやれなかった『普通の生活』を、お前に与えてやったことだけが、俺達の救いだ。同じ結末を迎えても、もうお前を責める奴はいない。自分の人生を、歩め。そのために編んだ、特別な魔法だ」

俯く少年の頭に手をやりながら、父は優しく少年に言い聞かせる。「さあ、もう時間がないわ。アーティ、早くコフィンに乗り込みなさい。愛しているわ。若いワタシ達によろしくね。ああそうだ、できることならワタシの旦那さんは別の人がいいわね。カット・ジユウモンジなんてどうかしら。あんな人の妻になつてみるのもいいかもしれないわあ」

「おいおい、リーナ。それはないだろう」

「あら。アナタだって若い頃は随分と深雪にご執心だったじゃないの」

「そつ、それは…」

「ふふっ」

こんな場面でも夫婦漫才を繰り広げる両親に、少年は思わず笑ってしまう。不思議なものだ。さつきまでは握る拳に爪が食い込んで血が出そうなほど必死に涙をこらえていたのに、今は笑っているなんて。

少年の笑いを見て、ようやく彼の両親も安堵の表情を浮かべた。

「なんてね。マサキ。ワタシ達じゃないとアーティは生まれられないじゃない」

「ああ。何にも代えられない、俺達の宝だ」

そう呟く二人の瞳は、すでに遙か彼方を見据えていた。

別れの刻は近い。ここにいる3人は皆、それを理解しながら、動けずにいた。

数秒か数分か、数十分かはたまた数時間か。一瞬とも永劫とも思える時を経て、最初に動いたのは意外にも少年だった。

「もう、行かないと」

それは、人類すべての希望を背負い、両親の想いを背負い、ただ独り歴史に挑む者として見せるべき覚悟だった。

少年は1歩1歩、さりとて着実に、彼を愛し、そして彼が愛する両親のもとを離れ、2120年の技術水準から考えてもおおよそ見慣れぬ風貌の卵型の機械のもとへと歩みを進める。母親はすでに泣き崩れている。父親も母親を気遣い手を差し伸べながら、流れる涙を押し止められていない。そんな両親を振り返ることもなく、彼の母親がコフィンと呼称した卵型機械のハッチ部分を開け、迷いなく乗り込む。弱冠十五歳の少年が独りで乗り込むにしても手狭なコックピットに座った少年がハッチを閉じる際に見た両親の最後の姿は、彼の目の錯覚か、映像資料で見た若かりし頃の二人が立っているように見えた。

少年が乗り込んだ卵型の機械は大型の特化型CADである。その

大型CADの名称は、開発の大部分に貢献した魔工技師の好きなクラシック・フィルムに登場するとあるマシンから「De Lorean」と名付けられた。

『De Lorean』、アウェイクニング起動

少年は「De Lorean」に乗り込むやいなやその電源をONにする。今から両親は高速で「彼」のもとへ接近し、交戦し時間を稼ぐだろう。近接戦闘中は彼もその戦略級魔法を起動できない。いかに今の彼がすべてのリミッターから解き放たれその理性をも失い破壊の化身となつてはいえ、少年の両親は、片や日本の魔法師の最高権力集団「十師族」の中でも最有力の「一条」当主、「クリムゾン・プリンス」と呼ばれた天才、一条将輝。そして片や、22世紀に入つてなお世界トップクラスの軍事力を誇るUSNA軍所属の魔法師集団、STARS総隊長を努めた戦略級魔法師、旧名・アンジェリーナ・クロウドゥーシールズ。名実共に世界最高峰の魔法師の一角を誇る二人が全力を賭して時間を稼ぐのだ。彼らの目が黒いうちは方に一つも少年に危害が及ぶことはない。しかし、一刻たりとも無駄にできる時間はない。少年は今から、世界初の快拳となる魔法を起動しようとしているのだ。その起動時間は有に三十分を超える。今まさに世界を滅ぼそうとしている最凶の魔法師、司波達也を前にはいかにこの二人とはいえどもどれだけ時間を稼ぐことができるかはわからないのだ。

『De Lorean』、起動に成功。魔法式出力システム、全て異常なし

少年はシミュレート通りに一つ一つ声を出しながらコフィンの作動状態をチェックする。膨大な数のシステムの複合体であるこのマシンは、その構成システムのうちたった一つでも正常に働かなければ今から使用する魔法は起動できない。加えてこのマシンは極力機構を少なくするためにそれぞれのシステムの状態を操縦者にフィードバックする機能が搭載されていない。そのため、操縦者は電子系の魔法を自分で使用し搭載されているシステムを走査しながら点検していかなければならない。数万個に及ぶ構成機構のチェックは、一流の

魔工技師でもきちんとした計測機器を用いて計測したのでは丸一日以上はかかる。それを、少年は電子走査系の魔法を使用することで体系的に、超高速で点検を済ませていく。また少年の魔法行使により想子がマシン全体を駆け巡ったことにより、マシン全体に彼の想子の通り道が出来上がり、マシンの稼働効率を高める効果も副次的に生み出している。こんな事にならなければ、少年はこの技術を世間に公表し一躍時の人になっていたであろう。

『De Lorean』、速度定義変更術式を構築準備…開始』

20世紀前半、物理学はたった2つの問題を残して完成を迎えた。残された問題は、光の速度と、高温に熱せられた物体から発せられる光についてであった。そして、その時点で知られていた物理学は「古典物理学」、光の速度については「特殊相対性理論」、高温に熱せられた物体から発せられる光については「量子力学」と呼ばれ、それぞれ体系付けられた。

『De Lorean』、速度定義変更範囲を『De Lorean』
本体及び内部空間に設定…完了』

この「De Lorean」が用いる物理学はそれらの物理学のうち特殊相対性理論である。

光というとても速い速さで進むものの速度を計測するという難題を回転する歯車の間を通り抜ける光を観測するという方法で解決した当時の物理学者は、その結果から導き出されたある法則に頭を抱えることになる。

その法則とは、「光速度不変の原理」である。

速度とは相対的なものである。電車にただ座る者からすれば自身の速度はゼロで、周りの風景こそが 60 km/h やそこから後ろに移動することになるが、踏切で電車を見送る者にとっては当然電車と乗客が 60 km/h で移動していくように見えるし、 30 km/h で走行する自動車からはこの電車は 30 km/h で自分を追い抜いていくように見える。

つまり、広く知られている光の速度はおよそ 30万 km/s であるが、仮にその半分の数値、 15万 km/s で移動する物体から同方向

へと進む光の速度を観測した場合、差し引き15万km/sの速度で進むように見えるはずだが、驚くことに変わらず30万km/hで進んでいることが発覚したのだ。

『De Lorean』、速度定義基準点を現地点から23億光年先のポイントに設定」

このことから、時間の流れが一定でないことが判明した。光の速度の半分速度で進む物体の中では、静止している物体の半分速度で時間が流れているがゆえに光の速度が期待される速度の2倍速度で観測されたのだ。つまり、物体が移動する速度が光速に近づけば近づくほど、その物体を流れる時間は限りなく静止している状態に近くなる。仮に光速に達したならば、その物体の時間は完全に静止することになり、光速を超えれば時間は逆行することになる。この原理を利用した時間旅行装置、いわゆる「タイムマシン」の構想は20世紀から存在した。しかしながら、光速に近づけば近づくほど時間が遅くなるということは、その物体にとっての自身の速度は無限に近づくということであり、無限の速度に到達するためには無限のエネルギーが必要になるため、タイムマシンの実現は不可能であると結論付けられた。

『De Lorean』、術式の効果時間を0.87秒に設定」

しかし魔法という技術の出現によりこの不可能な技術は実現可能になった。魔法とは現実の物質の「情報を書き換える」行為である。加速系の術式はその物体の速度に関する情報を書き換えることで実現している。この加速の対象単位が分子レベルであれば分子運動が加速し温度が上がる加熱魔法になり、対象単位が物体そのものであれば加速魔法になる。

先述したとおり速度とはあくまで相対的なものである。電車の例を用いるのであれば、踏切で電車を見送る者にとっては電車の移動速度は60km/hであるが、自転する地球を宇宙空間から眺める者にとってはその電車の速度はほぼ地球の自転の速度と等しい速度になる。更に付け加えるならば、宇宙空間自体は光速を超えて膨張していると考えられるので、空間の伸長によって移動しない宇宙空間の定点

から観測したならば、その電車の速度は光速を優に超えることになる。

『De Lorean』の到達日時を予測：2094年10月3日13時27分30秒と予測。誤差36.5秒。誤差を許容範囲と評価」つまり魔法師は速度に対する干渉を行う際、当然の事として「地表に対する」相対速度を基準として速度情報の改変を行う。「De Lorean」は、エイドスの速度に関するより深い部分の情報を書き換えることで、宇宙空間における任意の点を基準点とし、「De Lorean」の運動情報の再定義を行う。これにより、「De Lorean」は超光速移動が概念的に行えるようになり、時間の逆行が可能になる。現在の宇宙から「De Lorean」を観測した場合、違う速度軸の上に乗ることにより瞬間的に光速を大きく超えた「De Lorean」は瞬く間に逆向きの時間が流れ、「De Lorean」は組立前の部品どころか構成元素レベルにまで時間を逆行、中にいる少年も胎児への逆行を一瞬で通り過ぎ構成元素レベルにまで時間を逆行し瞬時に消滅する。しかし「De Lorean」から見ればこの星自体が超光速で宇宙空間を移動しているように観測されるためこの星の時間のみが逆行していき、少年と「De Lorean」のみが時間の逆行から取り残されることになる。

『De Lorean』、速度定義変更術式の構築準備：完了。続いて、速度定義変更術式、ロード」

すなわち過去への転移が現象として起こるのである。

少年がコフィンに乗り込んでから25分。

コフィンの周りの状態は遠隔でモニタリングされ今まさに交戦中の将輝とリーナの手元に映し出される。達也との死闘の中で意識を向ける余裕は皆無に等しいが二人は視界の隅で常に遠く離れたコフィンの状態を気にしていた。コフィンが突如消滅すれば、時間転移が行われたことになる。果たして彼らの息子が無事に時間旅行を終えたのかは彼等には知る由がないが、彼等の仕事はそこで終わる。2

人は持てる力すべてをもって達也と交戦していたが、ついに力尽きようとしたその時、2人は同時に手元のディスプレイからコフィンが消滅するのを目にした。

「ねえ、サラ…いるのなら、どうかあの子を守ってあげて」

そんな言葉が紡がれたのと、2人の身体が達也の雲散霧消ミスト・デイスパージョンによって消滅したのがどちらが先かは定かではない。

大亜連合による大兵力派兵を伴う四葉深雪暗殺に端を発する司波達也暴走、それにより瞬時に熱核戦争へと発展した第四次世界大戦は、人類最後の有力魔法師の消滅により、人類史の終焉という形で幕を下ろした。

一条スチュアート

日本屈指の魔法師と、USNA屈指の魔法師の電撃結婚。

一条将輝とアンジェリーナ・クドウ・シールズの結婚は、全世界に大きな衝撃をもたらした。

魔法はその国の超軍事機密であり、ひいては魔法師の血は国の宝である。魔法師の国際結婚は珍しいわけではないが、このレベルの魔法師の国際結婚は前例が少なかった。

この出来事により、USNAの魔法技術の多くが一条家の知るところとなり、また一条家の魔法の粋の多くをUSNA軍は獲得することができた。

結果として、それまで友好国でありながら小規模な小競り合いを続けてきた日本とUSNAという2つの超大国が、名実ともに完全なる同盟国として認知されるに至ったのである。

この結婚を実現せしめたのは多分に一家前当主・一条剛毅の尽力によるところが大きい。とある合同軍事作戦にてアンジー・シリウスと共闘した将輝が彼女に好意を抱いた事を知り、彼の覚悟を知った剛毅はアンジー・シリウスに接近しようとする将輝を妨害するUSNAの勢力を退け、また一条の魔法技術の流出を懸念する十師族の反対を水面下で懐柔するなど、八面六臂の活躍であった。

こうして、2102年7月21日、世界中の魔法師で知らぬ者はいない2人の世界屈指の魔法師の夫婦が誕生したのである。

周囲の思惑を退け結婚に至った2人ではあったが、二人ともお互いの国で非常に重要な立場に立つ人間である。USNA軍の勢力も、十師族の勢力も、最終的にこの二人の結婚を認めたのは一つの思惑が両陣営で一致したからである。

それこそが、「司波達也に対抗しうる魔法師」を作ることであった。

戦略級魔法「マテリアルバースト」の使い手であり、その威力が十分に世界の脅威になりうることは「灼熱のハロウィン」が証明している。また、司波達也自身が対人戦闘を始めた様々な軍事作戦に高い適性を示していることもすでに周知の事実であり、彼が世界最強の

魔法師であることは世界各国の魔法師が認めるところであった。

また彼が「アンタツチャブル」の四葉に所属していることも、彼の脅威度を大きく上げていた。

世界の軍事バランスは司波達也を中心として動いており、司波達也への対抗策を完成させることは世界の軍事バランスにおいて大きな優位を築くことと同義である。

その共通目的のためにUSNA軍と十師族は最終的にこの電撃結婚を看過したのだ。

このような経緯から、2人の間に生まれた子供はすぐに魔法師としての英才教育を受けることになった。「司波達也を殺せる魔法師」になるために。

このような動きに対して、将輝・リーナ夫妻は思うところがなかったわけではない。自分の子供達が一人の人物を殺すための教育を受け、そのための存在になることを、心底嫌悪していた。

故にこの2人は2110年5月、世界中の誰もが予想もしなかった行動に出る。

将輝・リーナ夫妻の双子の子、サラとスチュアートが司波達也に弟子入りしたのであった。

司波達也は忍術使い・九重八雲の弟子であり、体術に関しても世界屈指の腕前を誇ることは世界的にすでに知られている。加えて、四葉深雪はその実力を知らぬ者はいない世界屈指の魔法師である。5歳を迎え、本格的に師を迎えての魔法・実戦訓練を始めようとした矢先に夫妻が打った妙手であった。

当然これを認めようとしめない動きが無かったわけではない。幼少から師として仰げば情も生まれ、達也を殺す駒としては機能しなくなる。その懸念からUSNA軍の上層部も十師族の大体の勢力もこの決定を覆そうとした。司波達也と一条夫妻の私人間で取り決められ

たこの約束など、この2つの勢力の反対の前ではなんの意味も持たない。そのはずだった。

しかしその一条姉弟の司波達也への弟子入りは現実のものとなる。

七草真由美、吉祥寺真紅郎、十文字克人の3名が連名で一条姉弟の司波達也への弟子入りを支持する声明を発表したのだ。十師族2人に加えカーディナル・ジョージの異名で知られる吉祥寺真紅郎の支持を得たことにより、すでに決定された2人の弟子入りを覆すことは困難になった。最終的には師族会議にて四葉真夜が登場、彼女自身が2人の弟子入りを支持する立場をとったことにより十師族は完全に沈黙、趨勢は決することとなった。

サラ・スチュアート姉弟は自分が血を引く一条・九島・リーナの魔法に加え、四葉の魔法技術をも叩き込まれることになった。この2人は真夜にとっても達也に対する切り札になる。真夜が2人の弟子入りを支持し、門外不出の四葉の技術を2人に与えたのは、2人を自分の駒とするためでもあった。

多彩な魔法技術、戦闘技術を叩き込まれたこの2人が実戦投入され、たった2人で新ソビエト連邦の魔法師を含む1個大隊を殲滅、北極方面の極秘基地の破壊任務を遂行し世界から「真紅の双子クリムゾン・ジェミニ」と呼ばれるようになったのは、彼等が弱冠11歳のときであった。

様々な思惑に絡められながら華々しい未来を約束されたかに思えたこの双子に、彼等の12歳の誕生日に悲劇が起こる。

それは12歳の誕生日を迎えたことで四葉の基準で魔法演算領域のうち精神に関する部分に干渉しても悪影響を及ぼさないと判断され、故人である四葉深夜しか使い手のいなかった精神構造干渉魔法を洗脳技術の応用でまず姉のサラから習得させようとしたときのことだった。

すでに調整体での実験により術者の魔法力が十分であれば精神構造干渉魔法を習得、再現することが可能なことは立証されており、安全面に關しても十師族の面々がデータを閲覧しゴーサインを出すほどには保証されていた。

故にこの悲劇は誰も予想だにできなかつたことである。

まさか、習得した精神構造干渉魔法が即時に暴走するなど、世界トップクラスの魔法力を誇るこの双子に限って誰も起こることを予想していなかったのだ。

結果として一条サラは消滅、元々達也への対抗手段を失いつつあった真夜は達也と深雪の逆鱗に触れ失脚した。

それに伴いスチュアートへの精神構造干渉魔法の「植え付け」は^{アポルト}中止された。

「真紅の双子」、魔法事故により無力化。

このニュースは瞬く間に全世界で報じられ、様々な憶測を呼んだ。軍事バランスが大きく日米陣営に傾くことを恐れた東側陣営の工作であるとか、四葉の絶対戦力である司波達也への対抗手段を潰すために四葉が仕組んだものであるとか、実に様々な憶測がさらなる憶測を呼んだ。事実としてこのニュースを見て憂いた者よりも喜んだ者のほうが多かったのは事実だ。

生き残ったスチュアートは深い悲しみに沈んだが、周囲が心配するよりはずっと早くまた自己の研鑽に戻った。この姿は日本中の魔法師の心を打ち、これまで^{クリムゾン・ジェミニ}真紅の双子を司波達也に対する最終兵器としてしか見ていなかった自分を恥じたという。皮肉にも、畏怖され嫌悪されていた側面があった^{クリムゾン・ジェミニ}真紅の双子が日本中で人気を博したのはサラの死去後のことであった。「^{クリムゾン・ジェミニ}真紅の双子」の異名は一条スチュアート一人によって受け継がれた。

サラ死去のニュースにより^{クリムゾン・ジェミニ}真紅の双子は世界の注目を完全に失った。しかしそれ以降もスチュアートは実戦投入され、戦場の最前線に立つ者たちには変わらぬ異名で恐れられ続けた。

それからさらに3年。多くの者が恐れた事が起き、世界は滅びた。しかし直前に完成を間に合わせていた時間逆行魔法専用コフィン型CAD「De Lorean」により、「^{クリムゾン・ジェミニ}真紅の双子」こと一条スチュアートは歴史を変えるべく26年前の過去へと向かったのであった。

入学編 入学編Ⅰ

「腑に落ちない…っ！」

俯きがちにボソボソとぼやきながら歩く少年が身にまとうのは、真新しい制服。

ここ、国立魔法大学附属第一高校の周りでは毎日目にする、通称「一高生」の制服である。

その制服の胸と肩に堂々と咲き誇る八枚花卉のエンブレム。

それ自体は決して珍しくもなく事実この高校に通う生徒の半分はこのエンブレム付きの制服を身に纏い通学している。

しかしこの少年が自覚なく周囲の注目を集めているのは、その制服のブレザーから上に伸びる首から上であった。

真紅と言って差し支えないほど鮮やかな赤色の髪。かなり日本人らしい顔つきには似つかわしくない深い蒼色の瞳。それでいて違和感なく、やや中性的に美しく仕上がった顔立ち。この顔で目を合わせるとウインクなどしようものなら道端から黄色い悲鳴が湧き上がること間違いなしである。

そんな美少年が今にも地団駄を踏みそうな様子でぼやきながら歩いているのだから、周囲の注目を集めてしまうのは必定と言える。

「あんな粗悪な機械で入試成績を決定するなんて…審査項目もまったくもって魔法技能の評価すべきポイントを抑えていない。これが25年前とはいえ名実ともに日本一の魔法科高校だなんて…こんな入試で総代を決めるだなんて本当に納得がいかない！いや、深雪さんから総代を奪うつもりなんてなかったけどさ…それとこれとは話が別じゃん！」

もはや途中からぼやきではなくまるで隣に人がいるかのような声量でブツブツと文句を垂れる少年の姿に、初めの方はその見目麗しい姿から二度見していた通行人も努めて彼と視線を合わさないようにしていた。

「今更入試制度の文句を言っても始まらないな…かなり早めだけでも構内に入っちゃおう。先輩方が見つければ時間も潰れるんだけどな」

驚くべき速度で機嫌を直した少年は先程とは打って変わった軽い足取りで一高の門をくぐる。

今日は国立魔法大学附属第一高校の入学式。魔法の才能を認められたエリートたちが華やかな未来を手にするためにそのキャリアの第一歩を踏みしめる、門出の日である。

「納得できません」

「まだ言っているのか…?」

入学式開会の二時間前。入学式の会場となる講堂を前にして、真新しい制服に身を包んだ一組の男女が何やら言い争っていた。

誰が見ても見目麗しい、いやこの歳にして絶世の美女と称賛されても誰も異を唱えないであろう女子生徒の胸には、先程の赤髪の男子生徒と同じく八枚花卉のエンブレム。

しかしピンと伸びた背筋と鋭い目つき以外取り立てて特筆すべき点のない、彼の目の前の少女と比べれば平凡な男子生徒の制服には、そのエンブレムがない。

「なぜお兄様が補欠なのですか？入試の成績はトップだったじゃありませんか！本来ならばわたしではなく、お兄様が新入生総代を務めるべきですのに！」

「お前がどこから入試結果を入手したのかは横に置いておくとして…魔法科高校なんだから、ペーパーテストよりも魔法実技が優先されるのは当然じゃないか。俺の実技能力は深雪も良く知っているだろう？自分じゃあ、二科生とはいえよくここに受かったものだど、驚いているんだけどね」

どうやら女子学生が男子学生を「お兄様」と呼んでいるところから、

2人は兄妹なのだろう。二人とも身に纏う制服は真新しいので、双子か、ギリギリ学年が離れなかった兄妹か。親しい親戚である可能性も排除はできない。

だが兄妹だとするならば、あまりに似ていない兄妹だった。

「そんな覇気のないことでどうしますか！ 勉学も体術もお兄様に勝てる者などいないというのに！ 魔法だって本当なら」

兄の弱気な発言を妹が厳しく叱咤する。が、

「深雪！」

その先は禁句だった。自分よりさらに強い語気でたしなめられ、深雪はハツとした表情で口を噤んだ。

「わかっているだろう。それは口にしても仕方ないことなんだ」

「……………申し訳」

深雪が項垂れながら謝ろうとした刹那、その動作は第三者の闖入により中断させられた。

「しまったー！ どれくらい危険なっ！」

二人と同じく真新しい制服に身を包んだ男子生徒が相当な速度で突っ込んできていた。男子生徒が突っ込んできた方向は深雪と呼ばれた少女が兄と呼んだ少年の背後。故に完全に死角のはずだが、

「っ、と」

ひらりと身をかわしつつ肘を当てることで突っ込んできた男子生徒の進行方向を変え、目の前の妹を見事に守った。

自分を止めるものを失った男子生徒はというと…

彼もまた、見事にわずか数メートルで静止を成功させていた。

「いや、すみません。慌てて逃げてきたもので。気づいたらぶつかるところだったんですよ…って、新入生？」

ぶつかりそうになった男子学生が胸を撫で下ろしながら謝罪をする。ぶつかられかけた兄妹が身に纏っている制服が真新しいことに気付いたようだ。

「大丈夫です。大事には至らなかったので。…あなたも新入生ですか？」

形式張った謝罪ではないが、ひどく恐縮しているので兄と呼ばれた

少年も社交辞令で返す。

「そうです。よかった。先輩だったらどうしようかと……ああいえ、同級生ならぶつかりそうになってもいいとか、そういうわけではなく！」

　　どうやら突っ込んできた男子学生は相当落ち着きのないタイプのようにだった。……構内で走って人にぶつかりそうになるくらいだから、それは自明とも言えるのだが。

　　しかし外見はとても特徴的だ。まず燃えるような真紅の髪がよく目を引く。柔らかい髪質を綺麗に、自然体に流し、彼の第一印象をとっても清潔感のあるものになっている。そして顔のパーツもなんとも秀逸だ。線が細く色白でやや中性的だが日本人にしては相当高い鼻と、早朝の青空のような深い蒼色の瞳が見せる鋭い眼光は、彼の顔立ちに凛々しい印象をもたらしている。瞳の色、白い肌、高い鼻、かなり高い身長にスラリと伸びた手足。純系の日本人には見えない。ハーフかクォーターではないかと、ぶつかられかけた男子生徒は狼狽える目の前の少年を冷静に観察する。

「オレ、工藤スチュアートって言います。クドウは十師族の九島じゃなくて、大工の工に藤の花の藤と書いて工藤です。みんなにはアーティって呼ばれてます。同じ新入生同士なんで、仲良くしましょう！」

「俺は司波達也だ」

「私は司波深雪です。アーティさん、よろしくお願いしますね。……アーティさん？」

　　達也と深雪が自己紹介を返すやいなや、アーティと名乗る少年はその動きをピタリと止めた。あまりにフリーズしている時間が長いので、深雪が心配して声をかけたのだ。

「……あまりに若かったのと慌てていたので気づかなかった……」

「え？なんですか？」

　　アーティの聞こえないくらいの声量の独白に、深雪が聞き返す。

「ああ、いえ、なんでもありませんっ！ではオレは入学式があるのでこれ

でっ！」

ようやく我に返ったアーティは逃げるようにこの場を立ち去ってしまった。

「……………新入生総代で答辞のリハーサルがある深雪ならともかく、入学式までは後二時間もあるのだが」

呆れるようにひとりごちた達也のツツコミに、深雪も不思議そうな表情で頷くしかなかった。

(まさか……………まさかこんな……………早めに行つて色々見て回つたら達也さんと深雪さんに会うなんて…っ！しかもこんな失礼な会い方…あああ最悪だあ〜)

達也と深雪から逃げるようにその場を離れたアーティは、物陰に入ると直ぐに頭を抱えてへたり込んでしまった。

(あの人にも見つかつて追いかけられるし…25年後でも苦手だったけど、三つ子の魂百までとはよく言ったものだなあ…この頃からそんなだったなんて)

達也とぶつかりかける少し前まで逃げていた相手に毒を吐く。

(もう挨拶も済んだことだし、思いの外時間が余っちゃったなあ。現代の魔法理論について少しでも予習しておかないと。未来の理論を口を滑らそうものならどうなるものかわかったもんじゃやない)

どうにもポンコツであるという印象を拭いきれないこの未来から来た少年は、とはいえその未来では世界を救う役割を期待された聡明な少年である。切り替えの速さは同年代の少年少女とは比べるべくもなかった。

アーティが情報端末で魔法理論を読んでいる間に、校門の人通りも増えてきた。入学式に参列する新入生が続々と投稿してくる時間になったのだ。

新入生の制服は大きく2種類に分かれている。男子用のスラックスと女子用のロングスカートの違い、ではなく。先程の達也と深雪の制服の違いのように、八枚花卉のエンブレムが制服の肩と胸についているか否か、である。

——ああ、あれがウイードか。本当にエンブレムがないんだな。

——補欠とはいえ、残酷よね。こんな目立つ形で差をつけるなんて。

——でも、仕方ないじゃない。魔法師の世界は実力主義。文句を言う資格なんて与えられないのよ。その社会の縮図なんだわ。

こんな会話が、聞えよがしに、ではないが決して遠慮を感じさせることもなく風によって聞こえてくる。

内容はともかく明るく会話を弾ませながら校門をくぐる、八枚花卉のエンブレムのある制服に身を包む^{ブルーム}一科生の新入生とは対照的に、エンブレムのない制服を身に纏う^{ウイード}二科生の新入生たちはなにかに遠慮するように、会話をすることもなくそそくさと校門を通り抜けていく。

(上に立つ者の差別意識も現時点でかなりあるけど、自分が下であると卑下する者たちの被差別意識のほうが根が深いってのは本当なんだな)

そんな愉快とは言えない風景を眺めながら、そんな感想を抱いたアーティは情報端末を鞆にしまい自分も入学式会場の講堂へと進んでいった。

(……失敗した。かえすがえすも失敗した。今日は厄日か?)

アーティはまたも呆れ気味にひとりごちる。

アーティが講堂に入ったときにはすでに新入生はまばらに席にっていたが、そこに規則性を見つけられるほどの数はまだいなかった。そこでアーティは何も考えずに後ろ三分の一くらいの席に座ったのだ。そのことが今、彼を猛烈に後悔させている。

彼は厳密に言えば間違いを犯したわけではない。彼の行動が間違いだというのならば、入学式の会場にはそのような指示が出されていなくてはならない。何ならむしろ彼にとっては彼の行動が明確に間違いであったほうが良かったのだ。

つまり今何が起きているかというところ。

彼のあとに入ってきた新入生たちは皆誰に言われるでもないのにある規則に従って席についていたのである。その結果前半は一科生、後ろ半分は二科生というふうにきれいに分かれたのである。

その後ろの二科生の領域テリトリーの中に一点。場違いに座る一科生と、その左右2人分の空席という異様な空間が出現する結果になった。

(校門での様子を見れば容易に予想がついたことだ。本当に今日は厄日なのかもしれない)

ため息をつき右手を額にやるが、それだけの仕草で2人分離れて座っている女子生徒に「ヒツ」と短い悲鳴をあげられる。その様子にアーティはまたもため息をつきたくなるが、ぐつと堪える。

ここまで新入生が席についてしまった状態で前の方に移動しようとすれば辺りは騒然となる。今座っている席を立ち前に移動するということはクラスも発表されていないのに二科生を後ろに追いやるという差別的な並び方を積極的に肯定することにもなる。

(これが入学式のルールなら間違えましたと言って移動もできるんだが)

あるいは近くの二科生に「もつと前に行ったらどうですか」とでも言われれば堂々と前に移動できるが、先程の様子では期待もできない。

だが毎年一高の新入生入学者数は一科生100人、二科生100人

と決まっている。椅子も当然、ピッタリしか用意されていない。つまりいつかは、この不自然な空席に着く二科生が否応にも現れる。「すまない。隣は空いているかな。もしよければ詰めてもらえると助かるんだが」

場違いに座る一科生に声をかける二科生が現れ、周囲は騒然となる。幸い式の開始までまだ20分以上あり、この騒ぎが教師陣に見咎められる心配はない。

「は、はいっ！もちろんです！今詰めますねっ！」

声をかけられた一科生の反応は思いもよらぬものだった。騒然としていた周囲はしんと静まり返り、皆目を丸くしてその一科生と二科生のやり取りを見ていた。いや、見ていたというより信じられないものを目にして固まっていたと言うべきか。

「たしか君は、アーティだったか。偶然だね。同級生なのだから、そこまでかしくまらないでくれ」

「はいっ、達也さん、今詰めましたのでおかけください！」

「いや、だからだな……………」

周囲の目は茫然自失から達也への好奇の目に変化していた。一科生に礼を尽くさせる、いや心底ビビらせるほどの二科生。一科生への劣等感にまみれ後ろの席を選んだ彼等にとって、達也の存在はあまりに奇異に映った。

落ち着き払った様子の達也だが、この状況が彼にとって居心地の悪いものであることは自明である。しかし幸いなことに、その時間は長く続かなかつた。

「あの、お隣は空いていますか？」

今度は詰めたアーティの横に座った達也に女子学生の声がかける。れる。

「どうぞ」

達也の返答を聞いて声の主はありがとうございます、と会釈を返し達也の隣に腰を下ろした。

その横に次々と二人の女子学生が腰を下ろす。

どうやら三人組で座れるところを探していたようだ。

「あの……」

達也の隣の女子学生が達也に声をかける。女子学生は眼鏡を掛けている。25年前の現代でも眼鏡は珍しかったはずだ、と達也越しに彼女の眼鏡に気付いたアーティはひとりごちる。

「私、柴田美月つていいいます。よろしくお願いします」

「司波達也です。こちらこそよろしく」

「あたしは千葉エリカ。よろしくね、司波くん」

「オレは工藤スチュアート。アーティつて呼んでください」

眼鏡の少女を皮切りに始まった自己紹介の波に乗ってアーティが達也越しに自己紹介を返すと、美月とエリカだけでなく達也までもが目を丸くしていた。

「……………??」

彼等の反応の理由がわからないアーティは、じつと彼女たちの顔を見比べることしかできない。

「……………いや、一科生のエリートくんがあたしたちに自己紹介を返してくれるなんて思わなかったから。こんなところにわざわざ座るなんて、どんだけイヤミなヤツなのよか思ったけど、アーティつてもしかしてただのおっちょこちよいだった?」

一番早くフリーズ状態から再起動を果たしアーティに軽口を叩いたのは千葉エリカと呼ばれた女子生徒だった。

「おっちょこちよ……………つて、ひどいな君は。見かけ通り開放的な性格なんだな、君は」

突然初対面の相手におっちょこちよいとまで言われ思わず嫌味を返したアーティだったが、エリカは気にすることもなくもうひとりの女子学生の自己紹介を促した。一通り自己紹介を終えた辺りで、入学式が始まるブザーが鳴ったので、彼等も会話をやめ前に向き直ることにした。

入学編Ⅱ

新入生総代、司波深雪の答辞は見事なものだった。深雪の、達也への評価に対する忸怩たる思いを知るアーティには「皆等しく」だとか「魔法以外にも」だとか「総合的に」など引つかかるワードを巧みに忍ばせていたが、それを一切の悪意なく全く棘を感じさせない仕上がりになっていた。

深雪自身の美貌と落ち着いていて堂々とした声、完璧と言って差し支えない答辞の内容に、新入生は皆男女を問わず釘付けになってしまっていた。

式の終了後、IDの交付がある。ここで新入生は自分のクラスを知らされる。クラスはI―AからI―Hまであり、1クラス25名の構成になっている。A↪D組が一科生のクラスであり、E↪H組が二科生のクラスとなっている。クラス配分は成績順ではなく、完全に無作為のようだ。

「さて、オレは何組かな」

「アーティは一科生だからあたしたちとは別のクラスだねー」

「アーティさんも、頑張ってくださいね」

談笑しながら窓口に並ぶ。IDを交付されるだけなので列はサクサクと進み、あつという間にアーティたちが受け取る番になった。一科生と二科生が同じグループで並んでいることに好奇の目を向けられはしたが、いずれも粘着質であったり悪意があるものではなかった。新入生なぶん、そこまで差別意識に染まりきっていないということだろうか。

「オレはA組だった」

「Aって言ったたら、もしかしたらあの総代の子と一緒にかもね！司波君は何組だった？」

彼等とクラスは違うと知りながらもアーティは自分のクラスを口にする。それに対するエリカのコメントはやや短絡的だが決してありえない話ではなかった。

「E組だ」

達也の答えに

「やたっ！同じクラスだね」

飛び跳ねて喜ぶエリカ。少々オーバーに喜んでみせるエリカに「私も同じクラスです」

こちらは心底嬉しいのを極力抑えるような面持ちの美月が続く。

「あー、あたしはG組だあ。じゃあ、またねー」

どうやら連れ全員同じクラスとはいかなかったようだ。あっさりした反応で連れの女子学生は自分のクラスへと向かっていった。

「じゃあ、オレも行くから」

アーティもそれに倣い、達也たちと別れてその場を去った。

達也たちと別れA組のクラスルームに向かったアーティだったが、アーティの予想とは裏腹に、クラスルームにいた生徒の数は僅かであった。

(深雪さんか)

アーティは深雪がA組だったことを知っている。達也と深雪のもとで学ぶときに、休憩時間に達也の「武勇伝」を聞かされるのは日課だったのだ。自分という本来の歴史にはない存在がこうして入学したことにより変わってしまった可能性もあったが、クラスメイトがほとんどここに来ていないことから鑑みるにそのようなバタフライ・エフェクトは起こっていないようだった。そもそも今日はこれ以降連絡事項も授業もない。ホームルームによるのは必須ではない。であるならば、IDを受け取り自分のクラスを聞かれA組だと答えた深雪がA組のIDを受け取った生徒に囲まれるのは自明の理であった。

(今日はもう帰ろう)

これ以上ホームルームにいても得られるものがないと判断した

アーティは即帰宅を決意した。

(朝の件といい、入学式の席のことといい、今日は厄日だ。こんな日は早く帰って寝て、明日を迎えるべきだ)

そう心の中でひとりごちると、アーティは荷物をまとめそそくさとホームルームを去っていった。

高校生二日目の朝。まだ日が出たばかりだと言うのに、アーティの姿は既に一高への道中にあつた。アーティは特に何にも乗っていないが、その移動速度は明らかに常軌を逸したものだつた。

(飛行魔法が普及して以降はこうして地上で高速移動魔法を用いる魔法師はめつきり見なくなったけど、この時代なら結構いるんだな)

アーティの独白通り、自己加速術式で高速移動するアーティと同じように移動する者としてしばしばすれ違ふ。今アーティのいる2095年といえば日本にて飛行魔法が世界で初めて実用化された年だが、当然まだ使用する者はいない。故にアーティも使用するわけにはいかない。魔法の考案者ということになれば身元を詳しく調べられる。せつかくタイムトラベルから数ヶ月で現代社会に生きるための準備をするための後援者^{パトロン}を見つけ第一高校に入学できたのだ。移動が少々面倒になる手間を惜しんですべてを水泡に帰すわけにはいかない。

(それに、だ)

アーティは達也の功績を語る心底嬉しそうな深雪の顔を思い浮かべていた。昨日初めて目にした、花も盛りの少女の姿の深雪の顔ではなく、今となつては見るのが叶わない、実年齢を感じさせない妙齡の貴婦人の顔を。

(達也さんの功績を奪うようなことは極力したくない)

これがアーティの偽らざる本音だつた。鍛錬の合間の休憩のお茶のお供にと深雪が達也の武勇伝を心底嬉しそうに語り、それをやりづ

らそうに少し謙遜して達也がかわす。そんなやり取りを鍛錬で上がった息を整えながら眺めているのが、幼少からのアーティにとって最も幸せな時間だったのだ。

(でも)

アーティの使用している移動補助の魔法は決して簡単なものではない。このように考え事をしながら行使できるようなものではないのだが、アーティは慣れたものでほとんど無意識に使いこなしている。

(あの未来を変えるには、達也さんが世界の脅威として認識されないようにすることが一番確実だ)

これがアーティが未来を変えるために出した結論である。これから先、司波達也という規格外の魔法師は数々の偉業を成し遂げ、全世界にその名を轟かせていく。そのなかで司波達也という魔法師はいっしか世界にとっての脅威として認識されていく。人間社会というものは行き過ぎた力を許容しない。司波達也という規格外の存在がその自分の力に飽き足らず、最愛の妹を守るために自己研鑽を続け誰も届き得ぬ超規格外の存在になってしまったからこそ、司波達也は人類の敵になってしまったのだ。

(そのためにまず必要なことは、達也さんの横に立ってその注目度を分散させることだ。すべてを達也さんの仕業にしてはいけない。そのため一高にも入ったし、既にそのための布石も打ってある)

アーティがこれほど朝早くから登校している理由は、一つは彼の後援者の都合というものがあるのだが、もう一つには彼が司波達也にできるだけ近づいたために打った布石のためというものである。

一高正門まで残り3kmを切ったあたりで、アーティはその速度をさらに上げた。

「おはようございますー」

「はよっスー」

「ちーっス」

早朝、始業時間にはほど早い一高の武道場に、生徒たちの元気な挨拶の音が響き渡る。もうすぐ新入生勧誘週間だが、マーシャル・マジック・アーツ M M A 部は朝の鍛錬を欠かさない。

マーシャル・マジック・アーツ M M A とは魔法を組み合わせた徒手格闘術のことで、本来のく残されている。一高のような魔法系の高校の部活動で扱うようなものはいわばその模倣とも言えるもので、単純に魔法を使用しながら徒手にて格闘を行うというものになっている。

マーシャル・マジック・アーツ M M A と一般的な競技としての マーシャル・マジック・アーツ M M A 軍海兵隊の本場の マーシャル・マジック・アーツ M M A には共通する マーシャル・マジック・アーツ M M A 特有の特徴として、その基礎技術として接触点を魔法の発動ポイントに設定することにより魔法発動における作用点や距離などの変数の設定をすべて省くことができ、通常の魔法の発動に対してその発動速度で大きな優位に立つことができる、という利点がある。

魔法で身体能力を強化して戦うので厳密に言えば素の身体能力自体は必ずしも高い必要はないのもこの競技の特徴であるが、体の使い方というものは鍛錬した者でないと掴むことはできない。故にこの競技に携わるものは大抵よく鍛え抜かれた肉体を持っているものである。

その中にひとときわ線の細い男子生徒が混じっている。

「沢木先輩、よろしくおねがいします」

「今日からは君ももう当校の生徒だからね。これでようやく、遠慮なく君を揉んでやれるつてものだ」

その線の細い男子生徒に相對するのはそこまで筋骨隆々としていないわけではないが高く伸びた背にガッチリとした肩幅からよく鍛えていることが誰の目にもわかる偉丈夫。彼を沢木先輩と呼んだ赤髪の男子生徒も見る者が見ればその線の細い印象は日本人離れしてスラリと長く伸びる手足が形作るものと分かるものだが彼の目の前にそびえ立つ青年を前にしては彼を誰もが細い少年と形容するだろう。

「沢木。程々にな。うちは例外を認めてもらってるんだ。怪我でもさせたらシゴキだつてんで勧誘がまともにできなくなるぞ」

「部長。春休みはずっと俺がこいつの相手をしてましたが、こいつの腕前は相当なものです。もう手加減してたらこっちはやられますよ」
「お前をしてそこまで言わせるとは。会頭が目をつけるだけのことはあるな。だが怪我だけはさせるなよ」

「わかってますよ。さあアーティ、いつでもお前のタイミングでいい。かかってきたまえ」

「では、行きますー！」

かかってこいと沢木に言われるやいなや気合を入れ正面から飛びかかるアーティ。その初速に魔法は使われていない。相手に重心の移動を悟られぬよう予め膝を曲げ重心を慎重に落としておき、踏み込む瞬間に後ろ足を蹴るのではなく前足を抜く事によつて初動を悟られずにかつ初速から全速力で動くことができる。一部の東洋武術で用いられる「縮地」の技術である。

「速いな」

沢木に部長と呼ばれた男子生徒が腕を組みながら嘆息を漏らす。予備動作を盗ませない技術は横から見たのではわかりにくく、正面から相対した時にその真価がはつきりと分かる。正面の沢木にはほとんどアーティが突然消えたように見えたはずだ。

「しかし、沢木も流石だ」

アーティが初動に魔法を用いなかったということは沢木の側も対応するために魔法を用いる時間がなかったということだ。すなわち一瞬で間合いを詰め放ったアーティの上段突きを首の動きだけで交わし右足を半歩引いて即時に仕切り直したのは純粹に沢木の身体的技術によるものだ。

競技的なMマーシャル・マジック・アーツ M A

の特徴として、試合開始の合図とともに互いに自己強化の魔法を使用するというものがある。魔法で自分を強化し超高速・超強度の徒手格闘を繰り広げるのだから当然なのだが、アーティはその定石を覆す戦い方を見せている。彼の戦い方を知らない選手ならば、自己強化の魔法を使用するためにCADを操作し

ている間に彼の初撃を受け床に沈むだろう。沢木は何度もアーティの身体技術の高さに触れていたからこそ、対応できたのだ。

「この初期位置ではMマーシャル・マジック・アーツ Mマーシャル・マジック・アーツ Aマーシャル・マジック・アーツが競技として成り立たないな。公式ルールの改正が必要だな。しかしここからは沢木の土俵だぞ」

最小限の動きでアーティの初撃をかわし半歩とはいえ間合いを取り仕切り直した沢木が手ぶらで待っているはずはない。既に自己加速術式の起動を終えようやく二人の戦いは本来のMマーシャル・マジック・アーツ Mマーシャル・マジック・アーツ Aマーシャル・マジック・アーツのステージへと移行した。アーティも追撃が間に合わないと見るや自己加速術式を見事な速度で展開、マルチ・キャストで接触魔法を駆使し既に3合ほど打ち合っている。

「驚いた。入学したてで既にマルチキャストを使うか。彼はこの高校で学ぶことが一体どれほど残っているのか」

マルチキャストとは起動した魔法式の展開、効果時間が終了する前に他の魔法式を起動、展開することで、結果として異なる魔法を同時に複数種類発動させる技術である。相当な高等技術なのだが、移動のための自己加速術式と攻撃のための接触魔法の同時展開はMマーシャル・マジック・アーツ Mマーシャル・マジック・アーツ Aマーシャル・マジック・アーツにとって必須技能であり、それ故にMマーシャル・マジック・アーツ Mマーシャル・マジック・アーツ Aマーシャル・マジック・アーツの選手であるというだけで相当に優秀な魔法師であることが確約される。

もつともMマーシャル・マジック・アーツ Mマーシャル・マジック・アーツ Aマーシャル・マジック・アーツで用いる接触魔法は先述の通り変数入力が多くを省略しており、他の魔法を使用するときほどマルチキャストのハードルは高くないのだが、当然のように使いこなすアーティの姿に部長と呼ばれた生徒以外の見物人も嘆息を漏らす。

「なるほど。沢木の言葉も最もだ。これほどの体術、そして既にマルチキャストを満足に使いこなす魔法技能があるならば、いくら沢木でも手加減などしようものなら不覚を取るだろうな」

果敢に戦うアーティに向けて呟かれた部長の言葉は紛れもない称賛だ。だがその文脈は彼が沢木の勝利を確信しているものである。

Mマーシャル・マジック・アーツ Mマーシャル・マジック・アーツ Aマーシャル・マジック・アーツ 部員が固唾を飲んで見守る中、14合ほども打ち合ったところで沢木の有効打が入った。8合ほど打ち合った辺りで明確にアーティが押され始め、ついに沢木の拳がアーティの肩口を穿ったのだ。

「……………っ！ありがとうございます」

「ありがとうございます」

有効打が入ったやいなや2人は向き直り、礼をする。14合も打ち合ったというのに、2人とも全く息を切らしていない。

「いやあ、あそこまで粘られるとは。春休みからさらに腕を上げたな。自分ひとりで練習できるものでもない、誰かいい練習相手がいるのかな」

「いえいえ、いいイメージが掴めたんですよ。それで動きも良くなったのかと」

「それでここまで動きが改善するならみんな苦労はしないさ。君は逸材だな」

「でも沢木先輩には完敗でした。イメージの中では勝ちきっていたのに」

「ははは、まだまだ新生に負けるわけにはいかんよ」

こんな会話を交わしながら2人はお互いに酷使した体をストレッチでほぐし合う。

国立魔法大学附属第一高校 マージュナル・マジック・アーツ M M A 部の新学期二日目の朝

練は、部員全員が見入るほどの組手の終わりとともに、終了時間を迎えた。

入学編Ⅲ

登校したばかりの1年A組のクラスルームは、雑然とした雰囲気にも包まれていた。

その雰囲気を一瞬で説明するのならば。

「……………アリンコかよ」

植生の管理が進み、また舗装が著しい進歩を遂げた影響により蟻の大群を子供が観察する機会もめつきり減ってから半世紀が経とうとしているが、一つのものに群がる集団への揶揄としては未だに用いられる。

教室に入ってきたのが何も知らない生徒ならばその騒ぎの正体がつかめず若い好奇心を満たすためにその蟻の一員になったであろうが、アーティにはおおよそ見当がついていた。

「深雪さん、だろうな」

常日頃聞かされていた深雪からの話では深雪のクラスはA組。加えて昨日はホームルームには連絡事項も授業もないとはいえ人がいなさすぎた。ほぼ確実に深雪はこのクラスに居る。昨日の深雪の答辞は見事なものだった。加えてあの美貌。さらには「国立魔法大学附属第一高校の新生総代」というのは特別な意味がある。慣例として新生総代は一年生の時分から生徒会に入ることになっており、歴代の生徒会長の多くは新生総代を務めた生徒だった。全国の魔法科高校の中でもトップに君臨する第一高校の生徒会長を務めるということはこれからの魔法師社会においてリーダーシップを執っていくということだ。彼女に今のうちにお近づきになっておくのは彼等が背負う家のためにも必要なことなのだ。ここまで予備知識を持っているならば、あの集団の中心に佇むのが誰かを当てるのは基本的な四則混合計算を解くよりも簡単なことだった。

幸いアーティは図らずも昨日深雪に挨拶は済ませている。深雪を取り囲む集団を通り過ぎ深雪の3つ前の席に着く。そのアーティの背中に、思いがけず声がかけられる。

「あらアーティさん。昨日ぶりですね。貴方もこのクラスだったの

ね」

慌ててアーティが振り返ると声の主は深雪だった。周囲への返礼に嫌気が差した深雪が人だかりの外に突破口を求めてのことだろう。深雪が自ら声をかけたという事実に取り巻きたちの空気が止まる。アーティはほんの僅かな逡巡の後、ここは深雪に助け船を出すことに決めた。クラスメイトには少々睨まれることになるが、ここで少しだけ恩を売っておいて深雪に近づくことを優先することにしたのだ。

「おや、深雪さんですね。昨日の答辞は見事なものでした。お兄様も大変喜んでおられると思いますよ」

普段は間が抜けていてポンコツとの誹りを免れないアーティだが、彼も聡明な優等生である。この単調な返しにいくつもの牽制を含んでいる。

まず下の名前で呼んだこと。兄の達也のことを知らない殆どの生徒にとっては司波といえは深雪のことなのでまずは皆彼女のことを司波さんと呼ぶ。ところが昨日兄と一緒に紹介を受けた彼にとっては彼女の呼び方は深雪で違和感がないのだ。その事情を知らないクラスメイトにとっては、何らかの予めの繋がりを感じさせるほど親密に見えるのである。加えて兄についての言及。家族構成をも知る仲であると暗にアピールしてみせたのだ。そして一番大きな影響はとやうと。

「そうなのです！兄も大変喜んでくれました、褒めていただいたんですよ！」

深雪のテンションが数段上がって食いついてくること。この深雪の反応に、2人の会話に水を差すまいと取り巻きの生徒たちは退散した。

その様子を目で追いほつと息をついたアーティを見て深雪もアーティの思惑に気付いたようだ。

「お気遣いいただきありがとうございます」

「いえいえ、少々行き過ぎていましたから。もうそろそろ始業ですし、ちようどよかったですよ」

昨日の朝の印象も少しは回復できているといいな。そんな都合の

いい願望を胸にしまいながら、アーティは始業の時間を待った。

いかに国立魔法大学附属第一高校が勉学・魔法教育ともに国内トップクラスの水準を誇るとはいえ、入学二日目でいきなり授業を始めるほどゆとりがないわけではない。今日行ったのはガイダンスに履修登録、それからいくつかの専門課程の見学だった。MMA部の練習も勧誘期間が始まるまでは放課後は行われない。荷物をまとめて校門をくぐろうとしたアーティだったが、入学二日目で早々に面倒事に巻き込まれることになる。

「いい加減に諦めたらどうなんですか？深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟むような事じゃないでしょう」

苛立たしげに響いたその声は、アーティにとって聞き覚えのある声だった。好奇心を覚え騒ぎの渦中に体を寄せ声の主を確認したアーティは驚きを禁じ得なかった。

(あれは…入学式の時の)

達也の隣りに座ってきた二科生の一人。柴田美月と名乗った少女であった。

(あんなふうになるタイプには見えなかったけどな)

そして声を張り上げている主の隣に台風の目を見て今度はアーティは溜息をつくことになる。

(またこの人達か)

そこにはアーティが半ば予想していた二人の姿があった。

「別に深雪さんはあなたたちを邪魔者扱いなんてしていいじゃないですか。一緒に帰りましたから、ついてくればいいんです。なんの権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか」

こう続けた美月の言葉でアーティは大体の状況を理解した。どうしても深雪と帰りたいが二科生と帰路を共にすることなど御免だと考えた一科生が達也を排除しようとしたのだらう。それに深雪を含

めた周りのメンバーが反発した。

(しかし、引き裂く、つて。水晶眼は物事の真理を見せる力もあるのかな。もうあの2人の真相にたどり着いているだなんて)

そう冗談めかしてひとりごちるアーティを傍目に事態はますます緊張感を増していく。

「僕たちは彼女に相談することがあるんだ！」

「そうよ！司波さんには悪いけど、少し時間を貸してもらっただけなんだから！」

美月の言葉は正論であったが、一科生たちはなおも食い下がる。そんな彼等に、

「ハン！そういうのは自活中にやれよ。ちゃんと時間が取ってあるだろうが」

そう二科生の男子生徒が返す。どうやら達也の連れのようなのだ。

(物怖じもせずに言い返すか。二科生も非差別意識に沈む者ばかりではないということだな)

そうアーティに安堵させるほど、その男子生徒の反論は勇ましいものだった。

「相談だったら本人に予め同意をとってからにしたら？深雪の意思を無視して相談も何もあったもんじゃやないの。それがルールなの。高校生にもなつて、そんな事も知らないの？」

その反論に息ぴったりが続けたのはこれまたアーティの知る顔、千葉エリカだった。エリカの嘲るような言い草に、一科生たちはなおもヒートアップする。

「うるさい！他のクラス、ましてやウイードごときが僕たちブルームに口出しするな！」

ウイード、ブルームという言葉は差別用語として使用を禁じられている。それでもその差別意識は根強く残っておりこの言葉を使う者も決して少なくない。新入生の間にも既にそのような差別意識があることが浮き彫りになる一言だった。

そんな言葉に反応したのはまたもや美月だった。どうやら彼女は誰にもまして芯の熱い所があるらしい。

「同じ新入生じゃないですか。あなた達ブルームが、今の時点で一体どれだけ優れていると言うんですかっ？」

売り言葉に買い言葉。だがルール違反の発言である先ほどの一科生の発言とはまた違った意味で、これは禁句だった。

「……………どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ」

一科生として選ばれこの高校の門を叩いた彼ら一科生にとって、その言葉は彼らの冷静さを失わせ実力行使に踏み切らせるには十分すぎた。数秒後の展開が読めたアーティは即座に地面を蹴る。彼の前にはまだ人垣があるが、彼はまるでそんなものは存在しないとも言いかのように駆け抜けていく。

「はっ、おもしろえー！ぜひとも教えてもらおうじゃねえか」

これまた売り言葉に買い言葉。だがこの言葉が重大なルール違反を犯そうとする一科生の背中を押してしまった。

「だったら教えてやるっ！」

ついに堪忍袋の緒を切らせた一科生の生徒が腰につけたホルスターから拳銃型のCADを抜く。

「特化型っ!？」

男子生徒が取り出したCADが発動までの時間が短縮されより実践的に用いられるCADの型であることを理解した二科生が悲鳴のような声を上げる。周りにいる誰もが、次の瞬間、そこには魔法使用による無残な光景が広がるものと目をつぶったが、その魔法が発動することはなかった。

「ぐはあっ！」

人垣を文字通りすり抜けて走り込んでいた赤髪の一科生に投げ飛ばされていたのだった。

「流石だな。死角からの不意打ちでも最低限の受け身を取れるとは」

投げ飛ばした相手の首の後を完全に抑え込みながらアーティは自分が投げ飛ばした男子生徒に賞賛を送る。

「だが。魔法師社会の中でリーダーシップを発揮していくことが望まれる一科生が、魔法の不正使用を行うなど、言語道断だ。そして君」

そう言つてアーティは目の前にいる喧嘩を買っていた二科生に向

き直る。

「今、彼女のCADを素手で掴もうとしただろう。出力された起動式は時にはそれに触れた魔法師に拒否反応を起こさせることもある。今後はやめておいたほうがいい」

「お、おうすまないな助かったぜ」

突然の闖入者の言葉に慌てて頷く二科生の生徒。彼の横ではエリカが伸縮型の警棒をまさに構えている状態だった。アーティが乱入しなくても、魔法の発動より一瞬早くエリカの警棒が一科生のCADをはたき落としていただろう。先を越されたエリカが昨日知り合ったばかりの闖入者に声をかけようとするが、鋭く背後を振り返り身構えたアーティの動作によってそれは中断された。

「——っ!!!」

アーティが振り返った先では一科生の女子生徒が腕輪型の汎用型CADへ指を走らせている。ここに至って初めてアーティはたった今投げ飛ばした生徒と目の前の女子生徒がA組のクラスメイトであることに気付いた。深雪のクラスメイトなのだから当然のことだが、朝の件以降必要以上にクラスメイトから睨まれることを嫌ったアーティは深雪と極力離れて行動することを選んでいたため、積極的に深雪と行動をともしたがったクラスメイトへの印象は薄い。そこまですれまれないように慎重に立ち回っていただけに、このような大立ち回りを演じて敵対してしまったことでアーティは慙愧の念に駆られてしまった。

目の前の女子生徒は新生生とはいえ一科生に選ばれた優秀な魔法師である。ただでさえ後手に回っていたアーティは、その刹那の逡巡により女子生徒の魔法の発動を阻止する手段を失った。

「しまっ、——」

アーティには展開中の魔法の起動式を読み取り発動する魔法の種類を予測する技能はない。その女子生徒が得意とする魔法の系統もわからない。故にアーティにできることはできるだけダメージを減らすために防御姿勢を取ること、攻撃対象の自分の近くにいるエリカと二科生の男子生徒を突き飛ばし巻き添えを食わないようにするこ

と、あとは女子生徒の発動した魔法ができるだけ危険度の低い牽制タイプの魔法であることを祈ることのみである。

しかし。

すぐさまそのすべてを実行し地面に伏せたアーティに、いかなる魔法攻撃が飛んでくることはなかった。

今日の前でアーティのクラスメイトが展開していた起動式に、外部から想子の塊を撃ち込まれ、起動式の想子パターンが攪乱され、魔法が未発のまま霧散したからである。

防御姿勢を取ることに尽力したアーティはその知覚が一瞬遅れたが、すぐさま響いた声にアーティもすぐさま事態を理解した。

「やめなさい！自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則違反である以前に、犯罪行為ですよ！」

決して迫力のある声とは言えない。だがその毅然とした口調から聞く者に威厳を感じさせる声の主は、アーティのクラスメイトの魔法を無力化した張本人の声だと、その場にいる全員が直感的に理解していた。

声の主の姿を認めて、アーティたちに攻撃魔法を使用しようとしていた女子生徒は顔面蒼白となった。よろめいたその女子生徒を他の女子生徒がしつかりと抱きとめている。

女子生徒の魔法を無効化し、警告の声を発したのは、入学式でも登場し新入生も皆知るところとなっている、生徒会長・七草真由美だった。

攻撃魔法の使用未遂。すなわち魔法犯罪の未遂の現場を、生徒会長に抑えられた。その衝撃は大きく、その場に居合わせた全員が完全に凍りついていた。

「あなたたち、1—Aと1—Eの生徒ね。事情を聞きます。ついてきなさい」

先程の生徒会長の口調に比べればいささか異常に冷たい、という印象を受ける声でこう命じたのは、真由美の隣に立つ女子生徒。入学式の生徒会紹介によれば、彼女は風紀委員長、渡辺摩利という名の三年生だ。

摩利のCADはすでに起動式の展開を完了している。それは地面に伏しているアーティにも知覚できている。下手に動けば武力行使に出るだろう。それをこの場にいる全員が直感的に理解している。故に、動けない。ついてきなさいという命令を無視しているのではない。摩利と真由美の迫力に気圧され身動き一つ取れなくなっているのだ。

「すみません、悪ふざけが過ぎました」

「悪ふざけ？」

そんな中、全く動けないでいる同級生たちを尻目に泰然とした足取りで前に出てきて達也が言い放った一言に、当然ながら摩利が訝しげに疑問符を返す。

「はい、森崎一門のクイックドロウは有名ですから、後学のために見せてもらうだけのつもりだったのですが、あんまり真に迫っていたもので、あちらの生徒が危機を感じて手を出してしまったようです」

(うわぁ……………)

達也の明らかな嘘に突っ伏したままのアーティは言葉には出さずため息をつく。それまでの経緯をまるっと嘘の説明で塗り替えてしまった上に、事態が急変したのをアーティの責任にしたのだ。

「ではその後にはーAの女子が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのはどうしてだ？」

達也の説明を鵜呑みにしない摩利は冷笑を達也に向けながら質問を重ねる。

「彼が投げ飛ばされたことに驚いたんでしよう。条件反射で起動プロセスを実行できるとは、さすが一科生ですね」

真面目くさった表情で達也も返すが、流石に白々しい。

「あの攻撃範囲では君の友人も巻き込まれていたかもしれない。それでも悪ふざけだと主張するのかね？」

「攻撃と言っても、彼女が発動しようとした魔法は目くらましの閃光魔法ですから。それも、失明したり視力障害を起こしたりするレベルのものではありませんでした」

再び、息を呑む気配。起動式から発動魔法を予測することなど、ア

ルフアベツト数万字の情報を一瞬で読み取りその意味を理解することに等しい。そんな事ができるとするならば。それはもはや異能と呼ばれるべきものだ。

摩利の態度も、冷笑から感嘆に変わる。

「ほう…どうやら君は、展開された起動式を読み取ることができらしいな」

にわかには信じがたい達也の意味するところを、明確に言葉にして確認する。

「実技は苦手ですが、分析は得意です」

これがでまかせなら、この男子生徒は魔法技能よりも演劇の才能があると言っているだろうか。異能とも呼べるその技能を、達也は「分析」の一言で片付けた。

「……誤魔化すのも得意なようだ」

値踏みするような、睨みつけるような、その中間の眼差し。

ここであただ一人矢面に立っている兄をかばうように、深雪が進み出る。

「兄の申したとおり、本当に、ちよつとした行き違いだったんです。先輩方のお手を煩わせてしまい、申し訳ありませんでした」

達也の言葉をにわかには信じられない摩利だったが、深雪に小細工無しで高も深々と頭を下げられては摩利も毒気を抜かれてしまう。

「摩利、もういいじゃない。達也くん、本当にただの見学だったのよね」

ここでの真由美の助け舟が追い打ちになり、ようやく事態は収束に向かう雰囲気になった。

「生徒同士で教え合うことが禁止されているわけではありませんが、魔法の行使には、起動するだけでも細かな制限があります。このことは一学期のうちに授業で教わる内容です。魔法の発動を伴う自習活動は、それまでは控えたほうがいいでしょうね」

「会長がこう仰せのことでもあるし、今回は不問にします。以後このようなことがないように」

真由美と摩利の総括に、そこにいる一同は呉越同舟ながら慌てて頭

を下げる。地面に伏していたアーティとアーティが突き飛ばし同じように地面に伏せていた2人の達也のクラスメイトも、それに倣った。

そんな彼等に見向きもせず真由美と摩利は踵を返す。だが摩利は一步步を進めたところで足を止め、背中を向けたまま問いを発する。

「君の名前は？」

それが達也に向けられたものであることは明白である。

「二年E組、司波達也です」

「覚えておこう」

こうして色んな人に目をつけられていくんだな、と心のなかでため息をついたアーティの目の前で、入学二日目にして起きた事件は収束したのだった。

入学編Ⅳ

「……………借りだなんて思わないからな」

アーテイの手を借りて立ち上がった森崎が、役員の姿が校舎に消えたのを見届けて、開口一番刺々しく達也に言い放った。成熟した大人でも、自分が見下している相手に素直になるのは難しい。故に目下の者に対する態度がその人間の品格を真に表すものだが、この場合、まだ高校一年生の彼にそれを求めるのは酷と言えらるだろう。攻撃魔法使用未遂というれっきとした犯罪行為を行い、あまつさえ自分が見下す二科生にそれを庇われた時点で、彼は大恥をかいている。この上達也に謝意を示そうものならさらなる恥の上書きになると考えるのも無理はない話だ。

当の達也もそれをわかっているのか、やれやれ、という表情を浮かべて振り返り

「貸してるなんて思っていないから安心しろよ。決め手になったのは俺の舌先じゃなくて深雪の誠意だし、お前の魔法の不正使用を直接阻止したのはお前のクラスメイトなんだからな」

摩利への説明で責任をなすりつけた落とし前か。達也はきっちりアーテイへのフオローを入れ立ち去ろうとする。

「……………僕の名前は森崎駿。お前が見抜いたとおり、森崎の本家に連なる者だ」

意地を張った強がりか、思いの外大人の対応を返されて彼も自分の対応の稚拙さに思い至ったのか、少し姿勢を正して達也に名乗りを上げる。

「見抜いたとか、そんな大げさな話じゃないが。単に模範実技の映像資料を見たことがあっただけで」

「あつ、そういえばあたしもそれ、見たことあるかも」

「で、テメエはそのことを今の今まで思い出しもしなかった、と。やっぱ達也とは頭の出来が違うな」

達也の返答を勝手にギャアギャアとまた勝手に会話を始めるE組の面々。その様子にまた森崎は苛立ってしまったようで、

「僕はお前を認めないぞ、司波達也。司波さんは、僕たちと一緒にいるべきなんだ」

そんな捨て台詞を残して達也の返事を待たずに背を向けてしまった。捨て台詞とは表面上は多くの場合返事を期待するものではない。相手に返事をさせないために捨て台詞の形を取る場合もある。だが相手を過剰に意識しているからこそ出てくるもの、という側面もある。

「いきなりフルネームで呼び捨てか」

だからこそ達也の返答ではないものの聞えよがしな独り言は十分に大人げないものと言える。それを耳にした森崎はピクツと肩を震わせたもののもう何も言わずにそのまま立ち去ってしまった。そんな森崎を無表情で見送る達也に心配そうな顔で見送る深雪、呆れ顔で見送るアーティとそれぞれの面持ちでその場に立ち尽くしていたが、「お兄様、もう帰りませんか?」

「そうだな。レオ、千葉さん、柴田さん、帰ろう。アーティも一緒にどうだ? 君さえ良ければ、だが」

司波兄妹の言葉に止まっていた空気がようやく動き出した。

「ええ、達也さん。オレの方はぜひ一緒に一緒にしたいのですが、お友達の方は大丈夫でしょうか?」

「なんだ、達也の知り合いかよ。なら俺は全然構わないぜ」

「あたしと美月は昨日もう話してるしねー。ね、美月?」

「はい。アーティさんと一緒に帰れるなら、私も嬉しいです」

「なんだ。俺以外みんな知り合いなのかよ」

「あんただけ仲間はずれねー」

「なんだとー???」

どうにも既に達也の周りには親しい友人関係が築かれているらしい。会話のボールをひとたび投げるとなかなか帰ってこない。そんな親しげな彼等の様子を半ば呆れながら、少し羨望も入り混じった気持ちで眺めていると

「あ、あのっ!」

さきほど森崎を投げた直後に魔法をキャストし真由美によって魔

法発動を阻止された女子生徒が意を決したように割り込んできた。

「光井ほのかです。さつきは失礼なことを言つてすみませんでした」

つい先程彼等に危害を加えようとした人物の突然の割り込みに一同が身構えるよりも早く、その女子生徒は深々と頭を下げ謝罪の言葉を口にしていった。二科生のところに何も考えずに座つてしまうようなアーティならともかく、先程の口調から少なからずエリート意識が垣間見えていた彼女のこの態度は、豹変と言えた。

「庇つてくれて、ありがとうございます。森崎くんはああ言いましたけど、大事にならなかつたのはお兄さんのおかげです」

「……………どういたしまして。でも、お兄さんはやめてくれ。これでも同じ新生生だ。」

「わかりました。では、なんとお呼びすれば……………」

そんな彼女の豹変ぶりに面食いながらも達也も冷静に言葉を返す。

「達也、でいいから」

「わかりました。それで、その……………」

言いつらそうにしているほのかに、

「……………何でしょうか？」

クラスメイトである深雪から助け船を出す。

「……………駅まで一緒にしてもいいですか？」

恐る恐る、だが何かある種の決意を秘めた顔で、同行を請うほのか。虚を突かれた一同だったが、その申し出を拒む理由もなかつたので、彼等は奇妙な下校を共にすることになった。

駅までの帰り道は微妙な空気になるかと思つたが、思いの外会話は弾んだ。

「工藤くんは1-Aのクラスメイトだったんですね。たしかに朝、深雪さんとお話されているのを見た気がします。それ以降お顔を見なかつたので、すっかり忘れていました」

それは入学式で二科生の面々とすでに仲良くなつていたアーティ

の存在がうまく潤滑油になったことが理由だろう。

「オレは今日の見学でほとんど深雪さんと同じところになかったから。2人は深雪さんと一緒に回っていたようだし、無理もないね」

「そうだったんですね。アーティさん、クラスメイトとして一年間、よろしくお願ひしますね」

「こちらこそ」

既に相互の自己紹介を済ませ、道中にぎやかに駅へと向かっている。

「いやあしかしアーティがああ森崎？ってヤツをぶん投げたときはたまげたぜ。お前が近づいたことに気づきもしなかったんだ。突然現れてひよいと投げるんだから、驚いたなあ」

「ああ、俺も驚いた。柔術の投げというのは相手の勢いを利用して投げるものだが、あるとき森崎は直立していただけだった。あれは崩しの応用か？」

「さすが達也さん。ご名答です。誰でもいきなり後ろから首根っこ掴まれたら、よろけないように反発しますよね。その力の流れを利用して投げたんです」

感嘆の声を上げるレオに、仮説の真偽を問う達也。

「あれだけ最小限の動きで崩して投げるのなら、それはもう合気の域だな」

そう続ける達也の好奇の目に、アーティの背中を冷や汗が流れる。あそこで見せた技は一見普通に投げただけだが実は静止している相手を無理やり投げるのは至難の業であり、それをやってのけたアーティの腕前が相当なものであることを達也は確信していた。自分の武術の師を言うわけにいかないアーティとしてはこの話題はそろそろ終わりにしたいものだった。

「それはそうと、なんでお前らアーティと既に知り合いだったんだ？一科生のアーティとは教室も階段から違うし入学式も座るところが別だろ？」

「ちょうどよくレオが話題を切り替えてくれたがそれもまたアーティにとつては好ましくない話題だった。」

「それがよ。その入学式で知り合ったのよねー。ね、アーティ？」

悪戯な表情で同意を求めてくるエリカに諦め顔のアーティ。その諦め顔を首肯と見てエリカは意気揚々とエピソードを話し始める。

「前に一科生後ろに二科生ってキレーに座ってた中にね、アーティだけ後ろに座ってたの！それで周りの子遠慮しちゃって、空いてた席にあたしたちが座ったってワケ！」

「最初に座ってたのは達也さんで、私達はその達也さんの隣にお邪魔したんです」

赤裸々に語るエリカに補足する美月。これにはレオはもちろんほのかとその連れの女子生徒、北山雫も目を丸くしている。

「森崎ってヤツを投げたあたりでも思ったんだが、アーティってびつくりするくらい一科生とか二科生とか気にしないのな」

そう呟くレオの表情は感心を通り越して感動しているようにまで見えるものだった。

「そうなのよ。入学式の時も、あたしたちで勝手に自己紹介し合ってたらアーティも混ぜてきたのよね。何の疑問もなく。あたしたちのほうが面食らっちゃった」

入学式のエピソードを交えエリカが同意する。

「俺らもすこし気にしてムキになってたかもしれねえな」

「差別っていうものは片方の方向にだけ存在するものじゃない。差別されていると感じている者の中にも差別の意識はあるものだ」

自省気味に呟くレオに続ける達也。並み居る一科生なら居心地の悪いものだろうが、ほのかや雫はふむふむとうなずいている。どうやら心の底から差別意識に毒されていたのではなく一高全体の雰囲気染まってしまっていただけだったのと、彼女たちが非常に素直であるがゆえに自分たちの過ちを認め、改善できているようだ。

「私もほのかもこの学校の雰囲気流されてしまった。でも、最初から自分の考えを貫いて一科生と二科生の違いを気にしなかった工藤君は、すごい」

そうアーティの瞳をまつすぐ覗き込みながら雫が淡々と語る。

真正面から見つめられ惜しみない賛辞を送られたアーティは、

「え、あ、いやそんな、すごいとか言われるようなことじゃ……」
消え入りそうな声で謙遜している。というか、最後のあたりは隣りを歩いていったエリカにしか聞こえていなかった。

「……………落ちたな」

あまりにもわかりやすい反応に達也がぼそつと呟く。深雪は温かい視線をアーティに送っている。

「落ちたわね」

エリカもそれに続いて呟くとアーティの肩をポンポンと叩く。

「こんなにわかりやすいの、創作の中だけの話だと思つてたぜ……」

そう呆れがちにぼやきながら頭をポリポリとかくのはレオ。

そんな彼らに対して

「え？何か落としました？」

「何も落ちていないようですが……」

ついていけていない美月とほのか、わかっているのかわかっているのかよくわからない沈黙を続ける雫、赤面して心ここにあらずなアーティの姿は傍から見れば滑稽に映つたに違いない。

そんな奇妙な雰囲気は長くは続かず、まもなく一同は駅へと着いたので各々の帰路につくことになった。

入学編Ⅴ

司波兄妹が暮らす司波邸から、いつものように登校する兄妹。その登校時間は、達也とクラスが離れている深雪にとって家の外では貴重な達也と二人になれる時間である。そして電車というものの仕組みが変わってから、途中から知り合いが電車に乗り合わせるというイベントが無くなったので、自宅から第一高校の最寄り駅までその2人きりの時間は確約される。しかしその後はむしろ2人きりになれることのほうが少ない。

入学後3日目ではあるが、既に行動メンバーとして固まりつつある達也の級友達が待ち構えていたように駅で次々と合流する。それは達也との2人きりの時間が終わることを意味するが、深雪にとってはそれもまた喜ばしいものだった。

しかし、今達也の名を呼びながら走り寄る人物の顔を確認した深雪は、流石に驚きを禁じ得なかった。

「達也さん、会長とお知り合いだったんですか？」

思わず訪ねた美月も同様のようだ。

「一昨日の入学式が初対面……のはず」

記憶に自信のある達也だが、走り寄る真由美の態度にその返答も煮え切らないものになってしまっている。

「そうは見えねえけどなあ」

「わざわざ走ってくるくらいだもんね」

達也の記憶の限り、そして達也は自分の記憶に絶対の自信があるが故に、時分と七草真由美は入学式が初対面だと断言できる。しかし、レオとエリカが言う通り、真由美のこの態度はとても出会って数日の人物に対するそれではない。

「……………深雪を勧誘に来てるんじゃないか？」

「……………お兄様の名前を読んでいるんじゃないか？」

彼の周りには、美月、エリカ、レオの「いつもの」と形容して違和感のない面々。ほのか、雫、アーティの姿はない。別に彼らが仲間外れになっているわけではなく、本当にここに居合わせた面々は偶然駅

で一緒になったから合流してきただけなのだ。

「達也く〜ん」

深雪の言う通り、後ろから走ってくる第一高校の生徒会長は聞き間違いないではなく達也の名前を呼んでいる。そんな真由美の態度にさすがの達也も小首をかしげながら振り返り、彼女の合流を足を止めて待つ。

「達也くん、オハヨ〜」

深雪さんも、おはようございます」

なぜかはわからないが、達也だけ扱いがぞんざいだ。親密ということもできるのだが。そんな真由美の態度に煮え切らない達也だが、相手は3年生で生徒会長だ。

「おはようございます。会長」

それなりに丁寧な、数日前に知り合った人間に対して相応な対応を彼はしなくてはならない。昨日の森崎への対応のように大人げない一面が顔を見せる時もあるが、基本的に彼はこの年令の少年にしては良識ある落ち着いた男だ。自分に敵意のない相手に対しては十二分に丁寧な対応を見せる。

深雪、レオ、エリカ、美月も做って礼儀正しく挨拶を述べるが、少々腰が引けている。深雪はともかく、他の3人にとっては入学3日目で早々に生徒会長に挨拶をするというイベントはいささか以上に荷が重い。

「お一人ですか、会長？」

見れば分かることを問うたのは、このまま目の前のこの生徒会長と一緒に登校してくるのか、という確認でもある。

「うん。朝は特に待ち合わせはしないんだよ。」

肯定は、言外の質問に対する肯定でもある。

「深雪さんと少しお話したいこともありますので……………一緒にしても構わないかしら？」

これは深雪に向けられた言葉。やはり達也への言葉とは砕け方が違う。どうやら達也の気の所為ではないらしい。

「はい、それは構いませんが……………」

肯定を返す深雪だが、煮えきらないのは後ろの3人を気にしてのことである。

「あつ、別に内緒話をするわけじゃないから大丈夫。それとも、また後にしたほうがいいかしら？」

それを敏感に感じ取った真由美は深雪と達也の後ろで固まっている3人に微笑みながら目を向ける。

「会長……俺だけ扱いが違うような気がするの、勘違いでしょうか？」

話が進んでしまう前に達也も自分の疑問を解消していこうとするが、

「えっ？そうでしたか？」

今更のように白々しく口調を変えられ、達也の思惑は霧消した。

達也はこの程度のことと怒ったりはしませんが、ストレスは感じる。それをよく知る深雪は慌てて話の水を自分の方に引き寄せる。

「お話というのは生徒会のことでしょうか？」

「ええ、一度ゆっくりと説明したいと思つて。お昼は空いているかしら？」

真由美も悪ノリを続けるようなことはせず、深雪と達也に昼、生徒会室で会食する約束を取り付けると、真由美は満足した様子で立ち去った。

同日、放課後。

達也と深雪は生徒会室の前にいた。

昼休み、真由美との約束どおりに昼食を取り、そこで生徒会の面々と深雪の顔合わせを済ませたのだが、そこで思いがけず深雪が達也の生徒会入りを希望した。それ自体は生徒会役員は一科生から選ばれ

る規則から却下されたが、同席していた渡辺摩利風紀委員長のアイデアで達也を生徒会推薦枠で風紀委員に加入させることが議題として上がり、詳細の説明を放課後に持ち越したため、また二人は足を運ぶことになったのだ。

達也は全く乗り気でなく、それを深雪も重々承知しているがゆえに二人の足取りは重いものだった。

丁寧にノックをして入室した達也を迎えた面々には昼休みを共に過ごした七草真由美生徒会長、渡辺摩利風紀委員長、市原鈴音生徒会会計、中条あずさ生徒会書記に加えて昼休みにはいなかった顔ぶれが2つあった。

片方の顔は今こうして達也たちを迎えることを達也も深雪も予想していたものだったが、もう片方の顔には達也も深雪も驚きを禁じ得なかった。

「失礼します」

既に入室済みだが軽くそう一礼して生徒会室の中ほどに進む達也を鋭い敵意を含んだ視線が捉える。達也は思わずため息をつきそうになったがこれも予想の範疇だったのと、予想だにしなかったもう一つの顔ぶれがいる理由を思索していたためそれは心の中だけで留めることに成功した。

幸いその敵意の視線は長く続かなかった。敵意が霧消したわけではないが、達也に続いて入室した深雪に視線が移ったのだ。その視線は達也に対するものとは打って変わって優しく、歓迎の意思を感じさせるものだった。

その視線の主が立ち上がり兄妹のもとに近づいてくる。いや、深雪に近づいてくると表現したほうが妥当であろう。どうやらその人物は達也を完全に無視することにしたようだ。

「副会長の服部刑部です。司波深雪さん、生徒会へようこそ」

敬愛する兄を無視して自分にだけ挨拶をしてきたことに深雪がムツとした気配が達也の背中越しに伝わってくるが、さすがは深雪、一瞬で収めている。その気配を察した者は他にはいないだろうが、昼休みはいなかったもうひとりの同席者がため息をつきたげにこめか

みに手をやったのが達也の視界の端に映る。そのことに疑問と意外さを感じながらも達也の意識は上座に座る生徒会長と風紀委員長に向けられる。

「よっ、来たな」

「いらっしやい、深雪さん。達也くんもご苦労さま」

既に完全身内扱いの摩利にいやに親しげな真由美。これにはもう達也も諦めの境地である。

「早速だけど、あーちゃん、お願いね」

「…………ハイ」

そしてこちらの書記を務める2年生も同じく諦めてしまったようだ。達也は心のなかで少しだけ同情すると、摩利に目を向ける。

「じゃあ、あたしにも移動しようか」

達也を手招きする摩利の横ではあずさが深雪を壁際の端末に誘導している。

「どちらへ？」

摩利の蓮つ葉な話し方に、達也も礼を失さない程度の口調で疑問を口にする。

「風紀委員会本部だよ。この真下にある。といっても中はつながっているんだけどね」

「…………変わった造りですね」

軍事や極秘研究の秘密基地ならともかく、学校の部屋でそういった造りをしているのは聞いたことがなかった。

「あたしもそう思うよ」

そう言いながら立ち上がる摩利。だが腰を浮かせたところで制止が入った。

「渡辺先輩、待ってください」

呼び止めたのは達也への敵意を隠そうとしない服部副会長だった。

「何だ、服部刑部少丞範蔵副会長」

「フルネームで呼ばないでください！」

摩利の返答に服部が突つかかる。席について様子を見ていた赤髪の男子生徒は思わず笑いそうになったのを必死でこらえている。

「じゃあ服部範蔵副会長」

「服部刑部です！」

「そりゃ名前じゃなくて官職だろ。お前の家の」

「今は官位なんてありません。学校には『服部刑部』で届けが受理されています……いえ、そんな事が言いたいのではなく！」

「お前が拘っているんじゃないか」

「まあまあ摩利、はんぞーくんにも色々譲れないものがあるのでしよう」

真由美の差し込みについて先程から笑いをこらえていた赤髪の新入生が笑いを殺しきれず吹き出した。生徒会室には気まずい雰囲気が出たが、それを払拭したのは服部本人だった。

「渡辺先輩。お話したいのは風紀委員の補充の件です。その一年生を風紀委員に任命するのは反対です」

冷静さを既に取り戻しているのは流石と言うべきか。魔法師は人知を超えた力を持つがゆえに極めて強固な理性を持つことが求められる。その点において、この少年は高い水準でクリアしていることがこの様子から分かる。

「おかしなことを言う。司波達也くんを生徒会選任枠で指名したのは七草会長だ。たとえ口頭であつても、その効力に変わりはない」

「本人は受諾していないそうですね。本人が受け取るまで、正式な指名にはなりません」

「それは達也くんの問題だな。生徒会としての意思表示は、既に会長によつてなされている。決定権は達也くんにあるのであつて、君にあるのではないよ」

摩利は眉をひそめながらも、達也と服部を交互に見ながら言う。

「過去、^{ウィード}二科生を風紀委員に任命した例はありません」

服部の反論には禁止用語が含まれている。それに対して摩利は軽く眉を吊り上げてみせる。

「それは禁止用語だぞ、服部。風紀委員による摘発対象だ。この私の前で堂々と用いるとは、いい度胸だな」

声を荒げるようなことはしないが、凄んで見せる摩利の迫力は相当

なものだ。端正な顔立ちだが切れ長の瞳には同年代の少年ならば簡単に気圧してしまうだけの眼力がある。

「取り繕っても仕方ないでしょう。一科生と二科生には明確な実力差があり、実力に劣る二科生がルールに従わない学生を武力で取り締まる風紀委員にふさわしいはずがない」

傲慢だが一面では正鵠を射ている服部の断言口調に、摩利は冷ややかな笑みで応じる。

「たしかに風紀委員は実力主義だが、実力にも色々あつてな。力づくで抑えつけるだけなら、私がいる。相手が10人だろうが20人だろうが、私一人で対処可能だ。この学校で私と対等に戦えるのは七草会長と十文字会頭だけだからな。君の理屈に従うなら、実戦能力に劣る秀才は必要ない。それとも、私と戦ってみるか？服部副会長」

勝ち気な瞳に似合いすぎる自身に裏打ちされた言葉。摩利の実力を知る服部は、流石にたじろぎ、気圧されてしまっている。だが彼も気丈なもので果敢に反論を続ける。

「私のことが問題なのではありません。彼の適性の問題だ」

彼がここまで威圧されてもなお反論を続けられるのは、ひとえに彼が勇敢な少年であると言うだけではない。何よりも自分の意見が正しいことを信じているからこそ反論を続けていられるのだ。正しい側にいるという自覚は人間に自信を与える。それは時として正義感の暴走を誘発することもあるが、今回においてはバランスよく彼の背中を押しているようだ。

「実力にも色々ある、といったらう？達也くんには、展開中の起動式を読み取り発動される魔法の種類を予測する目と頭脳がある」

摩利の反論に、達也は驚いていた。少なくとも昨日、摩利は簡単に信じているような素振りはなかった。

「……何ですって？」

服部の反応も無理はない。摩利のようにたった一日で受け入れている方がおかしいのだ。

「つまり彼を風紀委員に迎え入れれば、未発動のまま阻止された魔法使用未遂の事案に対して発動しようとした魔法に応じた刑罰を適用

できる。このことは学内での魔法の不正使用に対する強力な抑止力になるはずだ」

「……………しかし、実際に違反の現場で魔法の発動を阻止できないのは……………」

摩利が断言した以上、「信じられない」とは言えない。服部はシヨツクを隠しきれない様子で辛くも反論するが

「そんなものは一科生の新入生でも同じだ。魔法の発動の兆候を読み取ってその発動を阻止するということは、後出しでその魔法への対抗魔法を使用するということだ。そんな事が可能な者が、上級生を含めてもこの学校に何人いる？それにだ。私が彼を風紀委員会に欲した理由はもう一つある」

服部自身も認知している事実を突きつけられた挙げ句さらなる動機が存在を示唆され黙り込むほかなくなってしまう。

「今まで二科の生徒が風紀委員に任命されたことはなかった。それは二科の生徒の違反行為についても一科生の風紀委員によって取り締まられてきたということだ。このことは昔から二科生の間に不満を生んできた。風紀委員は一科生と二科生の間の差別撤廃を謳いながら、一方ではその差別意識を助長してきたというわけだ。それを今年度も続けるというのは、私の好むところではない」

昼休みの中では摩利の思いつきのように提示された達也の風紀委員入りであったが、思いの外多くの思惑に裏打ちされていることに達也は感心した。

服部もこれには反論の糸口を見つけられなかったようで摩利への反論を諦め真由美に向き直ると、

「会長……………私は副会長として、司波達也の風紀委員就任に反対します。渡辺委員長の意見に一理あることは認めますが、それでも風紀委員の主な仕事は校則違反者の鎮圧と摘発です。魔法実技の苦手な二科生に務まるわけがありません。どうかご再考を」

生徒会副会長としての諫言を述べるという手段に出た。風紀委員の任命権は生徒会長に委ねられているが、生徒会として副会長の意見を完全に無視はできない。固まりかけた趨勢を互角に戻す程度には

有効な一手であった。

思いがけぬ乱入がなければ。

「待ってくださいー！」

慌てて振り返る達也。牽制のタイミングを逃し続け、ついに先を越されてしまった。誰も気付いていないがさつきからずつとこのやり取りを傍観している赤髪の男子生徒はこころなしかワクワクしているような表情になっている。

「僭越ですが副会長、兄はたしかに魔法実技が芳しくありませんが、それは実技テストの評価方式が兄の力に適合していないと言うだけのことなのです。兄は実戦ならば誰にも負けることはありません」

確信に満ちた言葉に、軽く目を見開いた摩利、微笑みを消して真剣な眼差しを向ける真由美。彼女の言葉は一高の体制自体に対する批判とも受け取れる。何より深雪の言い切った内容は受け取りようによつてはこの実力者揃いの空間において極めて挑戦的なものだ。

だがその言葉を向けられた張本人の服部は冷静だった。

「魔法師は事象をあるがままに、冷静に、論理的に認識できなければなりません。魔法師を志す者ならば、身最真に目を曇らせてはいけません」

服部の言葉はムキになる後輩を宥めるための、諭すような口調だ。二科生が絡まなければこの人物は先輩としても相当な器量を持ち合わせていることが伺い知れる発言だった。もつとも、このような形で口を挟んできた以上、こういう言い方は逆効果になるものであるが。「お言葉ですが、わたしは目を曇らせてなどいません！お兄様の本当のお力を以つてすれば——」

「深雪」

ヒートアップして反論を返そうとする深雪に、達也の制止が入る。

深雪がハツとした表情になり、羞恥に顔を俯かせる。これには先程までワクワクしていた素振りを見せていた赤髪の男子生徒も気まずそうに目をそらしている。

「服部副会長、俺と模擬戦をしませんか」

居心地の悪い沈黙を切り裂いたのは達也の思いがけぬ申し出だっ

た。その奇想天外さに先ほどとは質の違う沈黙が流れる。

「思い上がるなよ、補欠の分際で！」

少し間をおいて放たれた服部の怒号も、当然の反応である。もともとこの場の空気に耐えきれず縮こまっていたあずさが小さく悲鳴を上げる。他の上級生は真剣な面持ちでやり取りの行き先を見守っている。

そして罵倒を受けた当人は、困ったような顔でうつすらと苦笑を浮かべている。

「何がおかしい！」

「魔法師は冷静を心がけるべき、でしょう？」

「くっ！」

自分が深雪に諭した言葉で揶揄されて思わず悔しさと言葉に詰まる服部。

「別に風紀委員に入りたいわけじゃありませんが。妹の目が曇っていないことを証明するためならば、やむを得ません」

そう淡々と述べる達也だが、その態度がまた服部の気分を逆なでする。

「……………いいだろう。身の程をわきまえることの必要性を、たつぷりと教えてやる」

それでも逆上し続けないのは服部の器量故か。それでも彼が今抱えている憤怒は相当なものだと、この場にいる全員が認識している。

真由美と摩利がそれぞれ生徒会と風紀委員として2人の模擬戦を認める宣言を行い、この2人の模擬戦が30分後、第三演習室で行われることが決定した。

入学編VI

服部生徒会副会長、二科生^{ウイード}の新生に敗北す――

そんなニュースが出回る羽目にならなかったのは、先の模擬戦が非公開とされていたからであり、その場に居合わせた者たちの中にこのニュースを言いふらそうと考える不埒者はいなかった。

達也が服部相手にとった戦法は生徒会長の七草真由美、風紀委員長の渡辺摩利といった学内屈指の実力者でもすぐには見抜けぬほど高度なものであり、ここに至り服部も含めた面々がこの高校の実技評価システムが必ずしも実力を反映しないという深雪の言葉を真に理解したのであった。

「ところで会長」

ひとしきり説明を終え、深雪に謝罪をし退室した服部を見送った達也が今しがた使った特化型CADをしまいながら先刻から口に出せないでいた疑問をようやく口にする。

「なぜアーティがここにいるのでしょうか。彼もまた生徒会入りするということですか」

アーティがここにいる理由で思い当たるものはそれくらいしかない。しかし、それもまた不可解な話ではあった。達也の知るところだと新生で1学期から生徒会入りするのは新生総代を務めた生徒のみ。察するにアーティも相当成績が良いのだろうが1学期に2人の新生が生徒会入りするにはそれだけでは理由は薄い。故にこの間は言外に彼が生徒会の招集を受けた理由を問うていた。

「いいえ」

しかし真由美の口から出たのはアーティの生徒会入りの理由ではなく、肯定ですらなかった。

「彼は部活連選定枠でウチに入ることになっているんだ。君とは知らない仲ではなさそうだったし、今日顔合わせしてもらおうと呼んでおいたんだ」

予想外の真由美の返答に怪訝な顔をする達也に種明かしをしたのは摩利だった。

「しかし委員長」

返答がまた新しい疑問を呼び、自分の失言に気が付き顔を顰める達也。摩利も当然気付いておりしたり顔で応じる。

「何だ」

彼女を委員長と呼ぶということは風紀委員入りを認めたことと同義である。

「部活連選定枠とおっしゃいましたが、当校ではまだクラブ勧誘すら始まっていません。この段階で部活連から推薦が出るなどありえない」

「例年はそうなんだ。だから明日から始まるバカ騒ぎ週間は卒業生分の補充が間に合わず風紀委員は自転車操業になる。例年は生徒会選定枠も間に合わないことが多いから、今年は達也くんが入ってくれて助かったがね」

失言を逃さず言質を取りにかかる摩利。だが達也はそれには応じず

「バカ騒ぎとは新入生勧誘週間のことですね。それでなぜ今年は部活連選定枠の人選が間に合ったんです」

話題を懸命に本題に戻す。

「これはここだけの話なんだが」

摩利も大人気なく達也を突つつき返すことはせず達也のもっともな疑問に答える。

「工藤は春休み、合格発表直後からウチのMMA部を『見学』している」

「……………なるほど。それで十文字会頭の目に留まったと」

「そういうことだ。私の部下にふさわしいんじゃないかとね。彼の方から春休みのうちに打診があったのさ。そういうことだから実力は折り紙付きだよ。今から君にもそれを目の当たりにしてもらおう」

「……………はい？」

思いがけない言葉にフリーズする達也だったが、その言葉を理解した後は達也は別の理由でフリーズする羽目になる。

「——入れ」

摩利が第三演習室の出口に向けてそう声を発すると、先程服部が退

室した扉から達也もよく知る顔が現れた。

「——教職員推薦枠でウチに入ることになっている森崎だ」

つい昨日揉めたばかりの相手の登場に、さすがの達也もたじろぐ。

「君でも、慌てることがあるのだな」

「そりやそうですよ」

ニヤニヤしながら得意げにからかう摩利に、達也はため息交じりに応じる。すると、今度は達也の姿を認めた森崎の顔が歪む。

「なっ、渡辺委員長！なぜ司波達也がここにいるのですか！」

思い切り指を指しフルネームで呼び捨て。相当失礼な態度に深雪の方からムツとした雰囲気漏れる。だが

「彼は生徒会選任枠でウチに入ることになった。どうした、不満か？」

「——っ!!」

ここで不満と言う事は真由美と摩利の人選にケチを付けることと同義だ。達也を決して認めたくない森崎だが、ここは口をつぐむよりほかない。

「…………さて。今日この演習室がすんなり取れたのは実はこの時間から元々ここを使う予定があったからだ」

森崎から反論がないことを確認した摩利が説明口調に戻る。

「もともとは魔法式の分析をお願いする予定だった達也くんはともかく、工藤と森崎は実戦部隊だ。いくら教職員と十文字のお墨付きでも、あたしはこう見えて自分の目で見えたものしか信じないタイプでな」
「どう見てもあなたはご自分の目しか信じないタイプですよ」という言葉を飲み込みつつ、頷いて先を促す達也。

「今日ここで、新入生風紀委員同士模擬戦をしてもらう予定だったんだ」

「なるほど」

説明を聞き疑問が霧消したことで、達也は既に親しくなった同級生の窮地に気が付いた。

「…………アーティにとっても森崎の風紀委員入りは誤算でしょうね」

「ああ。昨日あの場に工藤がいたのには驚いたが魔法の使用を止めようとしていた立場だったようだし君の方に目が行ったからな」

達也が摩利に目をつけられたのは昨日の件が原因だ。そのことを思い出して達也も黙り込む。

説明の義務を終えたと判断した摩利は達也の元を離れ、既に準備を終え戦闘態勢を整えているアーティと模擬戦のための準備をしている森崎の方へと歩いていった。

（入学式の時の急停止。昨日のあの動き。アーティがただの魔法実技に優れる一科生でないことは明らかだ。そして気になるのは、アーティの動きがそれとなく俺に似ていること：師匠九重八雲の仕込みを受けた、この俺に）

降って湧いたハプニングだったが、達也はこの状況を好ましく思っていた。これまで波乱続きで注目できずにいたがために解決しなかったアーティの技への疑問を解消する時が来たのだ。

達也は一挙動一投足も見逃すまいと、森崎が準備を終え模擬戦が開始されるのを待った。

「……………なんですか、これは」

森崎も準備を終え、誰に言われるでもなく開始位置に着いた2人。その2人を見て、達也は思わず横にいる摩利に尋ねた。

「何、とは二人の初期位置の話かな」

今回は審判役を真由美に譲った摩利は、達也の抽象的な質問にその意味するところを確認する。

「そうです。俺と服部副会長の時より、明らかに間合いが遠すぎます」
達也の言う通り、先程の彼我の距離が5mであったのに対し、今回アーティと森崎の立ち位置は優に15mは離れている。

「十文字から一つ、彼について申し送りを受けていてな」
彼、というのがアーティのことであることは明らかだ。

「工藤もまた、君のように優れた体術の持ち主らしい。彼を前にするのならば、5mの距離では、そもそも魔法を用いた模擬戦である意味がないらしい。加えて森崎の得意な土俵はクイックドロウによる中

距離での魔法の撃ち合いだ。始めから工藤の間合いに設定していたのではアンフェアだということ、今回は広い第三演習室を借りたのさ。君と服部についても同様の措置をとる必要があったかもしれないね。服部には悪いことをした」

最後は冗談めかしてなかなか様になっっているウインクを交えての摩利の説明に、達也は内心臍を嚙んでいた。

(アーティの体術は今回は見られない、か)

それでも、既に仲良くなった友人の、そして今後同じ風紀委員として活動する男の腕前というものを目に焼き付けておこうと、達也は雑念を振り払い目の前の試合が開始されるのを待った。

「では、ルールを説明します」

真由美の凜とした声が演習室に響く。いつものほわほわした可愛らしい声ではなく、どちらかといえば昨日の騒ぎの際に発した、場を収める声に近い。

「直接攻撃、間接攻撃を問わず相手を死に至らしめる術式は禁止。回復不能な障碍を相手に与える術式も禁止。相手の肉体を直接損壊せしめる術式も禁止とします。ただし、捻挫以上の負傷を与えない直接攻撃は許可します。

武器の使用は禁止。素手による攻撃は許可します。工藤君はもう履き替えているようですが、森崎くんも蹴りを使いたければ今ここで靴を脱いで、学校指定のソフトシューズに履き替えてください」

そこで一旦説明を切った真由美に、森崎が軽く頷いて続きを促す。蹴りは使わない、という意味表示だ。

「勝敗は一方が負けを認めるか、審判が続行不可能と判断した場合に決します。双方開始位置につき、合図があるまでCADを起動しないこと。また、今回はCADに予め触れておくことも禁止します」

意味のわかりにくい追加ルールに首を傾げた達也に

「これも森崎のクイックドロウが生きる条件を整えるための追加ル―

ルだ。クイックドロウは腰に収めたホルスターに入っている拳銃型特化型CADを即座に取り出し魔法を起動する技術だ。予めCADを手にしてははこの技術の真価は半減する」

摩利が小声で補足する。達也は追加ルールの意図は理解したもののルールの公平性自体に疑問を感じずにはいらなかった。

(これではあまりに森崎にとつて有利すぎる)

この模擬戦は紛争の正規な解決手段として行われているのではなく、2人の実力を確認するために行われているのだから、完全に公平性を期す必要はない。お互いの実力が最大限発揮されればよい。それを理解していない達也ではなかったが、それにしてもあまりに偏りがあるとやわぎるを得ない特別ルールに、やはり達也は納得することができないでいた。

「えっと、摩利、工藤くんのCADは情報端末型だから、この場合は懐に入れた状態から開始ということになるのかしら？」

審判を務める真由美からも摩利に質問が飛ぶ。

「ああ、このルールは事前に工藤にも説明してある。その上でその形態のCADを持つてきたのなら、工藤もそれで異論ないだろう」

この摩利の返答に達也は思わず目を剥く。それは無理もないことだった。森崎一門のクイックドロウは魔法師業界でも有名だ。魔法力が総じて高く、演算処理速度に置いて高いスコアを叩き出す森崎家の者が発動速度に長けた特化型CADを用いて独自の抜銃術と組み合わせたその技術は、同時に動き出したのであれば相手が懐のCADを取り出し終わる前に起動式の展開を終えることができる。すなわち勝負にならないのである。真由美だろうが摩利だろうが十文字だろうが、このルールで森崎に勝つことは事実上不可能だ。だからこそ予めルールについて打ち合わせを行っていた真由美もわざわざ摩利に確認を取ってきたのだ。

コクリ、とアーティが頷いたのを確認して真由美がルール説明の仕上げに入る。

「これらのルールに従わない場合は、その時点で負けとします。なお、この試合は摩利とわたしは制止用の魔法の起動を完了させた状態で

見守ります。危険行為があつた場合には即武力介入を行うので、そのつもりでね」

言っていることは恐ろしいことなのだが、にこやかに言っているのと幾分先程より和らいだ口調によりそこまで恐怖を感じさせない。だがその瞳の色はこれが脅しでないことを十分に当事者2人に理解せしめていた。

「昨日の借りを返させてもらうぞ」

一言、開始位置に着いた森崎から発せられる勝利宣言。自分に有利な土俵をお膳立てされており、自分の力量への自信に裏付けられた勝利宣言だった。

「ふふ、入学早々首が回らなくなったら大変だろうから利子は要求しないさ。なにせ今から貸しがもう一つ増えるんだからな」

しかしそんな勝利宣言に気分を害することもなくむしろノリノリで挑発を返すアーティに場の雰囲気が弛緩する。

開始の合図とともにすぐに腰のホルスターからCADを取り出せるよう腰のあたりに手を浮かせ臨戦態勢を取る森崎と、直立不動で泰然自若とした構えを見せるアーティ。

対照的とも言える両者の構えが固まったと真由美が判断し、戦いの火蓋が切つて落とされた。

「はじめー」

開始の合図とともに森崎がホルスターのCADを抜く。その動作は洗練されており一切の淀みを感じさせない。

(……………速い)

昨日の、レオに挑発されて見せたクイックドロウよりも数段キレが鋭い。昨日のは二科生に見せるだけのもの。しかし今回はすでに因縁ある、同じ実力ある一科生に向けたもの。森崎の本気度も当然、違

う。
起動式の展開速度に重点を置いた特化型CADが、森崎自身の高い演算処理能力によって成熟した魔法師の水準で見ても驚異的な速度でその攻撃魔法の起動式展開を終える。この時間、実に0.38秒。制服のブレザーの内ポケットにある情報端末型CADを取り出すに

は全く時間が足りていない。どんな技術を使ってもアーティはCADを操作するのか。完全思考型CADなど様々な仮説を立てながら15m先に立つアーティに目を向けた達也は、またも目を剥くことになった。

「動いていない!?!」

そう、アーティは直立不動の状態から少しも動いていなかったのだ。

「諦めたか。これで終わりだ!」

そのアーティと正面から対峙している森崎は起動式の展開を終えた、空気圧を偏位分布させその復元力によって生じる衝撃波で相手を戦闘不能に至らしめる空気圧収束魔法をあやまたずアーティに照準して放とうとした。勝利を確信した森崎には、その魔法の発動直前、静かにアーティが何も持たない右手をこちらに翳したことに、何かの意味があるとは夢にも思わなかった。

「……………」

呆気にとられたのは森崎。身動き一つ取らなかつたアーティに勝利を確信していた森崎が、自分の発動しようとした魔法が文字通り霧散したことに気づくには刹那以上の時間を要した。呆気にとられる森崎の目の前で悠々と懐から情報端末型汎用型CADを取り出すアーティ。その操作は澱みなく、森崎への反撃の魔法を紡ぎ出す。魔法の名は偏倚解放。空気を圧縮し破裂させ爆風を一方向に当てる魔法。威力を高めるならば圧縮空気の量を増やし、方向をより指向的に限定するならば圧縮空気を直接当てる形にすればよいという、威力と効果範囲の細かい調整に長けた使い勝手の良い攻撃魔法である。

「ぐわっ!」

偏倚解放により真後ろからの強大な爆風に曝された森崎は為すすべもなく前方に吹き飛ばされる。受け身を取りながら着地（正確には着弾、と表現すべきか）した場所は、アーティの足元であった。

「——ッ——」

気合とともにアーティから繰り出されたのは、震脚。力強く前足を踏み込み地面を振動させ相手の動きを封じるといふ、古武術の動き

だ。だがこの技で実際に相手が動けなくなるほど地面が揺れることはない。ならばなぜ震脚を型の基本に取り入れているのか。それは踵からの力強い踏み込みが前方向への重心移動を促し、次の前方向への動作の威力を飛躍的に高めるため、と理解されている。

実際に第三演習室全体が揺れるのではないかというほどの震脚から繰り出されたのは、うつ伏せに倒れた森崎の頭目掛けての下段突き。命中すればあわやという技の冴えであったが、その場にいた者は皆、その突きが途中で止められることを本能的に理解していた。アーティの殺気とも呼べる気配が、震脚を繰り出した時点で霧消したのを全員が知覚したからである。

「——勝負あり！」

真由美の掛け声で、森崎の頭の先で拳を止め残心の構えを取っていたアーティは姿勢を崩す。当の森崎は偏倚解放の爆風によって吹き飛ばされた衝撃とこの部屋にいる全員が知覚できるほどのアーティの殺気を至近距離で浴びたせいも、失神している。

達也とアーティで協力して部屋の隅まで運び、回復体位をとらせたところで摩利がようやく口を開いた。

「今のは？」

「偏倚解放です。一般的な魔法だと思いますが」

「そうじゃない。森崎の魔法を無効化したあの魔法だ。CADを使つたようには見えなかった」

「あれは術式解体と呼ばれるものです」

「術式解体!?!」

「……………会長はご存知でしたか」

質問していた当の摩利はその術名に心当たりが無いようだったが、真由美はその術名に心当たりがあるようで、かなりの反応を示している。

「術式解体グラム・デモリッションって、圧縮された想子の塊をぶつけて起動式や魔法式を吹き飛ばしてしまう、要求される必要想子量サイオンから使い手がほとんど存在しないっていう、あの術式解体グラム・デモリッションでいいのよね？」

アーティの口にした術名が信じられないらしく、聞き間違いという

ことはないのだろうが、それでも確認する真由美。

「今工藤君が見せたのはそこまで高度な対抗魔法だったのか……」

「そうよ。グラム・デモリッション術式解体には、並の魔法師が一日かけてようやく捻り出せるかどうかというくらいサンオンの量子量が必要なのよ」

「それほどなのか……道理であたしが知らない術なわけだ。そんな術を使える者など、日本中探しても何人もいるものじゃない」

摩利の言葉に頷く一同。風紀委員新生の実力を測る程度のもつもりが、十師族でも生涯に一度見るか見ないかという魔法を見せられ、一同は啞然とし続けるほかないのだった。

入学編Ⅶ

「……………」

驚愕の事実に固まる第三演習室に動きをもたらしたのは、失神して回復体位を取らされていた森崎であった。

「大丈夫か？」

高密度の想子の塊をぶつけられた挙げ句完全に不意打ちの形で爆風を食らわされた状態から気が付いた森崎に、一番近くにいた達也が声をかける。達也としても自分が声をかけるのはまずいとは思ったのだが、一番近くにいる自分が無視するのも気まずい。アーティの術の衝撃から未だに冷めやらぬこの空気を変えるためにも声をかけることにしたのだが、それは結果から言えば失敗だった。

「――二科生ウイードごときが、僕に触れるな！」

そう神経質に叫び達也を突き飛ばそうとするが、達也に見事にかわされてよろけてしまう。再び部屋の中に気まずい空気が流れ、そしてその一瞬後、深雪が森崎に詰め寄ろうとする。その気配を察して達也は制止に入ろうとするが、しかしそれは必要のない行為となった。

「森崎」

鋭く森崎の名を呼んだのはアーティだった。彼の声はその身長に對しては少々高く、穏やかな印象を受ける声だが、今森崎の名を呼ぶ時に発した声はおよそ彼のものとは思えないほど低く、重く、そして冷たい声だった。

その声に深雪も怒りを抑えてやり取りを見守ることに決めたようだ。アーティの豹変ぶりに粟立つ第三演習室の面々とは対象的に、達也はその深雪の様子に安堵していた。

「昨日の件でも分かっていると思うが、オレは一科生と二科生の違いに固執しない。なぜだか分かるか」

「そんなの知るわけがないだろう。だが魔法師の社会は実力主義。だからこそ第一高校にも一科生と二科生なんていう制度があり、残酷な区別がなされている。いわばこれは社会の縮図だ。才気溢れる者はおのが力を磨き、上に立つ者としての自覚を持たなければならぬ。」

実力に劣る者はしつかりと自分の立ち位置を自覚し、自分にできることを探さなければならぬ。魔法を学ぶことだけがこの学校の意義ではない。そういった社会で為すべきことというのを身につけるのも、高校生活で為すべきことだ。反差的、別け隔てなく接することができるといえば聞こえはいいが、お前のやっていることはその実反社会的行動だ」

そうまくしたてる森崎の様子に、摩利がため息をついてみせる。だがここで制止しないのは、これから一緒にやっていく風紀委員同士、昨日から残るわだかまりのようなものは今ここで残らず吐き出しておくべきだという配慮からだろう。

「正論だな」

そう返すアーティの声は、既にいつもの明るく朗らかな声に戻っている。

「魔法師の社会は残酷なまでの実力主義。その社会の中で生きる上で区別は必須。それが魔法師オレたちの生きる社会のルールだ」

「分かっている何故そのような偽善に走る」

「無意味だからだ。一科生と二科生の差別は、魔法師社会の実力主義の様相を正しい縮尺で投影していない」

「何？」

アーティの反論に、ため息交じりに聞いていた摩利もほう、と興味深そうな笑みを浮かべている。見れば、あずさも、鈴音も、真由美も同様にアーティの次の言葉を待っていた。

「単純な話だ。第一高校の一科生と二科生の区別はちょうど半分のラインで行っている。上100人が一科生、下100人が二科生だ。だがオレたちが生きる魔法師社会で成功し影響力を持つ魔法師と、そうでない魔法師の区別はおよそ半分のラインでなど行われていない」

アーティの言葉は何も魔法に限った話ではない。スポーツ、勉強、何においても成功者と凡人の線引はおよそ半分のラインでなど行われていない。どの世界でも成功者はほんの一握りだ。

「その上、成功者というのは必ずしも圧倒的な力でのし上がった者だけではない。自分にしかできないことを見つけそこに着目し研鑽し、

新たな権威を築く者もいる」

これもまた魔法の世界に限ったことではない。長身の選手が求められるバレーボールでレシーブを磨いてリベロとして名を馳せた小柄な選手も存在する。好打者は例外なく強打者であったが、ヒットを打つことに全霊をかけ好打者としての地位を極めた者もいる。

「だから、一科生と二科生というくくりで差別するのは全くの無意味だ。このくくりは教員不足と、魔法事故等により再起不能に陥った生徒が現れても人員の補充を可能にするための仕組みであり、社会の縮図などというのはまったくもって的是はずれな解釈だ」

アーティの正論に森崎も、誰も口を挟もうとしない。

「森崎、君の言葉を借りるなら、実力に劣り、自分の立ち位置を自覚し自分にできることを探さなければいけないのは、学生という守られるべき立場にいる一高生徒全員だ」

上に立つ者として持たざる者に敬意を示し平等に扱うのではなく、自分もまた社会の中では持たざる者であることを自覚するがゆえに一科生と二科生というくくりは無意味となる。偽善ではなく善ではない、無知の知らぬ無力の知であると言いつつ、そのアーティに敗れた森崎は言い返す言葉を持たない。

「今回はオレが勝ったが、君も相当の実力を持っていると思っっている。こんな高校ごときの科分けでお山の大将を気取っていて良い器ではないだろう」

最後は森崎を立てる形で締められ、森崎は反発する気すら失っていた。

「……………僕は君に負けた。完膚なきまでに僕を叩きのめした。その君が、自分を含めて一科生全員が無力な弱者であると言うなら、僕が二科生相手に傲るわけにはいかないな」

しばしの沈黙の後、森崎はそのような形で折り合いをつけることを選んだ。

「風紀委員として長い付き合いになる。次は負けないうよう、僕は慢心せず技を磨いておくよ」

静かに頷いたアーティにそう告げると、森崎はまだ少し頼りない足

取りで第三演習室を後にした。

「十文字が君を風紀委員に推した理由がわかったよ」

森崎を見送って開口一番、摩利がそう呟く。

「会頭とはこの高校の在り方について少し語り合う機会を持つことができました。それで会頭もオレを委員長のもとに送り出そうと思っただけでしょう」

「ほう。十文字にも同じことを言ったのか」

一高生徒が全員未熟者と言いつつ先程の論を十文字にもぶつけたと軽く言い放ったアーティに摩利も肩をすくめる。

「いくら実力があると言っても、会頭も委員長も会長もまだ学生なわけですから、魔法師社会は彼らを頼るのではなく守らなければならぬはずですよ」

「理想論だな。君が思っているほど、魔法師の社会は層が厚くない」

「もう、摩利。気に入るとすぐ意地悪するんだから」

真由美の言う通り、この摩利の返しは些か以上に意地が悪い。どうやら摩利は親しくなればなるほど扱いがぞんざいになるタイプのようだ。今身をもって思い知ったアーティはもちろん、それを目の当たりにした達也も深雪も、それを深く胸に刻んだ。

「すまないな、工藤。君の実力はよくわかった。思想的にも実力的にも、君は我が風紀委員にふさわしいよ。これから先、私にどうか力を貸してくれ」

「喜んで」

真由美の小言に底意地の悪い表情を引っ込めると、右手を差し出しながら改めてアーティに歓迎の意を伝える。その右手をしつかりと握り返しながら、アーティもそれに応じたのだった。

その後摩利に連れられ風紀委員会本部に訪れ、アーティにとってはMMA部の先輩である沢木と辰巳との顔合わせを済ませた後、帰路についた。

「……………フン」

森崎の態度に、アーティはため息をつきそうになった。当の達也は何食わぬ顔で摩利の言葉を待っている。

昨日アーティとの会話で認識を改めると宣言した森崎だったが個人的に因縁のついた達也に対しては無視を決め込むことにしたらしい。

「全員揃ったな？」

3人のいる場所は風紀委員本部。そしてそこには、全学年の風紀委員を務める生徒が集結していた。

「そのまま聞いてくれ。今年もまた、あのバカ騒ぎの一週間がやってきた。風紀委員会にとっては新年度最初の山場になる。この中には去年、調子に乗って大騒ぎした者も、それを鎮めようとしてさらに騒ぎを大きくしてくれた者もいるが、今年こそは処分者を出さなくて済むよう、気を引き締めて当たってもらいたい。いいか、くれぐれも風紀委員が率先して騒ぎを起こすような真似はするなよ」

摩利の言葉に苦笑をこぼすアーティ。周りの上級生たちが首をすくめているところを見るに、この言葉は真実のようだ。

「今年は幸い、卒業生分の補充が生徒会選任枠、部活連選任枠まで間に合った。紹介しよう。立て」

摩利の言葉に立ち上がる3人。事前の打ち合わせ等はなかったが、まごつくことなく立ち上がる。

「1―Aの森崎駿と工藤スチュアート、1―Eの司波達也だ」

摩利の紹介を経て、挨拶もそこそこに早速風紀委員は出勤することになる。風紀委員のメンバーも各々所属するクラブはあるが、勧誘期間は風紀委員としてのパトロールに尽力することになっている。

説明を必要としない上級生は一足先に出勤し、新入生3人は摩利の説明を受けるためこの場に残った。

「まずこれを渡しておこう」

横並びに整列した3人に、摩利が腕章と薄型のビデオレコーダーを手渡す。

「レコーダーは胸ポケットに入れておけ。ちょうどレンズ部分が外に出る大きさになっている。スイッチは右側のボタンだ」

言われるままに制服のブレザーの胸ポケットに入れてみると、ちょうどそのまま撮影できるサイズになっていた。

「今後、巡回のときは常にそのレコーダーを携帯すること。違反行為を見つけたら、すぐにスイッチを入れる。だが撮影を意識することはない。基本的に、風紀委員の証言はそのまま証拠として採用される。念のため、くらいに考えておいてくれ」

達也と森崎が胸ポケットにレコーダーを収納するのを待って、摩利が続ける。

「委員会用の通信コードを送信する。情報端末を出してくれ。今送ったコードを報告の際は必ず使用すること。こちらから指示がある際も、このコードを使用するから必ず確認しろ。」

最後はCADについて。風紀委員はCADの学内携行を許可されている。使用についても、いちいち誰かの指示を仰ぐ必要はない。だが、不正使用が発覚した場合、委員会除名の上、一般生徒よりも厳重な罰がくだされる。一昨年はそれで退学になったやつもいる。甘く考えないことだ」

摩利の言葉に了解を示すと、3人はそれぞれ巡回へと繰り出していくのだった。

「なんとか風紀委員に入れたのはいいが、さて」

一人で巡回に当たるアーティはひとりごちる。名家の出であることが教職員に知られているわけでもないし(言ったところで信じないだろう)、彼が風紀委員に入るためには部活連推薦枠で入るほかない。そのための布石として、合格発表直後からMMA部に「見学」に行っていたのだ。彼の目論見は成功し、十文字によって風紀委員入りを推薦された。毎年新入生勧誘週間に人手が足りていないことを達也から聞かされていたがゆえの計算づくの一手であった。

「これで達也さんが目立ちすぎるのを肩代わりできるはずだ」

アーティはその忙しない日常の中にあっても自分の使命を忘れることはない。悲惨な未来を変えるために、自分はここにいるのだ。今のところ、そのために彼が打った手はうまくいっていると言える。

思慮にふけりながらも、アーティの目はしっかりとあたりを見回している。騒ぎを見逃せばその騒ぎは大きくなる。下手に手を抜かないことが、面倒を避けるためのコツだとアーティは心得ている。

そのアーティの目に、早速雲行きの怪しいものが引つかかる。

(あそこは)

第2体育館の半分、南側のコート。その一角で何やら揉めているようだ。その時間のその場所の使用団体を手元の資料で確認する。

(軽身体操部か)

軽身体操とは魔法で身体を軽くして行う体操系の魔法競技である。どうやら通りかかった新入生を逃すまいと通せんぼし、新入生が窮しているようだ。アーティは胸元のレコーダーのスイッチを入れ、ノータイムで走り込む。

新入生を取り囲む人垣はそれなりに厚かったがアーティはそれをまるで存在しないかのようにほとんど速度を落とすことなく通り抜ける。

「何だ?」

「風紀委員の腕章だ」

しかしアーティが通ったところにいた部員たちは皆よろけている。

正面からぶつかるとはならず、合気の崩しを高速で応用して無理やり押し通ったため、崩された部員たちはバランスを崩したのだ。

「新入生への威圧的な勧誘は禁止されています。軽身体操部は今すぐ道を空けてください」

大声で叫びながら中に取り残されている新入生のもとへ向かう。だが部員たちが立ち退く気配はない。魔法の不正使用等はしていないため、彼らも強気なのだ。

「捕まってる」

囲まれていた新入生は2人だった。アーティはCADを一瞬で操作し起動式の展開を完了させると、両手を後ろに突き出し2人の新入生に掴ませる。

「跳ぶよ」

耳打ちすると同時にアーティは勢いよく地面を蹴る。その跳躍はおよそ人間の跳躍力で再現できる範囲を大きく超えていた。

換気のために開放されていた高窓の窓枠に一瞬着地し、そこから体育館外に飛び出す。軽身体操部の部員が呆気にとられるほど鮮やかな救出劇だった。

人だかりから離れたところで二人の手を離しレコーダーをオフにする。

大丈夫か、と声をかけようと振り向いたアーティはたった今助け出した二人の顔を見てたっぷり10秒フリーズした。

「工藤君」

「風紀委員に入られたんですね、助けていただいております。ありがとうございます」

それは、先日知り合ったクラスメイト、光井ほのかと今絶賛気になっっている北山雫であった。

入学編Ⅷ

「き、奇遇だね、まさか風紀委員初仕事が北山さんと光井さんを助けることになるなんて……」

頭の回転は早く機智も働くアーティだが、どうにも歯切れが悪いのは相手が悪いからか。

「軽身体操部の勧誘が思ったより結構強引で………本当に助かりました。工藤くん、ありがとうございます」

改めて向き直って深々と頭を下げるほのか。彼女に倣って雫もペコリと頭を下げている。

「いやいや、仕事だから全然気にしないで、っていや、北山さんと光井さんを助けられたのは嬉しいけど……」

自分が口にした仕事だから、という言葉にビジネスライクではないかという懸念を抱いて慌てて訂正しにかかるアーティ。

「工藤くん、この前は森崎くんを投げててびっくりしたけど、本当はとつても気さくなんですね」

そんなアーティの様子にくすくすと笑いながらほのかがかそんな感想を述べる。

「やるときはやる。でも、いつもは優しい。工藤くんは、きっとそういう人」

ほのかの賛辞だけでも思春期の男子には容量オーバーなのだが、そこに想い人からの賛辞まで付け加えられて、アーティは嬉しいの域をとつくに通り越して恥ずかしいという域に突入していた。目の前の二人の少女は全く気付いていないが、既にアーティの耳は真っ赤だ。エリカあたりがこの場を目にしたら、思わず写真を撮り始めたに違いない。

アーティとしてはすぐにも話題転換をしたいが、既に彼の思考能力は限界を超え機能していない。ともすればこのまま逃げ出してしまうかとも思われたが、ほのかの自然な話題転換に救われることになる。

「それにしても、一高の勧誘は想像以上に熾烈ですね」

ほかかとしては話の流れで自分の感想を述べたに過ぎないが、目の前の少女たちに心奪われていたアーティにとつては今現在の自分の責務を思い出させる、いい気付けになった。

「オレも風紀委員で聞いてはいたけど、驚いている。想像以上だ。クラブによつては、今みたいな強引な勧誘だけじゃなくて魔法の不正使用があったりする例もあるらしいんだ。二人共、くれぐれも気をつけてね。風紀委員も巡回しているけど、常にすべての場所を網羅できるわけじゃないんだ。大抵は騒ぎを聞きつけて急行することになる。そうだ、万一の際にはすぐにオレを呼べるように情報端末の番号を……」

風紀委員の職務に戻り冷静さを取り戻し、2人の同級生に注意喚起を始めたアーティだったが、連絡先を交換するという自分が提示した提案の意味に気づいて、言葉に止まる。

「それは心強いですね」

「風紀委員と仲良くなった役得」

そんなアーティの思春期らしい逡巡に気づく様子もなくほかかと雫は懐から自分の情報端末を取り出し、自分の番号を表示する。

アーティはドギマギしながらも彼女たちの番号を自分の情報端末に登録し、自分からワンコールをかけて自分の番号を登録させた。

「それじゃあ、工藤くん、ありがとうございます」

「風紀委員の仕事、頑張って」

気になる異性の連絡先を入手するという一大イベントをあっけなく済ませてしまったアーティは呆然としながら、次の部活の見学へと向かった2人を見送った。

しばらく立ち尽くしていたアーティの意識を現実に戻したのは、余韻を噛みしめるように握りしめていた情報端末の鳴動だった。

「まさか、北山さん!？」

早速彼女たちが何かにかき込まれたのかと慌ててディスプレイを確認したところ、発信源は風紀委員会本部だった。ほっと息をついて、応答ボタンを押す。

【風紀委員会本部より通達。第二小体育館、通称闘技場で剣道部と剣術部の紛争勃発。現在その場に居合わせた司波が対応中。手の空いている生徒会役員、風紀委員は現場に急行しろ】

声の主は摩利。声の緊迫感から、抜き差しならない状態になっているのではないかと悪い予感がアーティの脳裏をよぎる。

「風紀委員工藤、了解。これより現場に急行、2分後に現着します」

アーティは自分の現在位置から通達された現場の地理関係を思い出しながらそう短く応答し、すぐさま駆け出した。

闘技場に到着したアーティが目にしたのは異様な光景だった。

剣術部と剣道部の紛争と聞いて来たもののアーティの目下に広がっているのは達也vs剣術部皆さんの総掛かり稽古といった風情だった。それも達也に投げられたであろう剣術部の部員の屍（もちろん比喻表現である）が累々と転がり、まもなく収束するだろうという状態であった。

「一体何が……………」

思わずそう呟きながら情報端末を取り出す。

「風紀委員工藤です。闘技場に現着しました。負傷者がいるようですので、保健委員の出勤を要請してください」

【こちら風紀委員会本部。工藤の現着了解。これより保健委員に出勤を要請する。工藤は現場を整理して保健委員の到着を待て】

「了解」

本部の摩利と最低限の連絡をかわし、人垣をかき分け最前線に立ち、これ以上混乱が広がらないよう現場の整理にかかる。

「こちらは風紀委員です！周囲のクラブは混乱が沈静化するまで活動を中止してください！繰り返します！」

乱闘が起きた際の風紀委員のマニユアルに則り、まず周囲の活動を止め、その後退避させる。巻き添えを食い、それに対する報復などで混迷を極めないようにするための処置だ。

「アーティか。助かる」

すでに次々と迫りくる剣術部員を片付けた達也が息も乱さずに応援に来たアーティに礼を言う。

「派手にやりましたね」

「やむを得なかった」

アーティの軽い皮肉に達也も大げさに肩をすくめて応じる。

「現場の整理はオレが。達也さんは後で聴取があるでしょうから、先に風紀委員会本部に出頭してください」

「わかった」

そう短く返すと達也は悠々と闘技場を後にした。

閉門時刻間際。

達也が介入した剣道部と剣術部の紛争以降、小競り合い程度のトラブルは頻発したものの、風紀委員が本部にて事情を説明する必要があるほどの事案は発生しなかった。剣術部の部員14人を相手に大立ち回りを演じ、瞬く間にその名を一高中に知らしめたあの男が災いを引き起こしているのではないかという疑いがアーティの胸に去来したが、それは胸の奥底に封印することにした。

「しかし、案外疲れたな」

風紀委員のこの時期の業務は激務だと聞いてはいた。だがアーティは未来において既に実戦経験もある魔法師である。体力的に参ることはない和高をくくっていた。だが予想に反してアーティに疲労感を感じさせているのは、きつと精神的に気を張り詰め続けてきたからだろう。本人は全く自覚していないが、意中の生徒と思いがけぬ邂逅を果たしたことも彼のエネルギーを著しく損耗しているに違いない。

「早く帰らないと、稽古もあるし殆ど寝られないぞ」

アーティには日課がある。それは彼の後援者パトロンとの約束であり、たとえアーティが疲れ切つていても欠いて良いものではない。しかもアーティの朝は早い。このまま一高前の駅から電車に乗り、最寄りの駅から歩いたのではまっすぐ帰つたとしてもアーティは疲労を癒すのに十分な睡眠は取れないだろう。

(やむを得ないな)

体調管理も魔法師の仕事のうちである。時には手段を選んでいられないこともある。睡眠時間のため、というのがなんとも格好がつかないが。

アーティは懐からいつも用いているCADを取り出すと、一瞬でその操作を完了させる。すると、アーティの体は宙に浮き、そのままかなりの高度に上がると、流星の如き速度で遙か彼方へと消えていった。

第一高校の校門前からひとつ飛び。10分ほども飛んだところでアーティはその高度を下げ、着地した。そこは、小高い丘の上だった。何もない場所ではない。一言で言うならば、そこは寺だ。だが、そこにいるのは僧侶や和尚さんと言えるような風貌の人達ではない。どちらかといえば修行僧や僧兵と形容したほうが似つかわしい、そんな男たちが待ち構えていた

「思ったより早い帰りだねえ」

着地したアーティの後ろから声がかけられる。

「——大師匠。今日は飛行魔法を使いましたから」

自分が飛んできた方向から声をかけられ、驚きのあまりすぐに返事を返せない。

「ふむ。今日は初日と言っていたねえ。少しばかり疲れたのかな」

「はい。まだまだ修行不足です」

「そうだねえ。その年では色香にはまだ太刀打ちできまい」

「?なんとおっしやいましたか」

「いや、自覚がないのならいいんだよ、スチュアートくん」

今アーティが話している相手は、忍術使い、九重八雲。彼こそが、アーティが現代社会で生きていくために必要な基盤を用意したパトロン後援者である。

「ではさっそく。ウチに住まう以上、君には修行を積んでもらう。疲れている君に鞭打つようでも申し訳ないが、朝は達也くんが来るからねえ。彼とここで会うのはまずいだろうか?」

「はい。それに部活の朝練もありますし。夕餉の前にお願います」
「いいともいいとも。そのつもりで門下生にも準備させていた」

もう日が暮れているのに八雲の門下生がすでに庭に出ていることを不審に思ったアーティだったが、まさかと思っていた予想が見事に的中し舌を巻く。果たして彼は自分が飛行魔法を使用するのここから探知し、10分足らずで弟子たちに準備をさせたのか、それとも今日は疲れて飛行魔法を使って早く帰ってくることを予想していたのか。どちらにしてもアーティにとっていい気持ちはしない。

「では、はじめたまえ」

縁側の上の八雲の合図で門下生たちが一斉にアーティに飛びかかる。アーティに対しては達也と同じように総掛かり稽古だ。アーティの師匠は達也であり、達也の師匠は八雲。つまり、八雲にとってアーティは孫弟子に当たる。実際、アーティは未来において晩年の八雲の手ほどきを受けたこともあった。

「疲れてはいるようだけど、技は冴えているね。いつもより彼らを倒すのにかかる時間が短い」

そして現代においては門下生たちに全員有効打を入れると八雲自身に稽古をつけてもらい、それで一日を締めくくることがここでの日課になっている。

「君は色恋は苦手そうだが色恋で強くなるタイプだね。僕とは逆だ」

軽口を叩いている八雲だが既にその身はアーティと拳を交えている。アーティも彼の言葉が聞こえてはいるがその中身に意識を向けることができないでいる。

アーティは全神経を集中し八雲の動きに食らいつく。古式魔法の使用を織り込んだ八雲の動きに翻弄されながらも、アーティも同じ古式魔法を駆使しながら虎視眈々とカウンターを狙っていく。

「また一つ盗んだね」

古式魔法は現代魔法とは異なり起動式などの鍵になるものを供与すれば使えるようになるものではない。故に才能ある者でも古式魔法の真髄に触れなければ古式魔法を習得することはできない。しかし古式魔法に何度も触れ、その正体を肌で感じ取れば、あとは古式魔法の使い手が何をしているのかを理解すれば、使えるようになるのが古式魔法だ。算数の計算などのように教えを請うものではない。そしてアーティは教えを請う学びよりも、見て盗む学びの方が圧倒的に得意だった。

「——っ！」

八雲の動きをまた一つ物にしたアーティだったが、盗んだ動きを一つ披露すると決まってそこで一本を入れられ、その日の稽古が終わってしまう。アーティが転移してきてから半年になるが、絶対に今くるとわかっている八雲の一本を、未だに一度もかわせずにいるのだった。

「体術はまだ達也くんには及ばないけれど、君は魔法の実力がずば抜けている。体系的な現代魔法を得意とする魔法師は大抵、分散的にそのノウハウが存在する古式魔法の習得を苦手としているものだが……君は元々、こちらのほうが得意なのかもしれないね」

八雲に手痛い一本を入れられ大の字に寝転んで息を上げさせているアーティに、飄々とした息遣いの八雲がそんな感想を口にする。

「じゃあ、僕は先にながっていているからね。夕餉の準備はできているから、落ち着いたら君も上がってきなさい」

未だに返事すらできずにいるアーティにそう言葉をかけると、八雲は軽々とした足取りで縁側にひよいと飛び乗り、そのまま廊下の奥へと消えていった。

入学編Ⅸ

部活動による新人勧誘週間がようやく終了。

剣術部の一件で達也は特に一科生の上級生から目をつけられてしまったようで、「達也がトラブルを引き寄せているのでは」といういづのぞやのアーティの独白は現実になり、達也に流れ弾を当てたいがために達也の近くで騒ぎを起こし、達也を狙うというケースが多発した。そのため途中からは安全を期すためアーティが付きツーマンセルを組んだのだが、それでも達也を狙う事案は無くならなかった。

昨日でようやく勧誘週間が終了し、CAD携行制限が復活したことにより、ようやく達也の安全は回復しそうなのであった。

そして部活の新入生勧誘のために短く切り上げられていた授業時間はようやく本来の長さに戻り、それに伴い魔法実習が本格的にスタートした。のだが。

魔法実習の授業に取り組みⅠ—Aの面々の顔色は芳しくなかった。

「……………ひどい」

思わずつぶやいたアーティに、横の深雪もほのかも雫も首肯を重ねる。

「入学試験の時も思いましたが、この学校の実習用のCADのノイズはひどいですね」

気分悪そうにほのかがこめかみに手を当てながらアーティの言葉に続ける。

「おまけに学校の試験以外、何の役にも立ちそうにない魔法実技。こんなことなら、お兄様と談笑している方がよほどためになるのに」

深雪のこの言葉には一同も流石に苦笑を返すしかないが、無為な時間を過ごしているという感覚は共有している。

このような経緯があるからか。

昼休み、達也から差し入れを頼まれたと席を立った深雪に、一同はついていくことにした。

先日知り合った達也の友人たちを労いたいと、そう思ったからである。

「やつと終わった〜」

「ふう……………ダンケ、達也」

エリカの完成と、レオのホツとしたような声。昼休みに居残りをしていた2人が、ようやく課題をクリアしたところだった。

笑顔を浮かべて歩み寄る深雪に、それに続くほのか、雫、アーティ。彼らもまた労うように軽く手を振っている。

「二人とも、お疲れ様。お兄様、ご注文のとおり揃えてまいりましたが……………足りないのではないのでしょうか？」

「いや、もう時間もあまりないことだし、このくらいが適量だろう。深雪、ご苦労さま。光井さん、北山さん、アーティもありがとう。手伝わせて済まなかったね」

深雪の懸念に問題ないと応じる達也。

「居残りと聞きました。こんな酷い代物で無意味なことをやらされていると聞いたら、そりやあなにかしたくなりますよ」

時間への配慮から少なめに指定された量ではあるが、美月、エリカ、レオ4人分のサンドイッチと飲み物となれば結構な重量のはずだが、彼が荷物持ちを買って出たのだろう、一人で二つの袋に分けて持ってきた彼らの昼食を達也に手渡す。

それを受け取った達也はもう一度礼を言いながらエリカとレオに向かつてそのまま受け取ったものを差し出す。

「ほら」

「なあに？」

「サンドイッチ、か？」

唐突な手渡しに戸惑うエリカたち。

「食堂で食べてると午後の授業に間に合わないかもしれないからな」

そう言いながら、達也は深雪から弁当箱を受け取っていた。

達也の粋な気遣いに大げさに喜んで見せるエリカたちに苦笑を浮かべながら、達也も腰掛け弁当箱を広げる。アーティたち差し入れ組も飲み物を手に彼らの隣に陣取る。

二科生のクラスに一科生が差し入れを持ち込み、談笑する。なんと

も奇妙な空間ができあがっていた。

部活動の勧誘期間が終わって数日経ち、あの喧騒の余韻が消え新入生たちも各々加入した部活が日常の一部になってきた、放課後の冒頭。アーティはMMA部の部室へと足を運ぼうとしているところだったが、その彼が文字通り飛び上がる出来事が起こった。

『全校生徒の皆さん!』

うわあという声とともに本当に飛び上がってしまったアーティに、途中まで同行する予定だったほのかと雫が思わず笑みをこぼす。だが、アーティが古典漫画のような反応をしてしまうほど、今の放送の音量は大きかった。

『——失礼しました。全校生徒の皆さん!』

どうやら先程はスピーカーの音量調整を間違えていたようだ。常識の範疇の音量で同じセリフが放送される。

「何事でしょうか?」

ほのかが疑問に思ったことは音量調整のミスという初歩的なミスが起きたことに対してではない。明らかに、いつも呼び出し等で使用される時の放送の事務的な口調とは程遠い、不慣れな、緊張の成分を含んだ声に、ほのかは疑問を覚えたのである。

「二人とも、部活に行つて。オレは放送室に行つてくる」

何をしに行くのか、とは聞かない。アーティがおもむろに取り出し腕に巻いた風紀委員の腕章が、彼が今から取る立場を示していた。

「頑張ってください」

「無理しないでね」

それだけの言葉に赤面し俯きながらも、じゃあ、と小さく手を振つてアーティは猛然と駆け出した。

「遅いぞ」

悠然と到着した達也と深雪に、摩利から形式上の叱責が飛ぶ。それにすみませんと、形式上の謝罪を返したところでようやく集結した風紀委員、生徒会役員、部活連の実行部隊の対策会議が始められた。

「明らかな犯罪行為じゃないか」

「そのとおりです。だから私達も、これ以上彼らを暴発させないように、慎重に対応すべきでしょう」

不可解な放送に、放送室前に集結した当校の治安維持部隊。その状況が物語るのは「放送室のハイジャック」であった。それに対して呟かれた達也の言葉に鈴音が同意を重ねる。

「こちらが慎重になったからといって、それで向こうの聞き分けが良くなるかどうかについては期待薄だな。多少強引でも、早期の解決を図るべきだ」

すかさず、摩利が反対の意見を挿し込んでくる。方針の対立が膠着を招いている。有事の対応としては、最も拙劣な状態だった。

「十文字会頭はどうお考えなのですか？」

「俺は彼らの要求する交渉に応じても良いと考えている。もとより言いがかりに過ぎないのだ。しっかりと反論しておくことが、後顧の憂いを断つことになろう」

「ではこの場合は、このまま待機しておくべき、と？」

「それについては決断しかねている。不法行為を放置すべきではないが、学校施設を破壊してまで性急な解決を要するほどの犯罪性があるとは思えない。学校側に警備管制システムから鍵を開けられないかどうか問い合わせてみたが、回答を拒否された」

三者三様の立場を取る彼らの意見の相違に、完全に場は膠着していた。

「ならば、彼等に中から開けてもらえばいいんです」

おもむろに口を開いたアーティに、達也の情報端末を取り出しかけていた手が止まる。実は達也はこの状況を打開できるかもしれない手段を持ち合わせており、何もせず待たなければとそれを使用しようとしたのだが、アーティの言葉に達也の動きが、いやその場にいる全

員の動きが固まった。アーティの言葉ではなく、その声に。

「——アーティ？」

思わず摩利が聞き返すがそれは小学生のような返答に対してではなく彼女が感じた違和感からとつきに出たものだろう。

「これ以上彼等が暴発し警察沙汰になるのが最も回避すべき事態。この認識は諸先輩方の中で共通のもので、差異はそのリスク評価とそれによる緊急性の評価の違いです」

摩利の言葉を無視して、といっても返答を期待してものものはなかったが、滔々と言葉を連ねていくアーティ。その声音はいつもの身長に似合わず少し高めで明るくかつ利発的な印象を受けるものではなく、むしろ少し低く落ち着いた、それでありながら妖艶な印象を受ける声音になっている。聞く者の心を見えざる手で優しく撫ぜながら驚掴みにするような魔力を秘めた声に、その場にいる者は誰ひとりとして言葉を発しようとはしない。

「既に行われた不法行為に対して、警察の出動を回避するという思惑。これは学内で生じた不法行為を自己解決することにより隠蔽することも言い換えることができます」

隠蔽という穏当ではない言い方に、いつもなら切り返しが来るところだが、アーティの言葉の切れ目に何かを言おうとするものは現れない。

「なら、その解決手段に少々問題があるうと、隠蔽すべきことが一つ増えるだけのこと」

そう独り言のように言い終えたアーティは何も持たぬ右手を放送室のドアに向ける。

「——待てー！」

独断でドア内部の占拠を実行している生徒たちに魔法攻撃を仕掛けるという暴挙に出たアーティに、我を取り戻した摩利が制止をかける。

「ドアが開きます。突入の準備を」

「何？」

摩利の反駁にアーティは何も言わない。アーティの言葉の意味を

理解しない一同であったが、不思議と彼の言う通り突入の態勢を整えていた。

果たして。

突入の準備を整えた彼等の目の前のドアが、静かに開いた。後数秒、ドアが遅れて開いていたら、彼等はなぜ自分が突入態勢を整えていたのかという疑問に足を止めていただろう。しかし絶妙なタイミングで開いたドアに、彼等は条件反射のように突入を開始した。呆氣にとられたまま突入態勢を取らなかつた達也と深雪を残して。

「おい、何してる!」

「なぜ扉が開くんだ!!」

「迎え撃て! 締め出してもう一度施錠するんだ!」

突如としてなだれ込んできた一高屈指の実力部隊に放送室内は騒然となったが、ものの数分で片が付き、かくして学内での不法行為は警察の出動を見ることなく鎮圧されたのであった。

放送室の不正占拠という暴挙に出た彼等はそのまま部活連会頭たる十文字によって処分を受けようというところだったのだが、そこを真由美の制止により解放（実情を鑑みれば、保釈という言葉がこの状況を説明する熟語として最もふさわしい）され、彼等の求める交渉について真由美と壬生という生徒で取り決める運びとなり、達也と深雪を始めとする新生生たちは帰宅を許されたのであった。

いつものように仲睦まじく下校する達也と深雪に、しかしいつものような他愛ない会話はなかった。沈黙の理由は、放送室の占拠などという学校生活の物差しで見れば重大な事件が起きたことに対するショック、ではない。たしかに一般の高校生にとっては衝撃的な出来事かもしれないが、この二人に限ってこの程度のことでは心を揺さぶられたりはしない。

「…………お兄様、やはり、あれは」

深雪が重い口を開く。下校を許された達也たちは別れ際、アーティ

にあのとき使用した魔法について尋ねたのだが、「よく覚えていない」とはぐらかされた。そのような幼稚な誤魔化し方に引き下がるような2人ではないのだが、あまりにそのとぼけ顔が真に迫っていたので何も言えずに別れてしまったのだ。達也の見立てでは、およそアーティはうまく嘘をつけるタイプの人間ではない。その評価故に彼の誤魔化し方は稚拙極まりないものだったがその真に迫った「何も知らない」という顔に呆気にとられてしまったのである。

「ああ。別のことに気を取られてすべてを具に『視る』事はできなかったが、あれは間違いなく、系統外魔法だ」

達也の返答に、深雪が目丸くする。一つは系統外魔法というワードに、もう一つは自分の兄が認識をそらされていたという事実。

そして達也の言葉に動揺を隠せないでいる深雪の横で、達也もまた一つのことか気がかかって仕方がないのだった。

(あの時感じた違和感：アーティの、何に抱いたのだったか)

その精神構造上、記憶を違えることのあること、ありえない自分がその時抱いた違和感を忘れ去りつつあることに、達也は強い危機感を感じていたが、それも深雪とともに自宅の玄関をくぐる頃には自然と、見方を変えれば不自然に消え去っていたのだった。

「学内の差別撤廃を目指す有志同盟」と生徒会会長による、公開討論会当日。

「赤と青に縁取られた白いリストバンドをしている生徒をマークし、有事の際には即刻取り押さえよ」との司令を受け、風紀委員は講堂各所に立ち、見張りを務める。アーティは単独で講堂内、向かって左翼後方の警備を任されていた。

(赤と青に縁取られた白いリストバンド。大師匠によればそれは反魔法運動団体、エガリテ。表向きにはブランシュとの関わりはないとされるものの、その実情は政治色を嫌う若者をターゲットにした下部組

織)

達也に対してもそうだが、九重八雲という人物は支援しようとした相手に1から10までを教えることはしない。一つのキーワードを教え、それに対する注意喚起を促す。新入生勧誘にアーティが従事することになったと八雲に話した際にアーティが八雲から受け取った忠告は「エガリテ」に気をつけろというものだった。そこから自分の知っている情報と、自分で調べられる範囲で調査をしてきたが、どうにもそのブランシユの下部組織のエガリテが自分たちにどう干渉してくるのかを掴めずにいた。

(だが、ブランシユの背後にいるのは大亜連合。それは25年後の未来では既に白日のもとに曝されている、周知の事実だ)

反魔法勢力に対し情報秘匿の立場を取り続け水面下での押さえつけを図ってきた日本政府であつたが、何度鎮圧しても新たなリーダーを立て復活するブランシユに対して日本政府は立場を180度変え、大亜連合のテロ組織への支援を指摘し批判、2116年についてブランシユの撲滅に成功する。これは大きなニュースになり、アーティも知るところとなっていた。

(大亜連合。深雪さん殺害を企て、達也さんの暴走を招き世界の滅亡を引き起こした諸悪の根源)

アーティの脳裏に、自分を見送る両親の姿が蘇る。日本魔法師界きつての実力者の父。その胆力を敬わぬ者はおらず、威厳と優しさを併せ持った理想の人格者。その父を相手に家庭内で常に優位に立ち続けた、愛すべき間抜けさは否めないものの世界水準で見ても間違いないトップレベルの実力を誇る母。その父が涙した。その母が泣き崩れた。その光景は今でも毎日夢に見る。

彼の怒りは、滅ぼされた世界すべての怒り。その怒りは、大亜連合という一つの国に対して注がれているのであつた。

「工藤」

アーティの思索は、よく知る声と肩に置かれた手により中断される。

我に返つたアーティは、自分が今注目を浴びていることに気がつ

く。

声の主は、隣のエリアの警備にあたっていた森崎だった。

「とりあえず魔法を抑えろ。できるか？」

アーティは森崎の言葉をすぐには理解できずにいたが、森崎の額に浮かぶ季節外れな汗に遅れて事態を理解した。怒りに煮えたぎっていたアーティは無意識のうちに加熱魔法を発動させてしまっていたのだ。

「やれやれ。無意識でCADなしで魔法を発動させるとは。事象干渉力がよほど強いんだな」

慌てて魔法を打ち消したアーティに、森崎が呆れ声で肩をすくめてみせる。

「何があつたのかは知らないが、任務に集中しろ。今回の委員長のあの警戒っぷり、この討論会で何かが起きると懸念しているに違いない」

踵を返した森崎はそう肩越しに言いながら自分の持ち場に戻っていく。周囲の視線に居心地悪さを感じながら、アーティも雑念を振り払い周囲に注意を払うのだった。

入学編X

真由美と有志同名の討論会が討論会の様相を呈していたのは冒頭のみであった。

感情的に一科生と二科生の間に存在する差別をまくしたてる有志同盟に対して、それらの大部分が客観的事実に基づいた成果主義的な平等のもとに定められてきた事実を真由美が反論し、それに対する有効な反論がないまま次の指摘をしてはそれも返されるという質問会のような状態になっていた。

終盤は真由美が政権公約^{マニフェスト}として生徒会の一科生縛り撤廃を掲げ、差別意識の撤廃を掲げた真由美に、最後は一科生だけでなく二科生までもが万雷の拍手を送る結果となった。誰の目にも有志同盟側が敗北したことは明らかだった。しかしそれで、有志同名の生徒たちを裏から操っていた人間たちが諦めるはずはなかった。

突如の轟音が真由美の演説の余韻に浸っていた生徒たちを現実に戻す。それと同時に各所に配置されていた風紀委員が一斉に地面を蹴る。普段から訓練を重ねているわけではないが、今日は摩利の檄の飛ばし方が違った。きつとなにかが起こる。そう考えて緊張の糸をずっと張っていたからこそ、逡巡なく己の為すべきことを為し得た。自分がマークしていた同盟のメンバーを拘束する。この風紀委員の初動により、外部からの襲撃と内部からの攪乱という挟み撃ちの形に陥る事態は回避された。しかしながら、当然脅威度が高いのは武装して攻め込んできている外部からの戦力である。

「催涙弾!」

外部から窓を破り、紡錘形の物体が飛び込んでくる。床に落ちると同時に白い煙を吐き始めた榴弾に、近くにいた生徒が悲鳴に似た声を上げる。が、その榴弾はその煙を拡散させることなく、コマ送りの巻き戻しのように窓の外へと戻っていった。服部の魔法によるものだ。

「委員長! オレは部活棟を見てきます!」

「了解。気をつけろよ!」

既に生徒たちが速やかに避難を終えつつあり、その内部に限っては

危険分子が鎮圧されつつある講堂にこれ以上長居は無用と断じたアーティはそう短く摩利に行き先を告げると、扉を吹き飛ばすように出ていったのだった。

(わかりやすい奴め)

状況的に笑う余裕などないので、心の中だけに留めた達也は、自分のそばにピツタリくつついてきている深雪を肩越しにちらりと目をやりつつ、自分も摩利に行き先を告げる。

「では俺は、実技棟の様子を見てきます」

「お兄様、お供します！」

「気をつけろよ！」

摩利の声に送り出され、達也たちは最初に轟音が鳴り響いた区画へと向かった。

魔法科高校には、魔法実技の指導のため、魔法師が教師として常駐している。その実力は魔法師社会においても一流の魔法師揃いであり、このような有事にも対応は可能だ。加えて生徒の中には生徒会長を務める七草真由美や部活連会頭を務める十文字克人のように十師族に名を連ねる者を始めとし既に成熟した魔法師顔負けの戦闘技能を持つ逸材も揃っている。国内トップクラスの第一高校ともなれば、小国の軍隊程度なら単独で撃退してしまうほどの戦力を有していることになる。

しかしアーティの向かった部活棟はその堅牢な要塞とも言える一高の中で、数少ない脆弱なエリアと言える。グラウンドのある区画に位置する部活棟は、講堂や実技棟、講義棟などが密集するいわば一高の心臓部分とは距離がある。加えて生徒たちを守る貴重な戦力たる教師は今の時間、部活棟の方にはいない。いるのは部活の仲間と昼食を取るために足を運んだ生徒たちであり、彼等は校則によりCADを預けている。部活棟の部室にもCADはあるが、競技用にスペックを

統一された低スペック機であり、セプトされている魔法も競技用のものである。これではこのような事態に対抗することは叶わない。

もつとも、そのような防衛の穴に外部からの侵入者が欲しがらうなめぼしいものはない。故にそもそも狙われるような場所ではないのだが。万一、とは言えない程度には可能性がある攻撃に備えて武装した風紀委員が急行したことは、この場において大きく命運を分けた。

およそ魔法的な補助を受けなければ出せない速力でアーティはグラウンドを横切り部活棟に真っ直ぐ向かう。部活棟を見据えるアーティの目に、襲撃者の姿は映らなかった。そのことに安堵を覚えながらも、そのまま部活棟に肉薄する。すでに部活棟で昼食をとっていた生徒たちも騒ぎに気が付いているらしく、安全を確保しながら遠目に講堂や講義棟を眺め、状況把握に努めているようだ。風紀委員の腕章をつけたアーティの到着に、自然と視線が集まる。

「現在当校は何者かの武力攻撃を受けています。生徒会役員、風紀委員、部活連、それに教師たちが目下交戦中です。ここを襲撃する動機は薄く、これからここが戦闘に巻き込まれる可能性は高くありませんが、みなさんも部活用のCADなどを装備して頂き、万一の際には最低限の自衛ができるよう備えてください。道中が危険なので本棟にCADを取りに行くことはおやめください。敵戦力に対して一高側は現在優勢を保っています。鎮圧されるまで部室で待機をお願いします」

部活棟周辺にいる生徒全員に聞こえるよう声を増幅して指示を出す。

「工藤くん」

「来てくれたんですね」

指示を出し終え本棟、現在戦闘が行われている方角を見張るアーティに背後から声をかけたのはほのかと雫だった。

「北山さん、光井さん」

その声に振り返るアーティの声は少し上ずっている。ここにエリカでもいれば茶々の一つでも入ったのだろうが、彼女はここにはいな

いし今はそんな状況ではない。

「討論会が狙われたのでしょうか」

「うん。どうにも反魔法政治団体がバックにいたみたい。それを生徒会も風紀委員も掴んで、今回は嚴重警戒だった。正直、想定以上の攻撃だけど、それでも鎮圧は時間の問題だよ」

ほのかの質問に答えながらも、しきりに流れる風紀委員の無線は聞き漏らさない。その内容から、一高側は建物の被害を除けばほぼ損害なく順調に侵入した戦力を鎮圧していることをアーティは読み取っている。

「反魔法……魔法科高校の生徒にまで魔の手を伸ばして自分たちの主義主張を押し通そうとするなんて」

アーティの言葉を受けて呟く雫の頬は怒りから少しばかり紅潮していた。普段感情が表出しにくい雫にしては珍しいことだった。

いつもならばそんな雫の様子に反応し必死で言葉を選び返しを考えていたところだろうが、今のアーティの反応は全く異なるものだった。それは、本棟の方角を目を凝らして見張っていたアーティの瞳が、視界の端に違和感を感じたからだった。

「二人とも、下がって。できることなら、部室に退避して」

いつもの身長に似合わぬ高い声ではなく、低く、威圧感を感じさせる声に二人の動きが止まる。

「早くー！」

そのまま動きを止め心配そうにアーティを見つめる2人にアーティが低く怒鳴りつける。彼女たちの動きは無理もないことだ。彼女たちはアーティが急に警戒感を増させた理由が全くわかっていないのだから。

それでもアーティの豹変ぶりに2人はハッとしたりするように動き出すと、2人が所属するバイアスロン部の部室に手早く退避した。

「……………っ！確かに、いる」

先程一瞬視界の端で捉えた違和感。その違和感は一瞬で消えたが、アーティはそれを自分の気のせいとは考えない。用心深く張った気配への意識の糸に、確にかかるとある。確かに自分の意識の網

にかかっているのに、その位置がイマイチ特定できない。その事実
焦っていることを自覚したアーティは、隙を作らないように慎重深く
深呼吸をし、今一度気配を探る。

(これは、どこに居るのかがわからないのではない。気配は一つの方
角、定まった距離から届いている。にもかかわらず、オレがどこにい
るか分からないと直感的に感じたということは、この位置情報は正し
くないということだ)

精神干渉の魔法を織り込んだ認識障害に対して魔法師は、その魔法
の発動を知覚しなければ対抗することは難しい。しかしながら隠形
からの不意討ちを主とする忍術の使い手はこの知覚が阻害されてい
る事実を、偽装情報を素直に受け取るのではなく不明であると直感的
に印象づけることで自分が今欺かれていることを知覚する術を身に
つける。

(この感覚は)

そしてアーティは自分が陥っている状況に対して見に覚えがあつ
た。

中国を源流とする占いの考え方に、風水というものがある。簡単に
言えば、その日その時ある人物にとって吉を呼び込む方向とその人物
が苦手とする方向を掴む術である。特に苦手とする方角を鬼門と呼
び、古来日本においても鬼門の方角に用事がある際は予め前日に別の
方角の場所に寝泊まりをし経由することによって鬼門に向かうこと
を避けたと言う。アーティが今まさにかけられている術は鬼門の方
角から使用することによって魔法師が無意識に自分にかけている情
報強化からくる精神干渉への抵抗力を効率的に無効化し、自分の気配
の方角をアーティに錯覚させているのだ。

この場において、アーティが鬼門を用いた風水の古式魔法に覚えが
あつたことは、大きく命運を分けた。

「——っ！」

狼狽を帯びた息を呑む音はアーティのものではない。なにもない
虚空から生じたものだ。ドアを薄く開けちらりと様子をうかがって
いたほのかと雫は声を上げることになる。アーティが突如向く方向

を変え、猛然と2人が隠れる部室の方向に突進してきたのだ。

「工藤くん!」

ドア越しに思わず悲鳴を上げたほのかに構うことなくアーティはドアの前で急停止すると、携行していたCADを一瞬で操作すると、入学直後森崎との模擬戦とは比にならない規模の偏倚解放が、誰もいないはずの虚空に向かって放たれた。

広範囲に作られた圧縮空気の開放による範囲攻撃。それはもうもうと辺りの砂を巻き上げ大きな土煙を作り上げた。

「鬼門の優位を失った上にとっさに回避のために加速魔法を使用すれば、その隠形は子供でも見破る事ができるぞ」

アーティの言葉は未だに静まらぬ土煙の中に向けて放たれる。土煙が収まったそこには、中年の細身な男が口に手を当てながらアーティを睨んでいた。

「あの人は!」

「一体どこから?」

アーティの後ろから、ドアの隙間を通じるほのかと雫は突如として現れた人影に驚きを禁じえない。

「オレに対しては念入りに鬼門からの認識阻害。他の生徒たちは範囲型の認識阻害と完全光学迷彩魔法の併用で隠形を果たしたか」

初見ならばあるいは超一流の魔法師を相手にしても完全な形での不意打ちを成功させうる隠形を見付いてみせたアーティの顔には、その絶対優位な状況に似合わぬ焦燥があった。

(なぜこれほどまでに高度な隠形使いをたかが魔法科高校への侵攻で使うのか。しかも最先端の資料がある実技棟ではなく、戦略的価値のない部活棟に)

これほどの相手がこんな場所にいる。彼等も伊達や酔狂で魔法科高校への侵攻というテロ行為を計画したわけではあるまい。故にその人員の配置には明確な動機があつて然るべきだ。

(それに、オレに対してピンポイントで鬼門を使ってきた)

鬼門を用いた精神干渉の強化は方角を用いるがゆえに一度に多数の人間に使用することはできない。収束系の魔法で鬼門を収束すれ

ば可能かもしれないが、鬼門を用いる前に大勢の魔法師の鬼門に干渉などすればその時点で隠形は成り立たなくなる。故に鬼門は多くの場合一人の対象にしか用いることはできない。

「お前、別口だな」

少しの逡巡の後に口に出したアーティの推論に、目の前の壮年の魔法師は少しばかり目を丸くする。

「……………そう考える根拠をお教え願えますかな」

土煙で薄汚れてしまった服の埃を静かな動作で払い落としながら、男は静かにアーティに問いを投げる。

「単純な話だ。有志同名の背後にいたのはエガリテ、及びその上部組織ブランシユ。しかしエガリテもブランシユもこれほどの凄腕の隠形使用を用意できるような組織ではない。その上、戦略的価値のない部室棟にわざわざ足を運びオレにピンポイントで隠形の焦点を集中させた。これらの情報から分かることは、一つだ」

「……………ほう」

「お前はオレを知っている。オレを知っていて、オレにちよつかいをかけるために今日起きる事件に便乗した。違うか？」

そう指摘しながら睨みつけるアーティの視線にたじろぐ様子もなく男は感心した顔で静かに拍手を始めた。

「お見事。大筋は合っている。もつとも、私は元々貴方にちよつかいを掛けに来たのではない。私の大いなる責務のため、今日は下見に来たつもりだったのです。そこで、こんなところで見かけるのはいはすの貴方をお見かけしましてね。彼本人よりも君のほうが脅威度が高いと思ひ直して君にちよつかいを掛けに来たのです。どうです、目的は」

「余計な言葉は不要だ。お前の『大いなる責務』とやらは分かっている。その上で断っておく。オレはお前の敵だ」

目的は同じだろう、同士になれという言葉を遮り、明確な敵対宣言を告げる。

「……………やはり牙を抜かれていましたか。では決裂ですね。では最後に一つだけ。貴方は私の敵ではありません」

「最後、だど？逃げられるともりでいるのか」

逃がすわけがないだろう、と呟きながらCADを操作し、男に照準を合わせる。男の周囲の空間27箇所から発射された圧縮空気弾が、男の腹、心臓、頭と四肢を抉り吹き飛ばす。

「貴方は、あの宣言をもつて私達の敵となつたのです。それではごきげんよう、クリムゾン真紅」

およそ原型を残していないにも関わらず、男は言いたい台詞を残しその気配を霧散させた。

「……………式神か」

忌々しそうに肉塊と化したかつて自分と対峙していた物体を睨むと、諦めたように振り向き、手元のCADを静かに操作し始めた。

（風水を用いた遁甲術に完全光学迷彩魔法。それに生きた人間の精神のみを取り除き式神の憑依体とする技術）

男が使った術から男の素性のある程度検討をつけることは、難しいことではなかった。

（大亜連合……………すべてを変えようとするオレの前に立ちほだかるか。ならば、迎え撃つのみ）

アーティには迷いがあった。深雪が斃れ世界が滅びる未来。それを変えるためには闇雲に動けばいいというものではない。自分という本来は存在しなかった者が動けば動くほど、歴史は正史からかけ離れていく。それは世界の破滅を防ぐことになるかもしれないが、ともしれば世界の破滅を早めることになる可能性もある。歴史を知るアドバンテージを捨てることにもなる過去改変を積極的に行うことは憚られた。

（だが、同じく改変を試みる者がいるのなら、そもそも歴史は正史からオレが動かなくてもかけ離れていく）

男は去り際にわざわざ仲間の存在を示唆して行った。つまりそれは男を逃した以上アーティの存在が敵陣営全てに知れ渡ることになったことを意味するのだが、アーティにとってはその迷いが晴れたことのほうが意味が大きかったのかもしれない。

（おそらくは無駄だが……………本体の居場所候補でオレが現時点で把握

できているのは一箇所。保険にと聞いておいたんだが)

ここまでやっては保険だと言った自分の言葉を嘘だと取られても仕方ない。そう苦笑しながらアーティは起動式の展開を終了させる。

CADを操作し終わったアーティの身体からとてつもない規模の魔法の行使の余波が放たれる。

「工藤くん……………」

「その人」

始終をドアの影から見守っていたのかと雫が恐る恐る部室から出てアーティに声をかける。

「殺していないよ。この人は既に式神の憑依体にされていた。その時にこの人は死んでいるんだよ」

普通ならば信じられない、という場面であるが、アーティに全身を吹き飛ばされてなお喋り続けた姿を目にした2人はそれを信じざるを得ないのであった。

すでに人として死んでいたものとはいえ目の前で躊躇なく人体を吹き飛ばしたアーティの行いに動揺を隠せない二人を尻目にアーティは脅威の去った部活棟を後にしたのであった。

街外れの丘陵地帯。そのなだらかな坂道をゆつくりと下る、初老の紳士の姿があった。白いあごひげをたつぷりと蓄え、小柄な体躯とその優しい瞳から受ける印象はひ弱な老人だ。しかも、その老人は服のあちこちが焼け、擦り切れている。今力尽きても不思議ではない痛々しい風貌だが、その敵意に満ちた爛々と光る眼光は男の気力がまだま

だ尽きないことを雄弁に物語っている。

「真紅の双子め……10秒と置かずに吹き飛ばすとは。ここを突き止めている辺り、強力な情報網を既に所持している、か」

忌々しそうに吐き捨てながら、男はその坂道をゆっくりと降っていった。

「お兄様、これは」

警察の介入を嫌い、一高戦力単独でブランシユのアジトを叩くために出動した一高実力部隊は、目的地の豹変ぶりに呆然としていた。

一高から徒歩でも1時間とかからない、街外れの広陵地帯に存在する廃工場を今回の騒動の背後にいたブランシユがアジトにしているとの情報を受けそこを叩きに来たのだが、到着した彼等を待っていたのは地下の基盤部分を残して吹き飛んでいる工場の跡地だった。周囲から立ち昇る白い煙がこの破壊がつい先刻行われたことを雄弁に物語っている。

「ブランシユのさらに背後にいる者たちによる口封じか」

深雪の問いかけに、さしもの達也もそのような推測を口にするのが精一杯だった。

自分で始末をつけ損ねたという事実は、達也に小さな苛立ちを感じさせるのには十分であった。

「これで…壬生を誑かした奴についても分からずじまいかよ」

忌々しげに吐き捨てたのは桐原。

一同が呆然としていたのもそう長い時間ではなく、ブランシユのスポンサーに先手を打たれたと打ちひしがれながらも乗ってきた車両に乗り込む。

だが、達也はブランシユの拠点を叩きに行くという話になった時に心底興味なさそうに自分は学校に残ると告げ部屋を後にしたア―

テイの後ろ姿を思い出していた。

九校戦編 九校戦編Ⅰ

西暦2095年、7月中旬。国立魔法大学附属第一高校は1学期の定期試験を終え、生徒たちのエネルギーは一気に九校戦へと向かっていった。

九校戦。全国魔法科高校親善魔法競技大会。

この国に存在する9つの魔法科高校で執り行われる、夏の一大イベントだ。日本の魔法師の未来を担う魔法科高校の学生たちに、学校単位で競わせることにより団結させ、切磋琢磨させる。そのために開かれるのが、この夏の九校戦なのであった。

そんな中、生徒指導室の前で心配そうな面持ちで人を待っている集団があった。そして彼等は意図せず目立っていた。エリカにはほのか、雫は間違いなく美少女に類する顔立ちをしている。美月も普段深雪とエリカに挟まれているがために地味な印象を持たれてはいるが顔立ち自体は癒やし系の美少女で、密かに一部の上級生たちから人気を集めていたりする。そんな美少女に囲まれているレオもゲルマン的な彫りの深い顔立ちでクラスの女子からは「ちよつと気になる男の子」の地位を獲得している。しかも彼等は一科生と二科生の枠を超えてともに行動しているのだ。周囲の奇異の目を集めるのは当然と言えた。

「達也」

「レオ……どうしたんだ、みんな揃って」

生徒指導室から出てきた達也にレオが声をかけると、達也も驚いた面持ちで応じる。深雪がこの場にいないのは、生徒会役員として九校戦の準備のためにどうしても先に行かなければならないことは達也も知っている。だから自分を待つ者などいないと思っていたために、達也も少々驚かざるを得なかった。

達也が呼び出しを受けていたのは実技試験に関することだった。魔法実技と魔法理論は、ある程度正の相関関係がある。実技が得意な

いは、高いレベルの理論を肌で感じることができずに理論が身につかないのだ。しかし達也は実技は二科生の中でも低い水準でありながら理論は堂々の学年トップだった。それを実技試験について手抜きをしたのではないかと疑われたのだと言う。

「それより、アーティはどうしたんだ？」

達也へのあらぬ疑惑に怒る同級生の様子に、早急な話題転換の必要性を感じた達也はここにいない同級生の名前を使って話題転換を試みる。彼の、雫への秘めたる思いを知る達也にしてみれば、特に用事のないはずの彼がここに射ないのは少し不自然なようにも思えた。

話題転換の為に軽い気持ちで水を向けた達也だったが、返ってきたのは重い沈黙だった。

「……………おいおい、一体どうしたんだよ」

ほのかと雫の態度にレオも思わず口を突っ込んでいる。

「工藤くん、最近すごくピリピリしてて……………」

「それにちよつと、私達も工藤くんのごことが少し怖くなっちゃつて」

ほのかと雫の返答に達也もしまったと臍を噛む。ブランシユの侵攻以降、アーティは自分の部活がありそもそも達也と接する機会が少ないために達也もすっかり失念していたのだが、達也の目から見てもアーティの様子はどことなくピリピリしていた。加えて、報告で聞いた、アーティが敵の式神を破壊した件。その目撃者に目の前の2人の少女たちの名前もあった。実戦経験のない彼女たちにとってはさぞ凄惨な光景だったに違いない。

「そうか。いや、済まなかった。この前の件は風紀委員として君たちを守るためにやったことだし、今アーティがピリピリしているのはきつと九校戦に向けてあいつも自分のメンタルを作っているんだろう」

「たしかに。あいつは出場確定だもんな」

達也の精一杯のフォローに、そんな達也の内面など知る由もないレオが頷きながら同意を重ねる。何も理解しない者の闖入ではあったが、この場合達也にとってプラスの方向に作用しているのは疑う余地がなかった。達也はこの単純(?)な友人に心の中で礼をしつつ、や

はり誰の目から見ても少しおかしいアーティの様子と、ブランシユのアジト突入の際の心底興味のなさそうな冷たい瞳を連想するのだった。

8月1日。ついに九校戦に向けて出発する日が来た。アーティは定期試験が終わってからもしばらくピリピリしていて近づきがたい雰囲気が出ていたものの、九校戦のメンバーが発表され、彼も新人戦のバトル・ボードとモノリス・コードに出場することが発表され、チームのメンバーと交流を持つようになってその雰囲気も鳴りを潜めた。しかし、凄惨な現場を見られたほのかと雫との間には、未だにぎくしやくとした雰囲気が横たわったままであった。

道中事故に巻き込まれかけたが深雪と十文字の見事な対応により一高側に死傷者を出すことなく会場入りし、一高チームは今、懇親会に出席していた。

「お飲み物はいかがですか？」

聞き覚えのある声にアーティは振り返る。だが遠く離れたこの地で同席者ではなく給仕の声に聞き覚えがあるというのは不自然なことだった。だが彼がその違和感に気づくよりも前に、彼は素っ頓狂な声を上げていた。

「エリカ!?なぜ君がここに!?!」

周囲の注目まで集めるほどの過剰とも言える驚きっぷりに、エリカはご満悦の表情だ。千葉家のコネで今回のアルバイトに潜り込んだという説明を受けたアーティはようやく納得した様子で落ち着きを取り戻した。

「アーティ、最近ピリピリしてたって聞いたから。今の様子見て安心しちやっつた」

素っ頓狂な反応と落ち着きを取り戻してホッと胸を撫で下ろしているアーティの姿にエリカも安心したという表情で胸を撫で下ろす。

「いやあ、この前あんな事があったものだからやっぱりああいうことに巻き込まれることもあるんだな、としみじみ思ってたね」

あけすけなエリカに心配されたという事実がアーティに決まりの悪さをもたらす。右手で頬をポリポリとかきながら言い訳をするアーティの姿は、しかしそれはそれでスラリと伸びた背と手足に整った顔立ちも相まって女子生徒からすれば母性をくすぐられるような一種の可愛らしさを醸し出していた。

「はあ……アンタって大事なトコ以外でいつも決めにかかっているよね。それが無意識だからなおもタチが悪い……」

そんなアーティの姿を正面からぶつけられたエリカも流石にきまり悪そうに、アーティには聞こえない声量で文句を垂れる。

「何だって?」

「じゃ、あたしは達也くんといっってくるから!ほら、二人共こっち来て!それじゃ、またねー」

聞き返したアーティに突如エリカは別れを告げ走り去っていく。なれない給仕服でグラスを持ちながら大した運動神経だと感心しながら見送るアーティに、近づく影が二つあった。

「工藤くん」

声の主は、雫だった。

「北山さん。それに、光井さんも」

声の主に驚きながらも、エリカの差し金であることに気付いたアーティは、エリカを恨むべきか感謝すべきか一瞬迷う。その迷いが、返って彼に一層気ますぐくなるような間を作らせずに間髪入れない反応をさせた。

「いやまさか、エリカがここに來てるなんてね。アルバイトだって。話は聞いた?」

気まぐさを紛らわせようと、アーティも個々に彼女らと自分を引き合わせた張本人の話題を出す。

「そうですね。エリカさんから声をかけられたときは、びっくりして思わず転びそうになっちゃいました」

「オレも、思わず声を上げちゃってさ。視線を集めちゃって、恥ずかし

かった」

エリカ被害者の会を突如結成したほのかとアーティが気まずさを置き去りに会話をはずませる。しかしそれは、気まずさを克服したのではなく気まずさから逃げているだけの、逃避行動だった。

「工藤くん」

そんな有耶無耶になりそうな空気を破ったのは、アーティに声をかけて以来ずっと押し黙っていた雫だった。

「……………はい」

逃げてもどうにもならないことを悟っていたアーティは、おずおずと雫に向き直る。一緒に気まずさから逃れようとしたほのかもまた、俯いて雫の次の言葉を待つ。

「テロリスト襲撃のときは、ありがと。それから、避けちゃってごめんなさい」

ペこりと頭を下げる隣の雫に倣ってほのかも頭を下げる。空気を読んで周囲に合わせることが得意なほのかには、このように流れを切って謝ることなどできなかつた。お互いの苦手な部分をお互いにかばい合う。長年、この2人はそのような良い友人関係を築いてきたのだろう。そんなことが伺い知れるワンシーンだった。

「こちらこそ、怖い思いをさせてしまって、ごめんなさい。それに、最近のオレ、ちよつと変だった」

どちらかと言うとマイペースと言うより場に合わせてしまいがちなアーティにとっても、マイペースな雫の謝罪は都合のいいものであつた。格好の機会を得たりときまり悪げに頭を下げる。

「そんな、工藤くんは風紀委員として私達を守ってくれたんです！謝るようなことじゃ…………でも最近、確かにピリピリしてましたね。どうしたんですか？」

恐縮するほのかだったが、最近のアーティの態度には疑問が拭いきれないらしく問いを重ねる。

「い、いやあ…この前の一件で、一高は俺が思っているより平和じゃないんだな、って。そう思うとずっと緊張しちゃって」

これまたきまり悪そうに頬をかきながらそう答えるアーティに、ほ

のかと雫もようやく胸のつかえが取れた思いを抱くのであった。

「じゃあ、私達は先輩方にご挨拶してきますね」

気まづさが晴れ、一通り会話も進んだところではのかが席を立とうとする。雫もそれに倣おうとするが、その試みはアーテイの声によってかき消された。

「あ、あのー！」

思いつめたようなアーテイの制止に、2人は動きを止める。

「お、オレ、苗字で呼ばれるの実はそこまで慣れていなくて……よかつたら、アーテイ、って呼んでくれませんか」

当然だが、アーテイが名字で呼ばれることに慣れていないのが工藤という彼の苗字が偽名であるからだということとは2人は知る由もない。だがこの申し出は思いの外あっさりと受け入れられた。

「わかりました、アーテイさん。わたしのことも、ほのか、でいいです」

「うん、アーテイ。私も雫でいい」

その日、アーテイがえらく上機嫌で鼻歌を歌っている姿が一高チームの少なくないメンバーによって目撃され、「風紀委員の実力派美少年」という密かに与えられていたブランドが音もなく崩壊していったことを、ついぞアーテイは知ることがなかったのであった。

九校戦編Ⅱ

懇親会の翌日にあたる今日は、九校戦初日の前日にあたる。懇親会が九校戦の初日の前々日に催されたのは、前日を休養に当てるためだ。全国から長い旅路を経て現地入りした高校生たちは、交通手段の飛躍的な進歩により所要時間は21世紀初頭と比べれば大きく短縮されたものの、少なからず旅の疲れを抱えている。その配慮から、前日は休養日としてスケジュールされているのだ。この英気を養う休養日は学校、選手によつて様々な使われ方をする。

もとより現地まで大した距離がなく、体力に自身のあるアーティの過ごし方は体を動かしての練習だった。

「もつと発射間隔を縮めてくれ」

「…………それは構わないが、本番の平均発射間隔より既に相当早いぞ？」

「本番より厳しい条件で訓練してこそ、本番で訓練通りのパフォーマンスが発揮できるというものだ」

スピード・シューティングに出場する予定の森崎の練習を手伝うアーティは、森崎のストイックさに舌を巻いていた。スピード・シューティングは、準々決勝未満の予選においては空中に発射された50個の標的のうち破壊に成功したスコアを競い、準々決勝以降は互いにそれぞれ紅白の標的のうち割り振られた色の標的の破壊を目指し、相手のスコアを超えることを目的とする、勝ち上がるとルールが変わるという性質を持った競技である。森崎はもともとアーティにこの競技で雪辱を果たすことを望んでいたが、アーティはバトル・ボードにエントリーすることになったので叶わなかった。

アーティが今行っているのは近くでスチームを炊き、大量の水蒸気を発生させた上で減速系魔法で水蒸気を氷に昇華させ移動系魔法で次々に発射する行為で、スピード・シューティングにて発射される破壊目標を擬似的に再現している。

「お前と戦えないのなら、せめて結果でお前に勝つ。そのためには恐らく、優勝しなければ望みはないからな」

既に本番のピーク時の発射間隔の1.5倍の速度でターゲットを発射しているのだが、森崎はそれをすべて撃ち落としながらもなお森崎は言葉を発する余裕を見せている。持って生まれた才能もなかなかのものだが、それ以上に森崎は努力の天才のようだ。アーティは心の中で本気で彼への評価を改めることになった。

「期待しているよ、森崎。もつとも、お前が優勝しても引き分けなんだけどな」

「もう優勝を確信しているのか。まったく、はつきり言ってお前がバトルボードと聞いたときには適正的に心配したんだが、心配ないようだな」

「そもそも今年の男子バイアスロン部は新生は全員初心者だ。魔法実技も芳しく無く、バトルボードにエントリーしている中じやオレが一番だ。バトルボードをまるつきり捨てるわけにはいかない。オレの適正的にはスピード・シューティングかアイスピラズ・ブレイク、モノリスコードが良かったんだが、早撃ちはお前がいるし、棒倒しには三高の『プリンス』がいる。彼が棒倒しに出るという一高戦術部の読みは、見事に当たったな。確実に取れる優勝ポイントを取りに行つた人選だ、期待には答えるさ」

得意種目ではないけれども優勝してくると言い放つたアーティの余裕に悔しさを感じながらも、絶対に負けるわけには行かないと意気込む森崎。彼にとって、アーティはよいライバルになっていると言えそうだ。

「ここに至って余裕をかませるのは大したものだが、アーティ。勝算はあるのか？」

最悪な形の出会いをした下級生たちの微笑ましい切磋琢磨に目を細めながら、彼等の上司、摩利が乱入してきた。

「委員長」

本戦の同じ種目に参加予定の先輩の登場に、尊大な態度でホラを吹いていたアーティは慌てて姿勢を正す。

「ああ。僕もお前がバトル・ボードの練習をするところをほとんど見ていない。お前が負けるとは思わないが、なにか作戦はあるのか？」

バトル・ボードは紡錘形のボードに乗って全長3kmの水路を3周する競技である。波形抵抗等が非常に大きな影響を及ぼす競技なので、ボードの寸歩に関しても長さ165cm、幅51cmと細かに定められている。

魔法による加速により選手はその最大速度は55〜60km/hにも達する。この速度により選手は姿勢制御と方向転換、また風圧への耐久のために体力と魔法力を要求される、非常にハードな競技である。

「分かっていると思うが、他の選手を攻撃するのは禁止されているからな」

「オレを喧嘩屋か何かだと思っいませんか？委員長」

確かにアーティは戦闘向きの適性を持っているが、それにしてもあからさまな摩利の釘刺しに苦笑交じりで応じる。

「大丈夫、策はあります。それも、前代未聞のやつです。それ一本で予選から決勝まで、走り切りますよ」

そう得意げに宣言しながら、アーティは右手を摩利と森崎に向ける。

「？」

その意味がわからず摩利も森崎も小首をかしげる。

「5分、です」

「は？」

「ゴールタイムで5分を切ってみせる。そう、言っているんです」

「何だって？」

アーティの大胆な宣言に、森崎も摩利も一様に目を丸くする。9kmのコースを5分で完走するということは、平均速度でも100km/h超えの速度で走行しなければならない。その速度は、海上での単独航行を得意とするBS魔法師が記録した速度にも匹敵する速度だ。いわば異能力者がマークした世界記録レベルの速度を、この窮屈なコースで出してみせると豪語したのだ。この二人が言葉を失ったのも無理はない。

「ふふふ。本当に、今年の1年は面白いやつが多いな。楽しみにして

いるよ」

そう、心の底から楽しそうに笑うと、摩利は実に楽しげな足取りで立ち去ったのであった。

九校戦前夜。休養日として丸一日開けられた日程を思い思いの過ごし方で終えた一高チームも、夕食を取るときには一緒になる。そして、その後達也の部屋を訪れる深雪に級友であり達也に仄かな好意を抱いているほのかとその親友の雫がついていくのは、昨晩から続けてもうお決まりのパターンになりつつあった。昨夜はそれなりに達也も交えて談笑などしたものだ、今夜は前夜ということで達也が起動式のアレンジ作業に入るということで早めに彼女らは達也の部屋を辞し、彼女たちだけのガールズトークにほのかの部屋で花を咲かせていた。

ほのかはともかくいつもは無口な雫と浮世離れして見える深雪がそのようなガールズトークに興じるのは男子生徒から見れば少し以外に思えるかもしれないが、彼女らも年頃の少女である。どのようなパーソナリティであれ、多かれ少なかれ気のおけない友人との会話はこの上なく楽しいものである。そして彼女らは新入生であり、その試合日程は初日から始まるわけではない。翌日に備えて既に就寝している選手も多い上級生とは対象的に、彼女は時計の短針が「X」を過ぎてまだまだまだ活気を持って余っていた。そしてそれはほのか、雫、深雪の3人に限った話ではない。同じように活気を持って余した新入生女子が闖入してくるのは当然と言える。

「あつ、私が出るよ」

突如部屋のドアから響いたノックに、立ち上がるようにする雫と深雪を制止しほのかが立ち上がりドアへ向かう。

「こんばんは〜」

「あれっ、エイミィ。ほかのみんなもどうしたの？」

ほのかがドアを開けると、そこから顔をのぞかせたのは、ルビーのような紅い光沢が特徴的な、小柄な少女。その背後には4人の同級生。つまり、第一高校新人戦女子チームのメンバーがほぼ揃っていることになる。

「うん、あのね、ここって温泉があるのよ」

「……ゴメン、もう少しわかりやすく言って」

弾んだ声でエイミィと呼ばれた少女が返した言葉は、何が言いたいのか分かるようでよく分からなかった。

「そういえばこのホテルの地下は人工の温泉になっていたわね」

もつとも、深雪にはこの少女、明智英美の言いたいことが理解できたらしい。

「そ、さっすが深雪、あつたまいい」

脳天気な声で無邪気にはしゃぐ英美。後ろの同級生たちも少し困ったような苦笑を浮かべている。

「そう、だから君たちもご一緒にどうかと思ってね」

助け船を出すように後ろから声をかけたのは里見スバルという少女だ。彼女の見た目は可愛らしいと言うよりは凛々しいとも言えるべき風格を漂わせ、その艶のあるアルトな声も相まって宝塚の男役、とでも表現できそうな雰囲気纏っている。

「はいれるの？ここ、軍の施設だよ」

しかし、雫からもつともな指摘が飛ぶ。九校戦が行われる会場に隣接するこのホテルは国防軍の演習場に付属する施設である。予め使って良いと言われている場所以外、立ち入ることはできないはずだ。

「試しに頼んでみたら、許可くれたよ。11時までならいいって」

しかしその雫の懸念はすぐに否定された。軍の関係者に温泉を使っているかなどという問い合わせをしてのけた英美に、3人とも神秘的な面持ちで顔を見合わせることはなかったが。

「さすがエイミィ」

「言ってみるものよねっ」

ほのかの呆れ混じりの称賛も、英美にはまるで効果がない。だからこそこんな問い合わせができたのであろうが。

地下の大浴場は、一高一年女子の貸し切りだった。貸切状態、ではなく、貸し切りにしてもらえたのだ。11時まで、という制限付きではあるが。

入浴には水着が必要という規則が合ったが彼女たちは当然そんな者を用意しているはずはなく、湯着の貸し出しを受けている。その湯着の風貌は、純白のミニ丈甚平、ただし半ズボンなしという風貌で、異性に見せるにはとても頼りないものだったが、ここは気心知れた同性のチームメイトのみの空間。だから何も問題はない。はずだったのだが……………

「わぁ……………」

「な、なによ」

お湯に浸かろうとやってきたほのかを出迎える英美の視線と漏れ出たため息に、ほのかはどことなく羞恥心を覚える。思わず、胸元を握り合わせるように閉じていた。英美を努めて無視するように浴槽にその身を浸す。

「意外。ほのか、スタイル良いく」

じりっ、とにじり寄る英美。後退するほのか。しかしほのかはすぐに浴槽の壁にぶつかり、逃げ場を失ってしまう。

「ほのか」

「何よっ?」

手をわきわきさせながら迫りくる英美に、ほのかの声はもはや悲鳴のようになっている。

「むいてもいい?」

「いいわけないでしょー!」

英美の目は笑っているが、冗談で済ませる気がないこともまた、その瞳が雄弁に物語っている。

ほのかは助けを求め浴室中を見回すが、彼女たちもまた、たった一人の例外を除いて同じように笑っている。

「雫、助けてー！」

たまらず、たった一人の例外であり親友である雫に助けを求めたが、

「いいんじゃない？」

雫はおもむろに立ち上がるとそう一言言い残して湯船の外へ歩きだしてしまった。

「なんで!？」

親友の裏切りに悲痛な悲鳴を上げるほのか。

雫は一瞬、悲しげに自分の胸を見下ろして、

「ほのか、胸、大きいから」

そう言い残して、個室サウナへと入ってしまった。浴室にはほのかの悲鳴がこだました。

幸い、ほのかが無情な同級生たちによってひん剥かれてしまうようなことにはならなかった。後から入ってきた深雪に皆の目が釘付けになってしまったのだ。

性別など関係ない気がしてくるとまで言い切ったスバルの言葉から、何やら怪しげな空気になりかけた浴室だったが、ここぞとばかりに深雪の援護に回ったほのかの援護により、彼女らは冷水浴をせずに済んだのだった。

話の流れを全く知らない雫が加わると、そこはもう普通の年頃同士の女の子同士の会話が繰り広げられていた。

「そういえばさ、三高に一条の跡取りがいたよね」

年頃の女の子の話題といえ、ファッションか色恋の話とだいたい相場が決まっている。

「あつ、見た見た。結構いい男だったね」

「うん。男は外見だけじゃないけどさ。外見も良ければ言うことないよね」

一条の跡取り息子、一条将輝といえ、彼女たちと同一年で「クリムゾン・プリンス」の異名で呼ばれるこの歳にして高名な魔法師である。彼は佐渡侵攻の際、父とともに弱冠13歳でありながら多数の敵を屠った逸話とともに、その甘いマスクもあって「クリムゾン・プリンス」と呼ばれ恐れ、親しまれている。この場合、同年代の女の子がこの異名を呼ぶ場合は圧倒的に親しみの色が濃いわけだが。

「三高の一条くんっていえばさ、彼、深雪のことを熱い眼差しで見てたね」

懇親会での様子を覚えていた英美が深雪に話を振る。

「えっ、そうなの？」

「もしかして一目惚れなのかな？」

「いやいや、前から知り合いなのかも」

女の子たちは深雪の返答を待たずして勝手に盛り上がっている。そんな黄色い歓声に混ざらなかつた雫が、静かに深雪に問う。

「深雪、どうなの？」

「真面目に答えさせてもらうけど、一条くんのごことは写真でしか見たことがないわ。会場のどこにいたのかも分からなかつた」

聞きようによっては冷たいときえ言える深雪の返答に、しかし女の子たちは肩を落とすようなことはない。あくまでこれは彼女たちの雑談、一条将輝という大物であれど今の彼女たちにとっては話の種でしかない。

「あ、そうそう。一条くんですったんだけどさ、うちの学年の工藤君。彼、どこことなく一条くんに似てない？」

そう切り出したのはスバル。彼女の言葉に、えー、だとか確かに、だとか様々な声上がる。

「髪色はそっくりだけどさー。その印象に引つ張られたんじゃない？」

スバルの言に否定的な英美が否定にかかる。

「目元とかも似てると思うんだけどなー」

「アゴ周りも似てるよ！もしかして、親戚なのかな？」

「だとしたら、工藤くんも十師族の関係者ってこと？」

「ならあの魔法力にも納得だよね」

「えー。そんなことあるのかなあ」

思い思いの意見を口にする彼女たちを見ながら、深雪は写真で見た将輝とアーティを見比べていた。深雪から見ても、確かに似ている。それでも一条の縁者がいれば兄が把握しているはずだと、深雪は他人の空似だと結論づけた。

「あ、そうそう！工藤くんっていえばさ、もうアレ完全に雫にゾツコンだよー」

一条将輝と工藤スチュアート似ている論争に否定的でつまらなそうに見ていた英美が、思い出したように爆弾を投げ込む。男の子の品評会も、他人同士の色恋も彼女たちの大好物だが、その当事者が自分たちの中にとあればその盛り上がりは別格のものとなる。

「えっ!？」

「そうなの!？」

雫たちとクラスの違う彼女たちにとっては初耳なようで、異様なまでの食いつきを見せる。

「どうなのよ、ほのか。いつも一緒にいるんでしょ?」

雫とセットで行動しているほのかに問い合わせがこうして集中するのも当然のことだが、残念なことにはほのかはそのことに気が付いていない数少ない一人だ。

「え、えーつと、そんなことはないんじゃないかなあ?」

彼女たちの異常なテンションの変化に半ば気圧されながらも、ほのかは曖昧な答えを返す。

「じゃあ深雪！深雪はどう思う?」

ほのかがだめなら同じくクラスメイトの深雪。その流れは極めて自然なものである。雫の前で明確に答えることは避けたいが嘘を付くことも憚られた深雪は、

「そういうことは、本人たちの問題だと思っから……」

ほぼ肯定と取られてしまうような曖昧な答えを返すしかなかった。その答えに、またもやキヤーという黄色い歓声上がる。

「ねえねえ、雫！雫は彼のことどう思ってるの?」

彼女らの問いに、雫は最後まで答えを返せなかったのだった。

温泉の使用時間が終わり、日替わり前。翌日からは先輩の試合が始まる。それを見るためにも、そろそろ寝る時間だ。楽しかったガールズトークの時間も終わり、彼女たちは各々の部屋へと戻っていく。

先までの喧騒が嘘のように静まり返った部屋で、既に消灯を終えたほのかと雫は寝る前の会話を交わしていた。

「明日から、始まるね」

「そうだね」

自分の試合はまだだと言うのに緊張した声音のほのか。雫はこの友人が昔から緊張しやすく本番に弱いことを知っている。

「実力を発揮できれば、ほのかは負けない」

「そう……かな」

雫の言葉にも、不安そうな声音を返すほのか。

「ミラージ・バットは達也さんがCADの調整をしてくれるんですよ。鬼に金棒。わたしが言うんだから、間違いない」

「そう……だね」

いつになく強い語気で言い切る親友の言葉に、ほのかも考えることをやめたようだ。

ほのかもなんだかんだと疲れていたのだろう、緊張の糸が切れるとすぐに安らかな寝息を立て始めた。

一方で雫は、大浴場での会話が気になって未だに寝付けないでいた。

(アーティが…わたしのこと?)

ほのかの達也への淡い思いは知っている。それが恋と呼ばれるものであることも。だが今現在一高で最も仲が良い男子生徒が自分に対してそれと同じものを抱いているかなど。

(分かるわけない)

そう結論を出し、雫は眠りにつくことに決めた。だが、温泉の熱が抜けきらないのか、心なしか火照りが収まらずなかなか寝付けない雫であった。

九校戦編Ⅲ

九校戦前夜。明日も試合のない1年生の女子は他愛もおしやべりに興じたが、男子はそうではなかった。1年生男子チームが良好な関係づくりに失敗したわけではない。男性と女性の間の性差として、初めて、あるいはそれに近い関係性の同性同士を集めた時に会話が多いか少ないか、それが非常に顕著に出る。そういった実験は既に20世紀後半から盛んに行われてきた。女子と同じように男子も集まっておしやべりをしようという流れになっていたらならば、こうしてアーティが単独行動を取ることは難しかったかもしれない。

(少年……オレと同じ年くらいか?)

ブランシュ侵攻の際に現れた式神遣い。十中八九自分と同じく未から来たであろうあの男(男であったのは式神であって本体は女の可能性もアーティから見れば残っている)がこの九校戦を狙って動いてくる可能性を鑑み、式神やそれに類する使い魔の存在がないかを探っていたのだが、そのアーティの目に映ったのは同じ年くらいの少年が精霊魔法の訓練をしている姿だった。敵対勢力の一派である可能性も考えたが、少年の力量と、こんなところで訓練をしていることからすぐにその可能性を切り捨てた。

(こんなところにいるということは九校戦の選手か……一高にはあんな選手はいなかったから、他校の選手か。少しアンフェアな気もするが)

こんな場所で訓練をしている方が悪い、と少々理不尽な言い訳を自分の中で作り上げて十分に離れた距離から彼の手の内を見ることにした。

八雲のもとで古式魔法についても学んでいるアーティだったが、精霊魔法について多くを知っているわけではない。彼が知覚できているのは彼が複数の種類の精霊を使役しているということと、その精霊たちと感覚を同調しているということくらいだ。

幸いにも意識外に飛ばした精霊などの存在もなく、アーティがこうして盗み見ているのはバレていないようだ。そうしてしばらくもしないうちに、少年がハツとしたように動いた。

突如として駆け出した少年を、夜闇に紛れ空中から十分に距離をとって追う。

「!?」

狼狽はアーティのものだ。距離をとっていたとはいえ、少年が気付いた賊の気配にようやく気付いたからである。賊の存在に狼狽したのではなく、十分に距離をとっていたとはいえ、少年に気を取られて賊に気づくのが遅れた事実には、である。見たところ、3人の賊は拳銃で武装しているようだ。魔法師は至近距離では拳銃で武装した相手に基本的に勝てない。指を引くだけで攻撃できる拳銃に対して魔法はCADの出現とその進化によって劇的に発動時間を短縮できたとはいえどうしても先手を取ることができない。

(だが、間に合わない……っ！)

故に呪符を取り出し攻撃を加えようとした少年を援護しようといで地上に降り距離を詰めるが、間に合わないことを悟る。自分の魔法も、少年が放った古式魔法も。だが、少年に向けて拳銃が発砲されることはなかった。発砲直前に賊が手にしていた拳銃が全てバラバラに「分解」されたのである。その一瞬後、少年の放った雷撃が賊3人を撃ち倒した。

「誰だー」

この誰何はアーティに向かって放たれたものではない。今拳銃を分解した魔法の使用者に向けられたものだ。だがアーティも急いで物陰に隠れる。少年を援護した魔法師に勘付かれるのを避けるために。

「俺だ」

「達也?」

以外なことに、少年と達也は知り合いのようだ。

「死んではない。見事な腕だ」

生け垣を飛び越え倒れている賊のもとに降り立った少年に、賊の脈

を取りながら達也が賞賛の言葉を投げる。

「ブラインドポジションから、複数の標的に対して正確な遠隔攻撃。捕獲を目的とした攻撃で、相手に致命傷を与えることなく、一撃で無力化している。ベストの戦果だな」

「…………でも僕の魔法は、本来ならば間に合わなかった。達也の援護がなければ、僕は撃たれていた」

「アホか」

冷静な達也の評価に、返された自嘲的な言葉。それに対して放たれたのは、端的な罵倒だった。

「…………えっ?」

これには少年も面食らっている。

「援護がなかったら、というのは過程に過ぎない。お前の魔法によって賊の捕獲に成功した。これが唯一の事実だ。それとも何だ? お前にとっての『本来』というのは、至近距離で、複数の賊を相手に誰の援護もなく完璧に相手を一方的に無力化すること。それがお前の目指すべき『本来』なのか?」

「…………それは」

「お前はどう思うんだ? 援護が間に合わなくて急いで隠れた工藤スチュアート君?」

畳み掛ける達也にたじろぐ少年に達也は隠れているアーティの同意も求める。

「やはり無駄でしたか」

もつとも達也が出てきた時点で自分の存在がバレているのは覚悟していた。名指しで呼ばれては出て行かざるを得ない。

「!?」

さらなる闖入者に少年はわかりやすく狼狽する。

「紹介しよう。一高の1年生選手、工藤スチュアートだ。深雪と同じクラスで、俺達とも仲良くしてもらっている。相当の使い手だ」

「アーティと呼んでください。それで、こちらの方は?」

「そっちは吉田幹比古。俺のクラスメイトだ」

「よろしく、アーティ。見てのとおり、精霊魔法をよく使うんだ。隠れ

ていたことには全く気づかなかったよ。相当の使い手つてのは、本当みたいだね」

達也の紹介にアーティはまた一つ、疑問が生じていた。チーム入りしていない生徒が軍の施設であるこのホテルの敷地内にいること、である。

「幹比古はエリカと一緒に懇親会の給仕をしていたんだ」

そんな疑問を見通すかのように達也はアーティの疑問に答える。

「なるほど、エリカと一緒に……」

「ああ。ところでアーティ、さつきまでの話、聞いていたんだらう？お前がどう思うのか、幹比古に話してやってくれないか」

疑問も氷解したところで達也が話題を元々の話題に移す。

「ええと、魔法師に求められる力量の話ですよ？『本来』という言葉を争っていたように聞こえましたが」

「その解釈で間違いない」

「ふむ」

達也の振りに一呼吸置いて、アーティはこう続けた。

「そもそも実戦は用意ドン、の競技とは違う。先に敵を探知し、先制攻撃を加えれば発動速度で劣る魔法でも勝算がある。そしてその探知を魔法師は得意とする。1対多をしなければならぬときもあるし、多対1の難しさもある。すべての場合が本来の形だし、その結果全てがその戦闘に関わった者全ての實力を示す。そもそも理由なき敗北は存在しないからね。どうでしょう？こんなところでしょうか？」

アーティの意見に、達也は黙ったまま頷く。

「なるほど……全てが本来の形、か」

幹比古はアーティの言葉を咀嚼したようだ。

「ところで、アーティはどうして達也には敬語なんだい？僕には普通に話しているし、誰にでも敬語つてわけでもないんだろ？」

唐突に突き出された幹比古の質問に、アーティは答えに窮してしまふ。

「ああ。俺も気になっていた。俺と深雪にだけ、絶対に敬語をやめないんだ」

達也の追い打ちに、アーティはますます逃げ場をなくしてしまおう。未来の師匠だ、などと言えるはずがない。

「それは、なんかこう、2人はほら、別格、って感じがするし?どうしても敬語になっちゃうっていうか………」

アーティの返答はどうにも煮えきらないものだ。

「なるほどね。なんか、分かるなあ」

「わかるのか!?!」

だがそれに思いがけず心からの同意を返した幹比古に、今度は達也が狼狽する番だった。

翌日。昨夜の事件は内々に処理が行われ、そのような騒ぎがあったことすら知る者はいない。交通の便が悪い場所にも関わらず1万人以上の観客が押し寄せ、その百倍以上の有線視聴者が見守る中、簡単に開会式を済ませ、早速競技に入った。

「お兄様、会長の試技が始まります」

「第1試合から真打か。渡辺先輩は第3レースだったな」

「はい」

達也たちは、真由美の試合を観戦するべく、スピード・シューティングの競技場に移動した。その後ろには深雪、雫、ほのか、アーティと続いている。のだが、いつも口数の少ない雫が、いつにも増して俯いて黙りこくっている。

「雫?どうかしたのか」

目敏く雫の異変に気づいた達也が心配そうに声をかける。だがその問いかけにも雫はますます俯くばかりだ。その後ろではほのかが所在なさげに手をアワアワとさせている。その様子に、深雪も雫の様子の原因に思い当たったようだ。

「ああ……お兄様。恐らく、心配いらなと思いますよ?」
「?」

なおも怪訝な顔つきな達也に、深雪がこそつと耳打ちをする。

「ああ…そういうことか。そうか、それでこの反応…よかったじゃないか、アーティ」

「えっ」

いきなり話を振られて驚くアーティだったが、達也は意にも介さずそのまま観客席に向かったのだった。

試合で見せた真由美のパフォーマンスは、「エルフィン・スナイパー」の二つ名に恥じぬ完璧なものだった。ここで用いた「完璧」という表現は比喻ではなく、本当に真由美のスコアがパーフェクトだった、という意味で用いている。

知覚魔法マルチスコープで多角的にターゲットを補足し、ドライアイスの亜音速弾で次々に狙撃するという魔法は、原理を理解してもとても余人には真似できない高等技術だった。

「性格はともかく、実力はピカイチなんだよなあ……」

真由美の全試合が終わり、今度は摩利のバトル・ボードの会場に向かう道中、感心しながら、しかし忌々しそうに、色んな感情が見え隠れする声でしみじみとアーティが呟く。

「以前から思っていたのですが、会長と工藤くんは昔から知り合いだったのですか?」

そんな思わせぶりなアーティの態度に、深雪はかねてより抱いていた疑問を口にする。深雪の記憶ではアーティが真由美に「いじめられて」いるところなど見たことはないが、アーティはどうも真由美を避けているように見えるのだ。気のせいかもしれないと疑問を口にすることはなかったが、今の口ぶりに聞かずにはいられなかった。

「えっ、ああいや……」

「そういうわけじゃないのよ?でも入学式の日、あー君ったらわたし

に出会うなりすごく嫌そうな顔で『ゲツ』とか言うのよ。どういうこと？って追いかけたんだけど、逃げられちゃってね。お姉さん、嫌われちゃったみたい」

深雪の質問に狼狽するアーティに代わり答えたのは真由美だった。「会長」

試合を終えこちらを見つづけてきたのだろう、それでも息も切らさずに追いついてきた真由美に少し驚きながらも達也が労いの意を込めて軽く一礼する。

「お疲れさまです、七草会長」

それに続き深雪が丁寧な言葉を口にし、一同もそれに倣う。アーティを除いて。

「みんなありがとう。それで、あー君は労ってくれないの？」

真由美はわざとらしく悲しげな表情を造り、アーティのそばに寄り上目遣いでアーティを見つめる。

「……………予選突破、おめでとうございます、七草会長。それと、オレをそのあだ名で呼ぶことはおやめください」

さすがにアーティも逃れられなかったのか、心底嫌そうに顔をひきつらせて形だけの賛辞を口にする。

「……………もう。そんなに嫌われるようなこと、したかしら」

その態度に拗ねたようにぼそつと呟く真由美。アーティはこれも真由美の演技だと思っていそうだが、達也には本気で真由美が悲しんでいるように見えたので真由美に同情しながらも、自分でも忘れていた疑問が今解決したことに気付いていた。

（入学式の日、アーティが必死で逃げていた相手は会長だったのか）

それにしても、と達也は心の中で首を傾げる。真由美の態度を見る限り、アーティとの間に何らかの因縁があるようには見えない。それに真由美の悪辣さに気付いているのはこの学校ではごく少数のはずだ。だがアーティはまるで何度もその悪辣さの犠牲になって懲りているような態度を見せる。そのことを合理的に解決する仮説を、達也は最後まで立てることができないでいた。

真実、今の真由美とアーティに過去の接点は皆無だ。その点で真由

美からすればアーティの態度は理不尽極まりないのだが、アーティは25年後の未来において、40を迎えたのに未だ衰えぬ容姿と日本屈指の魔法力でその名を轟かせていた七草真由美その人に氏族会議や任務で会う度に可愛がられていたのである。この背景を理解する者ならば、アーティの態度を責めることはできない。もつともこの背景を真由美含め誰一人として理解していないからこそ、アーティの行動は誰にも理解されないのであった。

(しかもつけるあだ名まで一緒なんてっ！)

真由美から逃げ回るうちにいつの間にかやらつけられていたあだ名までもが未来での真由美からの呼称と一致し、アーティの真由美への拒否反応はますますひどくなってしまったのであった。

そんなアーティの胸中を窺い知れるはずもなく、子供のようによつぽを向くアーティと割と本気で悲しそうな真由美の様子に、達也は一つだけ、深い溜息をつくのだった。

九校戦編Ⅳ

「うーん……………」

九校戦初日。第一高校は真由美がスピード・シューティング全試合パーフェクトでの完全優勝、摩利もバトル・ボード予選突破と、華々しいスタートを切った。だがこの2人が勝つのは大前提。そのうえで他の選手がどこまで勝ちを拾えるかで第一高校の総合優勝が変わってくる。

それでもあこがれの先輩の鮮やかな姿に未だ興奮冷めやらぬ同級生たちとは裏腹に、雫はまだ10時を過ぎてもいないのに夢の世界にいた。昨夜結局ほとんど眠れなかった上に今日一日アーティとともに行動し、昨日の大浴場で言われたことがぐるぐると頭の中でリピートされていた。雫はその言動ほどクールな少女ではなくその中身は年頃の多感な少女であるが、これほどまでに自分がかき乱された経験はなかった。その疲労で今夜はどうしようか、というほのかの言葉を耳にする前に深い眠りの谷に落ちてしまったのだ。

「誰……………」

雫が問いかけても、その人物は応えない。手を伸ばせば届きそうな気がするが、しかし絶対に届かないという確信がある。腰まで伸びた燃えるように紅い髪。小さな肩に、ふっくらとした腰つき。背中越しにでも伝わる艶やかな色気はどう見ても女性だが、それにしても少し背が高い。170cm近くありそうだ。小柄な雫とは母娘のような体格差がある。

「……………」

女が振り向き、雫に何かを語りかける。だが、雫の耳には、いや頭には何の声も届かない。

「なんて言ってるの……………」

雫の問いかけに、女はハツとしたような顔つきでこちらに手を伸ばす。相変わらず何を言っているのかはわからないが、唇の動きから

「手を出して」と言っているような気がした。雫は読唇術など学んだことはないが、そう確信した。

雫がおずおずと手を伸ばすと、絶対に届かないと思っていた手が届いた。スラリと伸びた指は口ウのようになめらかで、それでいて確かな暖かさを触れた者に感じさせる。手と手が触れた瞬間、雫の頭に一気にさまざまな声の流れ込んでくる。それは少し、起動式をCADをから取り込む時の感覚に似ていた。だが、その情報量は比にならないほど多く、雫はその言葉たちのどれをも理解することはできなかった。

「——ごめんなさいね」

流れくる情報の濁流に飲まれ呆然としていた雫だったが、すぐに情報の濁流は止まり、一言の謝罪が流れてくる。

「久しぶりだったから。加減を間違えちゃった。頭、痛くない？」

久しぶり、というのも加減、というのも意味はわからなかったが、頭は痛くないかという質問にううん、と首を横に振る。

「そっか。よかった。ほんとはこんなことはしないんだけど、あの子が惑わせちゃったみたいだから。あなたも大事なものが控えているんでしよう？今回だけは、おせっかいを焼かせて」

女は伸ばされた雫の手を手繰り寄せるようにして雫に近づいてきた。もうこれなら、お互いに手を伸ばさなくても相手の体に十分触れられる位置だ。

「あの子の気持ちは、本物。でも今はまだきつと、あの子はあなたに向き合えない。だから、もう少しだけ待ってあげて」

女は雫を抱きしめるように雫の腰と後頭部に手をやり、耳元で囁くように雫には半分以上理解できないことを言う。知らない女にここまでされれば気味悪いものだが、不思議と嫌悪感はなかった。むしろ温かいような、自分の芯が熱くなるような、心地良い、というのとも違う感覚に包まれていた。そしてその声は耳元で囁かれているが、頭の中に直接響くように感じる。

「今回だけ？」

「えっ？」

ようやく返した雫の言葉に、女が間の抜けた声を漏らす。

「もう、来てくれないの」

雫は自分でもよくわからないままに、そう問うていた。

「……………今回だけは、イヤ？」

女はその質問に嬉しそうに、恥ずかしそうに、更に質問を返す。

「……………うん。イヤ、かも」

なぜ自分がそう答えているのかも分からぬまま、雫は明確な答えを返す。

「そつか。クールな子なのかと思っただけど、人懐っこいのね。ううん、クールに振る舞っている分、心理的に近づいた人には心を許すのかも。あの子も隅に置けないわね」

よく晴れた日の海のように美しく蒼い瞳が無邪気に笑う。

「それじゃあ、また会いましょう。九校戦、頑張つてね。私も陰ながら応援しているわ」

そう言い残すと、女は春風のように儂く消えていった。

「……………ん」

謎めいた夢が終わってすぐか、時間が経った後か。

「……………涙？」

朝日が昇り目を覚ました雫の頬には、一条の涙の跡がついていた。どんな夢を見ていたのか。それを思い出せぬまま、未だに気持ちよさそうな寝息を立てているのかを起こすことにしたのだった。

九校戦2日目は一高にとって少々計算が狂う展開となった。真由

美はクラウドボールも対戦相手に一矢をも報いさせぬ全試合無失点で優勝を飾ったものの、男子クラウドボールはいずれも予選負けと、優勝のためのロードマップを見直す必要性に迫られていた。新人戦で三高に大差をつけられる展開になると逆転を許す可能性もある。その事実は新入生の背中に重くのしかかった。だがやるべきことが変わるわけでもない。特に、昨日はずっと調子がおかしかった（理由は明白だったが）雫が今日になっていつもの調子を取り戻しているのを見て、達也は自分が担当する選手たちに限って言えば安心していい。

達也が思いの外早く届いた「試作品」を手にしてしていると、ドアの奥に隠す気のない気配を感じてまるで計らったようだと苦笑をこぼし「試作品」をテーブルに置き訪問者たちを出迎える。

お邪魔します、と軽く挨拶をして入ってきた深雪が引き連れてきたのはいつもの、と形容していいメンバーだ。

テーブルの上にこれみよがしに置かれた「試作品」に真っ先に興味を示したのはその「試作品」が剣の形をしていたのもあってエリカだったが、その実一番ソワソワしていたのはレオだった。得意魔法の関係から元々彼にテストさせるつもりだった達也はいとも簡単にレオをその気にさせ、夕食後に約束を取り付けると、一同は夕食をとり食堂へ向かったのであった。

夕食後の「試作品」のテストは夜中ということもあってテストターのレオと達也のみで行われた。その間、深雪達はホテルのロビーで談笑に興じることにしたのだった。

「アーティ、委員長さんにすごい宣言したんだって」

相変わらずの無表情で爆弾を投下した雫に、アーティが目に見えて狼狽する。

「アーティは確か、バトル・ボードとモノリス・コードに出るんだよね。どっちで宣言したの？両方？」

「ほのかと同じバトル・ボードだよ」

ほのかの質問に間髪入れず答える雫。

「たしか、ゴールデンタイム5分を切ってみせると豪語したようですね。渡部先輩がそれはもう楽しそうに話していましたよ」

具体的な中身まで深雪に暴露され、退路を失うアーティ。

「ええ!? たしか普通15分くらいかかるやつでしょ? ほぼ1/3じゃん!」

更に過剰にも見える反応で追い打ちをかけるエリカ。これはわざとだろう。しかし驚く気持ちはあるようで、横の幹比古も美月も目を丸くしている。

「…………新しい魔法を思いついたんだ。それで試算したら5分を切れそうだったんだけど、委員長に焚き付けられちゃって」

本当は横にいる森崎を意識してのものだったが、摩利のせいにしていくアーティ。幸いその小さな嘘を看破する者はいなかった。

そしてその大それた宣言に違う反応を見せたのは、ほのかであった。

「それ、どんな魔法なの!?!」

「ほのか」

新魔法、という言葉に即座に食いついたほのかに、雫の制止が飛ぶ。魔法師同士でのお互いの魔法の詮索はマナー違反。まして、未だ見せていないものなら、なおさらである。

「……………ごめんなさい」

「別に高度な魔法ではないから、全然公開するに吝かではないんだけど、ほのかは同じ種目に出場する選手だから。ここで新しい戦術を知ってイメージが崩れたら、責任持てないから。それに、達也さんに授かった戦術もあるんでしょ? ならなおさら、ほのかに余計な情報を与える訳にはいかないな。達也さんの面目を潰したら、オレは永久凍土の閉じ込められたマンモスのようになってしまう」

冗談めかしてかわすアーティの言葉に深雪がムツと頬をふくらませるが、それが場を収めるためのものだと分かっている深雪はすぐに頬をほころばせたのだった。

「え、じゃあじゃああたしたちには教えてくれるってこと?」

だがその気遣いを無にしたのはエリカ。エリカも鈍い女の子ではなく、むしろその感受性は鋭い部類だが、彼女はアーティに対してはとことん意地悪なようだ。もつとも、それも彼女がアーティをかなり気に入っている証ではあるが。

「ダーメ。本番であつと驚いてほしいからね。高等魔法ではないけど、見た目は派手だから。ワード・サーストンという20世紀初頭に活躍した有名なマジシャンもこう言っている。種明かしをしなければならない。そして、同じマジックを2度繰り返してはならない。そして」

「マジックを演じる前に、これから起きる現象を説明してはならない。サーストンの3原則だね」

勿体つけて3つ目を言おうとしたアーティを遮り雫が油揚げを攫っていく。これにはアーティも不服そうな顔をしている。

「よく知ってるね、雫。雫はレトロな趣味があるのかなー」

棒読みの言葉で暗に抗議するアーティ。

「うん。マジックは好きだから。アーティ、本番でのあつと驚くようなショー、期待してるから」

「えっ、あ、うん。もちろん。任せて……………」

その抗議に真っ直ぐな期待の視線を向けられ、先程の不満顔はどこへやら、急にしおらしくなつて最後は消え入りそうな声で呟くと耳を真っ赤にして俯いてしまったアーティに、思わずエリカが疲れたように突っ伏す。

「ええっ？ エリカちゃん、痛くない？」

唐突に頭をぶつけるようにテーブルに突っ伏したエリカに、美月が心配そうに声をかける。

「何よー、アンタたちもう既にいい感じじゃないの。つまんなーい」
「いいことじゃないか。僕はお似合いだと思ふよ」

今的一幕だけでははーん、と状況を察した幹比古が拗ねたようにぶー垂れるエリカを慰めるようにフォローするが、

「アーティ、顔赤い。熱あるの？」

俯いてしまったアーティの額に手をおさおすと伸ばした雫に

「ええ……」

とわざとらしく呻いてエリカと同じようにテーブルに突っ伏してしまった。

「吉田くんまで………」

状況をよく飲み込めていない美月は心配そうに突っ伏した2人を交互に見る。

「こういうのは気付いてない人が得をするんだよねー」

そう言いつつエリカはちらりと横目で美月とほのかを見遣る。すると、意外なことにはほのかは居心地悪そうにもじもじとしていた。

「ねえ深雪、何かあったの？」

そうでもないとほのかが気づくのはおかしい、と言わんばかりの暴言(?)だが問われた深雪は大真面目に首肯する。実はね、と浴場での件を簡潔にエリカに耳打ちする。

「はえー、なるほどね。それで」

「何? どういうことなの?」

「うっさいバカ! 聞くなっ!」

興味津々でエリカに情報をせがんだ幹比古だったが、風呂でのガールズトークをレオに言うわけにもいかない。幹比古にすれば理不尽極まりない手刀を脳天にお見舞いされ、今度は演技抜きでテーブルに突っ伏してしまう幹比古。そんな幹比古を心配そうに見つめる美月。しかしそんな時間も彼女たちにとってはかけがえのない友人との時間だ。

アインシュタインの言葉に、「熱いストーブの上に手を置いている1分間は1時間のようにも感じられるが、可愛い女の子の隣りに座っている1時間は1分にも感じられる」とあるように、こんな時間は一瞬で過ぎ去ってしまう。それでも少年少女は、その時その時を全力で生き、他愛もないことで感情を大きく動かすのだ。それこそ、若き彼等に許された特権なのかもしれない。

過酷な運命によって一度は奪われた若者の特権を、アーティは意識することなく取り戻している。これこそが、彼を送り出した将輝とリーナが一番望んだことだ。

ちなみに、自分を心配ししきりに声をかけてくる雫にますます赤面し、体温を上昇させ、周りの笑い混じりの制止も聞かない雫によつて医務室に運ばれ、エリカ達だけでなく「工藤スチユアートが倒れた」という知らせを聞き飛んできた真由美や摩利達上級生にも笑い話の種にされたのは、この直後のことであつた。

九校戦編Ⅴ

「やはり手強い……………」

九校戦4日目、達也達は一高が取りこぼせない種目の一つ、女子バトル・ボード準決勝を見に来ていた。素晴らしいスタートを切った摩利だったが、予選のようには行かず、すぐ後ろに二番手がピッタリとついてきている。

「さすがは『海の七高』」

「去年の決勝カードですよね、これ」

雫と美月の言葉通り、去年の決勝カードでもあるこの2人のレースは、今年に置いても事実上の決勝と言えるほど白熱したレース模様になっていく。既に多少の差をつけられてしまっている3番手の選手も、これが事実上の決勝カードでなければもう少し善戦しただろう。気の毒なことだと、そんなことを達也は思っていた。

スタンド前の長い蛇行ゾーンを過ぎ、ほとんど差がつかぬまま、鋭角コーナーに差し掛かる。ここを過ぎれば、スタンドから直接は見えなくなる。スクリーンによる観戦になる。

「まづいつー」

そう叫んだのはアーティだった。それに続いて「あっ!？」

ほのか達含む観客から悲鳴が上がる。彼等の視線の先では、七高選手が大きく体勢を崩していた。

「オーバースピード!？」

誰かが、そう叫んでいた。アーティのように一息先に異変に気づいた者は少なくない。鋭角コーナーに差し掛かる直前、減速しなければならぬ場面で加速魔法をキャストしていることに気付いた者は、この一瞬先の未来を予知していた。

ボードは水を掴んでおらず、このままならば七高選手は壁に激突するしかない。

そこを、唯一救える者がいた。直前を走る、摩利である。摩利は迷

いなく前方への加速をキャンセルし、水平方向への回転加速に切替。水路壁から反射してくる波も利用して体捌きの要領でボードを反転させた。さらに、高速で飛来し凶器と化したボードを吹き飛ばす移動魔法と、七高選手を受け止めた時に自分が吹き飛ばされないように、加重系・慣性中和魔法をキャスト。非常にシビアで危険な状況であったが、摩利の対応は完璧だった。悲劇は、摩利の見事な対応によって回避された。そのはずだった。

不意に水面が、沈み込んだりしなければ。

サーフィン上級者ではない摩利が、咄嗟に高速で飛来する相手選手を受け止めるという所業を成し遂げるために行った魔法行使は、針の穴を通すが如き絶妙なバランスの上に成り立っていた。不意の水面陥没により浮力を失い一臆警を狂わされれば、それらの計算はすべて破綻する。慣性中和の魔法をかけられないまま、摩利は七高の選手を受け止めることになる。

その結果として。

もつれ合うように、2人共がフェンスの方へと吹き飛ばされた。

「委員長!!!」

思わず席を立ち叫んだのはアーティだけではない。スタンドからは大きな悲鳴が複数上がっている。

「お兄様!」

立ち上がった達也を、深雪が青褪めた顔で見上げている。

「行ってくる。アーティ」

達也の言葉で、アーティは我に返った。みんなを頼むと目で訴えられたアーティは深く頷き、そのまま駆け出した達也を見送った。

「私達も!」

「いや、オレ達にできることはない。混乱を増幅させるだけだ。みんな、ここで待つんだ。今人だかりの中を割って進もうとすれば、オレ達まで怪我をすることになる」

腰を浮かせたほのかたちを制止し、アーティ自身も腰を下ろしながらも、アーティは摩利の身を案じていた。

(重症なのは相手選手と壁に挟まれる形になった委員長のほうだろ

う。後遺症など残らないといいが)

そう案じながら、その可能性が十分にある事実を受け止め、アーティは騒然とする同級生たちを宥めにかかったのであった。

同日、夜。アーティは人知れず、事故のあった水路の調査をしていた。

(委員長の足元で起きた水面の陥没。アレは不自然なものだった。達也さんは第三者による妨害の可能性を考えているらしい)

当事者によるものであるとは考えにくい。摩利本人はもちろんとして、姿勢制御不能状態に陥っていた七高選手、3番手の選手もレース中止になるような事故を起こす動機はない。

(だが)

第三者による妨害など、この九校戦では重々想定されているものだ。それらを監視する機器は死角なく何重にも張り巡らされているし、国内屈指の魔法師が対抗魔法を構えてレースを見張っているのだ。

(であれば、予め何らかの仕掛けがあったに違いない)

残るは、遅延型の術式。または、水面下に工員が潜んでいた可能性。しかしそれならば、何らかの痕跡が残されているはずである。

(おかしい)

だが、その事故の地点に潜ったアーティは、いかなる痕跡も見つけられなかった。

「おやおや。コースに侵入している者がいようとは。これは大問題ですよ。何らかの工作をしていたと言われても言い訳できませんまい」
「!?」

痕跡の調査に夢中になっていたとはいえ、意識外から声をかけられたことに、びしょ濡れのアーティの背中に冷たい汗がツーンと流れる。

(コースへの侵入を見張るセーフティはすべて無効化したはずだ)

「昼間の事故の調査を、と思ひまして」

振り向きざまにアーティはとっさに言い訳を口にしたが、流石に苦しい。

「痛ましい事故でした。その件については我々が調査中です。そのことよりも、今はここに不法侵入しているあなたのほうが問題です。ご同行願えますかな？」

大会実行委員を名乗る男の言葉はもつともなものだ。だがアーティはなにか引つかかるものを胸に感じていた。

「どうしました。ここで抵抗すれば私どもも問題を大きくせざるを得ません。最悪、一高全体の失格ということになる」

じつと動かないアーティにかけられた追い打ちの言葉は、コースへの不法侵入という重大な違反を犯した選手を動揺させるには十分すぎる殺し文句だった。

だが。アーティはこの言葉に、自分の胸のつかえの正体を看破した。

「ほう、一高全体、ですか。確認しますが、それはこの九校戦に出場している国立魔法大学附属第一高校を指して言っている、という解釈でよろしいですか？」

「何をわかりきったことを。さあ、ご同行ください」

一高といえはその一高に決まっているのに、それを念を押して確認するアーティに、男も苛立ちを隠さない。

「なぜオレが一高選手だと？」

「はい？」

「なぜオレが一高選手だと分かったのか聞いている」

「それは見ればわかりますよ。君は一高のユニフォームを着ているじゃないませんか」

ユニフォームを着ていながら何を馬鹿なことを、と付け加えて男はアーティに歩み寄る。だが。

「いいや。これは七高のユニフォームだ。ちよいと拝借してきたのさ。この暗がりなのと、調査不足が裏目に出たな」

「……………何？」

自分のユニフォームの襟をビヨンビヨンと伸ばしながら七高のユニフォームであることを誇示するアーティに、男の足が止まる。

「さあ、応えてもらおうか。七高のユニフォームに身を包むオレが、一高の生徒だと分かった訳を」

「私は大会実行委員です。選手の顔くらい覚えていきますよ」

「ほう。では千代田花音。この選手はどここの選手だ？」

「……………」

「彼女は一高の選手だ。今日女子アイスピラーズ・ブレイクで決勝リーグ進出を決めた。彼女の名前も覚えていないのに、新人戦が始まってもおらずまだ試合に出場していないオレの顔と名前だけ覚えてるってのはどういう訳だ？」

「……………」

アーティの言葉に返す言葉をなくした男は、キツとアーティを睨みつけている。

アーティはすつと右手をかざすと、C A D なしで加重系の魔法をキャストする。フラツシユキャスト。魔法演算領域に予めインプットしておいた起動式をC A D なしでを用いずに直接呼び出すことでキャストにかかる時間を大幅に短縮する、四葉の秘匿技術である。アーティは四葉のもとで訓練を受けた際に戦闘に用いる魔法は大抵インプットされている。

「っー」

男が姿勢を崩した隙にすかさずフラツシユキャストで自己加速術式を使用し、男の側面に回り込む。

予想外の高速魔法で2度も同じ手を食った男は悔しそうに歯噛みしている。

「やはり。今回も鬼門から気配を偽っていたか。今度は方位ではなく距離を。さしものオレも数キロ先にまで気配の位置を偽られては気付くことはできないな。だがやり方を変えても所詮同じタネだ。『2度、同じマジックを演じるな』。M A G I C^{魔法}を使う者として失格だな、お前は」

そういうアーティは何度も同じ加重系魔法を強度を上げながら使用している。同じ魔法の連続使用だが、男はもはやもがくことすらできないでいる。

「どうせまた式神なのだろう。だが、次会うときには本体を殺す。その準備をしておく。次来るときはその覚悟をしてくるんだな」

そう無慈悲に告げると、アーティはまたもやCADを用いることなくほぼノータイムで魔法をキャストした。その次の瞬間、男の肉体は爆発四散していた。魔法の名は「爆裂」。父親から受け継いだ得意魔法。前同名乗りそびれた相手への名刺代わりだった。

「ふう」

アーティは発散系の魔法で死体の痕跡を気化させ消すと、びしょ濡れになった一高のユニフォームにも発散系の魔法をかけ、即座に乾燥させる。

(こないいい加減なハツタリに引つかかってくれるやつで良かった)

自分の隠形に自信満々で、見つかった時の策を講じていなかったことを反省しながらも、見つかった相手が本当に大会実行委員でなくてよかったと胸をなでおろす。

(だが、痕跡は結局見つけられなかった)

結局の所、アーティには今回の妨害の手口の見当すらつかなかった。

(だがヤツが現れた以上、何らかの妨害はあったと見て間違いないな)
それだけでも収穫だと満足することにして、今度こそ大会実行委員に見咎められる前にアーティはそそくさと会場を後にしたのであった。

九校戦会場付近、某所。薄汚い廃屋の中で、男は冷や汗を額に浮かべコップに注いだ水を飲んでいた。

「本来は式神の同調を切るにはいくつもの工程が必要なのだが……人間の式神を用いても歯も立たんとは」

式神の使役はリスクを伴う。感覚の同調を切らないまま式神が損傷を受ければ、本体にもそのダメージが精神的ダメージとしてフィードバックされる。あまりに凄まじい致命的なダメージを受ければ、ショック死することもあり得る。故に式神が破壊される直前に強制シャットアウトを行う。数秒であればシャットアウト後も行動できるが、正規の手順を踏まない強制シャットアウトは負担が大きい。前は回復に1ヶ月を要したが、こう短期間に連続して強制シャットアウトを行えば、そのツケは前回よりも大きくなる。またしばらく動けなくなるな、とひとりごちた男は、自分の体が思うように動かせないことに気付いた。

(な、なんだ？体の動きが…にぶいぞ)

ボロボロのベッドに腰掛けコップを口にしたまま、動けない。

(ち、ちがう)

動きがにぶいのではない…う…動けんツ！ば…ばかな)

式神のシャットアウトのダメージはこのような形では現れない。式神を使役する際に脳の奥に激しい痛みを伴い失神するという形で現れる。故に男は、今自分が置かれている状況が全く飲み込めていないのであった。

(ま…まったく…か…体が動かん!?)

体が動かないという表現は比喻ではない。男は今瞬きはおろか、呼吸すらできていない。

「どうかしら」

脳に直接響くような(比喻ではなく本当に脳に響いているのだが)女の声に、しかし男は狼狽し息を呑むことすらできない。

「式神の強制シャットアウトで精神を摩耗したのは失敗だったわね。まあ、そうでなくとも私ならあなた達ごときの情報強化による精神防御など寝ながら突破してみせるのだけれど」

鈴の鳴るようなその声は、平時に聞いたならば聞いただけで日常のしがらみから開放され安らぎを得られそうだが、今の男にとってはその恐怖を呼び起こさせる声に他ならない。

「あらあら。そんなに怖がってはいけないわ。時計の針を御覧なさい」

御覧なさい、と言われても男は目を動かすことすらできない。

「あら。ごめんなさい。私としたことがうっかりしていたわ。目だけは動かせるようにしたから、時計を御覧なさい」

そう言われるがままに時計を見た男は驚愕するとともに、先程から心の奥底をかすめていた疑問の答えを得た。

瞬きもせず息もできないのに、眼球は乾くことなく呼吸ができない苦しみも感じない。その理由は、時計の針の動きにあった。

殆ど動かないのである。時計の故障ではない。男の感覚が何十倍にも加速されているのだ。

「わかったかしら。こんな状態で恐怖を増大させていったらどうなるか、あなたなら分かるかしら」

男は式神の使役、隠形と、精神に作用する魔法を多く扱う魔法師だ。それ故に他の魔法師よりは精神の仕組みというものに詳しい。

「極小時間中の恐怖の急激な増大。その先に待ち受けるのはショック死よ」

恐怖すれば、死。それはどうしようもなく恐怖を呼び起こすものだが、男も流石なもので、己の内に生まれ出た恐怖を抑え込むのではなく隅に追いやる方法というものを知っている。

「あら。さすがはタイムトラベルという大役を任された魔法師と言うべきかしら。まあ、ここで死んでもらっても困るわけですけど」

ころころと笑いながらそんな心にもない賛辞を並べる女の声を、男は黙って聞くしかない。

「このまま後1分、ああ、あなたの感覚なら数十分でとこかしら。放置しておけば、今のあなたは心臓も止まっているから、あなたは死ぬわけだけど」

女の言葉に男は慌てて自分の心音に意識を集中させる。女の言う

通り、自分の心臓は何十秒待っても拍動音を鳴らすことはなかった。「このままだと私も消えてなくなってしまうわ。貴方の精神に間借りさせてもらっている状態だから。もうすぐ少しくらいなら自由に動けるようになると思うのだけれど、如何せんあの子が眠っている間しか試せないものだから」

女の言葉は男には理解できないものばかりだった。今の男を支配しているものは心臓が止まっているという焦りと、恐怖すれば死という極限状態に耐えようという意思のみである。

「だから、ね？ 貴方には私が帰るための手伝いをしてもらうわ」

それまで全く理解できなかった女の言葉が、具体的なことは一つも言っていないにも関わらず、手にとるように理解できた。理解できてしまった。

「ダメよ。怖がっては、ダメ」

抑えきれず男の意識を押しつぶさんとした恐怖が、女の言葉で凍りついたようにその増大を止め、一瞬後に消えてなくなっていた。

恐怖という感情を削除された男は、呆然と女が自分の魔法スキームを用いて行う作業を眺めていた。

爆発四散し発散系の魔法で分子レベルで気化させられた式神の肉体と、未だ微かに残る本体であるこの男との間の路を無理やりつなぎ直し、男の精神を式神の肉体へと移す。

一流の式神遣いでも一度強制シャットアウトを行った式神の肉体との同調を再び儀式を行うことなく繋ぎ直すことは不可能なはずだが、本来恐怖に押しつぶされていたはずの男はそのことへの疑問すら浮かぶことはなかった。

男は完全に気化してしまった肉体へと精神を移し、その瞬間、男の精神は文字通り気化したのであった。

「？」

急いで会場を後にしたアーティは、何者かが自分の中に入ってくるような奇妙な感覚に襲われたが、不思議と先程までが何か欠けた状態で、今ようやくそれが満たされたように感じられて、ホテルに着いた頃には自分が先刻何を疑問に思ったのかすら忘れていた。

九校戦編VI

「じゃあ雫、頑張って」

「むう」

九校戦4日目。ここで本戦は一旦休止され、新人戦が開始される。アーティ達新入生にとっては待ちに待った自分の出番だ。アーティの大言壮語は今や一高メンバーだけでなく周りの高校の間でも噂されるほどになっており、新人戦一日目の午前に予定されている新人戦男子バトル・ボード予選はちよつとした注目マッチになっていた。とは言っても、他校の選手の間では、無名な選手が大ぼらを吹いたという笑い話になっているわけだが、アーティの実力を知る一高選手の間ではその宣言の成就を心から楽しみにしている者も少なくない。

ここでアーティの激励に雫が膨れているのは、雫は午前のスピード・シューティングがアーティのバトル・ボード予選と被っているからだった。

その雫の子供じみた態度に、アーティも苦笑いを返すしかない。助けを求めて達也に目配せをすると、達也は目で「もういいのか」と言う。それに「お願いします」とばかりに肩をすくめてみせると、達也が雫に声をかける。

「さあ、もう行くぞ、雫。早くしないと準備の時間がなくなる」

「オレの試技は録画してもらおうから。新魔法はそれで見られるよ」

「……………そういうことじゃない」

アーティはフォローをしたつもりだったが、雫はますます頬を膨らませる。その様子に首を傾げるアーティに、

「……………はあ。俺が言うのもアレだが、今のはないと思うぞ」

ため息交じりに辛辣な評価を下すのは達也。

「ああ。今のはなあ……………」

やりづらそうに頬をかきながらも同意を示したのはレオ。

「ええっ、みんな揃ってそんな」

慌てふためきながらアーティは救いを求めるアーティの視線がほのかを捉えるが、

「アーティのことなんて、もう知りませんっ」

ぷいっとそっぽを向かれてしまう。

衝撃を受けるアーティに、

「こんのバカっ」

止めと言わんばかりにエリカの向こう脛への蹴りが見舞われる。

「えええっ」

突然の総攻撃に絶句するアーティを、全員が置き去りにする。

「そんな、美月さんに幹比古まで……」

縫るような声に2人は申し訳無さそうな表情を返すが、それでも前が悪いと言わんばかりに歩みを止めることはない。

がつくりと肩を落とし項垂れたアーティだったが、その許に踵を返していた人影が一つだけあった。

「決勝は観に行くから。頑張って」

膝を付き項垂れるアーティの耳元に、そんな言葉が囁かれる。

ハッと顔を上げたアーティの視線の先には、ててたと達也たちに追いつこうとする雫の後ろ姿があった。

その先では、一人の例外もなく角砂糖を不意に10個くらい口に無理やり詰め込まれたような、そんな表情をしていた。

新人戦男子バトル・ボード予選。達也は雫のCAD調整係に任命されているため、競技が被っている雫に加え達也もアーティの試合を見ることはできない。さらに、ほのかも自分の試技の前に同じ競技の新魔法を目にすれば緊張が増すだろうと、長年の親友の試合を見ることにした。深雪は達也に付いていくかと思われたが、アーティの新魔法をリアルタイムで見てその様子を後で教えてくれと達也に言われこちらを見に来るようだ。したがってアーティの試合を見に来たのは深雪、エリカ、レオ、美月、幹比古。それに加え新魔法と常識外のタ

イムを宣言したこともあつて上級生たちはほとんどこちらの試合を見に来ていた。

「……………超満員だな」

「早めに席を取っておいて正解でしたね」

後ろの立ち見席までごつた返す盛況ぶりにうんざりした声音でコメントしたレオにそう返したのは美月。彼等はアーティを置き去りにした後すぐ席取りに向かい、こうして最前列を陣取っている。

彼等の後ろには一高上級生たちの姿もあつた。

「出てきましたよ」

選手たちの入場に美月が嬉しそうに声を上げる。いつもおとなしい彼女には似合わぬ声の高揚ぶりだ。楽しむ時にはとことん楽しむ性根なのだろう。

「オーケー、ビデオを回すぜ」

美月の声を受けカメラ役を任されたレオが情報端末を取り出しビデオモードをオンにする。この100年でビデオカメラの技術も飛躍的に発展し、超小型化・超高画質化に成功し、レオの持つような情報端末搭載のカメラでもハイビジョンテレビに映しても粗さを全く感じさせないどころか、超スロー再生まで可能なレベルの性能を有している。

「しかし、予選1戦目から『海の七高』かよ」

レオの呟いたとおり、アーティの横には七高の選手の姿がある。下馬評でも新人戦優勝有力候補と評されている選手だ。彼がいるだけで、アーティの組は「死の組」と言えた。

「でもアーティは5分を切るんでしょ？なら、関係ないわよ」

アーティの宣言を全く疑わないエリカはそんなことは全く気にもしない表情で言い放つ。だが、観客席の中でエリカのような視線をアーティに向ける者は少ない。一高スタッフの中にさえ、アーティの無謀な宣言を笑う者がいる。他の観客など、大体が新魔法など存在しないか、派手に失敗すると思つてここにいる。

そんな観客たちの思惑など意に介することもなく、予選に参加する4人の選手は位置につく。間もなく、スタート。

『用意』

このゴールが流れた後は、スタートの合図の空砲とともにレースが開始される。

パン、という乾いた音とともに新人戦男子バトル・ボードはスタートを切ることになった。

「出遅れたっ!？」

スタートの合図に動いていないアーティに、美月が悲鳴にも似た声を上げる。この場にいる者では他には幹比古しか知らぬことだが、昨日の摩利の事故に第三者による妨害という可能性が浮上していることを知っている美月の脳裏を、トラブルという文字がよぎる。そしてそれは解消されることなく、むしろその確信度は増していくことになる。

「動かないぞ!？」

「トラブルか!？」

開始から5秒。既に他の3選手とは大きな差が生じている。だといふのに、アーティは全く動こうとしない。そのアーティの姿に、会場は騒然とし始めた。

騒然とする会場をよそに、アーティはスタート一で悠長に手元のCADをびこびここと操作していた。

「よし。アジャスト完了。それじゃあ、MAWIG^{マーウィック}、テイクオフ!」

のんびりした声音で呟きボードの上でCADを手にした右手を差し出すと、アーティの身体がボードごと宙に浮いた。その一瞬後、アーティとボードは宙に浮いたまま猛然とおよそ15秒遅れのスタートを切ったのであった。

「……………なんだあれは」

先程まで騒然としていた会場は、先程とは打って変わってしんと静まり返っていた。それもそのはず、15秒ほど遅れてスタートを切ったアーティはその尋常ではない速度で猛追し、スタートから20秒を過ぎた辺り、アーティからすればスタートから10秒と経たぬ内に前を走る3人に追いつき、そのまま追い越してしまったのだ。

「あれは……………飛行魔法!？」

「加重系魔法の技術的三大難関の一つ、飛行魔法を実現しここで使っているというのか!？」

そして、アーティが完全に宙に浮き走るのではなく飛んでいる事に気づいた観客は、先程とは比にならないほどの盛り上がりを見せた。水上を走る他の選手と、空を飛ぶアーティ。いわば、船と飛行機でレースをしているに等しい。子供でも、それが勝負にならないことは理解できる。

「飛行魔法……………まさかこんなところで見られるなんて」

呆然と呟くのは幹比古。

「高等魔法は使わないって、大うそつきじゃない、アイツ……………」

興奮冷めやらぬ様子で呟くエリカ。しかし、

(違う)

この場では深雪だけが、違和感と戦っていた。深雪はその違和感の根源を確かめるべく、既に二周回差をつけ次のカーブを曲がればゴールへのストレートという驚異的な速度で「翔ぶ」アーティを目を凝らして見た。

アーティはボードごと空中に浮いている。水面との距離は50cmほど。この原理は分かる。摩利も用いていた硬化魔法の応用だろう。自分の体とボードを一つの物体と定義しその相対位置を固定しているのだ。

アーティの様子で気になる点は2つ。一つは、これほどの速度で飛翔していれば相当の風圧であろう向かい風の影響を全く受けていないこと。もう一つはアーティの横にアーティの速度に近い速度で不

自然に追隨する水滴が多数存在すること。

しかしこれでは深雪は結論を出すに至らない。兄ならば、その眼で即座にこの原理を暴いただろうが、彼女にそのような異能はない。飛行魔法という魔法の歴史が変わる瞬間に立ち会った喜びに大騒ぎの友人たちを背に、深雪は最後のカーブに差し掛かるアーティに目を凝らしていた。

最後のカーブ。それをアーティが全く速度を落とすことなく曲がり切った時、深雪の目に、3つ目の気になる点が映った。アーティは、まるで左右につつかえ棒を抱えているかのごとく左右両方の壁との距離をびったり一定に保ったまま高速でカーブを曲がっていた。

「分かったわー！」

そう叫んだ深雪の声はそう大きかったものではない。しかしいつもは淑やかな深雪にしては興奮の色が濃く出ている声に、周りの友人達はしんと黙って深雪の方を見た。

「分かった、って……あれは真正銘、飛行魔法じゃないの。水上を走るのではなく空を飛んでコースをなぞるのなら、あの速度も納得というものよ」

そう怪訝そうに首を傾げるエリカの背後のディスプレイは、アーティがゴールしている映像を写している。ゴールタイムは5分16秒。会場は大騒ぎでもはや収拾がつけられない状況だ。そのなかで、深雪の言葉に耳を傾ける一高一年生たちは異色と言えた。

エリカに疑問を向けられた深雪は、しかしすぐにエリカに答えを返せないでいた。いつも兄に解説を受けている深雪が、自分の力だけで真実を見抜いた。その喜びは、一時的に深雪の感情的な容量を少しオーバーしていた。

「……………深雪？」

心配そうにエリカに顔を覗き込まれ、深雪はようやく我を取り戻す。

「ごめんなさい、エリカ。よく聞いて、みんな。アーティの使っていた魔法は、加重系魔法の技術的三大難関、飛行魔法ではないの」

深雪の言葉に、一同は信じられないという表情で目をパチクリとさ

せる。

「アーティが使っていたのは、収束系魔法、硬化魔法、それに加速魔法だわ」

深雪が述べたアーティの使用魔法の中に、飛行魔法に該当するものはない。一同は息を呑んで深雪の説明に聞き入っている。

「アーティの使っていた魔法が飛行魔法なら、不自然な点が2つあるわ。細かく言えばもつとあるのだけれど、大きなもので2つね。1つはスタートが大きく遅れたこと」

「たしかに。空を飛ぶのにあんなに準備時間が必要なら、コースを曲がる時に魔法をかけ直す時にまた準備時間が必要なはずだもんね」

深雪の言葉にウンウンとうなずきながら言葉を返すエリカ。どうやらこの少女がこの深雪のともんでもない発言に最も早く気持ちを立て直しているようだ。

「もう一つはコースを曲がるときでも速度が全く落ちないこと」

「ウン。それは慣性中和魔法を使えば、速度を落とさずに曲がれるんじゃないか？」

「アーティは最速を目指したはずよ。曲がるために慣性中和魔法を追加でキャストする魔法力が残っているなら、直線ではその余力をさらなる速力に当てたはずよ」

「たしかにそうかあ」

エリカの反論はいいところを突いていたが、ここは深雪の推測が真実を言い当てていた。

「この2点を綺麗に説明できる仮説があるの。アーティは、いわば電車になっていったのよ」

「電車？」

素っ頓狂な声を出したのはレオ。水上を走る船でもなく、空を飛ぶ飛行機でもなく、地上のレールの上を走る電車という例えに疑問符で頭の中を満たしたのはレオだけではない。

「電車、というのはレールを敷いていた、という意味かな。でも、だもしたらアーティはどうやってレールを敷いたんでしょう？」

深雪の意図するところを見抜いて問いを投げたのは幹比古だ。

「彼はレールを敷いたのではないわ。彼はすでにコースにあるものをレールにしたの」

「どういうこと?」

「彼は、レースの水路の壁をレールにしたのよ」

深雪の説明に一同の顔の疑問の色は晴れないどころか一層混迷を極めるばかりだ。

「彼は収束魔法で自分の両翼に圧縮空気を作成、それを硬化魔法で固定し、自分の両側の壁の方に伸ばしつかえ棒のようにして、自分が常にコースの真ん中にいるようにしたのよ。彼がレースの最初動かなかったのは水路の幅を下見する機会がなかったから、あそこで調整していたのでしよう。今回のタイムは5分16秒だから、次回以降は本当に5分を切ってくるでしょうね」

「なるほど。だからアイツは他の選手を追い越す時わざわざ上昇していたのか。両翼の圧縮空気でぶつかっては直接攻撃になっちゃうからな」

深雪の説明に憑き物が落ちたように合点を返すレオ。

「でも、肝心の空を飛んでいることの説明がまだついていないよ?」

エリカがもう待ちきれないという顔で深雪に説明を求める。

「落ち着いてエリカ。それも説明するから。アーティは両翼の圧縮空気を固定した時、その形状に工夫をこらしたのでしようね。全面に圧縮空気のシールドを展開、そして両翼の圧縮空気は飛行機の羽根のように、高速で向かい風を受ければ揚力を発生させるように」

深雪の説明に、一同は豆鉄砲を食らったような顔をしている。飛行魔法の正体見たり、その正体とは圧縮空気を工夫して成型した硬化魔法だったのである。

「後は加速魔法で加速すれば揚力が生まれ、水面の波形抵抗を受けずに高速での飛行が可能っていうこと」

深雪の説明に、一人だけ合点がいかないという顔をしている男がいた。レオだ。

「確かによ、それならアイツは空気を使って飛行機の模型を作ることができる。だが硬化魔法はオレの得意魔法だ、だから分かるんだが圧

縮空気を硬化魔法で分子間の位置関係を固定しても、それは固体とは程遠い。いくらアイツの魔法力が高くて相当な気圧の圧縮空気を作ったとしても、アレ程の速度で飛翔すれば、少なからず向かい風の空気の分子は圧縮空気の分子間を通り抜けていくぜ。そうなりや揚力不足で落っこちるんじゃないか？向かい風の風圧を下げるために速度を落としたりしても揚力は下がる。そこをアイツはどう解決してるんだ？」

レオの思わぬ指摘に、深雪も答えに窮する。そこに救いの手を差し伸べたのは、後ろで一緒に観戦していた五十里であった。

「もしかして、水面効果？」

「水面効果ですか？」

「うん。地面効果、表面効果ともいうんだけど、翼形状を持つ物体が地表付近を移動する際、物体と地面の間を流れる気流が受ける影響のことなんだ。揚力というのは翼形状を持つ物体の上面と底面の距離が異なることによって底面下部の気圧が上面上部に比べて高くなることによって上向きに得られる力のことなんだけど、地面や水面の近くだと地面や水面によって底面下部の空気が逃げ場を失ってより気圧が上昇するんだ。結果として揚力が同じ速度、同じ翼でも上昇する。水面効果による揚力上昇込みなら、彼の魔法力なら飛行が可能かもしれない」

高校1年生には些か以上に高度な物理の範囲だが、第一高校は勉学の面でも国内有数のレベルを誇っている。予備知識として知ってはいたくとも五十里の説明を理解できる者は、少なくなかった。

「……………でもよ」

全てを理解したレオだったが、最後に一つ残った疑問をレオはぶつけないにはいらなかった。

「さっきの説明だとアーティは曲がる時に慣性中和魔法を使ってないんだっただよな？」

「ええ、恐らく」

「てことはあの速度であのカーブの加速度に、生身で耐えたってことかよ……………」

呻くように恐ろしい結論を出したレオの言葉に、一同は絶句を余儀なくされたのであった。

九校戦編Ⅶ

——一高工藤スチュアート選手、飛行魔法にてバトル・ボード新記録をマーク——

この知らせは、アーティがゴールをした直後、各校の情報網を用いて即座に伝えられ、他の選手がゴールをしたときには既に各校首脳陣でこれを把握していない者はいなかった。

そしてこの知らせに、一高首脳陣は完全にお祭り騒ぎだった。だが、当のアーティ本人はというと。

本部に報告にいく気もさらさらなく、まっすぐに新人戦女子スピード・シューティングの会場に向かっていた。アーティの予選は第1試合、それをわずか5分でゴールしたアーティは雫の第一試合は見られなくとも、それ以降の試合を観る時間は十分にある。アーティの足取りは浮かれているが、自らの勝利に浮かれているというよりは今から雫の試合を観に行くことができるという事実に浮かれている一面が色濃かった。

アーティが到着すると、新人戦男子バトル・ボードほどではないものの、ここもまたお祭り騒ぎだった。聞けば、雫が達也考案の新魔法「アクティブ・エア・マイン能動空中機雷」で見事パーフェクトを叩き出したと言う。

その知らせを聞きいても立ってもいられなくなったアーティは、迷わず選手控室に駆け込んでいた。

「——アーティ？」

肩で息をしながら扉を蹴飛ばすように駆け込んできたアーティに最初に反応を返したのは達也だった。あまりに早い到着にさすがの達也も面食らっているようだ。

「……………予選はどうだったんだ？」

切り出し方に困っているアーティに達也が助け船を出す。達也はアーティの様子から予選の結果など分かりきっていたが、今なおアワアワと所在なさげに手を動かしながら何も言えないでいる雫は気になっっているだろうから、というのも大きい。

「…5分16秒」

得意げなサムズアップとともにアーティの口から出たのは予選のゴールタイムだった。大会記録を8分以上縮めた記録に、達也も雫も絶句する。その表情に、もうほほ息を整えつつあるアーティは満足げだ。

「コースの寸法を測るのに、スタート直後15秒くらいは止まってましたから。次は確実に、5分を切ってみせます」

次、というのは明日の準決勝と決勝のことを指しているのだろう。今回のタイムから単純計算すれば5分というのは十分狙えるタイムだ。今頃本部は大騒ぎだろうと、達也はその喧騒を想像してくすりと笑った。

「……………雫」

「……………はい」

自慢げな表情を引っ込め、小銃型のCADを小脇に抱える雫に向き直るアーティと、未だ興奮の色を隠せないながらもアーティに向き直る雫。

「頑張っつね」

「ウン。絶対優勝するから」

もういつものクールな表情に戻っていたが、その声には少しばかり力がこもっていた。思いがけずいい気合が入ったと、内心アーティに感謝しながらも、達也はわざとらしい咳払いを一つして、

「さて。ならば部外者には観客席に戻ってもらおうか」

わざとらしく他人行儀に、こう告げた。

その言葉に、選手控室への乱入という自分の行為を認識したアーティがみるみるうちに縮こまっていく。

「し、失礼しましたっ！」

最後にはペコリと頭を下げそう謝ると猛然と控室から飛び出していったのだった。そんなアーティを見送った達也が雫に視線を戻すと、雫はもう会場への入り口に目を向けている。キツと一文字に結ばれたその唇は雫の気合の入りを雄弁に物語っている。

(こういうのは逆に気が抜けるタイプも多いんだが…この2人は大き

くプラスに働くタイプのようだな)

そう思えばこの2人の甘ったるい雰囲気もいくらか許せるな、と半ば自分に言い聞かせるようにして、会場に入る雫を見送った。

「あつ、アーティ」

選手控室を飛び出して観客席入口の前にいたアーティを、深雪達観戦組が見つけ、いの一番にエリカが声をかける。

「もう。どこ行ってたのよ。探したんだから」

そう怒ったようなことを言うエリカだが、先程の興奮が抜けないのか、どうにも怒っている感じがしない。やっと見つけたという喜びのほうに先に伝わってきそうな、そんな表情だ。

「まさか、雫のところへ？」

ほのかにまだ赤みが抜けない耳の色を見て深雪がその推測を口にする。ギクリと固まったアーティの様子は、子供が見ても凶星を突かれたと分かるだろう。その様子に、その場にいる全員が深い溜め息を漏らした。

「……応援した俺らへの報告もせずに選手控室に乱入してたのかよ」

ここで拗ねたような表情を作ってこんな事を言うレオは、些か意地が悪いのかもしれない。

「いや…その…つい…」

そんなレオのキラークラスに、きまり悪そうに頭をポリポリとかきながら困ってみせるアーティは、些か以上に単純な性格なのかもしれない。

「でもそれはそうと、飛行魔法、すごかったわね。ぶつちぎりだった

じゃない！」

そんなアーティに出されたエリカからの助け舟に、みるみるうちにアーティはその顔色を得意げに変え、

「ありがと。でもアレは実は飛行魔法じゃなくて……」

「圧縮空気を硬化魔法で固定した両翼の形成と、水面効果による揚力上昇での飛行。本当に、お見事でしたね」

ドヤ顔で解説しようとしたところに、深雪によるネタばらし。得意げに自分の魔法を解説するはずが、すでに深雪に看破され全員にバレていると知り、アーティはがっくりと肩を落としてしまう。百面相のように表情をコロコロと変えるアーティに、一同は笑いを禁じ得ないのであった。

アーティたちが見守る中、雫は汎用型CADと特化型CADの照準システムの組み合わせという、技術的に大きな意味のある新技術を携え、結果として、一高は新人戦女子スピード・シューティングの表彰台を独占するという快挙を達成、先刻の飛行魔法（ほとんどの者たちはアーティの魔法の実態を理解していない）に引き続いての朗報にもはや半狂乱であった。

この快挙には、雫たち選手の尽力はもちろんのことだが、達也が行ったCADの調整が非常に大きく貢献していることは誰の目にも明らかであった。この事自体は非常に喜ばしいことなのだが、一高の一部の選手、特に達也を拒絶した1年生男子たちにとっては必ずしも面白いことではなかった。達也の力を借りずとも結果を出してみせる。その力みが、1年生男子たちの足元を掬うことになることまでは、達也でも見通せていなかったであろう。

午後の新人戦男子スピード・シューティングでは森崎が準優勝と奮闘したが他の2人は予選敗退、アーティの快挙に湧いていたバトル・

ボードにおいてもアーティの他の2選手は予選敗退を喫していた。そして一方の女子はほのかのあつと言うような作戦勝ちを始めとし、バトル・ボードにおいても2人予選突破を見せ、男女でくつきりと分かれてしまった明暗に一高首脳部は少なからず頭を抱えるのであった。

「くそっ！」

同日、夕刻。一高テントの外れで地団駄を踏む少年の姿があった。新人戦個人種目準優勝。彼が今日掴み取った結果は、決して誇ることはあっても地団駄を踏んで悔しがするようなものではない。それでも心からの悔しさに歯噛みしながら地団駄を踏んでいるのは、彼の高い向上心故か。それは称賛されるべき美德かもしれないが、もう一つ出場種目を残している彼に限っていえば、あまり良くない精神状態かもしれない。

「……………森崎」

ともすれば拳から血が出るまで地面を殴りつけかねない少年を制止したのは、テントから音もなく歩いてきたアーティであった。

「……………工藤か」

「準優勝、おめでとう」

アーティからすればこの言葉は紛れもない賞賛の言葉なのだが、この賞賛の言葉を受け取っても森崎が喜ばないことを分かりきっているが故に、アーティの口調も控えめなものになる。しかし森崎も感性の鈍い少年ではない。アーティのそういった気遣いというものを汲み取り、八つ当たりをするような真似はしない。

「工藤こそ、予選を楽々突破したようだな」

「……………ああ」

「飛行魔法を使っただって？」

「アレは厳密には飛行魔法ではないが。空を飛んでタイムを大幅に縮

めたという意味ならば、そうだ」

「……？」

周囲の騒ぎっぷりからアーティの魔法が飛行魔法だと思いこんでいた森崎はアーティの部分否定に首を傾げる。アーティは森崎を良い友人だと思っっているが、ここで時間を使って自分の魔法を解説しようと思うほど彼に友情を感じている訳でもなければ、まして今の精神状態の森崎に自分の魔法を得意げに解説することが森崎にとっていい影響を与えりとも思っっていなかった。

「……まあいい。アレを使えば、優勝は間違いないだろう。現行のルールでお前を止める手立ては存在しない」

「そうだな」

「……またも、僕はお前に負けたわけだ」

「……直接戦ったわけじゃない」

森崎が指しているのは、九校戦前日、森崎のスピード・シューティングの練習に付き合っている際に交わした約束のことだ。お互いの結果で勝負をする。優勝は揺るがないアーティへの森崎の敗北宣言へのアーティのフォローは、苦しいものだった。

「直接戦ったとしてもだ。お前がスピード・シューティングに出ていて、僕と当たっていたら、僕は……」

「森崎」

先程まで気遣いながらフォローを返していたアーティだったが、打って変わってピシヤリと森崎の言葉を静止する。

「事實は事実だ。だがそれ以上によくよするものじゃない。今はまだオレのほうが上。それだけの話だろ？」

「……フン。お前には、敵わないな」

「……」

「だがいつまでもそうはいかない。必ずお前を超えてみせる」

「その前に、今は目の前のモノリス・コードだ。優勝を狙うなら、今度こそプリンスとの激突は免れない。プリンスはオレがマークするが、お前の担当の吉祥寺真紅郎も相当の使い手だぞ」

「カーディナル・ジョージか。インビジブル・ブリット不可視の弾丸。どう対策したものか

……」

ようやく目の前を向いた森崎に、アーティは内心やれやれとため息をこぼす。この向上心旺盛な友人は、その飽くなき向上心と高いプライドから先程のように精神状態がひどく落ち込む時がある。どうにも扱いづらい節があるが、他ならぬ自分が森崎に一番意識されているのもあってアーティ自身は森崎を比較的制御できる位置にいることは、アーティにとって幸運だった。

「オレは明日のバトル・ボード本戦があるから。それが終わったら山中も交えてモノリスの打ち合わせをしよう」

最低限の仲間のメンタルケアを終えたアーティはそう告げると、返事を待たずにテントへと引き上げた。

九校戦5日目。新人戦2日目。

今日は朝から新人戦女子アイスピラーズ・ブレイクと新人戦女子バトル・ボード本戦、午後は新人戦男子アイスピラーズ・ブレイクと新人戦男子バトル・ボード本戦が予定されている。

「良かったわね、アーティ。今日はお互いの試合が被ってなくて」

「うん。やっぱり、直接応援できるからね」

「アーティ君、そういうことなんですよ。それを録画がどうか言うから……」

エリカに水を向けられ心底嬉しそうにはしゃぐアーティに、昨日の一幕の答えを優しい美月はそれとなく教えてあげたのだが……

「ん？録画？何のこと？」

「……もう！アーティ君のことなんて知りません！」

ついに美月にまで見放され、呆然とするアーティに、レオとエリカはもはや隠す気もなく大笑いしていた。

新人戦2日目も一高にとっては快拳の日となった。女子アイスピラーズ・ブレイクにおいてまたも1位2位3位独占という快拳を成し遂げたことになる。これで達也は自分がCAD調整を手掛ける2種目で表彰台を独占したことになる。

この前代未聞の快拳に、一高に上位3位のポイントを付与する代わりに英美・雫・深雪の3名を同率優勝としてはどうか、という異例の申し出がなされた。元々寝不足気味で棄権するつもりだった英美はこれを快諾したが、雫が深雪との決勝戦を希望。普段クールな印象が強い雫のこの言動は周囲を驚かせた。

アーティはこの知らせを聞いて驚かなかった数少ない人間の一人だが、今は達也からの呼び出しに選手控室に向かっているところだった。

「どうぞ」

控室をノックして返ってきたのは呼び出した達也ではなく雫の声。その声に、アーティはそつとドアを開け中に入る。雫は今日ずっと着ている、振袖姿。アーティはそつと観客席から見ているが、遠くから眺めているのと同じくして間近で見るとは全く見え方が違う。いつものアーティなら赤面し会話になっっていなかっただろうが、ピリツと張り詰めた空気を察してか、アーティも顔色ひとつ変えることはない。一方の雫はといえば、アーティの来訪は思いもよらぬものだったようで、一瞬意外そうな顔を見せたが、すぐにいつものクールな顔に戻る。

「達也さんは？」

「深雪のとこ」

「そうか」

自分呼び出した達也の居所を尋ねたアーティの質問に、短い返答。その後には、長い沈黙。だが、その沈黙は心地の悪いものではなかった。言葉を探しているのでも、間が持たないのでもない。二人は

今、沈黙という言葉を交わしているのだった。

時間にすれば数分だろう。だがその数分の沈黙で、雫の深雪との勝負に掛ける思いは、余すところなくアーティに伝わった。

「そろそろかな」

「うん」

雫の支度が終わる時間を見計らって達也はアーティを呼んでいる。もともと時間は多くなかった。新人戦女子アイスピラーズ・ブレイク決勝、その時間はもう目の前に迫っていた。

「雫」

アーティは裾に皺を付けないように綺麗に足を折りたたんで椅子に座っている雫に近づきながら、その名を呼ぶ。

そのまま、アーティは雫の両耳の付け根に手をやり、かがむようにして雫の額に自分の額をくっつけた。

そうしている時間は数秒か、数十秒か。しかし、雫に不思議と狼狽は生まれなかった。

「これ、オレの姉さんが昔よくやってくれたおまじない」

額を離れたアーティは、そのまま手を話して後ろに半歩引きながら、はにかみながらそう言った。

「アーティ、お姉さんいたんだ」

そう言いながら、アーティに姉がいることをずっと前から知っていたかのような感じがすることに雫は気付いたが、今の雫は気にも留めない。

「うん。今度話すよ」

「うん。聞かせて」

そう笑顔でいうと、スタツと器用に重心移動だけで椅子から立ち上がり、雫は会場への扉に手をかける。

「アーティも、本戦、頑張つて」

そう振り向かずに言い残すと、雫は勢いよく扉を開け会場へと入って行った。

「……………もちろん」

雫を送り出し閉まった扉に向けて、アーティは人知れずそう呟く

と、踵を返し男子バトル・ボード本戦の会場に向かったのであった。

九校戦編Ⅷ

普段なにかに執着するということが少ない雫が、今回深雪との試合に拘ったのには理由がある。

雫は才能あふれる少女だ。そんな雫は幼少からおよそ周囲の人間に何かで水を空けられるということは皆無に等しかった。その雫が、第一高校に入って初めて、この少女には勝てないと、悟った。今までに負けたことがないわけではない。親友のほのかとは僅差で毎回勝ったり負けたりしている。だが、今の自分では何をしても勝てないと、そう思わせられたのは、深雪が初めてだった。

屈辱感は、なかった。それほどまでに、深雪は完璧な少女だった。雫は深雪に出会った瞬間に、深雪に勝てないことを心から許容していた。深雪に負ける自分を、何の抵抗もなく許していた。だが。

こうして深雪と正面から勝負をする機会があるのならば。

逃げるわけには行かなかった。雫は、深雪に負けることを許容している自分を良しとしなかった。

それに。

普通にやっても優勝くらいできるであろうあの少年が、自分の限界に挑戦した。聞いたところでは、あの魔法力でも例の飛行魔法を成立させるには干渉力がギリギリで、慣性中和魔法を使わずにその加速度に生身で耐えているらしい。勝てない戦いを勝てるようにするためならば、十分理解できる。でも、あの少年は普通にやっても十分に勝てる戦いで、「ベストを尽くす」ために必死でアイデアを絞り出し、それがどんなに苦しいものであっても挑戦してみせる。

そんな姿を前にして。

同率優勝などという甘言に、乗るわけにはいかなかった。

やるからには、勝つつもりで。深雪と戦うために温めておいた秘策を胸に、雫は静かにステージに上がる。

彼我の氷柱が並べられたエリアの向こう。清廉な巫女の衣装に身

を包む深雪は、いつも隣で見るとよりもずっと大きく見えた。

始まりを予告するライトが点灯する。決着の刻は、すぐそこまで来ていた。

開始とともに、雫と深雪の魔法が同時に発動する。その発動速度は、完全に互角。

熱波が雫の氷柱を襲う。深雪がこれまでの試合でも見せた『氷炎地獄』だ。だが、雫の氷柱がみるみるうちに溶解していくことはない。雫の『情報強化』が、雫の氷柱の温度変化を拒絶しているのだ。

そして雫は守るばかりではない。深雪の陣地を地鳴りが襲う。だが、その地鳴りが共振となり氷柱を破壊する前に、深雪は自陣全域の運動・振動を抑える範囲魔法を、自陣の地下部分にまで範囲拡大させたのだ。

雫と深雪はお互いの魔法をブロックしながら、事象変化の手を少しずつ相手の陣地に伸ばしていく。深雪相手にこれほどの時間試合を続けられた選手も、雫相手にこれほどの時間試合を続けられた選手も、お互いが初めてであった。

彼女らの高レベルな駆け引きは、互角に行われているかのように見えた。だが、当人の認識は異なるものだった。

(届かないっ……さすがは、深雪……)

雫の魔法は深雪によつて完全にブロックされている。だが、深雪の『氷炎地獄』の熱波は、直接雫の氷柱を加熱せずとも、雫の陣地を覆う大気の温度を著しく上昇させ、それが雫の氷柱をじわじわと溶かしている。

雫が自陣の氷柱にかけている『情報強化』は、その対象が受ける魔法による変化を防ぐものであり、これによつて『氷炎地獄』による氷柱の温度変化を防いでいる。だが、高温に熱せられた大気によつて氷柱が熱せられるのは自然現象であり、『情報強化』で防ぐことはできない。あるいは、雫が自陣全体に『領域干渉』を行い自陣全体を雫の支配下とすれば、深雪の『氷炎地獄』自体を無効化できたかもしれない。だが、領域に対する干渉力は明らかに深雪の方が上。雫は個に対する『情報強化』でしか深雪の領域魔法に対抗する術を持たないのだ。

(だったらー！)

このままではジリ貧。雫はCADをはめた左腕を、右の袖口に突っ込んだ。引き抜いた手に握られていたそれは、拳銃形態の特化型CAD。

通常ならば、一度に複数のCADを用いれば、想子信号波サイオンの混信を起こし両方の魔法が不発に終わる。だが、高度に想子を制御サイオンできれば、複数のCADを同時操作することができる。そしてそれは、魔法師同士の駆け引きにおいて大きなアドバンテージとなる。

果たして、雫は想子信号波サイオンを混信させることなく、2つ目のCADの起動処理を完了させてみせたのだった。

深雪の陣地に、雫の新たな魔法が襲いかかった。

深雪の氷柱から、白い蒸気の煙が上がる。これまで文字通り指一つ触れられなかった深雪の氷柱に、初めて有効なダメージが入る。

振動系魔法『フォノンメーザー』。超音波の振動数を上げ、量子化して熱線とし、対象を急激に加熱する超高等魔法。映像ですらなかなか見られない超高等魔法の登場に、会場は大いに沸き返っていた。

(これなら…いける！)

『氷炎地獄インフェルノ』が自分の氷柱を溶かすよりも早く、『フォノンメーザー』で深雪の柱を溶かし切る。雫の瞳に、確かに勝利への道筋が見えた瞬間だった。

「!?」

深雪の氷柱の融解が止まっている。自分の『フォノンメーザー』は作動している。深雪の氷柱を、『フォノンメーザー』の加熱速度を上回る冷却効率で冷却する魔法を、深雪がキャストしたのだ。

広域冷却魔法『ニブルヘイム』。北欧神話に登場する9つの世界のうち、最下層の氷の世界の名を取ってつけられたその魔法は、最大レベルならば擬似的に広範囲に絶対零度を作り出すこともできる超高等魔法だ。

策が尽きた雫は、そのでたらめな冷却魔法の威力に一瞬怯んでしまった。深雪はその隙を見逃すほど、甘い魔法師ではなかった。

深雪と雫の陣地を覆うように発動された『ニブルヘイム』によつて

発生した液体窒素。それらはお互いの氷柱の根元に大きな液溜まりを作っていた。

そこで深雪が再び『氷炎地獄』インフェルノを発動させる。結果として。

雫の陣地のみが急激に加熱され、大量に凝縮した液体窒素が、今度は急激に蒸発する。その膨張率は、700倍にもものぼる。液体窒素の気化爆発によって、雫の氷柱は一本残らず爆砕されたのであった。

こうして、新人戦女子アイスピラーズ・ブレイクは決勝戦までの日程を終了し、1位2位3位を第一高校が独占するという結果に終わった。

同日、夕刻。

準々決勝、準決勝、決勝と例の魔法を用いていずれもゴールタイム5分を切り決勝戦においては4分37秒という大会記録をマークしたアーティが、一高テントに向かっている途中だった。

「優勝おめでとう、アーティ」

彼を出迎えたのは、雫一人。それもそのはず、一高のテントまではだいぶ距離がある。アーティが通るルートによってはここまで来てはすれ違う可能性がある。それでも、雫はこのルートで待つことを選び、アーティもこのルートから帰ってきたのだ。

「ありがとう。雫こそ、準優勝おめでとう」

アーティも決勝戦前、雫と深雪の決着については聞いていた。

「ありがとう」

互いに言葉をかわずと、ゆつくりと一高テントの方へと歩き出す。

「……………深雪さんのこと、聞いたよ」

「……………うん」

「残念だったね」

「……………うん」

「強かった？」

「うん」

「悔しい？」

「……………うん。悔しい。悔しいよ」

実は雫は既にほのかに慰めてもらい、達也のおごりで深雪と話しながらお茶をして一度は整理をつけている。それでも、悔しい気持ちは、消えはしない。

「そつか。すごいね、雫は」

「……………？」

故に、すごい、と褒めるアーティの真意がわからなかった。

「オレはさ。入試で深雪さんに負けて。入試制度に腹は立ったけど、深雪さんに負けたことについては悔しくもなんともなかった。負けて当然だ、って思ってるんだ、オレは」

「……………」

アーティの言葉に、自分だってそうだ、と心の中で返す。

「でも雫はさ。同率優勝もできるのに、深雪さんに挑んで、負けちゃったけどちゃんと悔しいんだ。それは、すごいことだよ」

「……………」

「オレも負けてらんないな。オレ、明日からのモノリス・コード、正直プリンスには勝てないだろうなって思ってた。多分、このままモノリスに参加したら、当たり前前にプリンスに負けて、プリンス相手だからって悔しくも思わなかったんだろうな」

「……………アーティ？」

「オレ、勝つよ。モノリス・コード、プリンスにも勝って、絶対優勝する。でき、優勝したらさ……………」

「……………？」

「いや、なんでもない。絶対勝つから。約束だよ」

そう言うと、アーティは歩く速度を早めた。といっても、元々がゆっくりだっただけで、今でも普通に歩くのと変わらないくらいだ。

「……………期待してるから」

雫の発破に、アーティは応えない。だが、雫が見上げるその一文字に結ばれた唇が、アーティの覚悟を物語っていた。

「ところでさ、アーティ」

「何？」

「深雪さんのこと、前から知ってたの？ さっきの、そんな口ぶりだったよね」

雫の何気ない質問に、アーティの顔が露骨にしまったという表情に変わる。

「秘密なんだ」

「……………うん」

「じゃあ、黙っててあげる。でもそのうち教えて。お姉さんのことも」

そう、少し意地悪な表情を浮かべながら言い残すと、雫はテントの方に先に走り去ってしまった。

(やれやれ)

我ながら思い切ったことを言ってしまったものだ、と雫が走り去った道をテントの方へ歩みを進めながらアーティはひとりごちる。

(父さんに、達也さんや他の大人たちに怪しまれない範囲に制限された力で勝つ。正直、厳しい)

だが、とアーティは心の中で続ける。雫の悔しさに心打たれたのは事実だ。彼女を見ていると、諦め妥協しようとしている自分がひどくみっともなく思えた。

しかし、明日のモノリス・コードに意識を向ける一方で、アーティには気がかりなことが残っていた。それは、あの式神遣いのことである。アーティは式神遣いが何者かに殺されたことを知らない。式神遣いの脅威は去ったが、アーティ達を襲う苦難に気付くこともなく、アーティは的はずれな心配をしながらテントへと戻った。

テントへ帰還したアーティを待っていたのは、賞賛の嵐であった。特に新入生男子の熱狂ぶりは特筆すべきものだ。新人戦では男女で完全に明暗が別れてしまった。そのなかで、アーティの華々しい結果は男子たちにとって希望そのものだった。

そこで初めてアーティは自分の魔法について解説をした。アーティがバトル・ボードで見せた魔法が加重系魔法技術的三大難問の一つ、飛行魔法そのものではなく、圧縮空気の必要気圧から要求される高い干渉力によりごく一部の魔法師にしか再現できない、極めて限定的なものであるという種明かしには少々の落胆も見られたが、裏を返せばアーティがそれほど限定的な高難度魔法を使いこなす新記録を樹立したということは、アーティの魔法師としての実力は現時点で相当なものであるということを指す。そのことに対して、やはり一高一年男子は沸きに沸いたのであった。

深雪と雫の見事な戦い、それにほのかとアーティのバトル・ボードアベック優勝。まだまだ予断を許さぬ得点状況ではありながら、この日は一高首脳陣も枕を高くして寝たと言う。

翌日。九校戦日程7日目、新人戦4日目。

この日はミラージ・バットとモノリス・コードの日程が始まる日であった。男女それぞれ特有の種目であり、得点も他の種目の倍ということで各校はこの競技に特に力を入れる。

アーティは朝一番から、チームメイトの森崎、山中とともに準備運

動をしていた。モノリス・コードは直接攻撃こそ禁止なもの、九校戦の種目の中でも随一の体力要求量を誇る種目だ。古典的な準備運動もしつかり行わなければならない。

初戦、五高との試合。三高と当たり父を打倒するには、こんなところで負けてはいられない。

山中、森崎もそれぞれの思いを胸に、一高新人戦モノリス・コード出場メンバーは会場へと足を踏み入れた。

九校戦編IX

モノリス・コード。

2095年度の九校戦の種目の中で唯一チーム戦の形を取る競技で、女子のみのミラージュ・バットと対をなす男子のみの種目である。

内容は敵味方各々3名の選手によって「モノリス」を巡って魔法戦闘を行うというものである。

両チーム開始位置に自分のモノリスを持ち、相手のモノリスに予め受領している起動式を打ち込むことでモノリスが開き、そこに書かれているコードを読み取ることが勝利条件となっている。また、相手チームを全員戦闘続行不可能に追い込むことでも勝利となる。魔法以外の直接戦闘行為は禁止されているものの、その過酷な内容から男子のみ、となっている。

その過激な内容から九校戦で最も人気があり、白熱する種目となっている。

「なあに？アーティのあのカツコ……」

今回乱数によって岩場に設定されたステージに入ったアーティの服装を見て、エリカが怪訝そうな声を漏らす。それもそのはず、アーティはその身を真っ黒なローブに身を包んでいた。

「持ち込みが許可されているということは、何かの魔法の発動媒体ってことじゃないのか？アイスピラース・ブレイクじゃねえんだから、単なるコスプレってことはねえだろうよ」

アイス・ピラースブレイクをコスプレショーのように言い切ったレオに女性陣の非難の視線が集まるが、しかし言っている内容は正しいので反論する者もいなかった。

アーティ率いる一高チームは、振動系魔法の扱いに長ける山中が自陣防衛を務めながら得意魔法「ソナーレーダー」で敵の位置を把握、それを逐次2つのポイントから指向的に発される信号をアーティと森崎の地点で交差させることで2人にもみ信号を伝える「デュアル・エニグマ」で知らせる、というもの。アーティは先鋒を務め、可能な限り各個撃破を繰り返し、敵陣の防衛戦力を引きつける。その間に森崎がモノリスのコードを読み取るか、アーティと挟撃の形を取り全滅を狙う、という2-1の攻撃的な布陣を敷いている。アーティと森崎の優れた攻撃能力、それに山中の正確な探知能力によって実現できる布陣である。

第五高校との一戦目。事前の打ち合わせ、練習通り、開始と同時にアーティと森崎が自陣を出る。アーティは出発から十秒後自己加速術式を用いて高速移動を開始するが、森崎は魔法での補助を用いずに遅れて更にルートをずらして敵陣に迫る。

魔法行使による想子波サイオンの余波は、特に隠蔽のための方策を講じなければ容易に探知に引つかかる。開始直後に使用しなかつたのは自陣モノリスの位置を簡単に特定させないためであり、アーティだけが自己加速術式を使用したのと言うまでもなくアーティが敵を引きつけるためである。

高速でステージを駆け回るアーティを起点として、山中の「ソナーレーダー」のアクティブソナーが発信される。自陣から動かない山中がステージ中を網羅するほどの強い超音波を放つことは相手の探知に引つかかる可能性を鑑みて得策ではなく、故に尖兵として送り出したアーティを発信源とすることで自陣モノリスの位置を特定されることなく相手選手の位置を特定できる。

(動いている人体サイズの反応が2つ。狭い範囲をゆつくりと動いている反応が1つ。この動きの小さい反応の近くにモノリスがある)

アーティが受けた反響音の情報をそのまま受信した山中はその解析結果を即座に「デュアル・エニグマ」で発信する。現時点で情報において圧倒的優位に立ったのは一高サイドだが、五高もこれを座視していたわけではない。

これに対する五高のアクションを、山中のレーダーは捉えていた。山中が発信した敵の位置情報の一つに猛然と接近しているアーティに対し、五高サイドは陣地防衛に回していた1人も含めて今現在魔法行使の余波を隠そうともせず、超音波をただ漏れにしながらエリア内を駆け巡るアーティに戦力の全てを差し向けたのだ。戦力を分散した一高サイドに対して、五高側の採った戦術は戦力集中による各個撃破。戦術的には正しい。例えそれが一高サイドが計算した上での陽動作戦であったとしても、1対3で陽動が務まるほどの時間持ちこたえられるはずがない。三高の「プリンス」ならばともかくとして、十師族でもない無名な選手にそこまでの実力があるとは思わない。その前提が正しければ、正しい戦術だっただろう。

3人がかりで超音波を発しながら岩の隙間を駆け回る一高選手に五高選手が追いつくのかかった時間は決して長くない。五高選手がローブを翻しながら逃げる影に付近の石礫を大量に移動魔法でぶつけその動きを止めるまでにかかった時間は、五高の防御を任された選手が攻撃戦力との合流を図り自陣のモノリスを離れてから3分と経っていない。3人で追い込む形で迅速に撃破を果たした五高選手が石礫を受け動けなくなっている人影を確認する。残りの2人も倒れた人影に歩み寄る。戦闘不能を確認し、すぐにでも持ち場に戻り2対3の試合に持ち込むつもりだったのだが。

「クソッ！ どういうことだこれは！」

人影を仕留め真っ先に確認に向かった五高選手が地団駄を踏む足元には、今なお超音波を放ち続ける真っ黒なローブが落ちていた。隠すつもりもなく超音波を発しながら移動するアーティに対して、五高選手側が探知の手段を講じる必要はない。超音波の発信源をたどれば相手の位置はわかる。その心理をついたダミー作戦は、初見というのもあって見事に成功していた。そして、ダミー作戦で使用されるダミーには、大抵の場合トラップが仕掛けられているものである。

この様子を岩陰から見ていたアーティがCADを操作すると、ローブのもとに集まっている3人の目の前で、ローブに織り込まれているマグネシウムが発火する。マグネシウムの発火は非常に強い発光を

伴う。それをさらにローブに黒い糸で目立たないようにあしらわれていた刺繍による刻印が大幅に強化する。

結果として。

強烈な光に目を焼かれ五高選手全員が動けぬ間に、森崎がモノリスを割りコードを打ち込み、戦闘らしい戦闘を行うこともなく新人戦モノリス・コード第1戦は第一高校の勝利となった。

「……………悪辣だなオイ」

「……………アーティって根っこは達也くんと同じ？」

この作戦がアーティの立案とは限らないのだが、レオもエリカも揃ってアーティのものだと確信しているあたり、アーティの日頃の行動にどこか悪辣な性根を感じさせる部分があるということだろう。横で見えていた美月が反論しないことからそれが事実であることを示しているのかもしれない。

新人戦モノリス・コード第2戦は、四高との試合。ステージは、市街地ステージに設定された。

アーティは、森崎、山中とともに今回用いる作戦を軽く確認しながら、初期位置の廃ビル内で開始の合図を待っていた。

「開始位置が屋内なのは運がいい。山中の得意なトラップがふんだんに使える。防衛は任せたぞ」

「ああ。工藤も森崎も、次に響く怪我をするなよ」

「わかってる」

短く言葉をかわすと、開始を予告するサイレンが鳴る。次にブザーが鳴らされれば、試合開始だ。

試合開始に備え身構えたアーティは、不意に「見られている」感覚を覚えた。

「!?」

アーティはこのような感覚を「気の所為」だとは思わない。そのために幼少から訓練を受け続けていたのだ。

人間は第六感とも言える「気配」をある程度感じることができると、これは第六感などというものではなくその殆どが聴覚によるものだという仮説は20世紀末には立てられている。意識内では「聞こえている」と認識できないような衣擦れの音、呼吸音、果ては相手の心拍音を、無意識で感じ取りそれを「何かがある」という気配として意識領域に返す。

アーティは、意識下では知覚できないレベルの魔法行使の兆候を無意識で感じ取りそれを「何かが来る」という気配として意識領域に返すことで、何らかの魔法行使を探知できる範囲を大幅に広げている。

「退避しろっ!!!」

山中と森崎にそう発した警告は、しかし開始を告げるブザーによってかき消された。

アーティの形相に疑問を感じた森崎と山中はブザーによってかき消されたアーティの言葉を聞き返そうとするが、それは叶わなかった。

その場にいる全員が、突如として崩れ始めた天井に気付き呆然としたからである。

(破城槌だ?!? フライングの探知に、オーバーアタックとはっ!)

廃ビルの窓まで、12メートル。アーティの身体能力をもつてしても、間に合う距離ではない。咄嗟にCADを操作しようと考えるが、

(――間に合わない!)

一瞬の刹那にもう崩れ始めている天井を見てそう判断する。

(やむを得ん)

試合を観ている者の意識はこのオーバーアタックに向くはずだ。希望的な願望を脳裏によぎらせながら、アーティはCADを使わず一瞬で自己加速術式のキャストを終え、その次の瞬間には廃ビルの窓を

突き破り脱出を果たしていた。

4階の高さから肉体的な受け身のみで着地を果たしたアーティは、自分が脱出したビルの惨状を目の当たりにし、呆然としていた。いくら軍用の防護服を身に着けていたとしても、これでは気休めにもなるまい。最悪の事態が頭をよぎる。

そしてアーティは思い出す。この九校戦に森崎が懸けていた思いを。山中がどれだけこの種目のためにこの短期間で研鑽を重ね力量を上げたかを。そして、自分が雫と交わした約束を。

自分の背負う大役から考えればその手段に過ぎない高校生としての生活。その一部に過ぎぬ一つの行事だが、それをそれだけで済ませられるほど、アーティは自分の人生に達観していない。片時も責務を忘れたことはないが、全力でこの日常を謳歌していた。それこそが両親の心からの願いだと心のどこかで理解していたのかもしれない。

そんなアーティにとって。

この理不尽は。

それも、この大会の裏で蠢く悪意の存在の片鱗を知るアーティには。

地獄の業火の如き怒りを引き出すに足る出来事だった。

「——っ!!!」

怒りに身を震わせるアーティの周囲の温度がみるみるうちに上昇していく。アーティが無意識の内に自分にかける情報強化によりアーティ自身への加熱は阻害されていたが、文字通り地獄の灼熱と化した大気の中で意識を保ち続けられるはずもなく、アーティの意識は泡沫のごとく弾けとんだ。

昼寝を終えて競技エリアに戻った達也は、会場が動揺に包まれているのを感じ取った。

パニック一歩手前の空気が各校のテントを覆っている。その中心は、騒動の渦中にある第一高校のテントだった。

「お兄様！」

テントに入った達也に、深雪が真っ先に駆け寄ってきた。その奥では雫が花音に介抱されている。

「まさか…モノリス・コードで事故か？」

先程から感じていた会場の同様の失神した雫。その光景から立てられる仮説は一つしかない。

「はい……………あれは…事故、といえますか…」

そう言い淀む深雪の頬は明らかに怒りで紅潮している。

「単なる事故とは考えにくいけれども、今は確信的な事は言うことができないわ。今言えるのは、一高チームが開始直後に破城槌を受けたということだけ」

上級生らしく説明を引き継いだ真由美の顔は、深雪よりいくらか落ち着いて見える。いつもの振る舞いからどうにも誤解してしまう節があるが、やはりこの人物はさすが生徒会長を務めるだけのことはある。そんな場違いの感心を覚えながら、しかし達也はそれをおくびにも出さずに淡々と言葉を返す。

「怪我の程度は？」

「……………それが」

言いにくそうに目を伏せた真由美に達也は最悪の事態を想像する。だが、それを否定する言葉は目の前の真由美ではなく摩利からもたらされた。

「命に別条はない。だが重症だ。なにせ瓦礫の下敷きになったのだから。山中と森崎は全身骨折で魔法治療でも全治2週間、3日間は絶対安静だ」

「……………アーティは？」

摩利の言葉は十分に重大なものだったが、それでも真由美が言い淀むほどのものではない。だが、その理由に摩利が除外した人物の名にあると踏んだ達也は続けて問いを投げる。

「アイツは……魔法を暴走させてな。気持ちちは分かる。真由美は立場上迂闊なことは言えんが、これは明確なルール違反だ。だがその暴走具合が凄まじくてな。エリア一帯を、立会人の対抗魔法をも退けながら加熱し続けた。人間の体はあれほどの高温に耐えられるようにはできていない。救出された瞬間はかなり危ない状態だった」

言いにくそうにしながらも気丈に為された摩利の説明は、真由美に言い淀ませるだけの内容と言えた。自分が倒れるほどの魔法の暴走。これは極めて高い事象干渉力を示すが、同時に魔法制御の拙さをも示す。口ぶりからしてある程度は回復したのだろうが、救出されたときは本当に危険な状態だったのだろう、その時のショックがテント中にいまだに残っているのを達也は感じ取った。

九校戦編X

同日。新人戦ミラージ・バットはまたもほのかとスバルのワンツーフイニツシュという華々しい結果に終わった。しかし、それへの歓喜はこれまでのものと比べると少し控えめなものだった。快拳に感覚が慣れたからではもちろんない。その日起きたあまりに痛々しい惨事に、思い切り喜ぶことも憚られたのだ。

特に、出場種目2種目優勝という快拳を果たしたほのかは、優勝を決めた直後はスバルと喜びを分かち合ったものの、それからはずっと暗い顔をしていた。クラスメイトの森崎とアーティが倒れ、そのことに親友が心を痛めている。心優しいほのかにとって、この状況はとても自分のことを喜べる状況ではなかった

「雫」

やっぱりここにいたんだ、と呟きながら、アーティの眠るベッドの横に座る雫の方へ歩み寄る。

「ほのか」

親友の来訪に顔を上げる雫の目は赤く泣き腫らしている。

「ミラージ・バット優勝、おめでとう」

「ありがとう」

そんな状態でも雫の口から紡がれた祝勝の言葉は穏やかで、親友の快拳を心から嬉しく、誇らしく思っていることが伝わってくる。ほのかには、そんな雫の気丈さが返って痛々しかった。

ほのかは何も言わず、部屋の隅から椅子を持ってくると、アーティのベッドの横に座る雫の隣に椅子を置き、静かに腰を下ろす。

「ほのか……」

「私はもう競技はないから」

そう短く返すと、ほのかは雫の頭をそつと静かに撫でる。ほのかはミラージ・バットの疲れから、雫は今日一日の泣き疲れから、いつし

か2人揃ってアーティのベッドに突っ伏して眠ってしまったのであった。

「今日はご苦労さま。期待以上の戦果を上げてくれて感謝しています」

呼び出しを受け本部に向いた達也を迎えたのは、真由美の些か形式張った労いの言葉だった。

「いえ。選手が頑張ってくれましたので」

その賛辞にニコリともせず、達也は返す。真由美の横に控える上級生の面々、その能面のような表情に、おもしろい話ではないようだとい内心ため息をつきながら続きを待つ。

「もちろん光井さんも里美さんも他のみんなもそれぞれに頑張ってくれた結果です。でも、担当した種目で事実上の無敗。これはやはり達也くん、貴方の貢献が大きいと言うのは、ここにいる全員が共有している事実よ」

「……ありがとうございます」

なおも続ける真由美の言葉に、少し間を置いて控えめに頭を下げた。そして視線を合わせぬまま、次に控える本題を待つ。だが真由美もなかなか本題に入ろうとしない。怪訝に持った達也が目を上げると、真由美が克人を目で抑えていた。真由美が言いづらいことを克人が変わりに切り出そうとしたが、それを真由美に止められた形だ。

何をそんなに言い出しにくいことがあるのかと一層達也は疑問を大きくするが、そこで真由美がようやく口を開いた。

「達也くん、貴方のおかげで新人戦のポイントは十分確保できました。このままモノリス・コードを棄権して、三高が2位以上にならないければ新人戦も当校が優勝。2位以上になつたとしても、本戦の得点差から、当校の総合優勝は揺るがないでしょう」

真由美の言葉に、達也はますます疑問を募らせる。これは朗報ではない。思わぬ落とし穴でもあったのだろうか、達也は悪い想像をしそうになるが、

「でも、三高のプリンスと、それから達也くんなら知っているかもしれないけれど、カーディナル・ジョージ。この2人が組む三高が新人戦レベルでトーナメントを取りこぼすことはないわ。それでも、ここまですてきたら新人戦も優勝したいと思うの」

続く真由美の言葉に達也はようやく真由美たちの思惑を理解した。

「だから達也くん……工藤くんたちの代わりに、モノリス・コードに出てはもらえませんか？」

「……2つほど、お聞きしてもよろしいでしょうか」

「ええ、何かしら」

想定した申し出に、分かっていることではあるが、一応はつきりさせておこうと確認を取る。

「怪我でプレーが続行不可能であっても、選手の交代は認められていないはずです」

「事情を鑑みて、特例として認められました」

明らかな四高のルール違反に加え、フライングを阻止できなかったこと、それから崩れやすい廃ビル内にスタート地点を設定したことによる被害拡大。何らかの特例を認めずして、モノリス・コードの続行は不可能だっただろう。だが、事情を理解しても、受け入れるかどうかというのはまた話が違う。

「なぜ自分が選ばれたのでしょうか」

これは質問の形をとってはいるが、これは遠回しの拒絶である。

真由美もこれは予想済みなのだろう、だからこそなかなか言い出せず、今もこうして苦笑いを浮かべている。

「達也くんが最も代役にふさわしいと思ったからだけど」

「実技の成績はともかく、実戦の腕なら君は多分、残ったメンバーの中ではナンバーワンだからな」

「モノリス・コードは実戦ではなく、肉体的な攻撃を禁じた魔法競技です」

「……魔法のみの戦闘力でも、君は十分ずば抜けていると思うのだがね」

説得に加勢した摩利だったが、達也の的確な反論に遭い達也を「陥とす」には至らない。

「自分は選手ではありません。代役ならば、1種目にしか出場していない選手を立てるのがふさわしいかと。一科生のプライドはこの際脇においておくにしても、代わりの選手を無視してスタッフから代役を選ぶのは後々しこりを残すかと思われませんが」

達也の畳み掛けるようなこの言葉に、真由美たちから反論はない。ならばこの話は終わりだと、明確な辞退を口にしようと思った、その時。

「甘えるな、司波」

克人の重量感のある声が響いた。

「お前は既に、チームの一員だ。1年生200名から選ばれた、21人のうちの一人。そのお前を、チームリーダーである七草が代役に選んだ。チームの一員である以上、メンバーとしての務めを果たせ」

「しかし……」

「メンバーである以上、リーダーの判断に逆らうことは許されない。その判断に問題があるならば、リーダーを補佐する我々が止める。我々以外のメンバーに、異議を唱えることは許されない。そう、誰であつてもだ」

なおも反論しようとした達也だが、今後このことではいかなるしこりが残ろうとも、それらの責を全て自分が負うと言外に言った克人の意図を理解し、言葉に詰まる。

「逃げるな、司波。例え補欠であろうとも、選ばれた以上、務めを果たせ」

逃げ道を全て塞がれた達也は、ここまで言われて、逃げるつもりもなくなっていた。

「分かりました。義務を果たします」

真由美と摩利の顔が安堵に弛む。克人はその達也の言葉に、しっかりと頷いてみせた。

「それで、俺以外のメンバーは誰なんでしょうか」

やると決まれば必要なことの確認だ。達也はチームメイトについての問いを克人に投げる。

「お前が決めろ」

「はっ……………」

だが、この思いがけない言葉に達也も絶句してしまった。

「残り2名の人選は、お前に任せる。今ここで決められないのなら、1時間後にここに来てくれ」

同じ内容を言葉を変えて言った克人の言葉に、達也は相変わらずだと感じた。

ブランシユのアジト突入、何者かによって既に殲滅された後だったが、あの時も下級生に決定権を委ねてまるで気にする様子がない。これが責任を下に押し付けるための方便ならば姑息なものだが、克人は責任は自分が持つと言うのだ。この度量は高校生とは到底考えられないものだ。十師族に生まれたことを差し引いても、この人物は天性の人の上に立つ度量を持ち合わせていると言える。

「……………いえ、選ぶだけなら時間を頂く必要はありませんが。相手が了承するかどうか」

「説得には我々も立ち会おう」

少し間を空けた達也が放った言葉に、間を置かず克人が応じる。つまり、達也に白羽の矢を立てられた者は拒否権を持たないということだ。

「誰でもいいんですか？チームメンバー以外から選んでも？」

思いの外強引な克人のやり方に愉快さを覚えてしまった達也は、悪ノリとも言える言葉を口にする。

「えっ？それはちよつと……………」

「かまわん。どうせ例外に例外を積み重ねているのだ。あと一つや二つ、例外が増えても今更だ」

「十文字くん……………」

真由美が呆れ顔で軽い非難の目を向けたが、克人の表情は揺るがな

い。

「では、1―Eの吉田幹比古と同じく1―Eの西城レオンハルトを」

「おいっ、司波!？」

チームはおろか一科生ですらない達也の指名に、服部が口を挟もうとするが、鈴音に手で制止される。

「いいだろう。中条」

「は、はいっ!」

克人の声に過剰な反応を見せたあずさにも、克人はまるで気にした様子がない。

「その二人をここに呼んでくれ。たしかその2人は、応援メンバーとは別口で、このホテルに泊まっていたはずだ」

豪放で大胆な克人だが、このような細部にまで意識を向けて把握していた克人に感心する達也だったが、その達也の意識を、いやその部屋にいた者全ての意識を遮ったのは、思いもよらぬ人物の登場だった。

「ちよつと待って下さい」

「お、お前はっ!？」

「あー君!?!なぜここに?」

部屋のドアを開けドアノブにより掛かるようにして立つアーティの登場に、摩利と真由美が真っ先に反応する。

「七草会長…そのあだ名はやめてくださいと何度も…」

そう言いかけてバランスを崩したアーティを、幹比古とレオを呼ぶためにドアの近くまで来ていたあずさが慌てて支える。

「すみません…中条先輩…」

長身のアーティを小柄なあずさが支える形になり周囲の心配は一瞬あずさに向いたが、アーティは重心をあずさにかけることなく体勢を立て直し、克人たちのいる方へ向き直る。

達也への打診の時には能面のような顔をしていた服部も、今はかなり心配そうな面持ちでアーティを見つめている。

「待て、というのはどういうことだ工藤」

「モノリス・コードのメンバーの入れ替えを待つて頂きたいというこ

とです。森崎と山中は動けません、オレはやれます」

「そんな、だって工藤くん、あなたは」

克人の言葉に威勢のいい言葉を返すアーティだが、その顔色は悪く額には汗も浮かんでいる。そんな様子に真由美が心配そうに口を挟もうとするが、克人に手で制止される。

「お前は自分の魔法の暴走で重症の熱中症に陥った。どうやってここにたどり着いたのかは知らないが、本来お前はベッドの上で絶対安静だ。自分の状態をわかっているのか？」

「回復したから、ここに来られたんです。明日には試合ができるくらいには回復しています」

克人の言葉に答えるアーティだったが、それが虚勢であることは誰の目にも明らかだ。

「ダメだな。本調子に戻らずに無理をして、また魔法が暴走でもすれば、最悪の場合命に関わる。チームリーダーを補佐する者として、お前の出場を認めるわけにはいかない」

そんな虚勢に対して放たれた、明確な却下の言葉。この克人の言葉は隣で聞く真由美ですらも取り付く島がないと感じるほどの、明確な意思を含んだ言葉だった。真由美や摩利とは違うカリスマを持つ克人の言葉に、あずさも事態は決したと確信し、2人を呼びに部屋を辞そうとした。その時。

「……です」

「何？」

「イヤです!!!」

アーティから放たれたのは、拒絶の言葉。十文字克人という絶対的なカリスマへの反抗の言葉に、控える上級生たちも目を丸くする。

「達也さんも、吉田も西城も、オレは知っています。彼等に任せるのが嫌だということじゃない。でも、森崎や山中と一緒にこの競技のために研鑽を重ねてきたのはこのオレです。特に森崎の情熱は凄まじかった。アイツらの想いを、悲願を果たせるのは、オレだけです。達也さんにも、幹比古にもレオにも、アイツらの代わりは務まらない……せめてオレだけでも出ないといけないんです」

アーティが一科生と二科生という区分に対してこだわりを持っていないことを知る者はこの場に多い。何よりそれを入学前に知り摩利に風紀委員として推薦した経緯のある克人は、アーティの言葉が真実であることを理解している。だが、克人の口から紡がれたのは、却下の言葉だった。

「チームメイトの想い、か。だがそれでは前途あるお前が魔法師生命を賭ける理由には薄すぎる」

「おい、十文字」

今度は厳格すぎる克人の言葉に摩利が口を挟もうとするが、またも克人に手で制止される。

「……………アイツらのためっていうのは嘘じゃありません。でも本当の理由は、オレのためなんです。敗者としての立場を受け入れつつあつたオレが、今回のモノリスでは諦めないって決めたんです。あるいは、ずっと目が覚めずに、目が覚めたら達也さんたちが代役を務めてくれたって聞いたなら、スツキリしたかもしれません。でも、目が覚めてしまったんです。身体は動くんです。なのに彼等に任せたら、諦めじゃないですか。逃げじゃないですか。ここでそれを受け入れたらオレはこれから先ずっと困難な状況を諦め続けることになる」

そうなれば、自分が背負う使命も果たせずに、どこかで諦める。その確信が、今のアーティを突き動かしていた。

「……………司波」

アーティの言葉には応えず、克人は達也の方へ向き直ると、

「朝三暮四ですまないが、補充要員はお前とあと一人だ。吉田と西城、どちらか一人にしてくれ」

「十文字くん！」

そう静かに告げた。即座に真由美が食い下がるが、

「七草。男には、逃げてはならない場面がある。工藤にとって、それは今だ。我々にできることは、一刻も早く工藤を病室に連れ戻して少しでも回復させることだけだ」

「十文字くん……………」

威圧する言い方ではないが、はつきりと譲るつもりのない声音で告

げられ、真由美も諦めの表情を浮かべた。

「……わかりました。チームリーダーとして、工藤くんの出場を認めます。実行委員会の方には、思いのほか早く回復したと伝えておきます。達也くん、もうひとりのメンバーは決まった？」

「はい。吉田に任せようと思います」

達也の返答を受け、今度こそとあずさが幹比古を呼びに行った。

あずさに呼ばれ目を白黒させながら連行された幹比古と、達也に支えられて病室に戻ってきたアーティを待っていたのは、今なお眠ったままのほのかと雫だった。

「アーティ、この2人を置いてきたのか」

ベッドにアーティを降ろしながらそう問う達也の声には少なからず批判の色がある。

「起こしたら絶対、止められますからね」

そう苦笑いしながらベッドに腰掛けると、力尽きたようにベッドに倒れ込む。その衝撃で、ベッドに突っ伏して寝ていた2人が目を覚ま

す。

「……？」

「わっ、達也さんーどうしてここに!？」
まだほとんど目を開けられていない雫と対象的に達也の姿を目にして狼狽するほのか。隣でほのかが素っ頓狂な声を上げたからか、雫もハッとしたように意識を覚醒させる。

「——!」

ベッドの上で横になつてはいるが、そんな雫とほのかを微笑みながら見ているアーティに気付き、雫はその瞳にみるみる涙を溜める。

「心配懸けて、ごめ——」

そんな雫にかけようとしたアーティの謝罪の言葉は、雫によって中断させられた。

「——っ！」

「……………心配したんだから」

ひしと抱きつき、息を呑んで言葉を打ち切ったアーティの胸に額を押し付けながら、雫は怒っているような、それでいて少し嬉しいような声で小さく、されどもここにいる全員が聞き取れるような声で囁く。

「はわわわわ……………雫、大胆……………」

目の前でアーティに抱きついた親友を前にして、ほのかは顔を真っ赤にしながら手をアワアワとさせている。幹比古も顔を赤くして気まずそうに目をそらしている。その中で唯一平気な顔をしている達也が、雫に半ば面白がるような色を含んだ声音で告げる。

「雫。そのくらいにしてやれ。また体温が上がったら明日までに回復できない」

達也の生暖かい視線の先ではアーティが既に耳まで真っ赤にして目を回している。

「……………明日？」

雫は達也の言葉にゆっくりとアーティを再びベッドに寝かせながら達也の言葉に紛れていた不可解な言葉に疑問を投げる。

「ああ。アーティのたつての希望だな。明日のモノリスの試合、ここにいる幹比古と一緒に、アーティも出場することになった」
「!？」

「そんな、無茶ですよ」

達也の言葉に雫もほのかも顔色を変える。既に安らかな寝息を立てるアーティと達也を交互に見ながら、達也に先を促すのは雫。

「もちろん、無茶だ。七草会長も十文字会頭も、そう言って止めた。だが、ここで諦めるわけにはいかないと。そう言って聞かなかつたんだ」

「そんな……………それでも、無茶ですよ。昨日の今日なのに……………」
「ほのか」

ほのかの反応ももつともなものだ。アーティの無茶は医者がふんじばってでも止めるほどのものだ。故に、そのほのかを雫が遮ったの

は達也にとって意外なことだった。

「アーティが決めたのなら、わたしたちにできるのは信じて応援することだけ」

そう言って眠るアーティの顔を見つめる親友の横顔に、ほのかは何も言えなくなってしまうた。

「幹比古。作戦会議は明日にしよう。少しでもアーティを回復させるために、ここで作戦会議を行う。朝の7時でいいだろう。それまで幹比古も体力を養っておいてくれ」

達也は未だ気まずそうに顔を背けている幹比古にそう告げると、これ以上この場においてたまるかと言わんばかりにそそくさとアーティの病室を後にした。

「…………じゃあ、光井さんも北山さんも、無理しないでね」

幹比古は気恥ずかしい気持ちを消せないままほのかと雫に別れを告げると、彼もすぐにアーティの病室から去っていった。

「えっと…………」

留まったものか出ていったものか決めあぐねているほのかの手を、雫がそつと握る。

「ほのかさえ良ければ、一緒にいてほしい」

そつと紡がれた雫の言葉に、ほのかは黙って頷くと、2人はアーティの病室でその夜を過ごしたのであった。

九校戦編 XI

九校戦日程8日目、新人戦5日目。この日は、困惑の空気とともに幕を開けた。

前日の新人戦モノリス・コードで、前例のない悪質なルール違反があり、そのために負傷・試合続行不能となった第一高校チームは、通常ならば残り2試合が不戦敗になるところを、大会本部の裁定により一部メンバーを入れ替えて試合の順延が認められた。このような事態は前例がなく、不満が出なかったわけではなかったが、モノリス・コード自体を中止したりモノリス・コードの得点を計上しないといった措置を取らないための補填とも言えるので、特に反対意見が具申されるようなことはなかった。

ではなぜ困惑の空気に包まれていたかと言うと。

第一高校が用意した代替チームが、昨日の試合から回復した一人を除き元々登録されていた選手ではなかったからである。一人はエンジニアスタッフ、そしてもうひとりチームの一員ですらなく、応援に来ていた生徒だったと言う。このことに、各校は困惑したのである。

ある高校は一高の人材の層の薄さに同情し、そしてありがたい展開だと言った。ある高校は一高から完全にマークを外した。ある高校は達也が担当試合を全てショウリニミチビイタエンジニアだと見抜き警戒している。だが、ひとときわこのチームを警戒する二人組がいた。

「出てきたね、彼が」

「そうだな。選手として出て来るとは思わなかったが」

「2丁拳銃に加えて、右腕にブレスレット……同時に3つのデバイスなんて、使いこなせるのかな？」

「アイツのやることだ。ハツタリじゃないだろう。回復した選手もバ

トル・ボードで飛行魔法を使ったと聞く。残る選手もなにか隠し玉があるを見て間違いないな」

「工藤選手だね。まともに試合をした五高との試合では、彼の立案かはわからないけど絡め手で危なげなく勝利を収めている。隠し玉には警戒したいところだね」

「ああ。だが工藤選手は昨日の時点では相当重篤な状態だったと聞く。万全な状態じゃないならば、アイツも見ているだけとはいかないはずだ。複数デバイスの同時操作、その狙いを見せてもらおうか」

第一高校と第八高校の試合。その試合開始を、第三高校一条将輝と吉祥寺真紅郎が、獲物定めをする蛇のような観察眼を一高チームに向けていた。

「森林ステージか……八高相手にはきついな」

「すみません、達也さん。結局作戦会議、満足にできなくて」

「問題ない。俺と幹比古はある程度煮詰めている。今回任せるのは防御だから、相手のオフエンスを止めてくれればそれでいい」

早朝から予定していた作戦会議であったが、結局アーティの体調の回復が遅れアーティはほとんど会議に参加できていない。ほとんどぶっつけ本番状態であった。

「……任せてください」

まだ少し足元が頼りないが、ここに至って幹比古も達也も大丈夫か、とは問わない。どのみち退路はないのだ。とはいえ、野外実習に力を入れる八高にとって森林ステージは庭のようなものであり、チームの連携に不安のある状態で迎え撃つに些か以上に不安があることは否めない。

不安を残す一高サイドに対して、得意ステージを引き意気軒昂の八高サイド。しかし開始のブザーはそんな彼等を待つことなく、今、試合開始を告げた。

森林ステージでの彼我のモノリスの距離は800m。会敵を警戒しつつ走り抜けると慣れば、10分はかかろうかという距離だが、戦端は八高サイドのモノリス付近で開かれた。八高デイフェンダーの前に躍り出た達也の姿が、観客用モニターに映し出される。あまりに早い敵襲に八高デイフェンダーも粟を食っていたが、すぐに身構えて対応しようとする。

「速い……！」

「自己加速術式か？」

その様子を見ていた将輝と真紅郎は達也の身のこなしに舌を巻いていた。

「いや、移動に魔法を使っている様子はないけど……あつ！」

かなりの速度に魔法の行使を疑う将輝だったが、真紅郎によって否定される。その会話の間にも、達也と八高デイフェンダーの駆け引きは目まぐるしく進んでいく。

達也は術式グラム・デモリッション解体で相手の魔法を無効化しつつ、振動系魔法を用いて相手の動きを止めながら、ついにモノリスを開くことに成功した。だが未だ沈黙せぬデイフェンダーに、達也はコードの打ち込みを断念し撤退せざるを得なかった。

達也の攻撃の合間に、八高サイドのオフエンズの一人も、一高サイドのモノリスへと肉薄していた。モノリスの前を陣取るアーティの目の前に、八高のオフエンズが躍り出る。どうやら、幹比古の精霊魔法と交戦中だったようだ。一時的に、遠隔とはいえ1対2をやったのけたチームメイトに心の中で礼を言っただけから、アーティは左手に握る情報端末型CADを短く操作する。使用する魔法は偏倚解放。アーティの得意魔法であり、ショートカットキーで設定されているために操作にかかる時間は特化型CADを操作するのほとんど遜色ない。

幹比古の精霊から辛くも逃れたばかりのオフエンズは、自分がたまにたま出た場所が一高のモノリスの前であることに驚愕し息を呑むが、

即座に自分が今攻撃に曝されようとしている事実を理解し、自分の体に移動魔法をキャストする。アーティの偏倚解放は、魔法の発動から実際に圧縮空気塊が攻撃対象に直撃するまでに若干のタイムラグがある。八高オフェンスが見せた素晴らしい反応により、偏倚解放はギリギリ回避されるかと思われたが、

「ガフツ！」

猛スピードで回避のため横に跳んだオフェンスが、見えない壁にぶつかる。見えぬ壁に受け身も取らずに直撃した衝撃にふらついたオフェンスは、その直後、壁に阻まれたことによって回避しきれなかった圧縮空気による衝撃波を受け、意識を失った。

「今のは!？」

「十文字先輩の『フアランクス』!？」

八高オフェンスに対して見せた、魔法障壁。それは、十文字家の十番、フアランクスに酷似して見えた。だが、それは背後で試合を眺める摩利によって否定される。

「五十里。あれは『フアランクス』じゃない。単なる魔法障壁だ」

そう苦笑いしながらも、摩利も内心舌を巻いていた。魔法障壁の強度が、情報強化を施している魔法師の、しかも移動魔法を行使した魔法師の移動をあそこまで完璧に妨げるほど高いことは稀だ。

十文字家はこと魔法障壁に対して高い適性を持っているがゆえに彼等の繰り出す魔法障壁は絶対の壁となる。凡百の魔法師が魔法障壁を作っても、それが意味のある壁になることは稀なのだ。それを鑑みれば、あそこまで完璧な障壁を十文字の魔法と同じものだと勘違いしたのも頷ける。

（魔法の暴走から干渉力が高いことは分かっていたが、よもや「鉄壁」を再現するほどとは）

アーティの回復具合を心配していた摩利だったが、アーティが今見せた干渉強度と、異系統の魔法のマルチ・キャストを見て、ひとまず

十分回復していると見ていいだろうと胸を撫で下ろした。

アーティが敵オフENSEを無力化している頃、その間幹比古は「木霊迷路」で敵遊撃をロストさせ続け、達也も無系統魔法「共鳴」を用いて敵ディフェンスを無効化、開いていたモノリスのコードを入力、送信し、一高対八高の試合は一高の勝利に終わった。

「勝った！勝った！」

「すごいすごいすごい、完勝よ、完勝！」

達也たちの勝利に観客席は沸きに沸いていた。

「……アーティ、調子戻ってるみたいだね」

「……ううん。まだ本調子じゃないと思う。あの『偏倚解放』、速度を優先して効果範囲を小さめに設定してた。いつものアーティならあの八高選手の反応でも避けられなかったけど、あのときは速度優先にした『偏倚解放』でも明らかに間に合わないって分かったから、魔力障壁を急いで作ったんだと思う」

ほのかの言葉にも、雫の表情は明るくない。

「そっか。最初からあのコンビネーションで倒すくらいなら、『偏倚解放』の威力範囲を大きくすればいいんだもんね。2段階への攻撃になったっていうのは、アーティ自身自分の発動速度を読み違えたってことだもんね」

「うん」

計算されたようなコンビネーション攻撃に、摩利のように安心した者もいたが、その実雫の言葉が真実であり、これを見抜いている者は雫だけではなかった。

「ジョージ、どう思う」

「司波選手のこと？」

「それは無系統魔法と振動系魔法のCADをの使い分けで説明がついただろう」

将輝と真紅郎は既に達也の攻撃に対してリアルタイムで分析を終えている。今の真紅郎の返しは、その分析の再開ではないのかという確認だ。

「じゃあ、工藤選手のことだね。彼はまだ本調子からは程遠いんじゃないかな」

「やはりそう思うか」

「うん。あの偏倚解放、もともと魔法障壁と組み合わせるつもりで撃っていないはずだ。避けさせないように、速度重視で効果範囲を小さめに設定したけど、思ったよりも発動に時間がかかってしまって避けられそうだったから慌てて魔法障壁を出した、って感じだと思う」
「それで魔法障壁を間に合わせたことも、魔法障壁自体の強度も驚くべきことだが、彼が本調子でないことは確かだろうな」

「そうだね。吉田選手はよく分からなかったけど、吉田家といえばあの古式魔法の吉田家なんじゃないかな」

「そうか、古式魔法か。それにしても、あの工藤とかいう選手」

「工藤選手、やけにこだわるね」

「いや。偏倚解放は俺も得意とする魔法だ。偶然な気がしなくてな」
「顔もどことなく似てるしね。髪とか顎の形とか。もしかしたら、生き別れの兄弟とか？」

真紅郎の冗談に、将輝も苦笑いを返しながら否定する。

「ウチは茜と瑠璃だけだ。親父がああなのはジョージも知ってるだろう？」

「ははは。分かってるよ。でも、戦っている彼を見て思った。彼はどこか将輝に似ている。将輝もそう思ったから、彼のことが気になってるんでしょ？」

その真紅郎の言葉に、将輝は返答を返すことはなかった。ただ、少しおぼつかない足取りで引き上げていくアーティの後ろ姿の映像をじっと眺めていた。

「アーティ、調子はどうか？」

30分後とかなりハードスケジュールに組まれた次の試合に備え選手控室で休んでいるアーティに、達也が声をかける。達也の後ろでは、深雪が楽しそうに達也の肩を揉んでいる。

「ええ、大丈夫です。この調子なら午後にはほぼ本調子でしょう」

達也には虚勢は通じないと分かっている、正直な見込みを告げるアーティの隣には、甲斐甲斐しく汗を拭いたりスポーツドリンクをついでいる雫の姿がある。

チームに選ばれてはいるものの、今この瞬間、幹比古は自分がひどく場違いな気がして、今すぐにでも出ていきたい衝動に駆られている。

そんな幹比古にとっては救世主にも等しい闖入者が現れる。

それは、真由美とあずさだった。前触れ無く入ってきた2人は達也と深雪、アーティと雫の姿を見るとたつぷり3秒固まった後、心から同情する視線を幹比古に送った。

「もう何も言わないわ」

そう呆れ声で切り出した真由美の目は、達也とアーティへの非難の色を雄弁に含んでいる。

「次のステージが市街地に決まったので、伝えに来たの」

真由美の言葉に、達也が絶句する。ちらりとアーティの顔を見遣るが、アーティの表情に変化はなかった。

「……………昨日あんな事があったばかりで、ですか？」

「ステージの選定はランダムなもの。そんなことは考慮されないんでしょうね」

真由美の表情がツンとしているのは懸念が消えたからか。たしかに今のアーティを見て心配し続ける気にはならない。これはこれでアーティなりの周りへの配慮なのかもしれないと、今なお楽しそうに肩を揉む深雪を止めようとしてもしない自分を棚に上げ、達也はアーティへの評価を改めていた。

市街地ステージに設定された一高対二高の試合は、五階建てのビルの三階に一高側のスタート位置を設定するという、ともすれば昨日の事故は運営の過失ではないと誇張するかのような偶然に苦笑を漏らしながらも、昨日のようなアクシデントは起きずに開始を告げた。オフエンスの達也が相手のオフエンスと鉢合わせになり撃破したことで、消耗を避けまたもディフェンスに回ったアーティは今回は出番がなく、気を張り詰めて見張りをしていたとはいえこの間はかなり体力を回復した。

一方で、達也が2人を撃破したことでモノリス・コードでの躍進が達也の功績によるところが大きいう印象が残り、後々のしこりになる。試合終了後、かなり調子が戻ったと肩を回しながら朗らかに笑うアーティの様子にホツとしつつも、達也は密かにそんな懸念を抱き内心ため息をついていたのであった。

この結果により、決勝トーナメントの組み合わせが決定された。準決勝第1試合、第三高校対第八高校。第2試合、第一高校第九高校。

決勝トーナメントは、正午から開始予定。

アーティは最後の休憩だと、昼食もそこそこに仮眠を取りに行ってしまった。雫とほのかもついていったので寝過ぎすことはないだろうとそちらは彼女たちに任せ、達也と幹比古は三高の手の内を見るため、観客席へと向かった。

九校戦編Ⅻ

第一高校と第九高校の準決勝の試合は溪谷ステージで行われた。

溪谷、といっても本当に川を用いたのでは上流と下流に有利不利が生じるので、実際には「く」の字に湾曲した湖である。

この試合は、幹比古の独壇場であった。

ステージにふんだんに存在する水を気化させ、霧にしてステージを埋め尽くしたのだ。

一寸先も見通せないほどの濃霧が九高選手を覆い、薄い霧が一高選手を覆う。

九高側もこの結界の完成を座視していたわけではないが、幹比古の「結界」は、空気中の水分量を飽和させて霧を発生させる魔法ではなく、飽和水蒸気量に関係なく空気中の水蒸気を凝結させる魔法であるが故に、気温を上げ霧を蒸発させようとしても霧は消えないどころか、湖からの水の蒸発量を増やしますます霧のもとになる水蒸気量を増やすだけの結果に終わった。

ほんの少し前すら見通せない霧は、霧自体に何の衰弱効果も幻惑効果もなくとも、九高選手の足を止めるのには十分だ。そして、達也は幹比古の匙加減によって達也の周囲は霧が薄い上に、観客は誰も達也を見ることができないという状況のおかげで、エレメンタル・サイト精霊の眼を何の心配なく使うことができる。達也は相手に一切勘付かれることなく相手デイフェンダーの背後に回り、「鍵」を九高モノリスに撃ち込む。モノリスの蓋が外れた音にデイフェンダーは慌てて振り返ったが、達也は悠々と離脱する。

あとは霧と「視覚同調」を使用している幹比古がコードを自陣で入力し、一切の戦闘なく準決勝の試合は幕引きとなった。

予選最終戦から引き続き出番無しとなったアーティはしかし不貞腐れるようなこともなく、むしろ体力を温存できたことを純粹に喜びながら、三位決定戦後に、二時間後に予定されている決勝戦に向けてと例によって仮眠を取りに行つた。

ほのかと雫に付き添われながら引き上げていくアーティの後ろ姿を見送り、達也は身につけたCAD用のホルスターを外しながら目の前でアーティの去つた方を見つめ続ける幹比古に話しかける。

「今の結界、見事なものだった。決勝のフィールドがまた渓谷になれば、全く同じ手とはいかないがステージ全域が幹比古の監視下に入るという点だけでも有用だ。消耗は問題ないか？」

「……………ああ、達也。僕は大丈夫だよ。達也には釈迦に説法だろうけど、古式魔法は魔法の継続使用に強いんだ」

視線を達也の方に戻しながら、幹比古は静かに答える。その言葉に強がりや虚勢はない。

「やはり、アーティの調子が気になるか？」

「……………うん」

先程からアーティの様子をしきりに気にしている幹比古の様子に、達也も言及する。チームメイトの状態を心配すること自体はいいことだが、これが試合中の懸念になっては悪影響を及ぼす。

「幸い、直近2試合は動く必要がなかった。しきりに仮眠をとっているし、次の決勝はほぼ本調子だろう」

達也の気休めとも取れる言葉に、しかし幹比古はそれを額面通り受け取り絶句している。

「昨日の今日で午後には本調子って……………おかしいと思わないの？」

「おかしい？何が？」

本気で幹比古の言葉の意味がわからないという顔をしている達也に、「僕もまだまだ修行が足りない」と幹比古は心の中で本気でそう思った。

「アーティ、起きて」

最終決戦に向けて仮眠をとっていたアーティは、雫の声と彼女の揺さぶりによって目を覚ました。どうやら仮眠のつもりが本格的に眠りについていたらようだ。

「……………」

ふわあと間の抜けたあくびをしながら、ゆっくりとあたりを見回す。雫の隣には彼女にそっと寄り添うほのかの姿。

「2人共、ありがとう」

1時間以上寄り添ってくれたクラスメイトに礼を言うと、スツと音もなく立ち上がる。

「調子は大丈夫なの？」

心配そうに聞いたのはほのかの声だ。

「うん。もうほとんど本調子だよ。達也さんと幹比古には楽をさせてもらったからね」

今度はオレが頑張らなくちゃ、と壁にかけていたブレザーに腕を通しながら気合を入れている。

「アーティ」

手際よくボタンを掛け部屋を後にしようとしたアーティに、後ろから雫が声をかける。

「しゃがんで」

「？」

雫の要請に応え、静かに振り向いて片膝を着く。雫は、そっと目を瞑ると、その額とアーティの額をそっと近づけ、くっつけた。

ほのかの息を呑む音が聞こえるが、雫もアーティも動かない。しかしそうしていたのも10秒足らずだった。

「信じてる」

額を離すと、そう一言だけ呟いて、くるりとほのかの方を振り向い

た。

頑張れ、ではなく、信じている、という言葉。アーティにはその言葉が、今は何よりも嬉しかった。

「勝ってくる」

アーティも雫に倣うようにくるりと踵を返すと、そう一言呟いて勢いよく駆けていった。

新人戦モノリス・コード決勝戦。

第一高校と第三高校の試合のステージは、草原ステージに決定された。「爆裂」の爆薬がないだけ渓谷や市街地よりはマシだが、それでも分の悪いステージである。

「来たか、アーティ」

その報せをまさに今受けていた達也と幹比古のもとに、アーティが到着した。かなりの速さで走って来たようだが、息一つ切らしていないところを見るに、本当にほぼ本調子らしい。

「草原ですか。できれば森林か岩場が良かったのですが。こればかりはどうにもなりませんね」

言葉の内容とは裏腹に、アーティの態度はあっけらかんとしている。どうにもまだ不安そうな表情を隠しきれない幹比古と比べると、このチームメイトは実践において相当成熟したメンタルの持ち主らしいと、達也は自分のことを棚に上げ感心していた。

「思ったよりも調子が戻ったので、言っていた通りプリンスはオレがマークします」

「ああ。俺がカーディナル・ジョージをマークする」

今回はオフエンス・遊撃・ディフェンスという役割分担ではなく、マークを行うということを事前にアーティの要望で取り決めていた。これはアーティのこだわりによるものだが、三高の一条将輝の魔

法力が卓越しており、これには確実にアーティを当てるほうが勝算が高いという側面もあり、この要望は異議なく採用された。万一アーティのコンデイションが整わなければ通常通りの役割分担か、一条将輝に戦力集中を行い撃破を最優先する作戦に切り替える予定だったのだが、アーティの状態が良かったことによりこれらは杞憂に終わった。

一高対三高の試合。

一高の予選第1試合でアーティが被っていたようなローブを今度はアーティ以外の選手が被って来ていることに、観客も、そして三高サイドも困惑していた。

予選第1試合で見せた戦術は初見だからこそ機能した面が大きく、しかも遮蔽物のないこの草原ステージではダメージは目視で判別できる。

「……………なんで僕だけ」

幹比古が恥ずかしそうにしながら不平を垂れたのは、そんな観客の反応が気恥ずかしかったからだろう。

「俺もアーティも『不可視の弾丸』インビジブル・ブリットを無効化する手段があるからな」

達也の返答には諦めろ、という言葉外の意味が込められている。幹比古もここに至ってこれ以上の抵抗は無駄と判断したのか、三高サイドをじつと見つめて試合開始に備えた。

新人戦モノリス・コード決勝戦、その火蓋が今、切って落とされた。

試合開始とともに、両陣営の間で砲撃戦が交わされている。魔法による遠距離砲撃。互いにゆっくりと距離を詰めながら、圧縮空気弾を放ち合う。その威力は掠めただけでも大きなダメージを免れないも

のであり、直撃すればいかに「クリムゾン・プリンス」とアーティであつても戦闘不能は免れない威力。それを、お互いに自分との相対位置前方5mに展開した「真空壁」エアボケットで吸収していた。奇しくも全く同じ攻撃方法と防御方法で繰り広げられる互角の砲撃戦に、大きく観客が沸いた。

「二条のプリンス……確かに規格外の手数だけど……」

一高テントから試合展開を見守る真由美は将輝が放つ圧縮空気弾の密度に絶句している。だが、それ以上に一高テントを覆う驚愕の霧囲気の正体は、

「だが、アーティも負けていない。それに、あの数の圧縮空気を吸収すれば『真空壁』エアボケットもあつという間に無効になる。相当の更新頻度だぞ、アレは」

摩利の分析によつて代弁された。

一条将輝が規格外であることはある程度想定済み。彼は佐渡侵攻事件で名を馳せた十師族の魔法師であり、その名声は既に世界に轟いている。だが、彼にどこか似た無名の高校生が、その「クリムゾン・プリンス」と真正面から互角の戦いを繰り広げていることに、誰もが驚愕していた。

将輝の相手は「術式解体」グラム・デモリッションを使用できる達也がすると思ひ込んでいた真紅郎は、思わぬ伏兵の存在に臍を噛む。

「これまで動きが少なかったのは体力回復のためか……バトル・ボードでは卓越した魔法力を見せていた……なのに司波選手に気を取られて彼のことを意識から外していた……っ！」

戦術に絶対の自信を持つ真紅郎にとつて、全く未知のものならともかく、見えていた伏兵を見落としたという事実は大きく心を付さぶられるものだった。だがこういう気の迷いが番狂わせを生むものか、自覚し、迷いを振り切る。

「打ち合わせ通り、僕もいくよ」

将輝をマークする選手が変わろうとも、自分のやることは変わらない。真紅郎はそう自分に言い聞かせると、将輝の背後を迂回して一高

陣地へと駆け出した。

じりじりと歩きながら砲撃戦を交わすアーティと将輝の攻防が動いたのは、真紅郎が駆け出したのをアーティが遠目に確認した瞬間だった。アーティは、このまま将輝と砲撃戦をゆっくり繰り広げることを選ばなかった。アーティは真紅郎の疾走を見るやいなや自分も猛然と将輝に向かって駆け出した。

魔法を使つての高速移動ではないが、全力疾走にほぼ近い速度での接近開始に、またも会場がひとときわ沸く。そしてこれは、将輝とアーティの間で保たれていた均衡を破ることをも意味した。

ゆつくりと歩き、近似すれば静止状態に近い将輝に対して、アーティは有意に接近状態にある。このことは、互いに飛来する圧縮空気弾を「真空壁」エアポケットで受け止める頻度に有意な差が生じることを意味する。「真空壁」エアポケットが圧縮空気弾を受ける頻度が上がれば、当然「真空壁」エアポケットの必要な更新頻度は高くなる。

その結果として。

アーティの側は「真空壁」エアポケットに回す演算規模が多くなつたがゆえに圧縮空気弾を撃ち出す頻度が下がり、更にその結果として将輝が生まれ余裕でさらに圧縮空気弾を多く撃ち出すという、アーティにとっては悪循環が生まれていた。

「ジョージが動いたことに焦つたんだろうが……距離を詰めたのは失敗だったな」

なおも疾走を続けみるうちに彼我の攻撃頻度の差が開いていく状況に、将輝は勝利を確信していた。自分と同じ手段で対抗し、それで自分と真正面から拮抗してみせたこの目の前の選手には内心焦つたが、自分と彼では実戦経験が違う。最後には焦りで自滅しつつある目の前の選手はもはや殆ど攻撃にリソースを割けていない。トドメだと言わんばかりに圧縮空気弾の頻度をさらに上げようとした時、将輝はまたしても予想外の出来事に焦ることになる。

「影分身!？」

およそ魔法の名ではない俗な名称がこぼされたのは、一高テントの中だった。観客が見守る中で、もう殆どのリソースを「真空壁」エアポケットに割いて防戦一方だったアーティが突如、12人に分かれたのである。

「なにっ!？」

目の前で繰り広げられた信じられない光景に、将輝は思わず息を呑んでいた。彼我の距離は100mを切っている。早く本物を特定し攻撃を繰り出さなければ。そう一瞬で判断し、将輝は即座に熱探知を行う。

(光学系魔法による攪乱ならば、熱探知によって看破できる。防戦一方になった苦肉の策だろうが、残念だが俺には通用しない)

将輝は苦手としてゐる絡め手を即座に看破したことに安堵感を抱きながら、熱探知の結果を即座に分析し、その結果にさらに驚愕を大きくした。それもそのはず、全く同じ規模の熱反応が12人の人影全てから返ってきていた。

(なっ!?)

アーティの繰り出した術の正体を見破っているものは、会場の中に5人といなかった。その1人は、気になる若者がいると言ってこの試合だけ観客席に観に来ていた、「老師」こと九島烈だった。

(あれは、「仮装行列」……いや、「纏衣の逃げ水」か)

「仮装行列」。探知に対しては本体と同じ熱や音を返し、そして視覚的には異なる色、形を映し出すことによって変装することを主眼に置いた対抗魔法。エイドスの情報をも書き換えるため自身を対象とした魔法はすべてダミーに作用し不発となるという性質を持っている。この対抗魔法は九島家の秘術であり、リーナの息子であるアーティは

使えるのだが、今回アーティは「仮装行列」の原型である「纏衣の逃げ水」を使用している。

「纏衣の逃げ水」は、「仮装行列」とは違い本体と全く同じ色、形、熱、音反応を自身の位置とは異なる座標に発生させ自身の位置を偽る術であり、八雲の先代が九島家に伝え、それが「仮装行列」に改造されたという経緯を持つ。

本物の判別ができない12個の「分身」に将輝は一瞬呆然とした。その間に彼我の距離は僅か50mにまで迫っていたが、この全く未知の魔法に対して将輝がたった一瞬で意識を立て直したのは流石と言える。看破不可能な幻術に対して将輝が採った戦法は至極単純。全て撃ち落とす、であった。

将輝は迫る12個の人影に圧縮空気弾の照準を一瞬で合わせると、驚くべき発動速度で発射した。12個の人影はたった1つの人影を除いてロクな回避行動もせず、圧縮空気弾の直撃を受け一瞬でかき消えた。それと同時に消えた人影が確かに発していた熱反応が消失したことも、将輝は認識した。

(やはりな。全ての幻覚を高度に操作できるはずがない。回避行動を取るのが本物に決まっている)

またも奇策を一瞬で看破したことに将輝は安堵する。

既に彼我の距離は30mを切っている。この距離ならば、将輝ならば全方位同時攻撃が可能だ。至近距離での無理な回避により未だ姿勢を立て直せていないアーティの上下左右前後斜め方向全てを取り囲むようにして圧縮空気弾の発射地点をセット、そのままその全てを同時発射した。

「アーティー！」

一高側の観客席から悲鳴が上がる。体勢を立て直せていない状態

での全方位同時攻撃に、アーティが防御手段を講じた魔法的兆候はない。きつちり規定威力内で、しかし絶対に逃がすことのないように撃ち込まれた将輝の魔法に、アーティの戦闘続行は絶望的な状況であった。

将輝の勝利を目の端で捉えた真紅郎は、既に一高陣地にて達也、幹比古と交戦していた。「不可視の弾丸」こそ達也の「術式解体」と幹比古の幻術が仕込んであるローブにより発動できないものの、真紅郎は1対2でよく抑え込んでいた。

このままアーティからヘルメットを脱がせた（ヘルメットを脱がされたことによつて戦闘続行不可能が定義される）将輝が合流すれば、圧倒的有利な2対2で勝利できる。

打ち合わせで決めた作戦をもう一度心の中でなぞりながら、決して捕まらぬように引き気味で戦い、もう倒れ伏すアーティのヘルメットを脱がせているであろう将輝の方をちらりと見た真紅郎は、信じられない光景を目にした。

最後の幻術には驚かされたが、結局将輝はダメージジラしいダメージは受けていない。魔法力の消耗も、残る2人との2対2に影響を及ぼすようなものではない。自分の圧縮空気弾の集中砲火にたまらず力尽きた一高選手のヘルメットを脱がせようと手をかけた瞬間、将輝は真後ろから聞こえるはずのない声を聞いた。

「ツメもワキも甘いお坊っちゃん。あなたがそんなだから、オレは真由美さんにあんな言われようをするんですよ」

そんないわれのない暴言はその内容とは裏腹に、喜びと懐かしさに満ち溢れていた。

将輝がその声に振り返るよりも早く、将輝の身体を一条の稲妻が貫

き、将輝はその声の主を確認する間もなくその意識を手放した。

将輝が敗れた――

この事実を真紅郎が理解するのに、たっぷり3秒はかかった。だが真紅郎はその意識の空白時間の間に達也と幹比古の攻撃を受けるようなことはしない。大きく後方に移動魔法を使用して状況確認をする。今一度将輝の倒れている方角に目をやった瞬間、真紅郎はまたもありえない光景に目を剥いた。つい先程起きた出来事は、将輝の足元に転がっていたはずのアーティが、将輝の身体を稲妻が貫いた一瞬後に倒れかかっている将輝の背後に現れ、無防備に倒れ込まないように支えたというものだ。それ自体不可解なことだが、今はそのアーティの姿がない。

「!?」

将輝を倒したアーティが真紅郎に向かって転進すれば3対1。その事実には真紅郎の意識を狼狽から引き剥がしたが、正常に戻った真紅郎の意識は、直後に上空から直撃した衝撃波によって星の彼方へと消えたのであった。

魔法障壁の超音速移動によるソニックブームでの攻撃。アーティが真紅郎を倒すために達也たちの背後から発生させそのまま三高陣地の方角へ超音速で移動した魔法障壁は、凄まじい轟音とともに衝撃波を発生させ、真紅郎が倒れた1.5秒には三高陣地を守るディフェンスをも吹き飛ばしていた。同時にアーティが展開した強固な魔法障壁により、達也と幹比古、倒れている将輝は衝撃波の影響を受けずに済んだ。

こうして、新人戦モノリス・コード決勝戦は三高選手の戦闘続行不能により一高の勝利に終わり、第一高校は新人戦においても優勝を飾ったのであった。

九校戦編XIII

「……………勝った、わよね？」

「……………勝ちました、ね」

独り言のような真由美の問いかけに、独り言のような口調で鈴音が答えた。

それが、合図になった。

誰かが歓声を上げた。それは2人、4人と呼応し、歓声の大爆発になった。一高が陣取るスタンドは歓声の大嵐だ。

それに遅れて、会場全てが、若き選手たちの奮闘を讃えて惜しみない拍手を送る。

アーティ達は惜しみない、温かい拍手に包まれながら退場した。

「それにしても」

お祭り騒ぎの中で落ち着きを取り戻し疑問を口にしたのは摩利だ。冷めているのではなく、それだけ今の戦闘が不可解なものであり、彼女の戦闘への好奇心が旺盛だということだろう。

「さっきのアーティの動きは何だ？」

だが摩利に見抜けないものがそうそう他の生徒に見抜けるわけもない。故に、克人の回答は摩利の意図した質問への回答にはならなかった。

「魔法障壁を上空に出現させ、三高陣地の方へ音速を超えて移動させ、音速を突破した際に発生するソニックブームで攻撃したのだろう」

真紅郎と三高ディフェンダーの防御を貫通し行動力を奪うほどのソニックブームを生み出すということは、発生させた魔法障壁は相当の大きさになる。それを超音速で600m以上移動させた事自体が信じられないというところだが、信じられないながらも摩利を始め半分近くの一高選手は理解していた。

「そうじゃない。その前だ。アイツは分身を一条選手に破られて倒さ

れたんじゃなかったのか？そもそもあの分身は何だ？分身全てが熱や音まで発しているように見えたが」

アーティの分身を見た時にスタンドから熱探知を行っていたのは流石と言える。その問への答えは、以外なところからもたらされた。「纏衣の逃げ水」ではないでしょうか」

ないでしょうか、と断定の形ではないがその声音は自身に満ちている。深雪以外にアーティの術に心当たりのある者もいない。その場の全員が押し黙ったまま、深雪に続きを促した。

「兄が九重八雲先生の指導を受けていることは前にお話しました。その九重先生の秘術に、『纏衣の逃げ水』というものがあります」
「纏衣の逃げ水」……………」

その術の名に心当たりのある者はいないようだ。

「私自身が九重先生の教えを受けているわけではありませんから、私もよく知っているわけではありません。ですが、兄が以前言っていたことによると、可視光の操作による幻影、赤外線による幻温、加重系魔法による幻体、精神干渉系魔法による幻覚、無系統魔法といった様々な魔法を少しずつを組み合わせ足し合わせることで魔法を使っていること自体を覺らせない偽装魔法の極地だと。結果として、自身の分身を自分の位置とは異なる場所に出現させるという現象を生みます」

深雪の説明に、その場にいる者全てが息を呑む。偽装をするという目的のために古式魔法の粋を集めた究極奥義とも言える魔法を、無名の魔法師が使用した。その事実、常識ならば到底考えられないことだ。

「ここからは私の推測ですが、アーティは一条選手との長期戦を嫌い、わざと距離を詰めて自分が不利になる状況を作り出し、そこで繰り出した分身魔法が本命の究極奥義ではなく苦し紛れの魔法であると思いついて、分身の一つのみに回避運動を行わせてそれを本体だと思わせ、ヘルメットを脱がせに来たところを至近距離で仕留める、という作戦だったのでしょう」

深雪の仮説に異を唱える者はいない。獲物にとどめを刺す瞬間が

最も隙を見せる瞬間。そのことはここにいる者はこれまでの経験から多かれ少なかれ知っている。だが、疑問が全て氷解したわけではない。むしろ、術の正体が分かったからこそ生まれる疑問というものもある。

「だがなぜ、アーティがその魔法を使えるんだ？その『纏衣の逃げ水』は九重家の秘術なのだろう？」

「それは今、お兄様が本人に聞いていますよ。お兄様たちの帰還を待ちましょう」

深雪はそう言うのと大役を果たしここに戻ってくる兄を、喜びに満ちた表情でじっと待ち始めたのであった。

深雪が予想したとおり、今アーティは達也の質問攻めに遭っていた。

「驚いたな。アーティが師匠の秘術を使うとは。弟子入りしていたのか？」

「実はそうなんです。達也さんにとっては弟弟子にあたることになります」

「だからアーティは達也に敬語を使っていたんだね」

アーティの答えに、幹比古は勝手に自分の疑問を解決している。その眩きを聞いて、これは使えろと内心想ったアーティだったが、達也の追求は止まらない。

「お前の戦い方がどことなく俺と似ていると感じたのはこのためか。だが、何故隠していたんだ？」

達也の追求に迫力はない。あくまで勝利に酔う少年たちの、種明かし大会に過ぎない。だが、アーティは質問を重ねる達也の瞳に明らかな警戒の色があることを見逃さなかった。

「ひけらかすようなものでもありませんから。別に師匠に口止めされていたわけじゃありませんが、『このほうが達也くんも驚くよ』と。実際、こうして驚いているでしょう？」

満足気に笑うアーティの顔の顔に達也は嘘の気配を見つけられず、また八雲の褒められない性格を思い出し、達也もひとまず納得したようだ。

(これは大師匠に話を合わせてもらわないとな……)

達也の瞳から警戒の色が消えたことに安堵しつつも、八雲に頼み事をしなければならぬという自分の暗い未来(?)に、内心若干の憂鬱さを抱えながら、アーティは凱旋の路についた。

一高テントに戦勝報告に行ったアーティ達は、熱狂的な祝勝に包まれた。特に、最大の難関だった決勝戦の試合内容がアーティの八面六臂だったという事実は、1年男子の一科生としてのプライドを癒やした。それ故に、アーティ達はこれ以上ないほどの称賛を得たのである。待ち構えるようにアーティの術について質問が飛び交ったが、アーティの想定よりは既に理解が進んでいたようだ。それが深雪の説明であることはアーティには明らかだった。

内心深雪に感謝しながらも、アーティは説明もそこそこにホテルへ戻ると言ってその場を辞した。

もともとアーティの話を聞きたがった同級生たちも上級生たちも名残惜しそうにしていたが、そもそも昨日倒れたばかりのアーティを引き留めるようなことはしなかった。

「やっぱりここか」

ホテルのロビーを通ったアーティを出迎えたのは、雫、ほのか、レオ、エリカ、美月だった。

「達也くん達は？」

「達也さんと幹比古はまだテント。アレは当分釈放されそうにない

ね」

他人事のように笑いながらそう言い放ったアーティに、一同も苦笑を返す。

「……………アーティ」

少し間を置いて、雫が口を開く。アーティは少し照れくさそうにおずおずと雫に向き直る。

いつもならここでエリカあたりが茶々を入れそうなものだが、今日はアーティに花を持たせてくれるようだ。

「優勝おめでとう」

「ありがとう」

2人の間に交わされた言葉はそれだけだった。だがそれだけで十分なのだ、その場にいる全員が理解していた。

自分を労ってくれた同級生たちと少しばかり会話を楽しんだ後、アーティはその場を辞した。アーティの体力を慮ってか、アーティを引き留める者はいなかった。彼等はアーティを見送った後達也と幹比古を労いに行ったようだ。

だが、アーティが部屋に戻った後に取った行動は休息ではなかった。

「無頭竜ノーヘッド・ドラゴン。達也さんの話で聞いた気がするけれど……殆ど覚えていないな。大師匠様様だな」

アーティは部屋につくなり情報端末を取り出し、八雲から受け取ったフォルダを開く。未来を変えるために極力達也を目立たせないという第一目標については八雲も同意している。そのために達也は動

きそうな案件については八雲が無条件に情報を提供してくれるという合意を得ている。

アーティは部屋の窓を開けると、そのまま飛行魔法を使用して夕闇の空へと溶けていった。

「まずいぞ。第一高校は新人戦も優勝してしまった」

「このままでは、我々は大損失を出すことになる」

テーブルを囲って青い顔で今にも震えそうな面持ちで話し合っているのは、今回の九校戦に仕事を働いていた犯罪シンジケートノイヘッド・ドラゴン無頭 竜の幹部たちだ。

犯罪シンジケートと言ってもただの犯罪組織ではなく、魔法を用いた魔法犯罪を企てる組織であり、幹部に取り立てられるにはある程度優れた魔法師であることが条件となる。

故に一定水準以上の魔法師たちが密集し、更には魔法行使のみを行うために改造された「ジェネレーター」も護衛に当たるこのオフィスが、単身乗り込んできた魔法師の襲撃を受けることなどありえないことだった。

「!?」

突如として入口付近に立っていたジェネレーター2人が爆散する。その直後、重厚な自動扉が風に舞うティッシュのように吹き飛ぶ。幹部の一人は飛んできた扉を避けられずそのまま絶命した。

「何事」

だ、まで言い切れずにまた幹部の一人が爆散する。人体内部の水分を発散させその体積変化によって内部から爆発する。一条家の固有魔法、「爆裂」。だが、目の前でそれを行使する少年は、一条家の跡取り「クリムゾン・プリンス」ではなかった。

扉の反対側、窓際を固めていたジェネレーターが即座に反撃の魔法を行使しようとするが、ジェネレーターの情報強化を容易く無視して

「爆裂」によりジェネレーターは爆発四散し、その反撃は未発に終わる。

「質問だ」

そう冷たく言い放った少年が何より不自然なのは、ここまで一切CADを使っている様子がないことだ。それでいて、ジェネレーターの魔法行使の速度を遥かに上回っている。既に血で濡れていない場所がないほどの地獄と化した部屋を這いずり回る幹部の男も、反撃を試みなかったわけではない。だが、一切魔法を発動することは叶わなかった。目の前の少年の強力な「領域干渉」により、あらゆる自分の魔法が効力を発揮しなくなっていた。

空間全体にかけられた干渉力に対し、局所的に集中させた干渉力ですら対抗できない。その事実にも、生き残った幹部は全員戦意を喪失していた。もとい、対抗手段を喪失していた。

「お前達に助力していた式神遣いはどうした」

少年は質問を投げた瞬間に幹部の一人をまた爆発させる。

「き、貴様っ！なぜその魔法、『爆裂』を使える！何者だ……っ！」

その光景にもはや幹部たちはアーティの質問に答える気力もない。ただ何者なのだろうと言のようにながら奥歯をガタガタ鳴らしている。

「質問をしていいのはこちらだけだ」

そう言うとアーティは一人の幹部を残して生き残っていた幹部の男全員を爆散させる。

「さて。お前は最後に残した期待に伝えてくれるよな？」

アーティはそう呟くと一人残った幹部の男の方をゆっくりと振り返る。男は他の幹部よりはいくらか理性の残っている表情だ。

「なぜ、式神遣いのことを？」

そう問を返した男の左手が破裂する。

「言っただけだ。質問をしていいのはこちらだけだ」と

「爆裂」は効果範囲を絞ることで人体を部分的に破壊することも可能だ。失血で意識を失わぬよう即座に傷口を焼き、アーティは「質問」の答えを求めた。

「……………式神遣いは死んだ。5日前に連絡がつかなくなって、3日前に死体で発見された」

痛みに歯を食いしばって耐えながらもたらされた答えに、アーティは動揺を禁じ得なかった。

「嘘をつくな」

アーティはその動揺を隠すように男の右手を同じように吹き飛ばすと、即座に傷口を焼き固める。

「……………っーう、嘘ではない……………貴様が殺したのではないのか……………！」

質問に答えたのに理不尽に右手まで吹き飛ばされ、男は恨めしそうにアーティを見上げる。

「……………式神遣いの男の仲間か？」

「ヤツに仲間がいることは聞いていない。そもそも素性がわからず我々もヤツを信用はしていなかった」

アーティは拷問の結果得られた情報の少なさに失望していた。あわよくば未来からやってきた刺客を一網打尽にすることまで考えていたのだが、あまりの情報の少なさに無頭ノーヘッド・ドラゴン竜東日本支部を壊滅させる以上のことはできそうになかった。

「…苦労」

忌々しげにそう呟くと、アーティは目の前の男を爆散させ、窓を加重系魔法で破壊するとその窓から再び夜闇へと溶けていった。

九校戦編XIV

九校戦日程9日目。新人戦は終わりを告げ、本戦が再開される。

摩利の負傷により摩利が出場予定だったミラージ・バットに代役でエントリーした深雪が、1年生の中では唯一本戦に出番を残していた。

「いくら深雪でも……本戦に出場しなくちゃいけないなんて、少し荷が重いんじゃない……」

深雪の応援のため観客席に集まったアーティ達は少し早く席を取ったために深雪の出番を待っているのだが、ほのかの言葉は他の1年生達の心情を少なからず代弁していた。

「さすがになあ……あの達也がついてて負ける姿は想像できねーが、それでもいきなり本戦つてのはヤバそうだけ」

レオも心配そうにそう同意を重ねている。しかし、何の心配もしていないという表情でその言葉を否定したのは雫だった。

「大丈夫。達也さんは深雪のためだけに特別な魔法を用意してるから。みんなきつと驚くよ」

雫の言葉に一同は返す言葉が見当たらない。雫の「アクティブ・エアー・マイン能動空中機雷」に「インフェルノフオンメーザー」、深雪の「氷炎地獄」に「ニブルヘイム」と達也の提供した魔法は既に高校生の域を遥かに凌駕しており、この土壇場でもまだカードが残っていると言う雫の言葉には絶句するしかなかったのだ。

「……………アーティも知ってたんだ」

少し意外そうに雫が呟いたのは、アーティがその雫の言葉にコクコクと頷きながら待ち遠しいという表情を隠そうとしないからか。

「えっ。ああ、うん。実はそうなんだ。バトル・ボードのアレも実はそこから着想を得てて…………つと、これはネタばらしになっちゃうかな」

アーティが航空魔法をバトル・ボードで使用することにしたのはこ

ここで飛行魔法がお披露目されることを強く意識していたからだ。だが、危うくネタばらしをすることで場所になつたので、慌てて口をつぐむ。

横でほのかがあつという表情をするが、即座にアーティは目で「ストップ」をかけ事なきを得た。

ミラージュ・バット本戦は深雪による飛行魔法の披露という大きなサプライズもあり空前の盛り上がりを見せた。

本来ならば起こったかもしれない事故も起きなかった。

克人の出場するモノリス・コードではなくこのミラージュ・バットに最後の妨害があると確信していた達也は、肩透かしを食った気分を味わいながら、国防軍の藤林響子から呼び出しを受けていた。

「お呼びでしょうか、藤林少尉」

「来てくれてありがとう、達也くん。今回の九校戦の件で話があつて、今回は呼んだの」

ビシッと背筋を伸ばし響子に声をかけた達也に、響子は軍での呼称ではなく親しげな、友人としての呼び名で応じる。その響子の態度に達也も幾分か肩の力を抜き、黙って頷いて響子に先を促す。

元々今回の九校戦にちよつかいを掛けていた無頭竜ノーヘッドドラゴンについて、スクールカウンセラーと公安のエージェントを兼任する小野遥の提供した情報なども用いて密かに殲滅のため独立魔法大隊一部の隊員と連携していた達也にとって、響子から切り出される九校戦絡みの話題は無頭竜ノーヘッドドラゴンの件以外にありえない。

「今回、私達が達也くんと一緒に殲滅する予定だった『無頭竜』ノーヘッドドラゴン」
「ただ、昨夜、何者かに完全に殲滅されていたの」

響子の言葉は信じられないものだった。達也に動揺するという状

況はありえない。彼はそのようにできている。だが、それでも彼は自分に許された範囲で最大限の驚愕を今感じていることを、冷静に理解していた。

「では、今日何も起こらなかったのは」

「昨夜彼等が殲滅されていたせいね。妨害の命令を出す彼等が殺されたわけだから、大会本部に潜り込んだ協力者も動かなかった。明日も、何らかの妨害工作が行われることはないわね」

響子の言葉は本来ならば喜ぶべきことだ。だが、達也は苛立ちに似た感覚が自分を支配していることを、冷静に理解していた。また、その苛立ちの根源も。

（ブランシユ殲滅の時の感覚に似ている。アレはスポンサーによる口封じかと思つたが、この2つが繋がっているとしたら、あるいは）

暗躍している影は案外身近にあるのかもしれないと、達也は自分の想像力の暴走だろうと半ば思いながらも、そんな事を考えていた。

翌日の九校戦最終日は本戦モノリス・コードで幕を下ろす形のスケジュールだった。辰巳・服部・克人の超実力派揃いのチームで取りこぼすことなど万に一つもあろうはずがなく、最後の決勝戦は克人一人の相手に文字通り何をさせぬ完封によりその幕を下ろした。

この演出の裏には新人戦において一条のプリンスがまさかの敗北を喫したことにより十師族の求心力低下を懸念した十文字家本家よりの要請があつた。その効果は靦面で、将輝が敗北したことにより確

かに十師族を相手にしても望みがあると考えた若者は多かったが、彼等が残らずその希望を失うに足る、完膚無きまでの粉碎劇であった。

かくして一高の優勝に終わった九校戦は幕を下ろし、ここからはノーサイドの精神での交流会が待ち受ける。

ノーサイドの精神、と一口に言っても全力を注いだ勝負になかなかこだわりを捨てきれぬものだが、この交流会は文字通り全国の魔法科高校の選りすぐりたちが集う交流会であり、毎年この場で少なくない遠距離カップルが誕生することは既に有名な話である。そのような若者にとっては魅力的なイベントへの若い期待が、勝敗への邪念を忘れさせる。そのためか、毎年ほとんどトラブルの類いが起こることはない。

九校戦最終日の翌日、交流会に参加したアーティはてんでこ舞いという言葉を己の身を以て体現していた。

「なるほど。あれは飛行魔法ではなく、圧縮空気翼による航空魔法だったのですね！」

「表面効果を使うだなんて、思いつきもしませんでした！」

アーティの周りには、男女を問わず幾重にも人だかりの層が彼を取り巻いていた。バトル・ボードでの奇想天外な戦法と大会記録に加え、誰もが優勝確実と目した一条将輝率いる三高チームを破つてのモノリス・コード優勝。彼が本大会でマークした成績を鑑みれば、この状況も納得がいくものだが、だからといって渦中にあるアーティの苦労が低減するというわけではない。

にこやかな笑顔を貼り付けながら、求められる説明を簡潔にこなし嵐が去るのを待つアーティだったが、その紳士的な対応がさらなる「客」を呼び込むことになっていることには、結局アーティは最後まで気付くことができなかった。

いくらか時間が経った後、生徒たちと交流していたお偉方が退出し、管弦の音楽が鳴り始める。ダンスパーティーの開幕を告げる、生演奏だった。

自分を取り巻く生徒たちもダンスの相手を求め散り散りになり、束の間の嵐の止み間にほうと息をつく、すぐ先で同じように人だかり

から解放され息をつく深雪の姿があった。その奥には、ちらちらと深雪を窺いながらソワソワしている男子生徒が数名。付かず離れずの距離から深雪をダンスに誘う機会を伺っているようだ。はたと気が付いてあたりを見回すと、同じような視線を自分に向ける女子生徒の姿も見えた。

(これはwin-winの関係……のはず)

見ず知らずの相手への対応は疲れるものだ。その直後に見ず知らずの相手と踊るといのは些か以上に過酷がすぎる。少なくとも自分はその御免だと心の中で呟いてから、アーティは悠然と深雪の方へ歩を進める。その様子に、深雪の方を伺っていた男子生徒たちからは諦めのため息が漏れる。

(申し訳ないけれど……これも役得だ)

心の中でそんな男子生徒たちにこっさり謝りつつも、数歩前にまで近づいた深雪に声をかける。

「一曲、お願いできますか?」

「ええ、喜んで」

恭しく差し出されたアーティの右手に、深雪は花も綻ぶような笑顔で応じた。

九校戦新人戦で間違いなく男女それぞれナンバーワンの活躍を見せた2人。それも、スラリと伸びた背に、それ以上にスラリと伸びた長い手足。絶妙なスタイルの体格に、燃えるような赤髪。彼の名を知らぬ者はもはやここにはおらず、その名からも分かる通りハーフであるアーティは一種日本人の憧れを集めるような雰囲気纏っている。それに応じるは、完璧な美少女という表現が過不足無い、雪のように白い肌美しい瞳が性別問わず見る者全ての心を奪ってやまない深雪。この2人が組んでダンスをしている間は、周りのペアもダンスを止めて見惚れていた。

曲の切れ目。ゆったりとした時間を楽しんだ2人は、ゆっくりと手を離し、一礼を交わして別れを告げる。踵を返したアーティとすれ違ふように深雪の前に出たのは、将輝だった。

「2日ぶりだな、工藤スチュアート」

そのまますれ違うかと思われた将輝が、アーティを呼び止める。飛び上がるようにビクリと反応した後、恐る恐るアーティは振り返る。

「ふっ」

そんなアーティの怯え方が余程おかしかったのか、将輝はそれまで浮かべていた真顔を崩し、吹き出した。

「もう試合は終わったんだ、そんなに怯えられては俺が威圧しているみたいじゃないか」

将輝は自分の友人に話しかけるような口調でアーティに話しかける。

将輝にとってアーティは苦杯を嘗めさせられた相手なのだが、不思議と目の前の同い年の少年には不自然なほどの親近感を抱いていた。

その将輝の口ぶりにアーティもいくらか緊張を緩め将輝に向き直る。

何も言わずに差し出された将輝の右手を、アーティがしっかりと握り返した。

「……………ところで、ツメもワキも甘いお坊っちゃんとはなんのことだ？」

そのままアーティにだけ聞こえる小声でにこやかな顔のまま放たれた質問に、アーティの顔が再び凍りつく。

わかりやすい目の前の少年の狼狽ぶりに満足したのか、将輝はゆっくりと手を離しながら、今度は周りにも聞こえる声で宣言する。

「工藤スチュアート。来年は、負けない」

一条将輝の勝利宣言。いや、この場合は挑戦といったほうがいいのか。それはダンスパーティーの趣旨から外れるものだが、周囲からは拍手が沸き起こる。アーティはまだその表情を凍りつかせていたが、将輝のこの言葉にみるみる顔色に活気を取り戻し、

「いえいえ、来年もまた、勝たせて頂きますよ」

そう不敵に応じたアーティの言葉に、再び会場が沸いた。

95年入学生の名物勝負の誕生に沸き返る会場を尻目に、アーティはゆっくりと将輝に近づく。

「それはそうと、深雪さんと踊るつもりならお早めに。彼女は後半はお兄さんと過ごすでしょうから」

「兄、だど？」

そんなものは初耳だという表情の将輝の目の前に、タイミングよく本人が現れた。彼もまた先程までその優れたエンジニアリングの成果を認められ多くの「客」の対応に追われていたようだ。

「お兄様」

お兄様、という呼称の行く先を認めて、将輝はゲツというような表情を浮かべる。先程のアーティに対する表情とは明らかに正反対のようだ。

「司波……………まさか……………」

将輝の狼狽ぶりに達也だけでなくアーティまでもが心配そうな目を向ける。

「もしかしてお前……………彼女と兄妹か!？」

「今まで気づかなかったのか？」

達也の呆れ声の成分が濃い返答は、横で見ていたアーティの心情をも代弁していた。

「一条さんには、わたしとお兄様が兄妹に見えなかったのですよね」

そんな将輝を庇った深雪は、なぜか少し嬉しそうな顔をしていた。

「えっ、いえ、その……………ハイ」

言い訳をしようとしたが出てこなかったという風情の将輝を、深雪はニコニコと笑みを浮かべて見ている。

「いつまでもここに留まっているのも邪魔だし、深雪、一条と踊ってきたらどうだ？」

達也の台詞に嬉しそうにガバッと顔を上げた将輝だが、その直後、アーティに右足をこれでもかと言わんばかりに踏みつけられ、危うく悲鳴を上げそうになる。何をするんだと目で抗議するが、アーティはツーンとそっぽを向いている。突然の奇襲に戸惑う将輝を、深雪の言葉が我に返らせる。

「一条さん？」

小首をかしげて「どうしますか？」とばかりに微笑みかけた深雪に、

「是非……一曲お相手願えますか」

上ずりそうになる声を精一杯抑えて、将輝は恭しく、深雪に作法通りに一礼した。

「こちらこそ、よろしくお願い致します」

そう答えた深雪の顔を見て今にも飛び上がりそうなほど喜んでい
る将輝の後ろ姿を、ジト目でじっと見つめるアーテイ。達也には、
アーテイがそんな表情をする理由がわからなかった。

だが達也のその疑問はすぐに霧散することになる。その答えを得
たからではなく、達也の意識が別のものに向いたからだが。

今なおうきうきと深雪と踊る将輝に殺意のこもった視線を送る
アーテイの方を軽く叩く。

「？」

振り向いたアーテイに達也が黙って顎で指し示した方向には、雫と
ほのかがいた。アーテイの顔が見る見る間に赤くなる。本当に分か
りやすい奴だと思いつつながら達也はアーテイを置いて踵を返そうとす
るが、不意にガツシリとアーテイに腕を掴まれていた。

「何だ？」

「何、って」

達也の質問にアーテイはもう呆れ顔だ。だがそんな表情をされる
理由がわからない達也はますます混乱を極める。その答えは、不意に
現れたエリカによってもたらされた。

「お客様、こういう時は、男性の方からリード致しませんと」

背後からエリカが指し示した先には、もじもじと上目遣いで達也を
見るほのか。

てつきりアーテイと踊りに来た雫に付き添ったものと勘違いして
いた達也は、この状況を持って余していた。横にいるアーテイは、達也
の困り顔を見てニタニタとしている。達也はそのヘラヘラした顔面
を一発殴りつきたい衝動に駆られたが、ぐっところらえて目配せする。

その目配せに、アーテイはわざとらしく「あくあく、本当にしやう
がない人なんだから達也さんはあ」とでも聞こえてきそうな表情を一
瞬浮かべた後、雫に向き直り

「雫。ダンスパーティーが終わるまで、オレと踊ってくれないか」

そう恭しく一礼しながら右手を差し出す。雫も慣れたもので、美しい所作でアーティの手を取り、一言

「喜んで」

と返した。そのままアーティと雫は流れるように達也たちから遠ざかっていく。去り際にアーティが達也にだけ見えるように器用に残したウインクが様になっていて少し腹が立ったが、達也にとってはそんなことをしている場合ではない。

「……………ほのか」

達也はおずおずと、目の前でまだ上目遣いで恥ずかしそうにこちらを見つめるほのかの名を口にする。

「はいっ！」

ほのかの元気良い返事に、達也も覚悟を決めた。

「……………踊らないか？」

「喜んで！」

覚悟を決め気合を入れたにしては間があり自信なさげな疑問形だったが、それでもほのかには十分嬉しいことのようにだった。

「アーティ」

達也たちから自然に遠ざかり踊っていた雫が、不意に口を開く。

「なあに？」

アーティも一通りダンスの作法は心得ている。苦手なわけでもなく、少しくらい会話をしながらでもステップを間違えるようなことはない。

「さっきのは、キザすぎた」

「うっ」

達也の困り顔というめったに見られないものに舞い上がっていた

とはいえ、ダンスパーティーが終わるまで、はやりすぎたと後悔していたアーティに、雫の言葉は効果抜群だった。

その動揺を示すようにコテツとステツプを間違えたアーティに、雫は上品に笑ってみせたのだった。

そんな2人を、幸せそうに微笑みながら見守る女の影が窓に映り込んだのは、現実か、幻か。しかし、その事に気付いた者は誰ひとりとしていなかった。

夏休み編 夏の休日

「……………ほえー」

間抜けな顔をしてアーティがあんぐりと口を開けているのは、小笠原の無人島にあるとある別荘だった。

九校戦を終えそのまま夏休みへと入ったアーティ達だったが、雫の誘いによってバカンスに行くことになったのだ。そのバカンス地は雫の家の別荘なのだが、その立派さにアーティは驚いているのだ。

そのアーティの後ろには、ほのか、深雪、達也、レオ、エリカ、美月、幹比古の姿もあった。

「なあ、アーティ」

アーティほどではないが驚きを隠しきれない表情のレオがそつとアーティに耳打ちする。

「なんでこんな大勢で来たんだ？ どうせなら2人で行きやよかったのによ」

このようなバカンスに参加できることは嬉しいのだろうが、雫やほのかとレオ達は直接そこまで親しいわけではない。気後れするのも当然と言えた。

「んー、まあ考えなかつたわけじゃないけど。オレはみんなと過ごしたいし。それに」

アーティが説明した経緯は以下のようなものだった。

雫とほのかは毎年ここに遊びに来るのが恒例になっており、今年に限ってほのかを誘わないということとは雫には考えられなかったし、アーティもそんなことをさせる気はなかった。

そしてほのかが来るのであればほのかは達也たちにも来てほしい。ならばいつそ親しい友人を全て招こうという話であった、というもの

である。

「なるほどな。そんじやあ、遠慮なく楽しませてもらうぜ」

自分たちに気を使つての招待でないことを確認したレオはコロツと顔色を変えて「遊ぶぞー」という表情になっている。

切り替えのいい友人にやれやれと小首を振っていると、

「こんにちは。君が工藤スチュアートくんだね」

アーティの背後から、聞き慣れぬ声がアーティの名を呼んだ。アーティが振り返ると、そこには実業家としての風格を漂わせる中年の紳士が立っていた。

「私は北山潮、雫の父親だ」

思わぬ相手の登場にアーティは慌てて頭を下げる。

「はじめまして、工藤スチュアートです。この度はお招き頂き、ありがとうございます」

「九校戦での活躍、見させてもらったよ。それに九校戦では、娘は随分と君に励まされたと言っていた。仲良くしてくれているようだね」

そう言いながらにこやかに差し出された右手を、しっかりと握り返す。

「ふむ。気弱な印象を受けたが、やはり芯は強いようだな。大事な時ほど頼りになりそうだな」

潮の手を握り返すアーティへの品定めは、目の前のアーティにすら聞こえないほど小さな呟きだった。

「うん。雫の目は確かなようだ。我が娘ながら、なかなかしつかりしているじゃないか」

そうにこやかに、今度はアーティにも聞こえるような大ききで呟くと、潮は握手を解きアーティに優しい視線を向けた。

「では、残念ながら私はもう行かなければならないが、雫のご友人の皆さん、自分の家と思って寛いでください」

雫から聞いていた通り仕事に少しだけ穴を開けてきていたようで、潮はそう告げると早々に立ち去ってしまった。

「アーティ、お墨付きだね」

そんな潮を見送るアーティを背後から茶化すのはエリカ。

「なっ、何のことさ」

「お義父上のお墨付きのことに決まってるじゃねえか」

急に顔を赤らめてエリカにとぼけるアーティに追い打ちをかけるのは、レオ。息ピッタリのこの2人のコンビネーション攻撃に「お前らのほうがお似合いだ」と叫びたくなるが、ここはぐつと堪える。

やいのやいのと馬鹿騒ぎをしているアーティ達を尻目に、女子たちは既に上着を脱いで水着姿になっていた。

「おわつとと。こうしちやいらねえ。海一番乗りを譲るわけにはいかねえ」

そんな女子たちを見て訳のわからないことを言い始めたレオの後ろをアーティも走り出す。

「おっ、じゃあ女共のところまで競争な」

それを競争の合図と捉えたのか、一歩先を行くレオから年頃の少年らしい宣言が飛び出す。

アーティとしてはそんなつもりはなかったのだが、競争と言われては引き下がるわけにはいかない。

「おおっと、魔法はなしだぜ?」

慌てて魔法なしのルールを付け加えると、レオは砂を勢いよく蹴り出しスピードを上げる。それに負けじと長いストライドを生かしてぐんぐん速度を上げるアーティ。そんな彼等を見て、達也は

「何をしてるんだ、あいつらは……」

と呆れ気味に呟いていた。

「砂浜をどうしてそんな早く走れんだよ……」

「魔法は使っていないからな」

100m以上砂浜の上を走りきった2人は流石に肩で息をしている。それでもアーティの方には少しばかり余裕が見えた。アーティが受けた訓練の中では悪路での走行も含まれている。体力自慢のレ

オとはいえ走り方を知っているアーティに敵うはずはなかった。

「2人共、大丈夫ですか？」

「大丈夫よ美月。勝手にバカやってただけなんだから」

肩で息をしている2人を心配そうに見つめる美月だったが、それを笑い飛ばしたエリカ。上着を脱いで既に水着姿になっている彼女たちは、年頃の少年にとっては何か以上に艶やかすぎた。

2人の水着姿にぎくりと固まったアーティの様子を見て、意地悪そうな顔をしながらエリカが近づいてくる。

「どう？アーティ」

「どう、って……………」

返答に困るアーティをからかうようにエリカがグイグイと近づいてくる。派手な原色のワンピースは、彼女のビビッドな印象も相まって彼女の存在感を際立たせている。余計な飾りのないシンプルなデザインは、彼女のスレンダーな身体のラインをくっきりと浮き立たせている。

「スポーティなイメージがマッチして、よく似合っているよ……………」

チラチラと目をそらしながらやつのことで口にした讃辞だったが、それを聞いたエリカは思いがけずおおっ、というような顔をした。「案外褒め上手じゃん……………」

そう聞こえないほどの声で呟いた後、エリカは傍にいた美月を手招きで呼び寄せる。

「美月のは、どう？」

「ええっ、エリカちゃん、いきなり……………」

エリカのキラークラスに戸惑う美月だったが、それでもアーティの感想が聞きたいらしく、口を噤んで上目遣いでアーティを見ている。細かな水玉模様のセパレートだが胸元の深いカットで彼女の大きな胸が強調されておよそ高校生のものとは思えない色香を醸し出した。

「ええっ、柴田さんまで……………その、大人の気品、っていうのかな……………ちよつと意外だったけど、すごく似合ってるね」

これまたしどろもどろの褒め言葉だったが、美月は満足したのか、

嬉しそうに俯いて下がっていった。

「エリカ、何をしているの？」

そこに深雪がやってくる。後ろにはほのかと雫までいる。思わぬ後続にエリカがニヤリと笑ったのを見逃さなかったアーティは即座に離脱を試みるが、エリカに足を踏まれ機先を制される。アーティが怯んだ瞬間にエリカが深雪に水を向ける。

「アーティに水着を褒めてもらってたの」

「まあ。わたしも、お兄様にお見せする前にアーティの感想を聞いておこうかしら」

エリカの言葉にニコリと顔を綻ばせた深雪が身に纏うのは、大きな花のデザインがプリントされたワンピース。体のラインを出しすぎないそのスタイルは、深雪が元来持ち合わせている妖精的な魅力を強調している。

「クールなイメージと可愛い花のギャップが刺激的ですね。達也さんもきつと気に入りますよ」

アーティも必死で言葉を選んだのだが、深雪には後半の言葉の意味のほうが大きかったようだ。そうですか……とだけ呟くと、自分の世界に閉じこもってしまった。

エリカの言葉を待たずに近づいてきたほのかに、流石に限界だと一緒に来たレオの方に助けを求める視線を送るも、レオは海に入るための準備体操に集中しているようだ。

「アーティ」

にこにこしながらほのかがアーティの名を短く呼ぶ。ここで何、と問い返すようなことはしない。

「ほのかのスタイルが完璧に活きているね。よく似合ってる」

もう半分自棄になって逆に冷静さを取り戻したアーティは短いながらもほのかを意識したのであろうポイントを抑えた讃辞を送る。だが、その冷静になった心もそのほのかの後ろからひよこつと出てきた影によって再び、いや数秒前より遥かに熱せられた。

「……………」

雫の水着はフリルを多用した少女らしいワンピース。大人びた表

情の雫にはどこか倒錯的な妖しい魅力を放っている。

「……………」

なおも押し黙る雫にアーティもどうしたものかと口を開きあぐねていたが、ほのかににこりと静かに微笑みかけられていよいよかと覚悟を固める。だが、覚悟を固めて正対するとアーティの言語野は全く機能せず、

「と、とつても可愛いよ……………」

これだけ言うたアーティの羞恥心は限界に達してしまった。アーティは上着を脱ぎ捨てると海へと既に走っていたレオを追い抜き、猛スピードで海へと飛び込んでいった。

「……………アーティだったら。一番ちゃんと褒めなきゃいけないのに……………」

むつと頬を膨らませながらアーティの後ろ姿を睨むほのかの肩に、そつとエリカが手を置く。

「いやいや、ほのか。あれはアーティの最大限の賛辞だよ。わたしたちには可愛い、なんて言わなかったじゃない」

やれやれ、と芝居がかつた仕草で首を振ってみせるエリカに、横の美月もコクコクと頷いている。雫の嬉しそうな俯き顔を見て、ほのかは自分の勘違いに気付いたのだった。

真夏の小笠原諸島といえども、夜中も海水浴ができるほど水温が高いわけではない。夕食を済ませたアーティ達は、別荘の居間で思い思いの過ごし方をしている。達也と幹比古は将棋、レオとエリカと美月と深雪と雫はトランプをしている。そして、アーティはというと、ほのかに連れられて別荘から少し離れた崖の上にいた。

「……、わたしたちのお気に入りの場所なの」

ほのかの視線は、星が映る水面に向いている。アーティもそれに倣って海を眺めてみる。

「小さい時に見つけた、小父様にも内緒の場所」

小父様、というのは潮のことだろう。アーティにはそのような場所にほのかにつれてこられた意味がわからなかったが、しかし不思議なことにアーティは自分がその理由を心のどこかで理解しているような気がした。

「綺麗だね」

アーティは思った感想を、何の言葉の飾りもつけずに口からこぼす。大気が澄んでいる無人島で見る、揺れる水面に映った星々は普段星に興味を示さないアーティにも格別美しいものに感じられた。

そんなアーティの言葉に、ほのかは領きながらアーティの横に静かに並ぶ。

何分、2人揃って海を見ていたかはわからない。だが、ほのかが意を決したように口を開く。

「アーティ。雫のこと、どう思ってる？」

思いがけぬ質問にアーティは目を見開いてほのかを見る。隣に立つほのかは、いつになく真剣な眼差しでまっすぐにアーティの瞳を見つめていた。

「そっか。ほのか、幼馴染だもんね。そりゃ、分かるか」

バレちゃったか、と舌を出すアーティに、なおもほのかは目を逸らさない。

「好き、だよ。最初は褒めてもらえた嬉しさから、だったと思う。でも、クラスで話すうちに、部活の練習をしている彼女を見る度に、オレは雫から目が離せなくなっただ」

しみじみと語るアーティの言葉の切れ目にも、ほのかはいかなる言葉をも挟まない。

「それに、九校戦。あそこで雫は、オレに勇気をくれたんだ。敗北することを仕方ないと受け入れていたオレに、困難に立ち向かう勇気をくれた。オレにはやらなきゃいけないことがある。そのための勇気を、雫がオレにくれる。そんな気がするんだ」

ほのかには、アーティの言うことの意味は半分以上わからない。単にタスクがあるという意味ではなくとてつもなく大きな使命を感じ

させる言葉の意味も、自分以上に華々しい成績を九校戦で残したアーティが受け入れていた敗北とやらも。だが、ほのかはアーティの言葉を真実と受け取った。親友を任せるに足ると、判断した。

「じゃあ、アーティからちゃんど気持ちを伝えて。雫も、それを望んでいるから」

ほのかの言葉にアーティは目を見開く。雫もまたアーティのことを想っているという事実もそうだが、目の前の友人が親友の気持ちを漏らすとは思えなかったからだ。

「それはできない」

本当ならば喜び勇みそうなほのかの言葉に返されたのは、思いがけない否定の言葉だった。

「え?」

ほのかは豆鉄砲を食らったような表情になるが、すぐに真顔に戻る。繕った、というよりはなにか心当たりがあるといった顔色だ。

「今のオレは雫に勇気をもらわれないと覚悟が足りない。雫とは、相手を求める関係じゃなくて、相手に与える関係になりたいんだ」

やはり、アーティの言葉はほのかにはピンと来るものではなかったが、今日の前で真剣な面持ちで水面を見つめながらそう呟くように言った友人の顔が、親友のことを心から想っていることを感じて、ほのかは静かに頷いた。

「それはそうと」

「?」

ガラリと明るい、いつもの口調に戻ったほのかの切り出しに、アーティが首を傾げて先を促す。

「アーティの気持ちに気付いたのは別にわたしが雫の親友だからじゃないよ。もうみんな知ってるんだから」

にこにこほのかから投げられた爆弾により、夜の小笠原諸島の海岸線をアーティの悲鳴にも似た声がこだました。

「真紅」と「夜」

アーティの夏休みは、先日のバカンスのような楽しい日々ばかりではない。むしろ授業がない夏休みしておくべきことは山ほどある。アーティはMMA部に所属しているので部活動に費やす時間も多いが、部活動以外の余暇はほとんど調査に費やしていた。

「直近で魔法系の部隊に加入した経歴不詳の魔法師はヒットせず、か……タイムマシンの性能限界と式神遣いの言葉、両方を信用するならやっぱり2095年なんだけどなあ」

アーティが調査しているのは大亜連合軍の魔法師に関する人事の情報。当然機密情報なのだが八雲の情報網を借りて調査をしている。時間旅行というものの性質上、アーティと同じく敵対する未来勢力が2095年にやってきていたとは限らないのだが、当時の技術の粋を集めた「De Lorean」でも25年の遡行が限界だった。それ以上は慣性中和の干渉力要求量が跳ね上がってしまうために不可能だったのだ。世界最先端の技術でも25年が限界であり、そして仲間に「伝えておく」と暗に言った式神遣いの言葉からは、既に仲間がこの時代に到着していることを指している。

「調査可能な場所にいるなら、そもそも匂わせないか」

わざわざ式神遣いが匂寄せた時点で足取りを掴むことは諦めていたが、ダメ元というやつだ。ダメ元は期待通り、徒労に終わった。

成果が得られないのなら、八雲のネットワークを開いたままにしておく理由はない。速やかに回線を閉じて座ったままアーティは思慮に耽る。

（未来勢力の敵対によって、達也さんと深雪さんを守るという使命の難易度は上がった）

アーティとしては達也を悪目立ちさせなければ目をつけられることもなくなり、少なくとも達也と深雪にあのような悪意が向けられる時期を先延ばしすることはできただろう。だが、達也が世界を滅ぼす

と知っている者が他にもいるならば、その意味はかなり薄くなる。

であれば、アーティが取るべき対策も自ずと自分の望みからはかけ離れてこざるを得ない。

(確実なのは)

達也と深雪を抹殺してしまうことだ。簡単な方法、ではなく確実な方法である。成功したならば確実に目的を達成できる方法。そしてその実現可能度についてだが。

(先手を取れば確実に可能だ)

現時点でアーティは今の達也ならば先手を取れば斃すだけの力を持っている。問題は、未来における達也に対してはアーティが先手を取れたとしても恐らく勝てないであろうことだ。これは、達也達を抹殺するのが先送りになればなるほど、確実な手段は実現可能度が下がっていくということを示す。

(達也さんたちがオレを弟子に取ったのは、万一の際に自分を止める存在を作るため。いざというときには躊躇してはいけない)

この思いが結局の所、達也と深雪に対してイマイチ心理的距離を詰められない要因となっている。未来を変えられたと確信できなければ、達也が対処不能な存在になる前に抹殺しなければならぬ。その事実が、達也や深雪と接する度にアーティの心に重くのしかかる。

(その未来を変えるハードルが格段に上がったことは確かだ)

アーティが達也達を手にかけてして未来を変えたと言える条件は1つではない。1つは、達也たちが表舞台に立つことを防ぐこと。そして1つは達也たちに仇なす勢力を滅ぼす事である。

(だが、そのどちらも確実ではない)

結局の所能ある鷹に爪を隠させても見抜く者は見抜くし、それで火の粉がかかれば振り払う。達也たちが表舞台に出ることを完全に阻止するのは不可能だし、そして達也が世界を滅ぼす力を持つと知れば敵対するのは大亜連合だけではない。文字通り世界が敵に回る。

(だが、達也さん達を抹殺する以外にも一つだけ、確実な方法がある)

それは、達也を超える存在に自分になること。だが、今のアーティでは未来の達也には勝てない。アーティには時間が必要だ。その時

間を稼ぐために、できる限り達也が目立つことを避け、敵対する勢力の力を削ぐことが必要だ。今自分がするべきことはそれに尽きると再度結論を出してから、アーティは席を立った。

調査に行き詰まり気分転換にと夜風を求めて夜の街に出る。夜とはいえ真夏の熱気はビルの立ち並ぶ地区ならばまだ残っており、故に外を出歩く人々の服装は軽装だ。

その中でベストを羽織っているアーティの姿は少し暑苦しい。だが魔法師は所持するCADを誇示しながら歩くわけにもいかない。まだまだ社会の中では魔法師は兵器であり忌むべきもの、恐ろしいものと認識されているのは25年後の未来でも同じだ。もちろんCADの小型化が進み選択しているCADの形態によっては気楽な格好をできる魔法師もいるのだが、アーティの使用する情報端末形態の汎用型CADはそこそこ大きさがあり、ベストの内ポケットにしまわなければ人目についてしまう。

だが不意にアーティはすれ違う一般人の数が減っていることに気が付いた。特段夜遊びをしに来たわけではない。ふらふらと足を向けるうちに人通りの少ない住宅地に入ったあたりでアーティは違和感に気が付いた。

(住宅地とはいえここまで人が通らないものか)

そう怪訝に思いながら魔法発動の兆候を探るが、感じ取れた兆候はない。魔法発動の兆候がない以上は自然現象であるように思えたが、アーティはこのまま警戒しながら夜歩きを続けても気分転換にならないと考え踵を返した。

「ほう。完全に気配は断ったはずだが」

踵を返したアーティの背後から聞こえてきたのは、低い男の声。アーティはその声に振り返ることをしない。男の声とともに、複数の魔法師の気配が同時に現れたからだ。

「ふむ。場数も相当踏んでいると見える。これで経歴が一切出て来ないのはますます不自然だ」

値踏みするような視線が四方からアーティの身体を舐め回すように注がれる。その視線は愉快なものではなかったが、アーティを凍りつかせたのはその次に聞こえてきた声だった。

「ありがとう、貢さん。後は私が話をするわ」

アーティはこの声を知っていた。だがまさかこんなところで聞くとは夢にも想っていなかった。

「四葉真夜……………様……………」

思わず振り返り声の主を確かめたアーティは、自分でも意識せぬ間に声の主の名を呟いていた。

「私を知っているのね」

その呟きに対して目を細めて発せられた真夜の声は人の神経を凍てつかせるような冷たさを放っていた。

「!?」

その殺気とも呼べる気配にアーティが気付いたのが先か後か。アーティと真夜を取り囲む空間から、あらゆる光が消滅した。もともと仄暗い住宅地の路地ではあったが、星の明かりに月の明かり、街灯の明かりなどで真つ暗というには程遠かったのだが、この瞬間にはあらゆる光が存在しなかった。いや、厳密に言えば、あらゆる光は収束され、真夜とアーティを取り囲む空間の上部に無数の光点となったのだ。

一瞬後、その光点から無数の光の筋が放たれた。

収束系魔法、「流星群」ミーティア・ライン。指定空間内の光を収束させ、まず光の筋が通る場所を確定させ、その軌道上に存在する物体を気化させて光が通る状態を後から確保するという調整運命的な発動機序を持つ、「夜」とも呼ばれる四葉真夜の固有魔法である。

2人を包んでいた夜の帳はゆっくりと消滅し、そこには真夜のみが立っていた。

「よく間に合わせたものね」

感心したように呟く真夜の声に呼応するように、真夜に対峙する

アーティが姿を表す。

完全光学迷彩。対象物の光透過度を100%にすることによって隠密行動を補助する魔法だが、光が通れない場所に光を通すために穴をあける、という理屈の真夜の「夜」を完全に無効化することができ。だが真夜の知る限り、完全光学迷彩魔法はまだ研究段階であり、実験レベルでも成功はしていないはずだった。

「貴方のことに興味がわきました。貢さん、彼を本宅にお招きしたいと思えます。お連れしてください」

「……………御意に」

真夜の奥から真夜の言葉を受けて先程アーティに声をかけた男、黒羽貢が前に出る。

「あら、貢さんのことも知っているのね。貢さん、その子は丁重に扱ってあげてくださいな」

貢の顔を見たアーティの反応からアーティが貢を知っていることを見抜きそう声をかけた真夜の言葉に、アーティと貢は同じように顔をしかめた。アーティは貢を知っていることを気取られたことに、貢は目の前の見知らぬ少年が自分を知っているという事実には。

丁重に、と言われ拘束することを諦めた貢の手招きに、アーティも抵抗することなく応じる。四葉に目をつけられて逃げ切ることは不可能。それを理解しての行動だった。

貢の運転する車に揺られること2時間。八王子を出たあたりでアーティは目隠しをされ知覚系魔法が使えないようにキャスト・ジャミングのジャミング波を当てられている。四葉本宅の場所を覚えさせないための措置とはいえ、特にキャスト・ジャミングがアーティには辛かった。2時間もの間キャスト・ジャミングを当てられフラフラになったアーティは、長野県と山梨県の間が存在する、地図にはない村に連れられていた。

本宅前で目隠しを取られたアーティは、フラフラとした足取りで貢の後に続いて四葉家本宅へと入っていった。

四葉家本宅へ入るなり、女中が出迎え、上着とCADを預かると言われた。アーティは一切逆らうことなく上着とCADを渡し、女中に連れられるまま今へと通された。

「窮屈な思いをさせてごめんなさい。今年はいいい茶葉が入っているの。楽しんでもらえと思うわ」

既にテーブルの奥でティーカップを手にしている真夜からアーティに労いの言葉がかけられる。真夜の席の向かいにはティーカップが一つ置かれており、そのティーカップからは湯気が立ち上っている。

作法に則り直立して真夜の言葉を待つアーティに、真夜が手振りです座るよう促すと、申し合わせたように女中が現れ椅子を引いてアーティを座らせた。

「それで」

中身を改めもせずに口をつけたアーティの度胸に感心しながら、真夜はティーカップを置き切り出した。

「今回貴方に近づいたのは、貴方が何者かを直接お聞きしたいと思つてなの」

真夜の言葉にアーティは顔色ひとつ変えずに、いきなり本気で殺しに来たくせに、と内心ひとりごちる。

「そうしたら私のことを知っているものだから、つい、ね？」

そんなアーティの心の中を読んだのか、ニコリと笑いながらごめんなさいね、と形だけの謝罪をする。

「貴方のことは調べさせてもらったわ。反魔法組織の壊滅、香港系犯罪シンジケートの壊滅。この2つの事件を起こしたのが貴方だというところまでは調べがかったの」

アーティの中で四葉に現時点で目をつけられる理由はそれしかなかった。だがこんな早くに目をつけられるとは思っていなかったのだ。昔から（とはいっても未来においての話だが）四葉家には恐ろし

い印象を持っていたが、それでも認識不足だったとアーティは悔やんでも仕方のないことを悔やんだ。

「でも貴方本人のことになると何もわからない。達也くんと同じ、九重先生のお弟子さんということしか、ね」

淡々と言葉を紡ぐ真夜の表情は、内心に抱えるものを一切感じさせない不気味さを纏っている。

絶体絶命とも言えるこの状況を、しかしアーティは深刻に考えてはいなかった。

(もともと四葉には取り入らなければいけなかった。これはこれだチャンスと言えろ)

達也と深雪を守るには彼等に近づかなければならない。そのうえで四葉と関係を持たないというのは現実的ではなかった。アーティは四葉というものに対して強く苦手意識を持っていたがゆえに具体的な段取りは決めていなかったのだが、回避できない状況に陥つてこの機会を活用しようと思いついたのだ。

「真夜様」

口を開いたアーティの、真夜への呼称が変化していることに気付いた真夜は初めて、怪訝そうな表情を浮かべる。

「オレは未来から来た、未来人です。2120年から、時間逆行魔法を用いて25年を遡行し、この2095年にやってきたんです」

真夜は突拍子もない話に怒るのでもなく、驚くのでもなく、笑うのでもなく、ただ真剣な眼差しで続きを促している。

「2120年においては、貴女の甥である達也さんが世界を滅ぼしました」

この言葉にも、真夜は顔色ひとつ変えない。

「オレはその未来を変えるために、未来からやってきたんです」

ここまで聞いて初めて、真夜が口を開いた。

「それなら達也さんを殺してしまうのが早いんじゃないかしら」

「もちろんそうです。ですが達也さんはオレの恩師です。できることなら、別の方法で未来を変えたい」

その質問を皮切りに、真夜は様々な質問をアーティに投げ、それに

アーティは全て嘘偽りなく答えた。

時間逆行魔法の理論、アーティの両親、未来での四葉家、未来での達也達、未来での国際情勢。

信じる根拠が存在しないアーティの言葉を確かめるために質問を重ねた真夜は、最終的に、アーティの言うことを信じることにした。「お姉さんのことについては、未来のこととはいえ可哀想なことをしましたね。それで、結論なのだけれど」

真夜がアーティをどうするのか。アーティはゴクリと息を呑み、真夜の言葉を待つ。

「貴方は既に四葉の秘密を多く抱える存在でありながら、今の四葉にはない技術を多く持つ存在でもある。そんな貴方を他所に取られることは許容できない。でも始末してしまうにはあまりに惜しいわ。どうかしら、四葉の一員になつてくれないかしら？」

真夜のこの結論は見えていたといえれば見えていた。未来においても、達也への対抗策になり得ると踏んだ真夜は真紅の双子を手中に収めることを望んだ。とはいえ、真夜の予想通りの結論にアーティはほっと胸を撫で下ろした。

「達也さん達を表舞台上に上げたくない貴方の思惑を達成するためにも、この提案は貴方にとつて魅力的なものだと思っただけけれど」

続いた真夜の言葉に、アーティは目を剥いた。四葉の一員になる。その言葉の意味が予想より遥かに大きな意味を持つ可能性を、真夜の言葉の端から感じ取ったのだ。

「真夜様、まさか……………」

四葉にある数々の分家。その一つに名を連ねたところで達也達を御しきれはるはずがない。それを分かっているはずの真夜の口から、なおも達也と深雪の制御に四葉に名を連ねることが役に立つという言葉が出るという事は、

「あら。大した頭のキレね。選択肢の一つくらいに考えていたのだけれど、もう決まりでもいいかもしれないわね。

ええ、貴方は私の息子ということにします。場合によっては、貴方に四葉の次期当主を任せます」

真夜の口から出たように、四葉の棟梁を務めるという意味に他ならなかった。

未来において、四葉の棟梁は深雪が務めていた。真夜がそれを選んだのは、四葉が達也と深雪を制御するに当たって、あの兄妹に対抗できる戦力が四葉にいない以上、達也への楔である深雪を四葉家当主という責務に縛るのが最も得策であると考えたからだ。しかし、ここにアーティというあの兄妹に対抗できる戦力を手に入れた以上、アーティに四葉の全てを握らせることが最善の策だと考えたのは、思えば自然なことだった。

「ですが、オレは完全によそ者ですよ」

分家の者が黙っていないだろう、というアーティの懸念は、もつともなものだった。だが、真夜がそこを考えていないわけはなかった。「そこは貴方が深雪さん達を味方につければいいのよ」

現時点でも達也は分家のものからは疎まれ蔑まれている。それでも未来の四葉継承の折に深雪が当主としての座を勝ち取ったならば、その深雪が支持することと真夜の息子であるという公表があれば十分アーティを四葉の当主にすることができると踏んでのことだ。つい先刻未来から来たというアーティの言葉を聞かされ、既に未来の事象から改変プランを計算している真夜の計算高さにアーティは思わず目を剥いた。

「貴方が私の息子であることを公表するのは再来年の慶春会です。それまでに達也さんと深雪さんと仲良くなっておきなさい。それと、ガーディアンのことなのだけれど」

「ガーディアンは不要です。達也さんに勘付かれれば、警戒されます」
「それが賢明でしょうね。有事の際には達也さんに守ってもらえるように、仲良くなっておくことね」

達也に守られるようでは共通の目的は達せられないのだが、真夜なりに空気を良くしたかったのだろう。愛想笑いで応じながら席を立つとうとするアーティに、真夜は少しだけ、言葉を続けた。

「……………本当は、達也さんが世界を滅ぼすならそれでもいいと思ってるわ。でも、私はあの子が少し可哀想だとも思っている。貴方のよ

うな子が未来から来て、あの子を殺すのではなく守ることで未来を変えたいというのなら、貴方に協力することが……いえ、なんでも無いわ」

アーティはそれに似た言葉を聞いたことがあった。真夜は姉の深夜は真夜をとある事件の爪痕から救うために真夜のそれまでの経験を全て知識に変質させた。そのことで真夜は深夜を恨み深夜は自分を罰するように魔法の過剰行使を繰り返し体を壊して夭折したのだが、それを晩年になって姉の行為が愛ゆえの行為だったと認識し、悔いたと言っていた。

(最近になって、とは。やはり貴女は嘘つきだ)

もう既に悔いているじゃないか、と思いつながら、世界中から恐れられる四葉の当主の人間性を目の当たりにしたことを安堵しながら、席を立った。

「失礼します」

居間を背に歩き去ったアーティを見ながら、真夜は無言で脇に控えていた葉山にアーティを送り返すよう手振りで伝えた。

天敵からの呼び出し

「ひ、卑怯なっ……………」

四葉家の手の者に半ば拉致されるような出来事の翌日。自分の置かれた状況の整理もままならぬ状態でアーティは自分の情報端末が受信した一通のメッセージを睨んで歯噛みしていた。

「そもそもナンバーを教えた覚えは……………委員長か……………」

件のメッセージはパーソナル・ナンバーを教えていないはずの相手から送られてきたものだが、ナンバーの漏洩元についてはあつさり推理できた。

アーティが睨んでいるメッセージの文面は以下の通りである。

「工藤スチュアート君

数件、お話があつて連絡しました。明日の部活には参加するのですよね？では部活後の17:00に生徒会室でお待ちしています。

七草 十文字」

十文字との連名なだけあつていつものような砕けた口調ではないが、手短に要件のみを書いていたり遠慮の欠片も感じられない。「会頭と連名じゃあ無視もできないし……………」

ほとほと困り果てた表情で途方に暮れるが、どれだけ考えてもこれを切り抜ける妙案は出ない。覚悟を決めるしかないと半ば諦めるようにアーティは床に就いた。

「始め！」

翌日。本日のMMA部の練習メニューはスパリングだ。開始の

合図とともに闘技場内で同時に複数の組がスパarringを開始する。アーティは全身の力を抜いた状態から素早く重心を前に移し、膝を抜くようにして開始と同時に予備動作なく接近の初動を繰り出す。これを読んで開始とともに後ろに下がりながら、魔法使用のための時間を作るのは1年生でありながらMMA部内でも有数の実力を誇る十三束鋼だ。

「――！」

後ろに下がりながら初撃を準備していた十三束は、アーティの寄せが予想よりも早いことに狼狽する。アーティは縮地で距離を詰めたから、加速魔法を用いて更に距離を詰めていたのであった。未だ開発途上の複雑な魔法式を構築しようとした十三束に対して、基礎単一魔法を拘束でキャストしたアーティ。十三束の魔法式が構築されるよりも早く、アーティの初撃が繰り出される。パラレルキャストで準備されていたアーティの拳を発動ポイントに設定した接触魔法が、基礎単一系の加速魔法に少し遅れて発動する。アーティの拳が十三束の肩口を穿つたことにより発動し、十三束の身体を更に後方に吹き飛ばすことは、なかった。

「レンジ・ゼロ」。十三束が持つ異名である。これは十三束が、体質として核が非常に強力で想子サイオンを強く引き付け、自分の想子サイオンを遠くに飛ばすことができないために遠隔魔法を使えないことを揶揄したものであるが、同時に近接戦闘においては無類の強さを誇ることに敬意を示す異名でもある。

この異名を持つ十三束は、自分の体内に超高濃度の想子サイオンを常に纏っている。これにより、彼の身体に作用しようとした魔法式はその大量の想子サイオンによって吹き飛ばされ、機能しない。「接触型術式解体グラム・デモリッション」と呼ばれる、最強の対抗魔法「術式解体グラム・デモリッション」の亜種だ。

アーティの拳を通して発動するはずだった魔法は不発に終わったが、加速魔法によりかなり重心の乗ったアーティのパンチそのものは十三束の肩口を抉っている。防具を着けてはいるものの衝撃は相応にある。並の魔法師ならば展開していた魔法式の展開に失敗しても不思議ではないが、十三束はここまでは既定路線と身構えていたから

か十三束が準備していた魔法式は展開を終え、その効力を発揮する。その瞬間、十三束の体は左の肩口を殴りつけられた直後であるにも関わらずその衝撃に逆らって右足で中段に回し蹴りを放つ。

「——っ！」

左肩に衝撃を受けてよろけながら右足だけを振り出したように見えるその回し蹴りは、そのような体勢から放ったとは思えないほど素早く、重い一撃だった。それに対して咄嗟に左腕を出し、左腕と頭の相対位置を硬化魔法により固定して耐える。そこに十三束が繰り出した右足を引ききらないままに右手での突きを繰り出す。およそ力を込められる体勢ではないが、その突きの鋭さはもろに受ければ大ダメージは必至の速度を兼ね備えていた。

アーティはその突きを先程十三束の右肩に叩き込んだ後引っ込めていた右手を差し出し顔の真横で受ける。右肩を前に半身の形になっていったアーティはその突きの威力で右肩が後ろに下がる形で、時計回りの回転をしながら十三束の突きの威力を殺すことなく受けきる。時計回りに回ったことで全面に出た左肩から、硬化魔法を解除し自由になった左手をまっすぐに伸ばして突きを放つ。そこにはアーティの臂力に加え十三束の突きの威力、さらにそれを古式魔法「転回」によって増幅した威力が乗っていた。

右腕を差し込む形でアーティに密着していた十三束の脇腹に重い一撃が入る。十三束はそのまま数m吹っ飛び、倒れ伏した地面で激しく咳き込んだ。

「今日は一段と容赦ないね」

少し申し訳無きような顔で倒れた十三束に手を貸すアーティに、十三束は拗ねたような顔で文句をつけてきた。

「そうか？」

「今日はいつてもより殺気立って見える。何かあった？」

だが十三束は文句をつけたのではなくアーティを案じていたようだ。

「…………いや」

十三束の言葉にこの後に控える気が重い用事を思い出し、苦虫を噛

み潰したような顔で辛うじて否定する。

「その顔は明らかに何かあった顔だね」

かなり思い一撃を食らったはずの十三束はもうすくつと立ち上がってアーティの顔を覗き込みながら半笑いでアーティの肩を叩く。

「……………これからあるんだよ」

それだけ言っただけのため息をついたアーティの肩を叩きながら、頑張れよと短く励まして十三束は去っていった。

「……………はあ」

もうすぐ部活も終わる。この後には逃げ出したくなるような用事が控えていることを思うと、アーティはため息が止まらないのであった。

「来たか」

「来てくれてありがとう。さき、座って座って」

時間丁度に生徒会室に入室したアーティを待っていたのは真由美と克人だった。相変わらず表情の読めない真顔でどつしりと構える克人と、楽しそうに手招きする真由美。アーティは不興を買わない範囲でできるだけだけゆっくりとした動作で椅子に座った。

「数点話があると伺いましたが」

無駄話は真由美の土俵だ。さつきと本題に入るに限る。多少強引ながらもアーティは本題に突入する流れを作った。

「うむ。単刀直入に言おう」

それに対して口を開いたのは、意外なことに克人だった。

「工藤。お前は、十師族の一員だな？」

唐突な質問の形をとった確認。アーティはこの質問の意図が読めず、隣に座る真由美をちらりと見るが、真由美も真面目な顔でアーティの答えを待っている。

視線を克人に戻すと、その視線は偽りや韜晦を許さない眼力が、克

人からの視線に込められていることを感じ取った。

「いいえ。オレは十師族の一員ではありません」

克人の問いは、嘘を許さぬだけの重圧があった。それに対してアーティが否定を返すことができたのは、アーティが逡巡の結果自分は十師族の一員ではないと考えたからである。

自分の生まれは紛れもない十師族ではあるものの、今この時代においては自分は十師族としての立場を取る勢力の中にならない。つい一昨日四葉への加入を約束はされたが、それも所詮口約束である。この場合、肯定を返すほうが嘘偽りに当たるとアーティが判断したがゆえの返答だった。

「……………そうか」

しばしアーティの瞳を覗き込み、返答の真偽を測る克人。隣の真由美は克人の判断に委ねているようだ。

「ならば、師族会議において、十文字家代表補佐を務める魔法師として助言する。工藤、お前は十師族になるべきだ」

「……………」

「そうだな…七草なんか、どうだ？」

「……………はい？」

「ええっ!?!」

唐突に出された名前に、アーティも、名を出された真由美本人も素っ頓狂な声を上げる。

「……………もしかして、結婚相手としてどうだ、という意味でしょうか?」

「そうだ」

恐る恐る発せられたアーティの確認に、ノータイムで肯定を返す克人。これには真由美も絶句している。

「……………会長にはむしろ、十文字会頭のお名前が上がっているのではないのですか?」

「なっ!?!ちよっつ、あー君!?!」

これはむしろチャンスだと瞳に悪戯な色を浮かべて切り返したアーティに、真由美が狼狽を見せる。

「確かにそういう話もあるな」

「十文字くん!？」

「会長はタイプではないのですか？」

「いや？七草はこれで中々、可愛いところがある」

「……………」

この克人の臆面もない返答には、悪ノリをした当のアーティでさえ絶句を免れなかった。克人の隣に座る真由美は可哀想に真っ赤になって縮こまっている。

その様子に些か以上の憐憫を覚えたアーティは自分で蒔いた種を回収しにかかる。

「……………今のオレには十師族の女性と結婚するという事は考えられません。これでも、心憎からず思っている相手がおりますので」

アーティの身を切る助け舟に、真由美がはつと顔を上げる。感激したような瞳を向けられ、アーティは少しばかり心が痛む。

「そうか。だが、覚えておけ。十師族の次期当主に正面からの1対1で勝利するというこの意味は、お前が考えているよりずっと重い」
アーティはこの言葉でようやく克人の意図を知った。将輝を倒したことで工藤スチュアートという魔法師の立場は十師族でないがゆえに危うく不安定なものになる。そういったものから守るために、十師族に名を連ねることを言葉通り助言しているのだ。

「肝に銘じておきます」

アーティの姿勢を正した返事にうむと頷くと、克人はその視線を真由美に向ける。

「それでは七草。もう一つの要件はお前から頼む」

「ええ」

先程まで慌てふためいていた真由美だが、アーティの助け舟により正常に戻っている。もう一つの要件とやらを切り出そうとアーティに向き直る真由美を見ながら、若い真由美さんはまだ素直なところが残っているんだなあなどと失礼なことを考えていた。

「あー君。今度の生徒会選挙のことなだけど」

真由美が会長を務める生徒会は、この秋に任期が終わる。当然次期

生徒会を指名する生徒会長を選ぶ選挙が行われる。真由美の話題はそれについてだった。

「貴方に、生徒会長に立候補してほしいの」

真由美の言葉は、アーティが予想もしない内容だった。目をパチクリさせながら真由美を見つめるが、真由美は至つて真剣な眼差しでアーティを見返している。冗談ではないようだ。

「…………オレは1年生ですが」

「前例がないわけじゃないわ」

「そういう意味で言ったのではなく。今年の2年生に適任者がいるのでは、ということですよ」

真由美の言葉を聞いてアーティが思った正直な感想は「やりたくない」であつた。来年ならまだしも、2年生を差し置いて生徒会長になつたという目で見られるのは正直御免だ。

「そのことなんだけどね……………」
「？」

「はんぞー君は部活連次期会頭、そしてあーちゃんは固辞してて…………」

困り顔で呟いた真由美の言葉は頷けるものだった。部活連は何かと腕が立つほうが務まるだろうし、あずさが自分には務まらないと尻込みするのも容易に想像できる。そしてアーティとしてはこの2人意外に生徒会長が務まりそうな人材がいなかった。

「それで1年生に話が行くのは納得したんですが、なんでオレなんですか？新入生総代の深雪さんではなく？」

「あー君にお願ひしたのは、一科生と二科生の差別意識について、わたしの政策を引き継いでもらえると思うからよ。わたしの後釜に差別的な会長を置いて、逆戻りするだけなもの」

「それなら深雪さんも同じですが」

「もちろん、深雪さんについても達也くんを通じてお願いするつもりよ。ただ…………」

「ただ？」

「差別撤廃を推し進める上で、会長を務めるのは深雪さんよりもあー君の方が都合がいいの」

「？」

なぜ深雪がダメで自分ならいいのか、心当たりのないアーティは小首をかしげる。

「深雪さんが主導でやると、どうしても達也さんのためっていう印象を拭えないのよね」

それに答えた真由美の言葉に、アーティはあー、という声を漏らす。「それに、選挙をやるのだから、深雪さんの信任投票より候補者が複数いたほうが健全だと思って。お願いできるかしら？」

候補者が一人であれば選挙は信任投票になる。信任投票では、どうしても生徒間に「自分たちが会長を選んだ」という意識が芽生えない。それを避けるために候補を複数立てるとするのはアーティにとっても領ける話だった。

「分かりました。1つだけ条件をつけます」

「何かしら？」

アーティは生徒会選挙に出馬する覚悟を決めた。だが、このくらいの我儘は許されて然るべきだろうと、たった1つの条件を口にする。

「金輪際オレをあー君と呼ばないでください」

「……………そんなに嫌だったの？」

小首をかしげてみせる真由美に、アーティは大仰に首を縦に振ってみせる。

「わかったわ。アーティ、でいいかしら？」

「それをお願いします」

かくして、生徒会選挙に出馬することと引き換えに、アーティは幼少期から付けられていたあだ名を消し去ることに成功したのであった。

八雲の忠告

MMA部の部活帰り。九校戦で深雪が飛行魔法を披露し、その起動式が世に出てから、アーティは遠慮なく飛行魔法を使用できるようになった。アーティの飛行魔法への熟達の様子は周囲を驚かせたが、九校戦にて獅子奮迅の活躍を見せたおかげか驚かせることはあっても怪しまれることはなかった。

一高から飛行魔法で寺に戻ったアーティを、怠惰と責める者はいない。飛行魔法は現状その修正頻度の高さから消耗の激しい魔法であり、飛行魔法でひとつ飛びしてこることもまた魔法を燃費良く使うための鍛錬であることは、八雲を始めとし門下生たちも心得ていた。

いつもなら帰宅を歓迎する声もかけずに掛かり稽古が始まるころであるが、今日に限って誰もかかってこない。

嫌な予感がして境内の気配を探るが、幸い敵襲を受け全滅したということはないようだ。

「——っ!!!」

境内を歩き回る門下生たちの気配にほうと息をついたところで、アーティは言いようのない寒気を背筋に感じて身を振りながら振り向いた。

振り向いたアーティの右の頬を、八雲の人差し指がプニユッと突いた。

「……………」

不本意そうに不貞腐れるアーティに、満足げな八雲。

「まだまだだねえ」

「……………」

楽しげな八雲にジト目を返すアーティ。不覚を取ったのは確かだが、いつもと異なる光景に心配したアーティへの仕打ちがこれなのはアーティとしては納得がいかない。

「いやあ、失敬失敬。君を驚かせるためにお弟子さん達を下がらせて

いたわけではないよ。忍んでしまうのは僕の忍びとしての性さ。許してほしい」

つるりと剃られた頭をポンポンと叩きながら軽口混じりに謝る八雲に、アーティはじつとりとした視線を浴びせ続ける。

「それで、今日お弟子さん達を下がらせていた理由はね。今日の鍛錬をお休みにするからなんだ」

だが、八雲の続けた言葉にアーティは真顔に戻ってしまった。これまで、八雲の鍛錬が欠かされたことはない。前触れもなく唐突に現れた例外に、アーティは即座に反応することができなかつた。

「それは……なぜですか？」

やつのことで理由を尋ねたアーティは呆然としながら八雲の言葉を待つ。

「うん。今日は君とゆつくり話がしたいと思ってね。よければこのまま話したいんだが、いいかな？」

話すことがある、と答える八雲に、アーティは無言で頷きを返す。真夜との件については既に全てを報告している。アーティは混乱する思考の中で、先日の真夜の件についてかもしれないと一瞬考えたが、その仮説はすぐに続けられた八雲の言葉によって否定された。

「話というのは、君のお姉さんのことだ」

八雲の言葉に、アーティはますます混乱を極める。自分の身の上話をした際に当然亡き姉についても話している。だが、現時点では存在すらしていない姉について、八雲から話をされるとするのは不可解な話だった。

「その、ね。僕から言うのは野暮かと思っただが。どうにも言うつもりがないのか、伝えたくても伝える手段がないのか、一向に伝えななし。だが僕はそろそろ伝えておくべきだと思っただよ」

アーティにとって意味不明な言葉を続ける八雲の言葉は、どこか言い訳みている。一体何について言い訳をしているのかさっぱり心当たりのないアーティは、そんな八雲の様子に混乱を深めるばかりだ。

「……………」

「？」

突然言葉を切つてアーテイの顔をじつくりと見つめる八雲に、アーテイは首を傾げる。どうにも八雲との間に致命的なすれ違いがあると感じたアーテイは口を開こうとするが、その試みは思わぬ闖入者の登場により妨げられた。

「私もそろそろ、と思っていたのですが。なかなか切り出せなかったんですよ」

ころころと笑いながらその場に現れたのは、八雲の門下生の一人だった。

「昌栄さん。何か知っておいでなのですか？」

「昌栄くん……？」

訳知り顔の兄弟子に問いを投げたアーテイだったが、八雲は彼の登場に驚いているようだ。だがアーテイがその事に気づいて疑問に思う前に、昌栄と呼ばれた八雲の弟子の口から信じがたい言葉が飛び出した。

「今の私は昌栄さんではないわ、アーテイ。私は、サラよ」

亡き姉の名を名乗る兄弟子に、アーテイの意識が凍りつく。八雲の門下生は一人としてアーテイの素性を知る者はいない。それは目の前にいる昌栄とて例外ではなく、故に伊達や酔狂でアーテイの亡き姉の名を名乗ることはできない。何よりも、アーテイの直感が全力で自分の目の前の兄弟子が今は亡き姉そのものだとしてアーテイに囁いていた。

「……………初めまして、サラくん。突然で悪いのだけれども、昌栄くんはどこかな？」

落ち着いた口調で弟子の意識の在り処を問う八雲の表情には、隠しきれない後悔の念がにじみ出していた。藪をつついて蛇を呼び出したという後悔が。

「お久しぶりです、大師匠。とはいっても、私はいつも大師匠の教えをアーテイとともに受けていました」

八雲の言葉に嫺やかに腰を折りお辞儀をしながらころころと鈴が鳴るような笑いを漏らしながらゆつくりと挨拶を口にする。

「……………昌栄くんはどこかな」

無視された質問を再度口にした八雲の表情には絶望が色濃く表れていた。自分の姉を名乗る存在に何らかの報復をすることを八雲が完全に諦めていることを感じ取り、アーティはなおも絶句する。

「昌栄さんは無事ですすよ。この中で眠っておられます。今の記憶は残りませんが、私がアーティの中に戻れば全て元通りですよ」

実に楽しそうにころころと笑いながらサラは八雲の質問に答える。今のところはそれを信じるしかない。

「オレの中に？姉さんはオレの中にいたのか？」

サラが口にした一つの言葉がアーティを我に返らせ、一つの確認を口にさせる。

「そうね。全て話してしましましょうか。せつかく大師匠が下さった機会ですもの」

淑やかに人差し指を口に当て、小首をかしげるサラの仕草は、その肉体が筋骨隆々とした昌栄のものであることを忘れさせるほどに艶めかしかった。

「アーティも知つてのとおり、私は死んだわ。四葉家の洗脳技術によって、私が精神構造干渉魔法を行使するに相応しい構造の魔法演算領域を持てるようにする手術が失敗して。そのプロセスは私の魔法領域にフラッシュ・キャストの技術を応用し少しずつ精神構造干渉魔法を刷り込み、私とその精神構造干渉魔法を起動すればその精神構造干渉魔法によって改造された私の魔法演算領域がそこでインプットされた新たな精神構造干渉魔法を起動し、そのようにして私の精神構造を段階的に改変するというものよ」

サラが施された手術の内容は、アーティが知っていたものではなかったが理論として理解できる話ではあった。精神構造干渉魔法を使いこなしたのは四葉深夜ただ一人であり彼女亡き未来世界において、サラの精神構造を精神構造干渉魔法を使用可能なものに改変することができる者はいない。そこで、サラでも行使可能な精神構造干渉魔法をサラの魔法演算領域にインプットし、それにより少しだけ変化したサラの魔法演算領域でまたサラの精神構造を少し変化させる。

この繰り返しによって、サラを「忘却の川の支配者」の再来としようとしたのだ。

この目的は「コキュートス」を始めとし「誓約」など深夜がかつて達也に施した精神構造干渉魔法を使用可能な魔法師を再びこの世に生み出すことで達也を再び制御可能な存在にすることであった。

「手術自体はうまく行ったの。ただ、結果から言えば私の負担を軽減するために自動的に次の精神構造干渉魔法をスケジューリングする構造にしたことは間違っていた。度重なる急激な精神構造の改変に対して、私は恐怖から私自身の魔法行使に抗ってしまった」

サラに埋め込まれた精神構造干渉魔法はサラの精神構造を改変する魔法式に加え次に使用すべき魔法式をサラの魔法演算領域にインプットする魔法、さらには改変された後のサラが自動でそのインプットされた精神構造干渉魔法を行使させる魔法が含まれていた。このことにより、サラは膨大な回数 of 段階的な自己の精神構造改変を意図して行うことなく、最初の魔法を使用すればドミノ方式にサラの精神構造が改変される仕様になっていた。だがその途中でサラは自分の精神が改変されていく恐怖に駆られ、魔法の行使をストップしようとした。

「でも、スケジューリングされた魔法は止まらない。次々に私の精神構造を書き換えてゆく。恐怖で支配されて立ち止まった私の意識を置き去りにして、私の魔法演算領域は数分にして完全に精神構造干渉魔法を使用可能なものに変化したわ。でも置き去りにされた私の意識はもはや魔法演算領域をコントロールできなくなっていたの。コントロールを失った私の魔法演算領域は今まで行ってきた『精神構造干渉魔法を行使するのに適したカタチに自己を変えていく』行為を継続したわ」

サラの言葉に八雲もアーティも息を呑む。コントロールを失ったサラの魔法演算領域はそのまま更にサラの魔法演算領域を改造し続けたのだ。「忘却の川の支配者」の更に向こう側へと。

「最終的に、私の魔法演算領域はすべての精神と融合するために自己と外界の境界線を消し去ることを選んだ。その瞬間に私の肉体は精

神を失い、即座に死んだの」

サラが死んだあの日。未来にある過去。アーティはサラの目の前にいた。サラの手術が終わるのをサラの目の前で心待ちにしていた。あの日のアーティにはサラが眠るように死んだということしか分からなかったが、そのサラから語られた事故の裏側は壮絶なものだった。

「じゃあ……その姉さんが今こうしてここにいるのはなぜ？」

サラの口から語られたのはサラが死んだ一部始終だ。サラの死を受け入れていたアーティにとって目下最大の疑問はサラの死の経緯ではなくなぜここにサラがいるのか、ということだった。

「世界との融合を選んだ私の精神は、広すぎる世界へと解き放たれ極限まで希釈されて消滅するはずだった。でもその直前、アーティ。私の意識はあなたの意識と融合することで消滅することを免れたのよ」
「オレの意識と……？」

「そう。あなたと融合した私の精神は私とあなたの精神を即座に同じ肉体の中で分離した。双子とはいえ意識が融合すれば自我の喪失は免れない。私の精神の自衛行動として、その精神分離は行われた。そのことがあなたのことも救ったのは、喜ぶべき幸運ね」

意識せぬ間に起こっていた自分の命の危機に、アーティは冷や汗を流す。全て無意識とはいえ、サラは自分の死に臨しながらもアーティのために戦っていたのだ。

「それからは長い年月をかけて私はあなたの中での私の在り方を変えていった。今は、私の意識はあなたの意識という広い机の片隅に小さく畳んで置かれた地図のようなものよ」

サラの例えがピンと来ず首をかしげるアーティに、サラが説明を重ねる。

「私の意識はあなたの意識を邪魔することはない。あなたの意識は広大で、その中に私は小さく折りたたまれた状態で置かれているだけだから。そして私はあなたへの影響力をほとんどなくした状態でああなたの意識の上にいるから、あなたのすべての行動は私も認識できる。そして、私はそのつもりになればいつでもあなたの意識というテーブル

ルいっぱい私の意識という地図を広げられる。そうならば私の意識の下敷きになったあなたの意識は失われ、私の意識があなたの肉体を支配する」

サラの説明は恐ろしい内容だったが、それが長い年月をかけサラによつて築き上げられた、アーティを極力害しないようなサラの精神の在り方であることはアーティも八雲も理解していた。

「最近になってアーティの外に出られるようになったの。肉体の代わりに、私の精神と外界との境界線を私の魔法で定めて、ね」

アーティの中で進化を続けてきたからこそ、サラはこうして昌栄の肉体を借りアーティと会話ができている。

「本当は何度も夢の中でアーティともお話しているのだけれど。アーティの使命のために私は伏兵になるから、アーティには忘れてもらっていたのよ」

「それは無粋なことをしたね。せっかくの伏兵を暴いてしまった」

サラの言葉に、自分のお節介を詫げる八雲。

「いいえ。先程申しましたように、そろそろアーティに存在を明かそうと思っていたのです。私がアーティの精神の中に間借りしているせいで、アーティの魔法の制御能力は落ちていきます。九校戦ではそのせいでこの子は自滅しかけましたし。それに、10月に予定されている出来事については、お話ししましたね？」

だがその謝罪を否定したサラが指し示すのは、2095年に起こる「灼熱のハロウィン」。

「私なりに考えて、私は伏兵ではなくアーティと別働したほうが良いかと思ひまして」

「別働？」

「そう。今の私なら他の人に移れば戦えるから」

「えっ。そんなことできるの？」

アーティの疑問はもつともなものだった。アーティの中にいる状態ならばともかく、他の人間に乗り移って魔法行使ができるのか。だがその疑問は、魔法行使の本質を知らぬがゆえの勘違いであった。

「魔法演算領域はヒトの器官ではないの。精神の無意識領域に存在す

るものよ。だから、私が魔法を行使するときには私が乗り移っている人の魔法演算領域を使っているわけではないの」

魔法演算領域は肉体に付随するものではなく、精神に付随するもの。魔法研究の部門の中で発展が遅れている精神や^{フシオン}霊子に関する知識に関しては、精神体となったサラが実感としてもっている情報だけで100年分の新発見があるだろう。

「そういうことなのか。姉さんは今、どのくらいの魔法が使えるの？」
サラリと最先端の精神に関する研究の結論を言ったことに驚きを示しつつも、アーティはサラの魔法について尋ねる。その答えはサラではなく、八雲からもたらされた。

「彼女は今、精神に関してはこうしたいと思うだけで物事を変えられるはずだよ。魔法行使という意識ではなく、こう思ってほしいだとかこう考えてほしいと思っただけで彼女は周囲の精神体の構造に影響を与えるレベルだ」

飄々と述べているが、八雲の表情は硬い。彼の見立てが正しければ、こと彼女は精神に関して言えば完全に全能だ。

「自分の影響力をカットアウトすることはできます。今なんかは影響力を及ぼさないようにしている状態ですよ」

それに対して返された部分否定は、大筋を肯定するものだ。そのことに、アーティはもちろんその見解を口にした八雲までもが絶句している。

「ただその代わり、精神干渉魔法以外は本当に何の魔法も使えないの。基礎単一系の魔法でさえ使えないわ」

サラが精神構造干渉魔法の会得のために支払った対価は命だけではなかった。その事実にも八雲もアーティも沈黙せざるを得なかった。

「まあ、魔法師の意識を乗っ取った上で魔法師に意識を半分ほど返せば、意のままに魔法を行使させることは可能よ。何事もやりようよ」
続いたサラの言葉に八雲とアーティは沈黙を続けたが、この沈黙は絶句だった。

「……………っ！」

しばらくして何かに気付いたように飛び上がったアーティを見て、

サラがニツコリと微笑む。

「オレの経験は全て見てたってことは……………」

「雫ちゃん、いい子だと思うわよ」

今更気づいて悶絶するアーティを笑う八雲とサラの聲が、夜の丘の寺にこだました。

横浜騒乱編

横浜騒乱編Ⅰ

「七草先輩！話が違うじゃありませんか」

珍しくかなりの剣幕で真由美に詰め寄っているのはアーティだ。背の高いアーティが壁際に真由美を追い込み、上から覗き込むように迫っている今の状態は、傍から見ればかなり大胆な行動にも見える。「中条先輩は仕方ないとしても、深雪さんまで出馬しないってどういうことですか！」

真由美も珍しく額に冷や汗を浮かべて青い顔で縮こまっているので、本当にアーティが無理矢理真由美に迫っているように見えるのだが、生徒会室にいるあずさ、深雪、達也は気まずそうにそちらを見ないようにしている。

「信任投票では新会長の求心力に不安が残るとか言いながら！オレをその求心力不足の新会長に据える腹だったんですね」

アーティが怒り狂っているのは、会長選に出馬してみれば対抗馬がおらず、あれよあれよという間に新会長に担ぎ上げられたからだ。

このまま延々と糾弾を続けそうなアーティに、深雪の出馬を止めた張本人の達也が重い腰を上げ助け船を出す。

「アーティ。深雪の出馬を断つたのは俺だ」

「達也さん？」

アーティは夏休み中に行われた真由美からの達也に対する深雪の出馬の打診のやり取りを知らない。だからこそ真由美に怒りをぶつけていたのだ。

「深雪の出馬要請は直接俺が辞退した。深雪はああ見えて感情的に幼い部分がある。魔法をしばしば暴走させるところにも現れている。

深雪に生徒会長はまだ早いと、俺が断つたんだ」

達也の考えだと言われれば引き下がるしかないアーティは、魔法を暴走させるのはオレもものにだとかこれじゃあ深雪さんに会長を押し付ける計画がだとかブツブツ呟きながらようやく真由美から離れる。

「あ、アーティくんなら信任投票でも求心力が十分に得られるわよ」

ようやくアーティの圧力から解き放たれた真由美がここぞと気休めを言うが、

「それは深雪さんにしたって同じです。貴女が信任投票を嫌ったのは個人の求心力ではなく会長選の経緯の観点からでしょう」

真由美自身よく分かっている誤魔化しを冷ややかにすっぱ抜かれ、真由美は黙ってしまう。そんな光景を目にしながら、達也は真由美に変なあだ名を呼ぶことをやめさせたあたり、真由美に対抗できるのはアーティくらいのものじゃないかと場違いな感心を覚えていた。

「はあ。まあもう信任投票までしまったので受け入れますが、オレは論文コンペ当日、欠席するんです。まさか本当に会長に就任するなんて思っただけだったので前々から言っただけなんです」

なおも不機嫌そうなアーティが口にしたのは、思いもよらぬことだった。

「えっ？アーティくん、論文コンペ来られないの？」

「父に呼ばれていました。USNAに帰国しなければならぬんですよ。その日程に折り悪く論文コンペの日にも含まれております」

名前からも顔からもハーフであると分かるアーティの口から出た帰国という言葉を、この場にいる誰もが疑わない。

「そう……なの。お家の用事なら仕方がないわね」

論文コンペに生徒会長が出席しないというのは些か以上にまずいことだが、未成年でUSNAの国籍もまだ持っている生徒の家庭の事情に強制力を発揮はできない。

「はい。ですから当日は一高生徒会長の権限は中条副会長にお任せしたいと思います」

「そんなーわたしじゃ務まりませんよ……」

それまで黙って聞いていたあずさが慌てて否定にかかる。

「いえ。各校の生徒が集まる論文コンペにおいて、有事の際に大勢の群衆をまとめ上げるのはオレよりも中条副会長が向いています。オレなりに考えた、最適任者です。現場には十師族の一員も数多く同席するわけですし、いざというときには彼等に判断を仰げばいい」

アーティはあずさを説得しながら真由美に視線を送る。

「わかったわ。いざというときにはあーちゃん、私の責任であーちゃんにその場を任せるわ」

真由美までもが援護に回り、退路を断たれたあずさはがっくりと項垂れる。

「それにしてもアーティ、お前は論文コンペでなにか起こると思ってるのだな。万一のため、というよりほぼ確信しているように聞こえたが」

感心したように放たれた摩利の言葉に、アーティの表情に一瞬だけ「しまった」という狼狽の色が浮かんだのを見咎めた者は、幸いなかった。

「……………確信しているわけじゃありません。ただ、現場に行けない以上生徒会長のオレが万一のため、というような心構えではいけないと思っただけです」

少し苦しい言い分だったが、その場にいる者は皆感心したようだ。

「なんだ。もう既に会長が板についてるじゃないか。これは真由美の英断だったな」

感心しながら放たれた摩利の言葉に、アーティは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

論文コンペに8日を残す今日、アーティは出国すると言って授業を欠席した。このまま論文コンペまで、アーティは一高の面々と顔を合わせることはない。だがUSNAへの帰国の予定など存在しないアーティは、朝一番、静岡と山梨の山間部に存在する、地図には書か

れていない村へと向かっていた。

「このあたり、だったか」

先日教えられた情報を頼りにバイクを走らせ、一見何もない場所に立ち止まり右手をかざす。仄かな想子放射光サイオンとともに、アーティの認識に対して作用していた認識障害の術式が晴れる。その事により目指すべき村の入口を正常に知覚できたアーティは、そこから存在しないはずの村へと入っていった。

「いらつしやい、スチュアートさん」

村の中央部にある、厳かな屋敷に入り女中に連れられるままに居間へと足を踏み入れたアーティを迎えたのは、四葉真夜その人だった。「すみません。こんなに早くお力をお借りすることになってしまつて」

「いいのよ。元はと言えば貴方の物を私がお借りしたから、貴方がこうしてここに来なければならなくなったのだから」

アーティが嚴重に隠匿された四葉の村を訪れたのは、アーティが預けていたアーティの所持品を取りに来るためだ。

「解析の方は進んでいますか」

「CADについては順調よ。流石に20世代も違うと完全に別物ね。何かを弄つたりはしていないから、簡単にチューニングすれば使えるはずよ」

真夜がアーティが未来からの持ち込み品をアーティに要求したのは、当然未来の技術を真似して再現すれば四葉はハード面において20世代分のアドバンテージを得られるからだ。

「……………タイムマシンの方は」

わざわざCADの方はと最初にことわった真夜の意図を察しながらも、確認をする。

「芳しくありません。オーバーロードにより作動しなくなっている部

分が多く、再現はおろか機構の解明でさえ困難を極めるでしょう」

真夜の返答に、アーティは項垂れる。技術的限界点である25年の時間遡行を行った際に、「De Lorean」を構成する機構の多くはオーバーロードしてしまい再起動不可能になった。これをまた使えるようにすれば、なにかに失敗してもリカバリが効く。だが、それは期待してはいけないようだ。

項垂れていたアーティの前に、アタツシユケースを手にした女中が現れる。

「それでは、持っておいきなさい。未来から来たという敵対勢力も、横浜事変に乗じて動いてくるでしょう」

アーティが預けていた品々を受け取ったアーティにそう言葉をかけると、真夜はしずしずと居間の奥の自室へと引き上げていった。

(横浜事変において達也さんが戦闘に参加したことは各国の秘密裏に付けられた記録に残っている。横浜事変で達也さんが動かなくていいようにする。かつ、未来勢力の改変による歴史の悪化を防ぐ)

自分の成すべきことを再確認したアーティは、四葉の村を後にした。

横浜騒乱編Ⅱ

「へえ。達也さんが論文コンペのメンバーに、ねえ……………」

「意外と驚いてない？」

「いや、驚いてはいるけど。でもまあ、あの人だしなあ……………」

「それもそっか」

アーティが画面越しに話している相手は雫だ。アメリカに行った（ということにしてある）アーティに、達也の論文コンペ発表メンバー入りというスクープを伝えるために雫がアーティの情報端末に電話をかけてきたのだ。

世界の情報網が無線から有線にシフトして以降、大陸間の通信速度は飛躍的に高まった。とはいえアメリカと日本で通話をすれば気がつく程度のタイムラグは生じる。アーティは雫や級友たちと通信することになってもいいように、アメリカのサーバーを経由することでそのタイムラグと、アクセスポイントの偽装を行っていた。

「アーティはいつ帰国なんだっけ」

「コンペの翌々日だよ」

「結構長いんだね」

「全くだよ。雫もだと思うけど、親の付き合いつていうものには苦勞させられるよね」

アーティは真つ赤なウソを口にしながら、雫の父親がどれほどの大物であったかを思い出していた。自分自身幼少期は姉とともに十師族の交流に連れ回されていた。未来にある自分の過去を思い出す度に身を切るような切ない思いが胸にこみ上げていたものだが、サラの生存を知って以降は幾分かその気持ちも変わってきているように感じる。

「そうだ。生徒会の報告で聞いているんだけど、最近一高の周りで少し怪しい動きがあるみたいなんだ。高校生の発表とはいえ論文コン

ペは優勝論文がスーパーネイチャーに取り上げられるくらいだからね。それを狙つての動きじゃないかって。俺がそっちにいられない分、雫たちも気をつけて」

アメリカにに向いているということになっているアーティのもとには、生徒会から逐次様々な報告が寄せられている。アーティがあずさに生徒会長権限を譲り渡したのは論文コンペ当日のみ。こうして学校を休み来るXデーに向けて準備をしている時間のうち、結構な時間にはリモートでの生徒会長の執務に取られていた。

「そうなんだ。達也さんも何も言っていなかったから、知らなかった」
「極秘事項だからね。動き自体は小さなものだし、公言して無闇に不安を煽るものでもない。けれども雫は達也さんや深雪さんと一緒に行動する機会も多いし、気をつけてほしくて」

「ん。わかった。気をつけるね」

コクリと頷きながらキツと引き締まった表情を作る雫。しかしその表情よりも普段の表情のほうが余程クールに見えることにアーティは笑ってしまう。

「……………何」

「なんでもないよ。心配ないなと思ってさ」

そんな失礼な笑いを察したのか、むっとむくれる雫を笑いながら誤魔化す。ふと画面右端の時刻表示を見ると、もう日が替わろうかという時間だった。

「そろそろ良い時間だ。こっちはまだ昼だけど、雫はもうおやすみ」

「うん。アーティはこれから会合？」

「うん。まさか息子同伴の会合がこんなにあるなんてね」

「そっか。アーティも頑張ってる」

「ありがとう。おやすみ、雫」

「おやすみアーティ」

雫相手に嘘を重ねる心の痛みに気づかないふりをしながら、優しい目つきで画面の向こうで静かに手を振る雫を見ながら、通信を切る。自分の人間関係も大切だが、それ以上に大切な使命というものがある。そのためなら、嘘もつくし裏切ることもする。そう決意したはず

のアーティの心は、親しい人にちよつとした嘘をついたりする度に揺り動かされるのだ。全てを割り切るにはまだ、アーティは若すぎる。ちりちりとした身を焦がすような痛痒を心に感じながらしかめ面をしているアーティの情報端末から、メッセージを受信した旨の通知が発せられた。その通知音がアーティを現実へと引き戻す。

差出人は真夜であり、中身はビデオだった。アーティはメッセージを開封し迷いなくビデオを再生する。

「アーティさん。横浜事変、とあなたが言っていた出来事に対して、結局の所、四葉として戦力派遣はほぼできないことが判明したの。まず、この横浜事変のソースが貴方である時点で、貴方の存在を伏せる私では四葉家の分家の方々を動かすだけの説得力は生み出せない。それに、四葉家の対応が早すぎる、ないし先手を不自然に打っている。とあれば他家からは四葉が手引したのではないかと疑われかねない。達也さんの出動停止要請は出すけれど、達也さんに対して直接の指揮権を持っているのは風間さんよ。現状、貴方単騎で戦況を大きく変えるしか手段がないと言わざるを得ないわ」

このビデオは既に録画されたものを再生しているだけであり、これに返答しても意味はない。故にアーティは画面内でしゃべる真夜に抗議したりはしなかったが、アーティは苦虫を噛み潰したような表情になっていた。

「初動で動けないのなら、後から他家と一緒に動いても四葉が動いた、という衝撃的事実を知らしめて横浜に四葉家の要人がいることを晒すだけ。酷いようだけど、今回四葉家は貴方に手を貸すことはできない。アーティさん、それでも私は期待しているんですよ?」

最後は吸い込まれるような笑顔を浮かべてビデオが切れた。

（四葉の早すぎる派兵が他家の詮索を生むとは言っても、それで見事に被害を押さえていれば四葉なら抑え込めるはずだ）

真夜の言葉は予想の範囲内ではあったものの、予想の正中線をかなり外したものであったがゆえにアーティも怪訝にならざるを得ない。（分家の説得にしたって、黒羽の貢さんは俺の拉致に関わっている。黒羽だけでも相当な戦力を用意できるはずだが）

アーティは考えれば考えるほど、真夜の言葉に虚偽を見つけてしまう。その答えは1つだった。

(真夜様は今回の件でオレを試している)

真夜は元々破壊者たる達也の誕生を喜んでいた。今でも、真夜の世界に対する復讐心は消えていないに違いない。ここでアーティがしくじるようであれば未来は変わらないし、未来が変わらないことに真夜はそこまで危機感を抱いていないのだろう。

(ならばオレ一人で横浜事変を大きく変えるのみ)

達也を目立たせないためには達也が八面六臂の活躍を見せた横浜事変において達也が戦わなくて済む状況を作ることが必要だ。そのためには、アーティ一人で敵の戦力を大きく削がなければならない、そのうえで、「質量爆散マテリアルバーストを使用させないために、敵基地をも先んじて破壊せしめなければならない。それも、国防軍側への協議なしで。あまりの難題に頭を抱えたアーティだったが、アーティはこういった状況での自己の切り替え方を知っている人間だ。アーティはすぐに気を取り直すと、横浜事変当日に使用する武器のメンテナンスを始めた。

「コンペ前から一高で不審な動きが見られたとは言っていたけど……………」

論文コンペが2日後に迫る中、来る横浜事変への準備に専念したいアーティは次々と上げられる一高の報告に頭を悩ませていた。レオとエリカの非合法イリガール工作員との戦闘、風紀委員に籍をおいていた関本のハッキング行為。幹比古が式神の存在を大まかに掴んでいることなどに加え、更には八雲から達也が自宅で義母の小百合から預かっているレリックが大陸系の勢力に狙われており、既に達也が交戦したとの報告も受けている。

達也の昔話(とはいってもいつも口火を切るのは深雪だった)で論

文コンペ前からきな臭い動きが見られたことは把握していたが、ここまで活発であったとは夢にも思わなかったのだ。

「しかし、これは好機かもしれない」

アーティは学校を休む前、生徒会の面々や周囲の友人たちに厳戒するよう言えなかった。注目度は高いとはいえ高校生の論文コンペに大事が起こるとは考えにくい、という意識を持つ友人に口を酸っぱくしても不自然に思われるだけだ。しかし、こうして論文コンペに向けたきな臭い動きがあれば格好の口実になる。そう思い立つと、アーティは生徒会への指示文書にて特に論文コンペに関わる生徒について厳戒態勢を敷くよう指示を出すことにした。

一高執行部に厳戒態勢を命じたが、それで憂いがなくなるわけではない。既にアーティは歴史への干渉をかなりの深度で行っており、また敵対勢力にもアーティと同じように未来から来た者がいる。アーティが日本の魔法師社会の中核に全く食い込めていないのと同じように、未来から来た、いわば何の身分証明を持たない人間が何を言ったところで信じられるはずもない。論文コンペに合わせた横浜侵攻の日程が繰り上げられることは考えにくいだが、未来から来た敵対勢力がこの横浜事変に絡むのはアーティの中では確定事項だった。論文コンペの前日、アーティは念の為先行戦力等の上陸を警戒して横浜の沿岸を監視していた。

（達也さんの暗殺を考えるなら平時よりも戦乱に乗じて行うほうが成功する可能性は高い）

記録によれば達也は横浜事変において日本側が発揮した戦力のかなりの部分を担っている。ここで達也にフォーカスを合わせて達也の殺害を狙うのであれば、平時では司波達也暗殺を具申しても戦力を貸してもらえないであろう未来勢力が、実質的に大亜連合のサポートを受けながら達也暗殺を実行できることになる。

(そして、第四次世界大戦前の最大の戦乱は横浜事変だ。つまり、奴らにとつて横浜事変こそ達也さん暗殺の最大にして最後の好機ということになる)

その最大の好機に、未来勢力は戦力を使い切るだろうというのがアーティの読みだった。この最大の好機で達也を仕留め損なえば、結局の所残存戦力があつたとしても達也を斃すことはできない。戦力を分散する愚を敵が犯すとはアーティには思えなかった。

(ただ、戦力の小出しをするとしたら、唯一あり得るのは)

アーティが横浜の沿岸部で無防備にうろついていた理由は監視の他にもう一つ。「真紅の双子」クリムゾン・ジェミニの介入を知った敵対勢力が事前にアーティを排除しようと考えると踏み、当日に大亜連合が投入する戦力を少しでも削ぐために釣っていたのだ。死んだと言われていた式神遣いがアーティのことをどの程度仲間に共有しているかは不明だが、実際にアーティへの評価は達也への評価よりも低い。明確に達也抹殺を妨害してくることが確定しているアーティを排除するために戦力を事前に使うことは十分に予想できた。

入念に張り巡らせた探知の糸に敵意が引つかかったことを感知したアーティは、即座に戦闘態勢に入る。港のコンテナ地帯の中にいるアーティは、肩の力を抜き全身の想子サイオンを活性化させる。アーティの全身は魔法師にだけ見える仄かな光りに包まれた。

「――」
様子を見るつもりだったのだろう、遠巻きに向けられていた敵意はアーティが臨戦態勢に入ったことに反応して一瞬戸惑う動きを見せたが、意を決してアーティの立つところに一直線に飛び込んできた。100m以上はあつただろうが、文字通り一瞬でその距離をゼロにする。するとアーティの目の前に轟音とともに降り立つ。

『真紅の双子』、一条スチュアートだな」

降り立つとともに低い声で確認をしたのは大柄な男。彼の発する殺気は、相対する者に人を捕食する猛獣の印象を強烈に与える。

「呂剛虎……う？」

アーティはその人相に覚えがあつた。大亜連合きつての対人戦闘

スペシャリスト、横浜事変にて最終的には真由美によって仕留められた男。アーティにとって、自分を待ち伏せしていた男が未来からの勢力ではないことも、その今を生きているはずの呂剛虎が自分の名前だけでなく異名までをも知っていることも、驚愕すべきことだった。

「——っ！」

アーティの際にもならぬ狼狽を好機と見たのか、呂剛虎は軽く膝を折った後、弾丸のように地面を蹴りアーティへと突撃する。アーティも思わぬ相手の出現に心にさざなみこそ立ったが、それに隙を作り初撃を甘んじて受けるようなことはない。即座に「纏衣の逃げ水」を作動させ棒立ちのままの幻像を残して後ろへと素早く下がる。その一瞬後に幻像の存在する座標を呂剛虎の小型トラックをも一撃でスクラップにしそうな一撃が薙ぐが、それはアーティ本体と同じ熱と音を発する幻像に過ぎない。呂剛虎も自分の攻撃が不発に終わったことに動揺するような未熟さは持ち合わせていない。それでも幻像と自分の位置が重なり視界が悪化した瞬間にバックステップを踏んでいたアーティからのカウンターを顎に受ける。

前のめりに拳を振り抜いたところへの顎への回し蹴り。生身で放たれたとしても相当のダメージを受けそうな攻撃だが、アーティの蹴りには接点を発動基準とする接触型の攻撃魔法が仕込まれている。

アーティが一高の部活動で取り組んでいるMマシヤル・マジック・アーツ M Aの技術だ。

「エクスペローダー」の術式を仕込まれたアーティの蹴りは、着弾点を起点として負のベクトルを生み出すように周囲の物体に運動エネルギーを瞬時に与える。結果として、呂剛虎の顎はアーティの蹴りにより凄まじい勢いで吹き飛ばすはずなのだが、呂剛虎は少しのけぞる程度で即反撃に転じる。

「鋼気功ガンシゴン……っ！これほどとはー！」

アーティの予想以上に堅牢な呂剛虎の守りからの反撃に、アーティは防御側に回ることを余儀なくされる。古式魔法の術法を多く含む呂剛虎の攻撃に対し、基本的に現代魔法の技法で編みだすアーティの防御は、速度的に勝り間に合わせることはできても彼我の威力的にアーティの干渉力をもつてしても受けきることは難しい。必然的に

アーティは繰り出される呂剛虎の連撃をすべて回避せざるを得ない状況を作られていた。

「常駐型の古式魔法がこれほど強力とはっ！」

呂剛虎が身を守るために常駐させている鋼氣功は、情報強化と自信を何重にも覆う対物障壁の両方を併せ持つ。強力に作用している「情報強化」を前に、「爆裂」は作用できない。並の魔法師ならばともかく、呂剛虎ほどの一流の魔法師が古式魔法として発動させている情報強化を突破することは不可能に近い。

情報強化を突破できないならば本体ではなく、間接的な攻撃を加えることがセオリーだが、非常に強固な対物障壁で間接的な攻撃も無効化される。アーティの目の前にいる呂剛虎という男は文字通り難攻不落の要塞そのものであった。

(コレを使うしかないか!?)

この数合の打ち合いでほとんどの攻撃手段が通用しないと踏んだアーティは即座に腰につけている棒状の兵装に手を伸ばす。1m以上はあるその兵装は、使用すれば呂剛虎を確実に屠るだけの力はあるが、戦艦の主砲級の威力がある上に周囲の電子機器への影響も甚大な兵装だ。明日のために携行していた最終兵器に手をのばす程度には、アーティは追い詰められていた。

最終兵器をぶっ放すために上空へと飛び上がったアーティに、呂剛虎は飛行魔法も使わずに猛追する。飛び道具を使おうと距離を取る相手には追従するのがセオリーだ。呂剛虎の跳躍限界まで引き剥がしてから虎の子の一撃を放とうとしたアーティの意識が一瞬途絶えたのと、物理法則を無視して飛翔していた呂剛虎の肉体が慣性で放物線を描くだけの運動状態に入ったのはほぼ同時だった。

「!？」

意識を取り戻したアーティの狼狽は、この土壇場で前兆なく意識を手放したこと、自分は何の攻撃も加えていないのに突如空中で力尽きた呂剛虎へのものだった。落下に転じようとする呂剛虎を捕まえ、飛行魔法を再度キャストして沿岸部に着地する。

「これは……………」

精神干渉魔法「コキュートス」。対象の精神が凍結され死ぬことからできずに停止してしまう。アーティはこの魔法を一度だけ、見たことがあった。

無謀にも四葉の屋敷に侵入し達也に斬りかかった賊に、深雪が使用した即死魔法。この場に深雪がいるはずもなく、使用者は一人しかいなかった。

「姉さんがやったのか……………」

サラはアーティの中からアーティの状態を常に見ていると言う。アーティが最終兵器を出そうとしたことにも気付いているはずだ。想子で干渉する魔法の一種である情報強化でガードできるのは肉体的のみであり、精神はガードできない。故に系統外魔法を無効化するには魔法自体を阻害するしかない。人を殺すことにおいては、サラの精神干渉魔法がおよそ最適と言える。

しかしサラは精神干渉魔法以外の魔法技能の一切を失っており、呂剛虎と対峙している間にサラがアーティの意識にオーバーライドすれば呂剛虎の意識を殺しても相討ちになる可能性が高かった。互いに上昇しており相討ちになる可能性のないあの飛行している瞬間にサラがアーティの意識にオーバーライドしてケリを付けたのだろう。

「ありがとう、姉さん」

アーティは誰もいない虚空へそう礼を言うと、呂剛虎の死体を一瞬で灰にし沿岸部の監視に戻った。だが、結局アーティにちよつかいを掛けてくるものはおらず、アーティは翌朝を迎えることになる。

横浜騒乱編Ⅲ

現地時間、西暦2095年10月30日午後3時30分。最凶最悪の魔法師司波達也が初めて戦略級魔法「質量爆散」マテリアル・バーストを使用し、大亜連合艦隊を壊滅させた「灼熱のハロウィン」。その発端となった「横浜事変」は、この時刻に貨物船に偽装していた機動揚陸艇による兵力上陸と地上に潜伏していたゲリラ戦力の同時攻撃により戦端を開いたと記録される。

シヒリアン・コントロール文民 統制の観点から日本側の初動が遅れたことに加え大亜連合側の攻撃が完全奇襲かつ同時多発的であったことにより、戦火は速やかに広域に拡大するのが正史のものであったが、実際には戦端は大亜連合側の大混乱とともに開かれていた。

「なんだ、あれは……………」

「揚陸艇がやられた!？」

午後2時40分。既に武装し、上陸戦力を乗せた揚陸艇からの合図となるロケット弾の発射を待っていたゲリラ部隊は、その揚陸艇が入港してくる方角を見つめ、呆然としていた。

彼等の見つめる先では、入港のため貨物船に扮し横浜港に向かって進行している揚陸艇があった会場の地点周辺が大規模な水煙に包まれていた。その水煙を生み出した大爆発の直後、水煙の中からまばゆい光と轟音が発せられ、最初の水煙よりも大きな水煙を生み出していた。雲の高度にまで達しそうなほどに膨れ上がった水煙は巻き込まれた揚陸艇の安否を確かめることを阻んだが、その威力と効果範囲の広さは揚陸艇の安否の確認の必要性を消していた。

「先制攻撃、だと……………」

「揚陸艇の偽装は完璧ではなかったのか!？」

オーストラリア船籍の貨物船に偽装した揚陸艇が、入稿し停泊中に

船内搜索を受けたならばまだしも、まだ沖を進行している段階で正体を看破され先制攻撃を受けることなど、想定しているはずもない。

「揚陸艇からの応答、ありません！」

横浜港沖での海上爆発を受け先程から揚陸艇に通信を飛ばしていた通信兵が、半ば分かりきっていた事実を口にする。

「隊長、どうしますか」

手を後ろで組み言葉もなくじつと沖を見つめる壮年の男に、横に控えていた若い士官が恐る恐る尋ねる。機動兵器を積載していた上陸部隊が上陸前に全滅したとあれば戦力は半減以下だ。それでも地上部隊のみで蜂起するのか、という見方によれば随分弱気な問いかけだった。

「……………」

隊長、と呼ばれた男はCADを身に着けてはいない。大亜連合が横浜の中華街に潜伏させていた部隊は非魔法師部隊である。

「隊長？」

なおも言葉を返さない隊長に、士官は怪訝そうに問いを重ねる。

「……………我々が蜂起せずとも、彼等は動く」

ようやく開かれた口から紡がれたのは、士官の問いに直接答えるものではない。だが、士官はその不完全な答えに怪訝そうな顔をするのではなく、忌々しそうな表情を浮かべていた。

「彼等、というのは我々に接触してきた魔法師集団のことですね」

「そうだ」

「彼等が事を起こせば脱出手段を失った我々も結局は巻き込まれる、と」

「そうだ」

忌々しそうな表情を浮かべていたのは士官のみではなく、隊長と呼ばれた男もであった。

「どのみち敵国に潜伏していた我々に勝利して帰還する以外の道はない。上陸部隊無しで我々で目標を確保した上で横浜を制圧、本国から追加の脱出手段が派遣されるのを待ちこの国を脱出する。第一目標、論文コンペに集まった魔法師の卵たちの拉致、第二目標、論文コンペ

の研究データ。第三目標、魔法協会横浜支部のデータ。これらを確保すれば、必ず本国はそれを本国に持ち帰るための手段を用意する。各員奮励せよ」

落ち着いた、見方を変えれば気合の入らない手付きで通信機を手にとると、声音だけは威厳と力強さを含んだ横浜全域に潜伏するゲリラ部隊への命令を発した。

こうして、横浜事変は西暦2095年10月30日午後2時40分に起こった正体不明の海上爆発を発端とし、その5分後開始された地上のゲリラ部隊の蜂起を起点に横浜事変は戦端を開いた。

「今のは海オーシャン・ブラスト爆か？」

「そうだろう。だが使用者の一条将輝が海オーシャン・ブラスト爆を初めて使用したのは2097年だ」

「では、あれは一条将輝の仕業ではなく、現在ここにはいないはずの息子の仕業、ということだな」

「間違いない」

大爆発とともに巨大な水煙が上がった横浜港の沖を見ながら不敵な笑みを浮かべ会話を交わす者たちがいた。7人は年齢はバラバラだったが、彼等の体の周りには活性化された想子サイオンが漂っている。彼等は皆、魔法師のようだ。

「ヒドラジン燃料電池を積載したあの船を撃沈するとは豪胆なことだ」

「貴公は二度目の爆発を見なかったのか？」

カラカラと笑いながらアーティの豪胆を称賛する40前後の男を、この場にいる中で一番若いであろう20前後の男がギロリと睨む。

「ここに至って仲間の力量を疑っているの？ 私達は皆あの時間遡行魔

法を成功させた超一流の魔法師。水煙の中で発動されたもう一つの戦略級魔法を見逃しているはずないじゃない。そのうえで彼は真紅クリムゾン・ジェミニの双子の胆力を讃えているのよ」

その若い男の方にしなやかに手を置きながら諫めるのは男よりわずかに年上であろう女。飛び抜けて美しいというわけではないが、優しい瞳と柔らかい声音は聞いた者を落ち着かせるような雰囲気醸し出している。

「フン。ヤツがヘビィ・メタル・バーストを使用できる可能性は十分に示唆されていた。父親の戦略級魔法を受け継いでいることは既に確認できていたのだから、ヘビィ・メタル・バーストについても使用できる可能性を考慮すべきだった。ヘビィ・メタル・バーストならばヒドラジン燃料までをもプラズマ分解して無害化できる。貴公らはヤツを過小評価していたのさ」

女が諫めたにもかかわらず若い男は毒を吐くことをやめようとなない。

「そうだ。我々はヤツを過小評価していた。昨夜は君の主張を認め呂剛虎にわざわざ我々の情報を与えヤツを消しにかかった。呂剛虎で事足りると判断したのも君だ。君もまた、ヤツを過小評価していたことを忘れるな」

だが、30前後の荘厳な雰囲気纏う男の反論に遭い、若い男は鼻白む。

「2人1組の天才。故に姉を失ってからは表舞台を去ったと思われた真紅クリムゾン・ジェミニの双子だったが、実際には時間逆行を成功させた上に戦略級魔法を2つも同時に使用し、その上対人戦闘でも呂剛虎を上回った。我々全員がヤツを過小評価していた。故に今回の作戦についても、第一目標をまず真紅クリムゾン・ジェミニの双子の排除にする。ヤツを野放しにしたまま司波達也を狙えば、必ずヤツは我々の横っ腹に風穴を空ける。地上のゲリラ部隊が日本軍に鎮圧される前に、真紅クリムゾン・ジェミニの双子を排除した上で司波達也を抹殺する。異論のある者は？」

どうやら30前後のこの男は彼等の中でリーダー格を務めているらしい。彼の言葉には全員が聞き入り、彼に異論を唱える者はいな

かった。

返された沈黙を了解と受け取ったりリーダーの男は、無言のまま腰につけられた飛行魔法用のCADを叩く。即座に男の体は浮き上がり、他のメンバーもそれに倣う。彼等は編隊を組んだ状態で横浜の空へと消えていった。

「!?」

達也が横浜沖での大規模な魔法行使の兆候を感じ取ったのと、真由美が驚きの余り声にならない声をあげながら口を抑え思わず立ち上がったのは、ほぼ同時だった。

「なに、これ……………」

真由美はマルチスコープを用いて会場の中だけでなく会場周辺の様子も監視していたのだが、その視界の1つに海上で起こった大爆発が映った。近くに座る達也も表情を変えたが、真由美はそのことに気づく余裕はなかった。

「どうしたんですか、七草先輩」

真由美の様子を怪訝に思ったほのかが心配そうに声をかける。

「え、ええ。少し気分が悪いので、外しますね」

やつとのことですら返した真由美は実際に青褪めていたのでその苦しい言い訳は何の疑問もなく信じられた。ちらりと盗み見る達也の視線にも気づかぬまま、真由美は会場のホールを出て廊下に出た瞬間に急いで情報端末を使って実家に連絡を取る。

「……………ええ、わたし。横浜沖で大規模な魔法が使用されたことはもう確認済み?……………そう。これから交戦が行われる可能性があるかもしれないから、十師族の出勤を要請してください。……………ええ、お願い」

ほぼ同時に緊急報告を受けていた父の弘一との通話を切り、真由美が会場へと戻ろうとした瞬間、会場が轟音と振動に包まれた。会場に

詰めていた聴衆はなにが起こっているのかを理解できず、どうすればいいのか答えを求めてぎわついている。真由美が急いで一高生たちが集う箇所に戻った瞬間、今度は複数の銃声が響いた。

「対魔法師用のハイパワーライフルか」

状況を伝えようと急いで戻ってきた真由美だったが、既に達也が状況を分析し周囲に伝えているようだ。

ややもすれば対魔法師用のハイパワーライフルを携えた者達が乱入してこようという状況だったが、会場に賊が乱入してくることはなかった。最初の銃声が響いてから1分もしないうちに、銃声は止まっていた。その理由をリアルタイムで把握していたのは、エレメンタル・サイト精霊の眼で会場周辺の様子を伺っていた達也とマルチスコープで同じく会場周辺の様子をうかがっていた真由美だけであった。

（真紅の………死神？）

達也が同じく自分が見ている光景を見ていることを露知らぬ真由美は、会場周辺で繰り広げられている戦闘を目の当たりにしてそんな感想を抱いていた。フードで頭まで覆い隠す真紅のローブを纏った若い女と思しき魔法師が、視線を向けるだけで賊が手にするライフルが爆発する。弾倉に込められている弾丸の、魔法師の防御を貫通するために増量されたガン・パウダーに一気に点火されてはそのライフルはそれを手に持つ者を十分に殺すほどの威力を持った手榴弾へと変貌する。恐怖のあまりなまじ照準もされずに放たれた弾丸のいくつは運良く魔法師の体を捉えたが、その弾丸はいかなる物理的干渉をその魔法師の体に与えることなく通過した。

幽鬼の如く敵の攻撃を無効化しながら瞬く間に敵を屠るその様は、まさしく死神を連想させるものだった。

真つ先に論文コンペ会場を襲撃した勢力を殲滅させたアーティは、急ぎ飛行魔法でその場を後にする。「バレイド仮装行列」でエイドスの情報を

誤魔化しているとはいえ、達也の視界の中に長時間留まることは賢明ではない。

アーティにとっての第一目標は速やかに横浜事変を終息させることだ。そのためにアーティが横浜中を駆け巡れば干渉してくるであろう敵勢力と遭遇することもできるし、敵勢力がアーティを無視して達也暗殺を試みたとしても大亜連合の戦力が大きく削られていれば達也たちが不覚を取る可能性も低く、さらにアーティも駆けつけられる。敵の位置を詳細に知らぬアーティにとっては唯一の選択肢だが、同時に最善の策でもあった。

「揚陸艇を海上で叩けたのは大きいな」

横浜の空を舞いながら地上の戦火を眺めるアーティは、敵戦力を潜伏していた地上ゲリラ部隊に限定できた効果を実感していた。新型の機動兵器等を積載していた揚陸艇を撃破したことにより、敵戦力は武装した歩兵がほとんどだった。それでも部品を持ち込んで組み立てたであろう機動兵器が少数ながらも地上を闊歩しており、その重厚さ、高火力に阻まれ日本側の地上勢力は思うように迎撃ができていない部分もあった。

「あんな物を部品単位とはいえ持ち込めるとは……………」

横浜港の検疫の甘さに辟易としながらも、上空から次々と数少ない機動兵器を狙い撃つ。放つ魔法は「爆裂」。狭義の「爆裂」は人体に対し体内の水分を発散させその膨大な体積膨張の圧力で人体を破壊する魔法だが、「対象を指定しその内部の液体を発散させる」という定義を用いるのならば、今アーティが使用している魔法も「爆裂」と言える。

戦車、航空機、そして今地上を闊歩する機動兵器。いずれも燃料タンクや潤滑油など、随所随所に液体が存在する。それらを一挙に、一瞬にして気化させられればその体積変化により鋼鉄製の兵器といえども簡単に破壊される。加えて気化した燃料は燃焼機関に即座に引火して大爆発を起こす。「爆裂」は現代兵器に対して圧倒的優位を誇り、それ故に一条将輝は幼い頃より単身で一個連隊にも匹敵すると評されているのだ。

上空からめぼしい兵器を狙い撃っていたアーティだったが、アーティの狙撃は長くは続かなかつた。長く続かなかつたとはいえ大亜連合側の地上勢力は持ち込んでいた機動兵器の殆どを失っていたが、アーティの素早い殲滅行動は複数の魔法師によって阻まれた。

「!?」

アーティが自身の存在する空中の座標の上方に魔法行使の兆候を感じ取り、自身の周囲に領域干渉を展開した上で自身に情報強化を使用、さらには自身の周囲に対物魔法障壁を展開し慣性中和魔法をかけるという守りのクアドラ・キャストを終えた次の瞬間、上空から飛来した空気弾が一瞬前に構築されたアーティの対物魔法障壁を叩いた。「ヒュウ。あそこから間に合わせるかよオ。しかも何だア?どんな攻撃でもおよそ防ぎきれるように領域干渉に情報強化に慣性中和まで併用?とんでもねえ化け物っぷりだなア、オイ」

守りの魔法を解かずに空中に停止しているアーティの耳元に、耳ぎわな若い男の声が発せられる。認識を阻害する魔法を使っていることは、アーティが相手の位置を認識できない時点で確定している。そして耳元から声がするのも、自信の位置をさとられないために空気の振動を指定したポイントから発生させる魔法を用いていることは分かる。

そして、この事実と耳元の声から、即座にある判断がくだされる。アーティによってではなく、アーティの意識の裏側から見守るサラによって。

「

おそらくは、アーティに初撃を加えアーティの耳元におしやべりを

仕掛けた魔法師は、自分が死んだことすら認識できていないだろう。感知されない安全な位置からアーティの精神に干渉している。それでいて、様子見をしている。

この状況は、サラがアーティの意識を乗っ取り、一瞬他の魔法が使用できなくなったとしてもその瞬間にアーティが殺されないことを意味する。そして、精神干渉に関して文字通り全能となったサラにとって、近距離の空間に潜み認識阻害の蓑に隠れている相手を逆探知し「コキュートス」で停止させることなど、わけもないことだった。

アーティが展開していた守りの魔法が一瞬途切れたあと、一呼吸置いて何もなかったはずの空間から6人の魔法師が飛び出す。アーティの周囲を7つに綺麗に分割したように包囲した位置から、である。7つの位置のうち1つだけは、そこにいた魔法師が死亡し墜落していったことにより包囲網に穴が空いている。認識阻害で安全なはずの仲間が殺されたことにより認識阻害が役に立たないことを瞬時に判断、攻撃に即時に切り替えたのは流石と言える。

どうやって、だとかかなぜ、だとか、そういう疑問が彼等の中に生まれないわけではない。だが25年後の未来において超一流の魔法師として活躍していた彼等にとって、自らの使命こそが至上命題であり自分の脳裏をかすめた疑問の解決など遅刻しそうな道中で見つけた1円玉ほどの価値もないものだった。

大きくその運命を変えた横浜の空で、人類の未来を変えようとする2つの勢力の決戦の火蓋が今、切って落とされた。

横浜騒乱編Ⅳ

虚空から突如現れ力なく以上へと落ちていく影。それが現れた一瞬後に虚空から6つの影が現れアーティに迫る。アーティは現れた影全てに一瞬で照準を合わせ、「爆裂」を使用するが不発に終わる。

(6人で情報強化をかけ合っているのか……)

魔法師は自分自身に無意識で情報強化をかけており、それによって人体に直接干渉する魔法は効力を発揮しづらい。しかし一条家の出自である第一研は生体への干渉をテーマとした研究を進めた機関であり、故に一条家はこの「爆裂」使用時に当たっては魔法師の自己への情報強化を突破することが可能となる。

情報強化というのは自己のエイドスの情報を複写しそのまま投射する魔法であり、複数の魔法師が同一の対象に情報強化を行使すれば同一の魔法式とはいえども想子の乱流サイオンを引き起こしそれらの効力はなくなる。しかしそれは彼等の肉体を対象とした魔法式が渋滞を起こすということであり、それによる要求干渉力の大幅な上昇が「爆裂」から彼等の身を守った。

(この要求干渉力……達也さんの雲散霧消ミスト・デイスバージョンも通用するまい)

「術式解体」で情報強化を吹き飛ばした一瞬の間ならば可能かもしれないが、彼等の体を覆う情報強化のエイドス・スキンが凄まじい速度で更新されていることを知覚し、アーティはその手段を諦めた。

(さすがは達也さんを暗殺しようと動きを見せている者たちだ。少なくとも達也さんの魔法についてはかなり対策してきている)

アーティが敵の分析をしている一瞬の間にも敵は迫る。飛行魔法を使用してアーティへの相対位置を即座に他の仲間と等間隔になるように調整すると、申し合わせた様に同時にアーティに魔法を放つ。

6人が、全ての方位から魔法を放ってくるという状況は普通ならばどうにかすることはできない。まして彼等は初撃がかわされるのは

織り込み済みで第二波第三波の攻撃も放っている。互いに干渉しないように系統と干渉対象をずらした魔法の波状攻撃は絶体絶命の致命傷の檻と化していた。アーティのいる空中の座標にはドライアイスの塊が亜音速で襲来し、その横から圧縮空気塊がアーティを吹き飛ばしに来る。アーティが咄嗟に張った魔法障壁は初撃の物理攻撃によって破綻状態に陥り棄却された。これが十文字家の「フアランクス」ならばこの次から次へと迫りくる波状攻撃全てに対応する多種の魔法障壁により防ぎきったかもしれないが、アーティは魔法障壁を使用するのに適した魔法適性を持っていない。九校戦で見せたのは地の干渉力の高さゆえの堅牢さなのだ。

「曇みかけろー!」

ドライアイズ弾が着弾しアーティが浮いていた座標付近が白煙に包まれる。その光景に魔法攻撃の手を止めようとした仲間に攻撃続行の号令をかけたのはリーダー格の男、ヤン・ソンテク 曜孫沢だった。今回彼がリーダーシップを発揮していたのには理由がある。それはもちろん彼の魔法師としての実力の高さもあつたが、彼等は全員時間逆行魔法を成功させた超一流の魔法師であり、実力で彼らに対して一方的なリーダーシップを発揮できるということはない。しかしその状況で彼がリーダーシップを発揮できたのは単に彼が彼らの中で唯一アーティと戦つたことがあるという理由だった。

今回の司波達也暗殺を遂行するにあたってにわかに障害として浮かび上がってきた存在がアーティであり、幼き日の、全盛期と呼ばれた頃のアーティと実戦で相見えたという事実は、今回の作戦で彼がリーダーシップを握るに足る理由となった。

(だが、妙だ)

曜は間断なく攻撃を繰り出しながらも、己の中の違和感と戦っていた。近く阻害の魔法を用いた不意打ちからの波状攻撃グラム・デイスパーション「術式解散」を有し、「再成」により不死身の達也に対してもシミュレーションで十分に斃せるという結果を得ている。魔法による隠形を破られ早々に戦力を削がれたとはいえ「最悪最凶の破壊神・司波達也」用の布陣が通用しないはずはなく、一撃攻撃を喰らえばそれで戦

闘不能になるアーティがこの波状攻撃を耐えきれないことは全く不自然なことではない。

だが、と曜は自分の記憶を辿る。曜は自分の直感を信じている。曜は自分の直感の理由を、過去のアーティとの邂逅に求めた。

答えはすぐに導かれた。曜は一瞬自分の記憶能力に感謝したが、その解がもたらす意味は彼を焦燥感の絶頂へと放り込んだ。

「幻影だ！退け!!」

曜が違和感を感じたのは、アーティが「術式解体」グラム・デモリッションを使用しなかったことだ。自分たちが6重にかけていた情報強化を吹き飛ばすのに使わなかったのは情報強化の更新頻度を見てのことだということだ。説明がつくが、アーティが自身への攻撃魔法に対して「術式解体」グラム・デモリッションを使用しなかった説明が見つからない。曜はカザフスタンの紛争地帯にてアーティの範囲型「術式解体」グラム・デモリッションを目にしていた。あれならば確実に全方位からの攻撃を全て無効化できた。だが、アーティはそれをせずに愚直に魔法障壁と領域干渉、自己への情報強化のみで防御を試みた。これが曜が感じた違和感の正体だった。

そしてその違和感の正体もたらす意味を曜は一瞬で導き出した。「術式解体」グラム・デモリッションの数少ない欠点。それはアイデアを経由せずサイオンに想子の塊をぶつけるという仕様上、射程が限られている点。しかしこの場合はアーティは至近の攻撃を無効化すればいいだけであり、関係がない。対抗魔法を使用するという時点で相手に捕捉されている状況が前提になっており、ともすれば気づきにくい欠点ではあるが、派手に想子サイオンの塊をぶつ放すので使用者の位置が簡単に特定されるという欠点である。そして九校戦で一条将輝に対して使用した隠形魔法。映像資料で見ただけだったので曜たちにもその仕組みはわかっていなかったが、それが大幅に自分の位置情報を誤魔化すものだとしたら。その結論をもの一瞬で導き出した曜は魔法力のみの評価には留まらない優秀な実戦魔法師であることが分かる。

曜の号令に従い即座に攻撃をやめた一団は次の瞬間には曜の周囲に固まっていた。彼らは各々異なる系統の防御手段を持ち合わせている。攻撃は散開して全方位からオールレンジ、防御は集中して行う。訓練によつ

て磨き上げられた、最適な対人機動だった。

「おい、曜。幻影ってのはほんとか？すり替わる時間はなかったはずだが」

「そうじゃな。それに奴は心音や体温を発していた。間違いなく本物じゃぞ」

「とはいっても、あの波状攻撃。既に跡形もないと思うけどね」

ピッタリと寄り添った状態で異議を唱えながらも、彼らの目線はアーティがいた座標に釘付けになっている。圧縮空気塊によって破砕されたドライアイス団とその冷氣が作り出す大量の水滴によりその周囲は白煙に包まれている。

「林、タンパク質を探知しろ」

「了解」

白煙は待てばじきに消えるが、曜はチーム唯一の女性魔法師に命じる。林と呼ばれた女も反論することなく探知を開始する。

「——！！」

探知を開始した林の顔色がさつと青ざめる。その様子にチーム全体の緊張感がぐつと高まる。

「ない。白煙の中心、ヤツがいた座標の半径10mの球状範囲の中に、タンパク質は全く含まれていないわ」

「総員、全方位を厳重警戒か——」

林の言葉を受けて発された曜の号令は、最後まで言い切られることなく虚空へと消えた。

数十秒遡り。アーティは正体不明の攻撃を受け、その瞬間一瞬気を失った。意識を取り戻したアーティがはその瞬間に姉がその攻撃の主を仕留めたことを理解する。サラにとって意識を返す瞬間にアーティの意識に自分がやったことを映しておくことなど朝飯前である。アーティは即座に「纏衣の逃げ水」を使用しその場に停止する自分の

幻影を作り出し、自身は全速力で降下する。その一呼吸後、アーティの幻影は敵の一団に包囲されその後総攻撃を受けた。アーティは幻影を守るように魔法障壁を展開するも、怒涛の波状攻撃にいつも簡単に突破される。初撃、第二波のうちアーティの周囲の空間に干渉するタイプの魔法は領域干渉で無効化していたが、攻撃を受けた演出のために領域干渉の展開も終了した。アーティの幻影が見かけ上「沈黙」した後もしばらく波状攻撃は続けられたが、その時間はアーティにとってには照準をつける時間になった。

攻撃を中断し速やかに集合した一団に、アーティは腰に着けていた長い筒状の兵装を肩に構え照準をつける。防御力を高め、多系統の攻撃に対して確実に対応するには固まるのが得策だが、今アーティが使うおうとしている魔法の性質を考えれば彼らが集まったことはむしろ悪手だった。

「君たちの中に戦艦の主砲級のプラズマビームを無効化できる使い手はいるかな？」

リーナが日本に帰化したことにより、リーナの助言で戦略級魔法「ヘビィ・メタル・バースト」を収束ビームとして使用するための兵装「ブリオネイク」が国防軍独立魔装大隊でも開発され、USNAを離れブリオネイクを失っていたリーナとその息子スチュアートに授与された。その片割れが、今アーティが手にしているものだった。少ない「De Lorean」の積載能力を割いて未来から持ち込んだアーティの秘密兵器の1つである。

世界的に見ても最速級の発動速度で知覚外から放たれた音速の100倍を超えるビームを防御することは叶わない。彼らは多系統の防御を構える暇もなく、プラズマ化した重金属の収束ビームに飲み込まれ文字通り骨も残さず一瞬のうちに蒸発した。

西暦2095年10月30日午後3時50分。横浜事変においておおよそ大亜連合戦力が主な戦力を失い敗走を開始したと言われる

時刻。この時刻に未確認の高出力のビーム攻撃が上空で放たれた目撃情報が広く知られているが、そのビーム攻撃が使用された戦闘に関する記録は発見されることはなかった。

横浜騒乱編Ⅴ

時間にすれば数分の出来事であったが、論文コンペという晴れ舞台に來たつもりの高校生たちが死と隣り合わせの本物の戦場に凶らずも飛び込んでしまったという事実は、その場にいる若き魔法師たちを混乱に陥れるには十分なインパクトを持っていた。無論達也や真由美、それに第三高校の将輝など、それに動じない精神力と経験を持ち合わせている者もいるのだが、彼らの多くは年齢相応の胆力しか持ち合わせておらず、自分たちの魔法での防御を貫通するほどの威力を持つハイパワーライフルを持った賊の闖入、更には彼らを文字通り瞬殺し去っていった正体不明の魔法師に彼らは恐怖し、烏合の衆と化していた。

「鎮圧された………のか？」

既に風紀委員を退任し一般生徒と一緒に論文コンペの会場に入っていた摩利は会場外から聞こえてきた銃声を聞き、いつ敵が会場内になだれ込んできても対応できるよう身構えていたのだが、突如として銃声が止み、そして一向に敵が突入してこないことに怪訝な表情を浮かべている。

「ええ、敵は殲滅されたわ」

摩利の独り言の様な問いに答えたのは真由美だった。真由美は「マルチ・スコープ」で会場外の様子を確認しており、ハイパワーライフルを持ち建物内に侵入してきた戦力が既に全滅していることを知っている。

「そんなバカな！ いったい誰が」

摩利の疑問はもつともなことだ。真由美が海上での爆発を視認し実家に連絡を取ったあの瞬間、七草家本家もようやく海上での爆発を認識していた。また、あの時点では七草家本家は敵性勢力の進行を把握していなかった。対魔法師用のハイパワーライフルで武装した戦力を速やかに撃破できるだけの戦力はあと30分ほど待たなければ到着するはずもないのだ。加えて、日本の魔法師協会の者や国防軍が

撃破したならば、真つ先に保護すべきである全国魔法科高校生が集うこの会場に姿を現し、速やかな避難誘導を行うはずなのだ。しかし銃声が沈黙してもう五分以上は経つというのに避難誘導は行われぬ。この事実から、この場に来ていた敵を撃破したのが国防軍や魔法師協会の者でないことは明白だった。

「……………」

狼狽する摩利の言葉に返答をもたらず者はいない。自身が目にした光景の意味を考える真由美を尻目に、会場内は学生たちの混乱によりますます混迷を極めていった。

「お兄様！」

突如として鳴りやんだ銃声、現れぬ救援。風間から事前に警告は受けていた達也だが、その警告の内容を明らかに上回る戦乱に、国防軍が間に合っていないことは達也の手持ちの情報から確定する部分でいるはずはない。これほどの戦乱が起こる情報を握っているならばこの2つは協力せざるを得ないはずであり、事前情報が無ければこれほど早い段階で動きを見せることは出来ない。「エレメンタル・サイト精霊の眼」で一部始終を見ていたであろう達也に深雪はその答えを求めたが、返ってきたのは深雪も見慣れぬ達也の困惑した表情であった。

「……………」

「お兄様？」

達也がすべてを「見通す」ことができることを知る深雪にとって、達也のその表情がもたらす衝撃は、他の生徒が受けたそれよりも大きかった。

「…………いや、何が起きたのかはわかる。にわかには信じがたいことかもしれないが、一人の魔法師が襲撃してきた勢力をあっという間に片づけたんだ。言うまでもないことだが、あれは国防軍の戦力ではないし、魔法師協会によるものでもない」

達也の様子に見る見るうちに青ざめる深雪を気遣い、達也は己の逡巡を中断してひとまず深雪に言葉を返す。達也自身が不調をきたしていたわけではないと知った深雪は達也の思惑通りにいくらか顔色を取り戻していた。

「では、何者なのでしょう？この対応の早さ、そして単騎で相当の戦力を一瞬で打破するだけの実力、お兄様が知らぬ相手とは思えません
が」

落ち着きを取り戻した深雪は周囲に聞かれないよう、達也にそつと顔を近づけ声のボリユームを大きく落として問いを投げる。達也の「精霊の眼」ならばたとえ相手が変装していようともその正体を看破することができる。

「それがわからないんだ。輪郭、温度、色彩の情報はあったが、内部に関するエイドスの情報が存在しなかった」

「そんな…」

達也の返答に深雪は思わず口を手で押さええる。達也が「精霊の眼」をもつてしても見抜くことができなかつたこと自体に対する驚愕も無論含まれるが、この瞬間深雪が戦慄したのは先刻達也が沈黙していた理由を悟つたからである。「分解」と「再成」に特化した達也にとって数少ない攻撃用の魔法の、その最有力の一角である「雲散霧消」は対象を標的として照準し行使する魔法であり、達也の「眼」をもつてしても先刻の謎の闖入者のエイドス情報にアクセスできなかつたということ、現状その者に対して達也は有効な攻撃手段を持たないことを意味するからである。

「これが敵ならば憂慮すべき事態だが、幸い今のところはむしろこちらに与する行動をとっている。ひとまず心配する必要はないだろう」先ほどまで大いに憂慮していた達也だが、目の前の妹が憂いを見せると希望的な言葉で杞憂であると主張する。意図した結果ではないが、深雪の憂慮は達也の意識を無用な杞憂から引きはがすという結果を生んだのであった。

達也たち魔法科高校の生徒達が集う建物に侵入した勢力は瞬く間に殲滅されたが、その戦闘に伴う爆音、衝撃は一堂に会する高校生たちをパニックに陥れるのには充分であった。本来ならば敵を撃退したのちに彼らを誘導すべきであった警備の戦力は残念ながら全滅している。会場に詰めている権威があるはずの、権威があるべきである大人たちは右往左往するばかりでこの場を收拾する気配もない。結果として、論文コンペ会場はもういくばくかの時間もたたぬ間に負傷者を多数出すほどのパニックに陥ることが確実な状況となっていた。

そして混乱し、どうすべきかわからずにいるのは先日第一高校の生徒会長に就任したアーティから一時的に生徒会長権限を委任されたあずさも同様であった。あずさは恐慌状態に陥り動き回り、パニックを助長するような真似こそしなかったものの、何をしたらいいのかからず座ったまま硬直していた。

「あーちゃん、あーちゃん……中条あずさ生徒会長！」

そのあずさを、壇上から叱咤する声。あずさは慌てて立ち上がり、ステージを振り向き仰いだ。代理です、と訂正するような余裕はなかったが、真由美があえて代理、をつけなかった理由に思い至らぬあずさでもなかった。

「このままだと本物のパニックになりかねない。負傷者も多く出ることになる。だから貴女の力で、みんなを鎮めて」
「えっ!？」

真由美の言葉に、あずさは大きく目を見開いた。言葉の意味を解さなかったのではなく、むしろ真由美の意図するところを理解したからこそ、あずさは大きく動揺したのである。

「でも、あれは……」

あずさの魔法は人の情動に干渉し、パニックを鎮めることができる。この状況において、あずさの魔法以上に効果的な手段はあるまい。だが、洗脳にも用いることができる精神に干渉する魔法は、元々使用に関して制約の多い魔法の中でも特に厳しく制限を設けられている魔法である。非常時とはいえ未成年者の判断で軽々に使用を踏

み切ることができない代物ではない。

「貴女の力は、こういう時のためのものでしょう？工藤くんは貴女の魔法を見込んだうえで、万一に備え貴女を生徒会長代理に任命したのよ。それに、この場には私もいるから。七草の名前は伊達じゃないのよ」

あずさの戸惑いはもつともなものだ。ゆえに真由美も即座にあずさを奮い立たせる言葉を放つ。また、七草の名前を出すことでこの場で右往左往する大人たちを牽制する意味もあった。そして真由美はというと、先日のアーティとの会話をふと思い出していた。

（ほんと、こうなることを予見していたみたいだったわ、あの時のアーティは）

あずさを代理に指名した際には摩利が同じような指摘をしていたが、今となって真由美は確信にも似た感覚を感じていた。しかし今は非常事態である、真由美はそのような疑念を頭を振って意識から無理やり追い出すと、あずさをじっと見つめた。真由美の視線の先では、意を決したという表情であずさがポケットからロケットを取り出し、左手で握りこむ。あずさの体からロケットに想子が送り込まれる。単一の魔法式を記録し、その魔法を行使するためだけに作られた、あずさだけの魔法の杖。

所々で押し合い圧し合いにまで発展している客席に向けて、あずさだけが使える情動干涉魔法「梓弓」が発動した。

「あずさです、中条先輩。ありがとうございます」

高速で戦火に焼かれる横浜の上空を飛行しながら、随所随所で突如として組み上げられ出現した直立戦車を次々と「爆裂」させている赤い人影の口から、誰にも聞こえぬ独白が漏れる。常に意識の片隅を論文コンペ会場に向けていたアーティは、真由美の激励もあってあずさが会場の混乱を鎮め、そこから生徒たちの避難が正常に開始されたこ

とを感じ取った。アーティはあずさの勇気をたたえる感謝の言葉を口にする、一転急上昇を始めた。ある人物に連絡をつけるためである。地上の物陰に隠れてもいいのだが、流れ弾や誘爆の危険性がなく、会話を聞かれる可能性も薄い上空を選んだのである。

「真夜様」

アーティが無線通信をかけた相手は1コールもしないうちに応答した。

「見事なものね、スチュアートさん。では、手筈通り、風間さんには伝えておくわね」

「お願いします」

10秒とかからぬ通話を終えると、アーティは再び急降下を始め、地上の戦力の掃討に当たった。

「藤林。現着まであと何分だ」

国防陸軍少佐、風間玄信は、およそ佐官が搭乗するにはあり得ぬ軽装のジープに乗り、藤林と呼ばれた女性将校に運転を任せていた。

「報告された敵戦力から計算した被害よりずっと被害は軽微なようです。この混乱状況であれば、5分もあれば現着します」

「うむ。…む？」

横浜襲撃の報を受けて急行した独立魔装大隊ではあるが、その様子に少し戸惑いながらの行軍になった。確かに混乱の仕方は戦時のものである。むしろこの統制の取れていなさに舌打ちすらしたくなるものであり、破壊された戦闘車両の数、倒れ息絶えている人間の数は夥しく、熾烈な戦闘がおこり、なおそれが継続していることは疑いようがない。しかしよく見てみれば、破壊され残骸になっている戦闘車両、倒れている軍人たちはみな日本のものではない。日本の国防軍自体がようやく到着したところであるのだから、国防軍側の戦力が被害を受けていないのは当然なのだが、では一体敵は何と戦い、被害を出

したということになる。その疑問を胸に後部座席で悪路に揺られていた風間の胸ポケットにしまわれていた情報端末が、着信を告げた。「風間であります」

当然のことだが風間が今手にしている情報端末は指摘に使用しているものではない。公用のものだ。戦地に急行している風間にその情報端末に着信が来ることは不自然なことではない。だが風間が訝るような声を出したのはその相手がおよその状況で連絡をしにくる相手には似つかわしくなかったからである。

「ご無沙汰しておりますわ、風間大尉。いえ、今は少佐であらせられたのでしたね」

「何の御用でしょうか」

着信に風間が応答した瞬間に運転席の藤林が風間の周囲を防音のフィールドで覆う。悪路走行による騒音により会話が妨げられることはなかった。

「横浜が今、大変なようですね」

電話の主、四葉真夜は妖艶に、さりとして状況が状況だけにいつものように遠大な話題への入り方をせずに、いきなり本題に入ってきた。

「はい。本官もまさに今、横浜の戦地に急行しているところであります」

「ご武運をお祈りいたしますわ。ところで、お電話した件なのですが」
真夜らしからぬ話題の急ぎように、電話越しに風間は眉を顰める。この時点で風間は、真夜が風間以上に横浜の情勢に関して情報を握っていること、そして今まさに自分たちが疑問に思っていることの答えを真夜が齎さんとしていること、そしてそれらの情報と引き換えに今から真夜がしようとしている「要求」を呑む以外に自分たちに選択肢がないことを予期していた。

「四葉の手の者が既に今回の戦乱に介入しておりますの。その者の報告によれば戦況は貴隊の到着により完全に優位となり、大きな損害を出すことなく終息に向かうとのこと。そこでなのですが」

やはりか、という思念が風間の内心を巡る。一方的に敵性戦力のみが被害を受けている状況から、まだ到着すらしていない国防軍の戦力

ではない何者かがこれを撃破したことは明確であり、実力のある者からない者まで動くであろう魔法協会がこれを行ったならば魔法協会側が受けた被害も戦場には残るはずである。それが無いということは少数精鋭で各個撃破を行ったことは明確であり、そのようなことを行えるのは十師族を置いてほかにない。そしてこの速度で対応できたのは事前には何らかの情報を察知していたからであり、それならば十師族はそれを共有し合同で対処に向かうはずであり、それならば国防軍にも事前に情報提供が行われるはずである。そうはならなかった時点で、四葉が関連していることは風間の意識の片隅に可能性として置かれていた。その可能性は真夜からの着信を見た瞬間にほとんど確信に変わり、今の言葉を聞いて腑に落ちたのである。

「達也さんには今回、深雪さんのボディガードに専念していただきたく、つきましては貴隊での招集を免除していただきたく存じますの」

四葉の手の者が今回の対処に当たっていたという事実を大方予想していた風間にとって、真夜のこの要求もまた想定外のものではなかった。達也という戦力の使用を禁じられる戦力的な損害は大きい。風間はある希望的な観測をこれまでの真夜とのやり取りから抱いており、風間はすぐに応じることなく真夜に次の言葉を促す。

「応じていただけただけならば今回対処に当たった者を風間少佐にもご紹介いたしますわ」

果たして真夜の口から紡がれた言葉は、風間が期待していたものだった。四葉真夜という人物は、一見強硬に見える要求をするものの、それに対して与える見返りというものは十分以上にその要求を満たすのに相手が支払うコストに見合ったものだ。今回動いた者が敵に与えた損害は甚大なものであり、戦力は申し分なく、また戦闘自体が継続している以上今動いている四葉の者と風間たちは緊密な連携をとる必要が生じる。国防軍のなかに強力な魔法師部隊を編成したい風間にとり、四葉の家の者をさらに引き込めるこの機会は、ふいにできるものではなかった。

「わかりました。特尉の招集は今回は見送ることをお約束いたしま

す」

「感謝いたしますわ。それでは、うちの者に、そちらと合流するように伝えておきます。それでは、ご武運を」

通話を終えた風間が懐に情報端末をしまうのと、藤林が防音フィールドの魔法を解いたのは同時だった。

「藤林。進路変更だ。横浜ベイヒルズタワーへ向かえ。近辺での戦闘は終了しているはずだ。そこで協力者と落ち合う」

「了解」

風間は手短かに藤林に行先の変更を告げると、また静かにに過ぎ行く戦火に燃えた地を眺め始めた。

横浜騒乱編VI

横浜ベイヒルズタワー。東京湾に面し大亜連合の揚陸部隊が上陸の起点としようとした横浜港に隣接する高層ビル。揚陸部隊は洋上で殲滅させられたものの、予め市内に潜伏していたゲリラ部隊にとつて第一に優先すべきなのは揚陸部隊のために横浜港を占拠することであり、この度の戦乱でいち早く戦端が開かれた場所である。東京湾洋上にて使用者不明の大規模な攻撃魔法により大亜連合の揚陸部隊が全滅したことはすでに十師族の情報網、国防軍の知るところであり、蜂起とともに戦闘が開始されたとしても肝心の揚陸部隊が全滅したとあっては横浜港及びその周辺地域の占拠は優先度は落ち、魔法師協会本部や論文コンペ会場といった機密情報をはじめ戦果がある場所の占拠、及びそれらの回収がその優先度を上回る。さらに日本の名だたる企業のオフィスが入った横浜ベイヒルズタワーに限って言えば、常駐の魔法師が抵抗を続けたはずであり、敵性ゲリラ部隊はその熾烈な抵抗を抑え横浜ベイヒルズタワーの制圧を試みるよりも優先度の高いエリアに転進している可能性が高い。

風間がここを合流場所に選んだのはそう言った理由からであり、果たして横浜ベイヒルズタワーに到着した風間を迎えたのは日本人の魔法師であった。

「国防軍の指揮官とお見受けする。所属と氏名をお教え願いたい、何しろこの状況ですので」

ハイパワーライフルを抱え、ジープから降り立った風間と藤林を迎えた魔法師は最低限の礼を失せぬよう背筋を伸ばして問いを投げる。しかしその声音からは明らかな警戒心があった。後ろに控える藤林は物陰にすでに攻撃魔法を展開した魔法師が何人も隠れているのを知覚する。

「国防陸軍第一〇一旅団独立魔装大隊少佐、風間玄信です」

その風間の言葉を聞いた瞬間、目の前の魔法師の警戒心は目に見えて薄まった。

「貴官があゝの風間少佐でしたか。大変失礼をいたしました。近隣地域から敵性力はすでに撤退しております。こちらには」

何用か、と問おうとした魔法師の言葉を、近くで無線機に耳を当てている魔法師の言葉が遮った。

「敵襲！所属不明の魔法師と思しき人影が8時方向より飛来！12秒後、当ビルに到着します！」

その言葉に、その場にいる魔法師のみならず、藤林までもが緊張の表情を浮かべ身構える。だが、風間は悠長に8時の咆哮と言われた南西の空を見上げる。

「いや、恐らく敵ではない。真夜殿と通信している時点で、あちらはこちらを捕捉していた。我々がここで止まったのを見てこちらの意図を察したのだろう。すまないが、迎撃はよしてやってくれ」

「了解しました。攻撃中止！」

風間の言葉を受けた魔法師の号令を直ちに無線機を持つ魔法師がこの場にいる魔法師たちに伝え、ビルのあちこちで展開されていた魔法の気配は霧散した。そして先ほどのアナウンス通り、きっかり12秒経過した時点で飛来した人影は横浜ベイヒルズタワー上空で停止し、ロビー前で人影を見上げる風間たちの前に降り立った。

「貴官が風間大…少佐ですね。早速ご挨拶と行きたいのですが、あいにく私が挨拶を許されているお相手は風間少佐とその側近の方のみ。場所を移させてはいただけないでしょうか」

降り立つとともに風間をまつすぐ見据え言葉を発したのは、全身を赤いローブで包んだ若い女だった。女性にしては日本人離れた身長とその服装の異様さが威圧的な雰囲気醸し出しているが話し方、物腰は敵意を感じさせるものではない。

「わかりました。藤林、ジープで埠頭までお連れしろ」

「了解しました」

呆然とやり取りを見つめる魔法師たちをよそに、藤林は風間と赤い女をジープに乗せ、エンジンをかける。

「では」

軽く会釈をし敬礼を風間が魔法師たちに向けたのをバックミラーで確認し、藤林はジープを発進させた。

「では、改めて」

ジープが止まったのは、横浜港の隣接する埠頭。戦闘の痕跡はあるものの、藤林の索敵に引つかかる存在は確認されず、風間と「四葉からの協力者」の顔合わせが始まった。

「本来ならばこのような場所ではなく、こちらの拠点にお招きした上でご挨拶申し上げたかったのですが。戦時中とあってはそうもいきません。ご無礼をお許しください、風間少佐」

先刻までは被ったままでその顔を隠していたフードをとり、女は恭しく頭を下げる。フードから現れた長髪は日本人に多い黒、瞳の色も黒であり、顔だちも派手で毒々しいともいえる服装に比べれば地味な顔立ちであった。

「いえ。こちらこそ、合流場所をお伝えもせずご足労いただきかたじけない」

女の謝罪に風間も社交辞令を重ね、女の出方を待つ。今回四葉からの協力者を紹介すると真夜から言われてはいるものの、目の前の女がどの程度の情報を開示してくれるのか、今後どの程度の協力を約束してくれるのかは完全に未知数であった。

「私は四葉家現当主、四葉真夜の息子、四葉スチュアートであります」
深々と下げた頭を上げながら女が口にした自己紹介の言葉に、風間も藤林も怪訝な顔をする。どう見ても目の前にいるのは女性であり、その人物の口から自分は四葉真夜の息子であるといわれてもピンとこなかったのだ。しかし、その程度のことでも声を上げたり口を挟んだりする二人ではなかった。それでも完全にポーカーフェイスとはいかず、その怪訝な表情を見て女ははつとしたような表情を見せる。

「これは失礼をいたしました。自己紹介をするのに隠形を解かぬままお話するなど、無礼千万でした。どうかお許しください」

そういいながら女は胸元からロケットを取り出すと、ロケットを開き中の写真に触れる。するとたちまち女の姿は赤髪碧眼の少年の姿に変わった。

「変身魔法、ですか」

「似たようなものですが、違います。変身魔法が不可能であることはご存じでしょう。捉え方によっては、それ以上のものです」

感心しながらつぶやいた藤林の言葉にアーティはにこりと笑いながら応じる。その言葉に藤林は感嘆の言葉すら返すことはできなかった。目の前にいる少年の振る舞いが、およそ自分の知る四葉のイメージとあまりにかけ離れていたからだ。

「さて、風間少佐」

じつとアーティの目を見つめ続きを待つ風間にアーティも向き直り、いかにも本題へ入るといふような表情と口ぶりで口火を切る。

「母から聞いておられるとは思いますが、今回は達也さんを動員する代わりに私が協力するということです。すでに横浜において相当数の戦力を撃破しております。現時点で保土谷の駐留部隊と現地の魔法師のみで掃討を完了できる程度の戦力しかもう敵には残されていません。風間少佐麾下の隊も到着なされたようですが、ほとんど戦闘に参加することはないかと思われます」

アーティの言葉を聞いた風間の心をかすめたのは落胆の念だった。今回は国防軍に先んじて四葉が今回の戦乱を察知し、この少年を横浜に配置、戦乱の初期においてこの少年の活躍で被害を大幅に減らしたことを誇示して達也の動員を拒否しようという算段であると風間は察知したからである。ゆえに、目の前の少年の口から紡ぎだされた次の言葉に、風間は思わず耳を疑うことになる。

「しかし、この度このような大規模な戦闘を仕掛けてきた大亜連合本国がこのまま攻撃の手を緩めるとは思えません。この一連の大亜連合の作戦行動が終息するまでの間、私は貴官の麾下に入り、貴隊の作戦行動に従事することをお約束します。……………意外でしたか？」

アーティの言葉に黙ったままの風間に、アーティは首をかしげながら笑いかける。

「実は、今回の要請は母の意向ではないのです」

どうも信じきれないでいる風間にアーティは笑みを崩さずに続ける。

「達也さんに出てほしくないのは私で、ゆえに今回の条件を決めたのも私です。風間少佐にはもう一つ、個人的なお願い事がございますので」

お願い事、と言われ表情を崩すことなく警戒心を強めた風間にかげられた言葉は、意外なものだった。

「私のことを、一切他言無用としていただきたいのです。無論、達也さんにも」

そう続けたアーティの顔を見て、今度は藤林がはつとしたような表情を見せた。

「君は…第一高校の…」

「そうです。九校戦では拙いところをお見せしました」

「いえいえ…歴史に残る、見事な試合でしたよ」

目の前ではにかむ少年が、九校戦で目にした第一高校のエースであることに気づき、藤林は目をむく。

「では、四葉殿」

「アーティ、でお願いします」

「では、アーティ君。これより貴官を我が国防陸軍第一〇一旅団独立魔装大隊特務少尉に任ずる。直ちに現在残敵掃討中の我が隊に合流し、これを支援せよ」

「は。……………一つだけ、お許しを得たいことがあります」

「言ってみなさい」

「風間少佐と藤林少尉以外の人物がいるときには、私は常に先ほどの姿で作戦行動に従事いたします。よろしいですか？」

「許可する」

「ありがとうございます」

言い終わるや否やアーティは胸元から先ほどのロケットを取り出

し、その姿を先ほどの赤いローブ姿に変え、腰につけた飛行デバイスをたたいて横浜の空へと飛び立っていった。

あずさの魔法によって静まり返ったホールに、真由美の声がこだまする。七草本家からの連絡を受けている真由美はこの場にいる誰よりも少しだけこの状況に関しての情報を握っている。そして七草家令嬢たる真由美ならばこの状況に対して情報を持っているはずであるという期待がこの場にいるものの中には共通認識としてあり、その期待は今この場における真由美への求心力となる。真由美とてこの戦況の詳細を知っているわけではないが、真由美はその求心力を最大限に生かすために自身の不安をおくびにも出さない。真由美がひとまずこの状況で下した判断は「この場での待機」だった。「マルチスコープ」でこの建物内だけでなくその周辺の状況をも観察している真由美の知覚する限りにおいて、およそ戦闘らしい戦闘は行われていない。先刻攻め込んだできた勢力が一瞬で殲滅されて以降、第二波が来ていないのである。本来ならば機密情報のあるこの論文コンペ会場は優先度最高レベルの目標であり、第二波第三波の戦力投入が行われなければならぬのであるが、その向かっている最中にそのことごとくが壊滅しているために論文コンペ会場は追加部隊による攻撃にさらされずに済んでいる。

「かいちよお……」

壇上から降りてきた真由美を迎えたのは今にも泣きだしそうなあずさの声であった。というよりはもうすでに涙でその瞳がにじんでいる。

「あーちゃん？今の会長はアーティくんだし、それに今この場においてはアーティくんに委任されたあなたこそが会長なのよ？……でも、ありがとう、あーちゃん。おかげですごく助かったわ」

真由美を会長、と呼んだことをやさしく窘めながらも梓弓の行使を
ろう。小心者のあずさがこのような緊急事態において本来使用に大
きな制限がかけられている魔法を大勢に使用することがどれだけ精
神的に負担になったのかは真由美は理解している。今でもぐすん、と
鼻を鳴らしているあずさをそつと抱きしめ、頭を優しく撫でている。
「しかし、七草先輩」

あずさをあやす真由美に少し声をかけにくそうにしながらも話し
かけたのは、防弾装備に身を包んだ服部だった。

「この会場は地下通路で駅のシエルターにつながっていたはずです。
そちらに避難したほうがよかつたのでは」

服部のこの提言はともすれば失礼にもあたる提言ではあるが、それ
で気を悪くする真由美ではない。

「そうね、この場に脅威が迫っているならば多少移動のリスクを伴っ
てもその選択肢が最良だったでしょう。ここはあまりに立てこも
るには不利すぎる」

「では、今この場所に差し迫った脅威はないと？」

「ええ。先刻この建物内で起きた戦闘で敵性戦力は全滅、現在に至る
まで周囲1km以内に侵入した敵はいないわ」

この返答に服部が舌を巻いたのはこのような状況であずさを鼓舞
しながらも半径1kmという広範囲にマルチスコープを使用し一見危
険にも見える「この場に留まる」という決断をしたことに対してだ。
ゆえにこの会話に二の句を継いだのは服部ではなく達也だった。

「しかし、大局がわからないのでは結局のところ最適解はわからない」
その達也の言葉を裏付けるように、真由美の表情にもどこか不安の
色が浮かんでいた。

「とにかく、今の状況に関する情報が欲しい」

風間とも、真夜とも連絡がつかない、というより連絡を取るわけに
はいかない状況にひそかに歯噛みする達也だったが、天啓は思わぬと
ころからもたらされた。

「VIP会議室を使つたら？」

いつものその思惑の読めぬ表情でちよいちよいとこの建物の上の

階を指さす雫に、この場全員の視線が集まった。